

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第4集

広島市佐伯区倉重町所在

稗 畑 遺 跡 発掘調査報告

1992・3

財団
法人 広島市歴史科学教育事業団



稗畑遺跡遠景（北より）

は し が き

近年、市民のスポーツ・レクリエーションへの関心は余暇の増大とともに年々高まりつつあります。

広島市においても、各区スポーツセンターの整備等、スポーツ・レクリエーション施設の充実が図られてきました。その中で今回の佐伯スポーツ広場（仮称）の整備計画も進められています。今回の調査はこの計画に伴い、遺跡の記録保存のために行ったものです。

この調査は、平成2年5月から平成3年3月まで実施しました。その結果、市域において弥生時代後期としては最大規模の集落跡や多くの遺物を検出し、当時の人々の生活を探る上でたいへん貴重な資料を得ることができました。

この報告書が多くの方々に活用され、郷土の歴史や文化について理解を深める上での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査・整理にあたり御指導・御助言を賜りました諸先生方、並びに御協力頂きました作業員の皆様方に心からお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 広島市歴史科学教育事業団

例 言

1. 本書は、広島市佐伯区五日市における佐伯スポーツ広場（仮称）の建設に伴い、平成2年度に実施した稗畑遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は広島市より委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
3. 本書は福原茂樹が執筆、編集した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、大崎尚吾、福原、高下洋一、稲垣美和が分担して行った。
5. 遺物の実測及び写真撮影は、幸田淳、福原が分担して行った。
6. 図面のトレースは、幸田、大崎、岡野孝子が分担して行った。
7. 本書掲載の航空写真撮影は、スタジオ・ユニに、写真測量は国際航業株式会社に委託した。
8. 第1図に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図を複製したものである。第2図に使用した地図は、地理調査所発行の昭和25年修正測量2万5千分の1の地形図を複製したものである。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	4
III	遺構と遺物	6
IV	総 括	40

挿 図 ・ 表 目 次

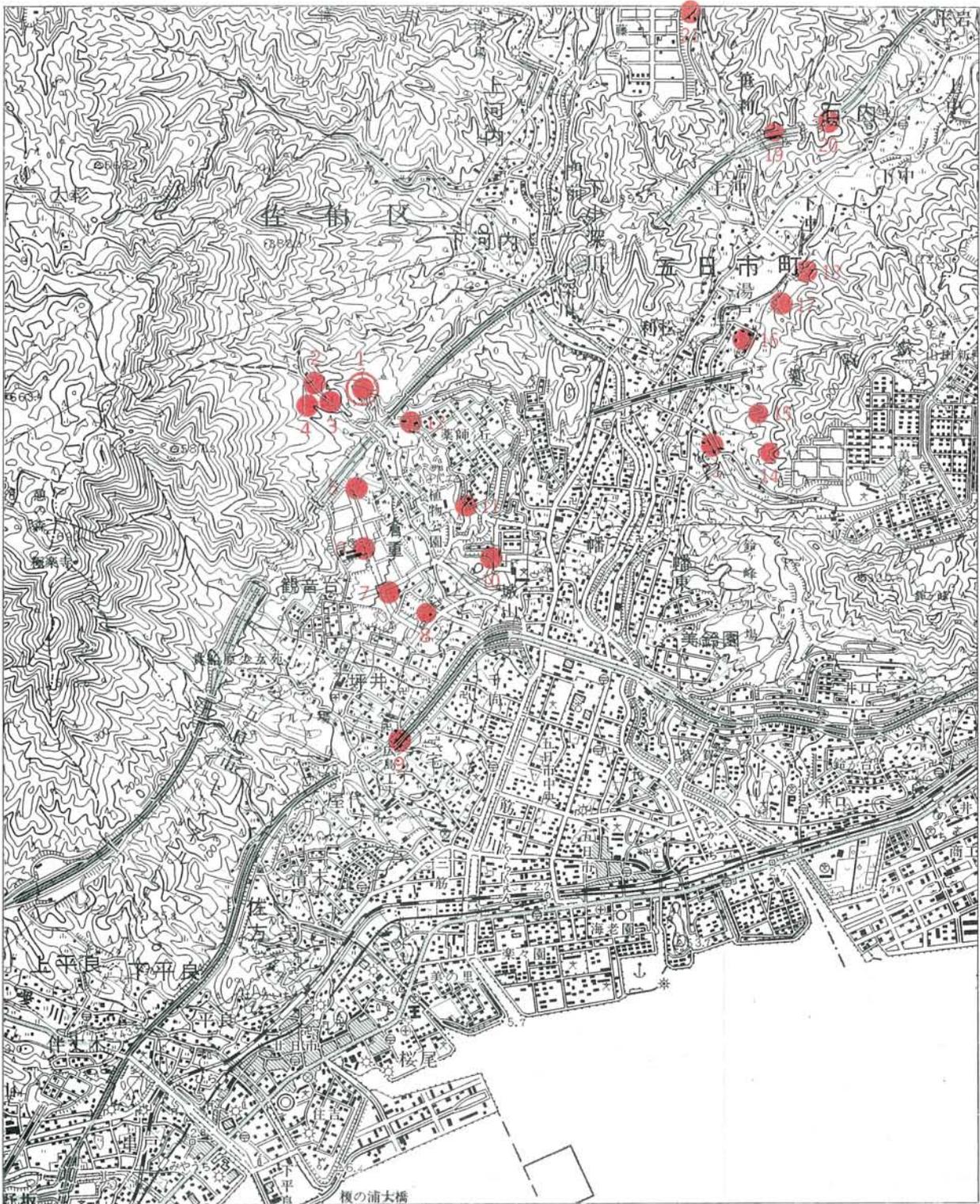
第 1 図	周辺遺跡分布図	2	第 35 図	第 3 3 号住居跡実測図	6 9
第 2 図	遺跡周辺地形図	3	第 36 図	第 1 号掘立柱建物跡実測図	7 0
第 3 図	遺跡周辺地形図(1 : 2, 5 0 0)・折り込み		第 37 図	第 2 号掘立柱建物跡実測図	7 1
第 4 図	2 地点遺構配置図	折り込み	第 38 図	第 3 号掘立柱建物跡実測図	7 2
第 5 図	1・3 地点遺構配置図	折り込み	第 39 図	第 6 号掘立柱建物跡実測図	7 2
第 6 図	第 1 号住居跡実測図	4 5	第 40 図	第 4 号・第 5 号掘立柱建物跡実測図	7 3
第 7 図	第 2 号住居跡実測図	4 5	第 41 図	第 7 号掘立柱建物跡実測図	7 4
第 8 図	第 3 号住居跡実測図	4 6	第 42 図	第 8 号掘立柱建物跡実測図	7 4
第 9 図	第 4 号住居跡及び第 3 号土壇墓実測図	4 7	第 43 図	第 1 号テラス状遺構実測図	7 5
第 10 図	第 5 号～第 8 号住居跡, 第 3 号～第 5 号掘 立柱建物跡及び第 1 号土坑実測図	4 8	第 44 図	第 3 号テラス状遺構実測図	7 6
第 11 図	第 5 号住居跡実測図	4 9	第 45 図	第 1 号住居跡状遺構実測図	7 6
第 12 図	第 6 号住居跡実測図	5 0	第 46 図	第 4 号テラス状遺構実測図	7 7
第 13 図	第 7 号住居跡実測図	5 1	第 47 図	第 3 号住居跡状遺構実測図	7 8
第 14 図	第 8 号住居跡実測図	5 2	第 48 図	第 4 号住居跡状遺構実測図	7 8
第 15 図	第 9 号・第 10 号住居跡実	5 3	第 49 図	第 5 号住居跡状遺構及び第 6 号土坑実測図	7 9
第 16 図	第 11 号住居跡実測図	5 4	第 50 図	第 1 号土坑実測図	8 0
第 17 図	第 12 号住居跡及び第 3 号土坑実測図	5 5	第 51 図	第 2 号土坑実測図	8 0
第 18 図	第 13 号住居跡実測図	5 6	第 52 図	第 1 号土壇墓実測図	8 1
第 19 図	第 14 号住居跡実測図	5 7	第 53 図	第 2 号土壇墓実測図	8 1
第 20 図	第 15 号住居跡実測図	5 7	第 54 図	第 1 号土器棺墓実測図	8 2
第 21 図	第 16 号住居跡及び第 2 号住居跡状遺構 実測図	5 8	第 55 図	第 2 号土器棺墓実測図	8 2
第 22 図	第 17 号住居跡実測図	5 9	第 56 図	第 3 号土器棺墓実測図	8 3
第 23 図	第 18 号住居跡実測図	6 0	第 57 図	第 2 号テラス状遺構実測図	8 3
第 24 図	第 19 号住居跡実測図	6 1	第 58 図	第 4 号土器棺墓実測図	8 4
第 25 図	第 20 号住居跡及び第 4 号・第 5 号土坑 実測図	折り込み	第 59 図	第 5 号土器棺墓実測図	8 4
第 26 図	第 21 号住居跡実測図	6 3	第 60 図	第 6 号土器棺墓実測図	8 5
第 27 図	第 22 号住居跡実測図	6 4	第 61 図	第 7 号土器棺墓実測図	8 5
第 28 図	第 23 号住居跡実測図	6 5	第 62 図	出土土器実測図(1)	8 6
第 29 図	第 6 号住居跡状遺構実測図	6 6	第 63 図	出土土器実測図(2)	8 7
第 30 図	第 24 号住居跡実測図	6 6	第 64 図	出土土器実測図(3)	8 8
第 31 図	第 25 号住居跡実測図	6 7	第 65 図	出土土器実測図(4)	8 9
第 32 図	第 26 号住居跡実測図	6 7	第 66 図	出土土器実測図(5)	9 0
第 33 図	第 27 号～第 32 号住居跡実測図	折り込み	第 67 図	出土土器実測図(6)	9 1
第 34 図	第 32 号住居跡内出土土器実測図	折り込み	第 68 図	出土土器実測図(7)	9 2
			第 69 図	出土土器実測図(8)	9 3
			第 70 図	出土土器実測図(9)	9 4
			第 71 図	出土土器実測図(10)	9 5
			第 72 図	出土鉄器及び石器実測図	9 5

第73図	出土石器実測図	96
第74図	出土石器及び砥石実測図	97
第75図	出土砥石実測図	98
表	出土土器観察表	30～39

図 版 目 次

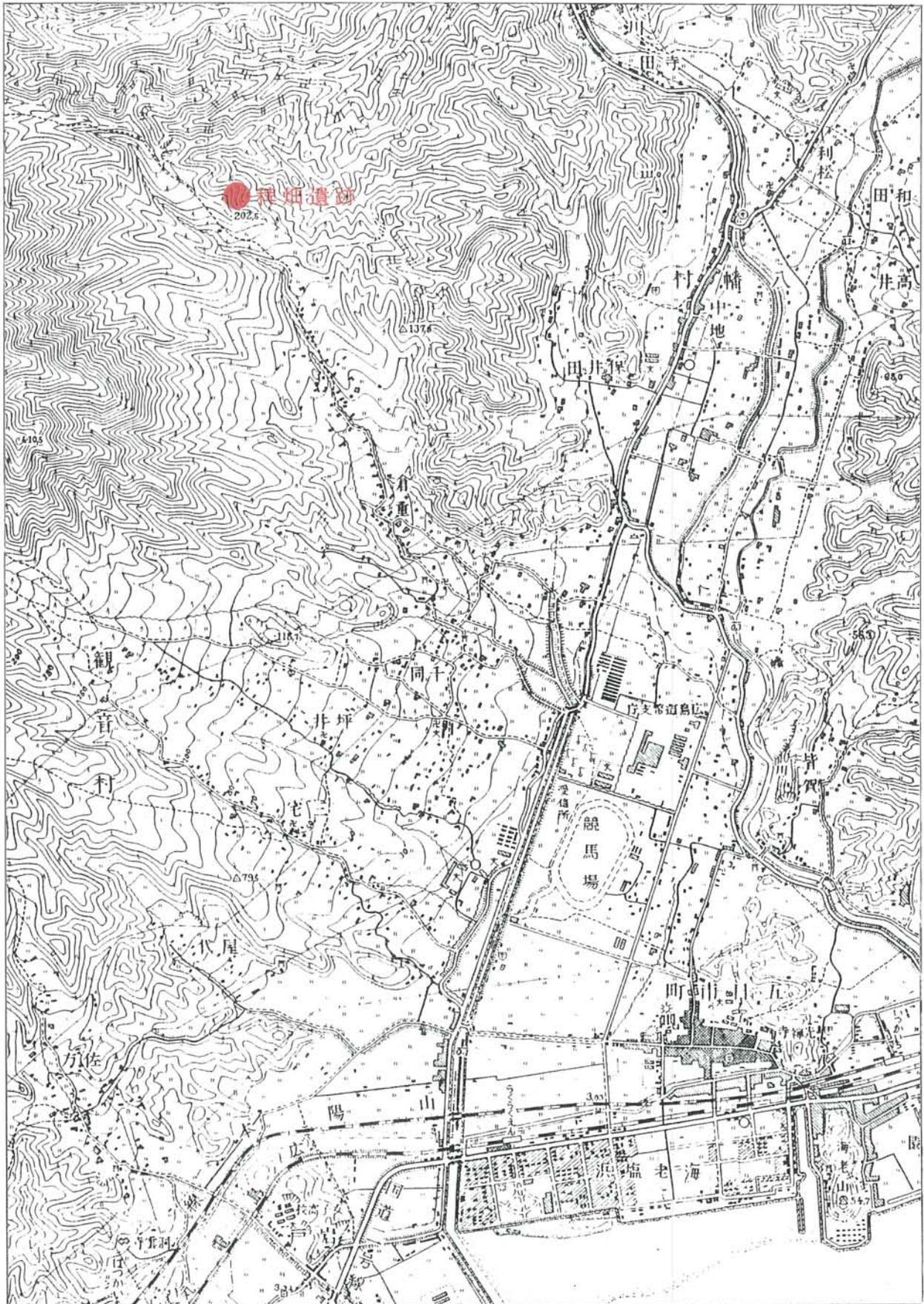
巻頭図版 稗畑遺跡遠景

図版1 a	稗畑遺跡全景	22 a	第1号土坑
b	稗畑遺跡全景	b	第2号土坑
2 a	1地点全景	23 a	第5号土坑
b	2地点全景	b	第1号・第2号土壙墓
3 a	3地点全景	24 a	第1号土器棺墓
b	第1号住居跡	b	第2号・第3号土器棺墓
4 a	第2号住居跡	25 a	第4号～第7号土器棺墓
b	第3号住居跡	b	第5号土器棺墓
5 a	第4号住居跡及び第3号土壙墓	26 a	第6号土器棺墓
b	第5号～第8号住居跡, 第3号～第5号掘立柱建物跡及び第1号土坑	図版26 b	第7号土器棺墓
6 a	第9号・第10号住居跡	27	出土土器(1)
b	第9号住居跡炭化物出土状況	28	出土土器(2)
7 a	第11号住居跡, 第8号掘立柱建物跡及び第2号土坑	29	出土土器(3)
b	第12号住居跡及び第3号土坑	30	出土土器(4)
8 a	第13号住居跡	31	出土土器(5)
b	第14号住居跡	32	出土土器(6)
9 a	第15号住居跡	33	出土土器(7)
b	第16号住居跡及び第2号住居跡状遺構	34	出土土器(8)
10 a	第17号住居跡	35	出土土器(9)
b	第18号住居跡	36	出土土器(10), 出土鉄器及び石器
11 a	第19号住居跡	37	出土石器及び砥石
b	第20号住居跡及び第4号土坑		
12 a	第21号住居跡		
b	第22号住居跡		
13 a	第23号住居跡		
b	第24号住居跡		
14 a	第25号住居跡		
b	第26号～第28号住居跡		
15 a	第29号～第32号住居跡		
b	第32号住居跡土器出土状況		
16 a	第33号住居跡		
b	第1号掘立柱建物跡		
17 a	第2号掘立柱建物跡		
b	第6号・第7号掘立柱建物跡		
18 a	第1号テラス状遺構		
b	第2号テラス状遺構		
19 a	第3号テラス状遺構		
b	第4号テラス状遺構		
20 a	第1号住居跡状遺構		
b	第3号住居跡状遺構		
21 a	第5号住居跡状遺構		
b	第6号住居跡状遺構		



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-----------|--------------|
| 1. 稗畑遺跡 | 2. 栄草原古墳群 | 3. 栄草原遺跡 | 4. 城緑遺跡 | 5. 倉重2号遺跡 |
| 6. 倉重古墳 | 7. 白禿遺跡 | 8. 月見城遺跡 | 9. 三宅古墳 | 10. 倉重向山遺跡 |
| 11. 倉重植物園遺跡 | 12. 永寿園遺跡 | 13. 高井遺跡 | 14. 小林遺跡 | 15. 城ノ下A地点遺跡 |
| 16. 和田1号遺跡 | 17. 下沖5号遺跡 | 18. 下沖3号遺跡 | 19. 浄安寺遺跡 | 20. 水晶城遺跡 |
| 21. 笹利迫田遺跡 | | | | |

第1図 周辺遺跡分布図



第2図 遺跡周辺地形図

はじめに

広島市教育委員会は、1985（昭和60）年6月17日、広島市都市整備局公園緑地部より、（仮称）佐伯区運動公園計画地内の文化財の有無並びに取扱いについての協議を受けた。これをうけて教育委員会は1986（昭和61）年3月19日から3月24日に試掘調査を行った結果、計画地内の一部で弥生時代の土器片及び住居跡を検出、遺跡の存在を確認した。その後、遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、現状保存は困難であり、記録保存もやむを得ないとの結論に達した。広島市は、財団法人広島市歴史科学教育事業団に発掘調査を委託して行うこととした。調査は財団法人広島市歴史科学教育事業団において1990（平成2）年4月から準備を始め、同年5月18日から翌1991（平成3）年3月29日まで実施した。また、調査後の1991（平成3）年5月7日から翌1992（平成4）年3月31日まで出土遺物の整理作業を行い、本報告書を作成した。

調査の実施に係る関係者は下記のとおりである。

調査委託者 広島市

調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当係 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課事業係

調査関係者 片岡寿一 常務理事

若野健二 文化財課長

幸田 淳 事業係長

若島一則 事業係主査

岡野孝子 事業係嘱託

調査者 大崎尚吾 事業係主事（調査担当者）

福原茂樹 事業係主事（調査担当者）

高下洋一 事業係学芸員補

稲垣美和 事業係学芸員補

調査補助員（順不同）

西本秋穂，野崎 昇，中本俊憲，難波 巧，福崎聰子，原田千代子，八木康子，鴉田愛子，松本千恵子，浅黄秋雄，上原 優，中村美都子，石本峯子，佐々木康子，村上朗子，岩井鈴江，益スミエ，益ヨシエ，百田冴子，大下 彰，大下清子，山本利子，松本文江，尾崎千鳥，渡辺国香，沢本育磨，広沢英雄，新田浩治，岡本剛明，福崎志郎，岡原ちか子，木村八重子，濱中美枝子，田中義照，谷口敏枝，岡本典親，小西千枝子，杉之原ハナヨ，渡辺サツエ，舛田愛子，長尾明子，松谷万里子，植木恭子，河合淳子，住川香代子，佐伯ひとみ，河瀬陽子，中田妙子，山本都，中本智子，黒田千景，栗林隆幸

なお、広島市都市整備局公園緑地部公園建設課，同緑政課，広島市教育委員会，八幡公民館，坪井公民館ほか多くの方々には，調査を円滑に進めるため多大な御配慮と御協力を頂いた。また，報告書の作成にあたっては，岡山県赤磐郡山陽町教育委員会ほか多くの方から広範な御教示を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

II 位置と環境

通称、極楽寺山（標高633m）から流れ出る倉重川は山塊を開析して谷を刻み込みながら瀬戸内海へ注ぎ込み沖積平野をつくり出している。倉重川の開析した谷の最奥部付近に位置する標高160～200mの丘陵上に稗畑遺跡はある。本遺跡からは、沖積平野上の広島市佐伯区五日市の市街地、そして広島湾を一望することができる。

倉重川の開析した谷へ張り出した低丘陵上には、その谷を取り囲むように本遺跡と同時期の弥生時代後期の集落跡が分布している。倉重川の右岸には北から倉重2号遺跡、白禿遺跡、寺山遺跡が分布する。倉重2号遺跡は標高120m前後の丘陵上にあり、付近の水田面との比高は10mである。後期後半の遺跡で竪穴住居跡3軒、土坑2基が検出されている。白禿遺跡は標高120m前後の丘陵上にあり、付近の水田面との比高は10mである。竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、土坑6基、段状遺構1か所が検出されている。寺山遺跡は標高100mの丘陵上にあり、竪穴住居跡1軒が検出されている。倉重川の左岸には、倉重向山遺跡がある。標高85～110mの丘陵上にあり、付近の水田面との比高は60mである。倉重向山遺跡からは竪穴住居跡7軒、土坑3基が検出されている。また、同じく左岸にある永寿園遺跡からは後期の土器が、倉重植物園遺跡からも弥生土器が出土しており、集落跡があった可能性が高い。また、倉重川をつくる谷の最奥部、本遺跡と同じ丘陵上には標高220m付近に城緑遺跡、栄草原遺跡が確認されており、いずれも弥生土器が出土している。

現在でも倉重川をつくる谷は水田として利用されているが、当時もこの谷が本遺跡を含めたこれら諸集落の生産基盤であったと思われる。市域における弥生時代後期の集落跡は、一般に住居跡が数軒しかない小集落が、核となる比較的大規模で継続的な集落を囲むように分布するといわれているが、稗畑遺跡は倉重川の谷を取り囲む他の遺跡と比較して住居跡・掘立柱建物跡等の数がいずれも卓越していることや、谷の最奥部付近という位置的にも倉重川水系におけるこれら諸集落の核となる集落であったと考えられる。

目を転じて八幡川・石内川流域を見ると、笹利迫田遺跡、長尾城遺跡、浄安寺遺跡、水晶城遺跡、下沖3号遺跡、下沖5号遺跡、城ノ下A地点遺跡、小林A・B地点遺跡等が同時期の遺跡として報告されている。中でも浄安寺遺跡は竪穴住居跡21軒（建て替え分を除く）、下沖5号遺跡は竪穴住居跡18軒（建て替え分を除く）、掘立柱建物跡6棟等の遺構が検出されており、ともに八幡川水系における拠点集落と位置付けられている。稗畑遺跡は集落の規模からみればこれらの集落跡に匹敵しており、当地域の同時期の集落を考える上で重要な遺跡であると思われる。

また、この倉重川の谷に張り出している丘陵上には、月見城古墳群、倉重古墳、三宅古墳、倉重向山古墳等が点在し、稗畑遺跡と同じ尾根上には栄草原古墳群がある。また1990年度に本事業団が発掘調査を行った倉重向山古墳は倉重川の谷に張り出している丘陵の先端部分にあり、眼下には沖積平野、広島湾が広がる。当地域では初めての前半期前方後円墳で、被葬者は当地域の中心的な地位を占めていたと考えられている。こうしたことから倉重川流域が早い時期から人々の生活の場となっていたことが明らかになりつつあり、注目される。

注

1. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』1987
2. 注1に同じ
3. 五日市町誌編集委員会『五日市町誌』上巻 1974
4. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『倉重向山遺跡発掘調査報告』1991
5. 注3に同じ
6. 注3に同じ
7. 注3に同じ
8. 注3に同じ
9. 広島市教育委員会『小林遺跡A・B地点遺跡発掘調査報告』1990
10. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『笹利迫田遺跡発掘調査報告書』1985
11. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告(Ⅲ)』 1986
12. 注11に同じ
13. 注11に同じ
14. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988
15. 注14に同じ
16. 1990年度, 財団法人広島市歴史科学教育事業団が発掘調査を実施した。
17. 注9に同じ
18. 注4に同じ

【参考文献】

1. 広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』1990

III 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

稗畑遺跡は、通称極楽寺山（標高663m）から南東に派生する丘陵の尾根上及び南側斜面（標高160～200m）に立地する。本丘陵の西側には、倉重川の開析した狭小かつ急峻な谷があり、この谷を利用してつくられている棚田面との比高は約20～30mである。本丘陵の尾根筋はほぼ東西方向に延び、その東端部分で北へ曲がっている。遺構はその尾根上及び南側斜面の主として3カ所から検出された。

1地点は尾根筋の東端が北へ曲がっている部分である。1地点からは住居跡2軒、テラス状遺構3カ所その他、土器棺墓7基、土墳墓2基が検出された。また、遺構及びその周辺から弥生土器が出土した。

2地点は本遺跡の中心となるが、大きく尾根上の遺構と南側斜面上の遺構とに分けられる。尾根筋は、本遺跡最高位部（標高203m）より東へなだらかに傾斜しているが、標高195m付近と標高182m付近で比較的広い平坦面を持つ。2地点尾根上の遺構はすべてこの平坦面に集中している。遺構としては住居跡9軒（建て替え分を除く）、掘立柱建物跡8棟、土坑2基、土墳墓1基が検出された。2地点南側斜面は傾斜が20～25°の急斜面で、斜面中ほどやや湾入している。ここからは住居跡20軒（建て替え分を除く）、テラス状遺構1カ所、土坑3基、住居跡状遺構6カ所が検出された。遺構及びその周辺から大量の弥生土器が出土したが、斜面の一部から須恵器が、標高195m付近の尾根上平坦面からは土師質土器も出土した。その他、鉄器・石器等も出土している。

3地点は遺跡の西端部である。住居跡2軒、土坑1基が検出され、遺構及びその周辺から弥生土器・鉄器・石器が出土している。なお、2地点と3地点の間には岩が露出しており、トレンチ調査の結果遺構は検出されず、遺構の空白部になっている。

2. 弥生時代の遺構

(1) 住居跡

第1号住居跡（第6図）

本住居跡は、1地点の尾根筋の東端に位置する。尾根筋と南側斜面との傾斜変換点あたりを掘り込んで住居をつくっている。床面は幅460cm、奥行280cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。壁高は最大56cm、壁溝は深さ3～9cm、幅6～30cmである。柱穴と思われるピットが3個検出されたが、P1、P2はいずれも住居跡隅の溝又は壁中にある。P3に対応する柱穴は斜面のため流失していると思われることから、構造は4本柱で460cm×300cmの隅丸長方形プランと推定される。

なお、本住居跡に伴い若干の土器片が出土したが時期は明らかでない。

第2号住居跡（第7図）

本住居跡は、1地点の北側斜面に位置する。本遺跡の住居跡、テラス状遺構の中で唯一北方向へつくり出した遺構であり、そのため日当たりも大変悪い。床面は幅350cm

m, 奥行き230cmが遺存するが北側は斜面のため流失している。壁高は最大90cm, 壁溝は検出されなかった。床面からはピットが1個検出されたが, 構造については明らかでない。

なお, 本住居跡に伴い若干の土器片が出土したが, 時期は明らかでない。

第3号住居跡 (第8図)

本住居跡は, 2地点の東端, 尾根上の標高182m付近の平坦面と南側斜面の傾斜変換点あたりに位置する。等高線に沿うように斜面を掘り込み住居をつくっている。床面は幅390cm, 奥行き240cmが遺存するが, 南側は斜面のため流失している。壁高は最大30cm, 壁溝は深さ7cm前後, 幅3~10cmである。P1, P2に対応する柱穴が斜面のため流失していると思われることから, 構造は4本柱の円形プランと推定される。

なお, 本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第4号住居跡 (第9図)

本住居跡は, 2地点の尾根上標高182m付近の平坦面に第3号住居跡から西へ12m離れて位置する。北東で第3号土壌墓と切り合っている。本遺跡の住居跡の中で最も遺存状態の良い住居跡の1つで, 4本柱で1辺が390cmの隅丸方形プランである。壁高は北側で最大44cm, 壁溝は深さ3~12cm, 幅4~19cmでほぼ完全に周回している。床面中央部に長径100cm, 短径72cm, 深さ7~15cmの長円形のくぼみがあり, 炭混じりの黒色土が充満していた。周囲に焼土面が見られることから炉跡と考えられる。また, 住居南東隅の床面及び溝中から11個の石を検出した。1辺が25cmで上面がほぼ水平な石もあったが, 多くは不整形な礫でいずれも利用方法は不明である。

なお, 本住居跡に伴うと考えられる遺物は, 床面中央のくぼみの黒色土上から弥生土器(No. 1)が, 床面から砥石(No. 76)がそれぞれ出土した。出土した土器の特徴から, 上深川(古)式段階の時期の遺構であると思われる。

第5号住居跡 (第10図)

本住居跡は, 2地点の尾根上標高194m付近の平坦面に位置する第5号~第8号住居跡群のうちの1つである。4つの住居跡は互いに切り合っており本住居跡も北で第6号住居跡と, 西で第8号住居跡と切り合っている。住居跡の中央やや南よりを東西方向に後世の里道が通っており床面が削られている。本住居跡の南西部分では一部で壁溝が二重になっているが, 現状のプランには内側の壁溝が対応している。壁高は北東側で最大20cm, 壁溝は深さ2~5cm, 幅4~14cmである。床面からは10個のピットが検出されたがそのうちP1, P2, P3, P4, P5, P6は190~220cm間隔で比較的整然と配置されていることから, 里道によって削られていると思われる2本の柱穴を加えた8本柱構造の可能性もある。しかし, その場合削られていると思われる柱穴の位置が他の6本の柱穴に比べて壁からの距離が遠かったことになる。そのためP2, P4, P6に里道によって削られていると思われる1本の柱穴を加えた4本柱構造も考えられる。いずれの場合も径720cmの円形プランと推定される。推定プランのほぼ中央部に現状で30cm×35cm, 深さ6~12cmの長方形のくぼみがあるが, 里道によって南側は削られている。位置や形状から炉跡と考えられる。なお, 南西

部分の外側にも壁溝があるため建て替えも考えられよう。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は、P4内などから弥生土器が出土した。いずれも細片であり図示しえなかったが、その特徴から上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。

第6号住居跡（第12図）

本住居跡は、南で第5号住居跡と、北で第7号住居跡と、西で第8号住居跡とそれぞれ切り合っている。本住居跡の床面レベルは、第5号住居跡の床面より10cm高く、第7号住居跡の床面より20cm低い。また土層観察から本住居跡が第5号住居跡より新しいと思われる。床面は南側が第5号住居跡と重複しており、北側が幅470cm、奥行き160cm遺存する。壁高は北西部で最大17cm、壁溝は深さ3～4cm、幅4～9cmである。構造はP2、P3、P4、P5、P9、P10、P12又はP1、P3、P4、P6、P8、P10、P11の2通りの7本柱の組み合わせが考えられ、本住居跡は建て替えが行われたと思われる。いずれの場合も径300cm程度の円形プランと推定される。なお、P7は支柱と思われる。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は土器片が出土したが、時期は明らかでない。また、本住居跡の床面と想定されるレベルから砥石（No. 77）が出土した。

第7号住居跡（第13図）

本住居跡は、南で第6号住居跡と、南西で第8号住居跡とそれぞれ切り合っている。遺存状態が極めて悪く、北東部分の壁や壁溝がわずかに確認された。壁高は最大21cm、壁溝は深さ1～5cm、幅4～12cmである。構造としてはP3、P5、P6、P8の4本柱が考えられ、壁と柱穴の位置関係から長円形又は隅丸方形プランと推定される。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は、壁溝中から弥生土器（No. 2）が出土した。その特徴から、上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。

第8号住居跡（第14図）

本住居跡は、後世の里道が東西方向に走り東側が一部削られているが、比較的遺存状態の良い住居跡であり、径580cmの円形プランを呈する。壁高は北側で最大70cm、壁溝は遺存部分では周回しており深さ3～7cm、幅4～14cmである。床面から全部で8個のピットが検出されたが、そのうちP1、P3、P5、P7は柱穴間が約230cmで一定していることからP1、P7間の里道によって削られたと思われる1本を加えた5本柱構造が考えられる。また、現状のプランとは一致しないが底面レベルや柱穴間の距離からP2、P4、P6、P8の4本柱構造も考えられる。この4本柱の組み合わせは現状のプランの西に偏っていることから、4本柱から5本柱への住居の拡張に伴う建て替えがあったものとも推定される。

床面のほぼ中央部に65cm×35cm、深さ6～9cmの長方形のくぼみがあり、周囲に焼土面が確認されたことから炉跡と考えられる。また、床面から上面のレベルがほぼ水平な板石が3個検出された。利用方法については明らかでない。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第9号住居跡（第15図）

本住居跡は、2地点の尾根上標高194m付近の平坦面に第8号住居跡から北へ3.

5 m離れて位置する。北西で第10号住居跡と切り合っている。壁高は西側で最大50 cm, 壁溝は周回しておらず部分的にないところがある。深さは4~15 cm, 幅4~20 cmである。床面からは6個のピットが検出されたが, そのうち壁との位置関係などから構造はP1, P3, P5, P7の4本柱と推定される。プランは長径670 cm, 短径620 cmの長円形で, 西側の壁は直線的である。床面の中央部西よりに80 cm×60 cmの範囲で不整形な焼土面があり炉跡と考えられる。

また, 本住居跡の床面全体にわたって大量の炭化材が検出され, 北東部分の床面及び溝中から焼けて赤変したと思われる礫が13個出土したことから, 本住居跡は火災にあったものと思われる。

なお, 本住居跡に伴うと考えられる遺物は弥生土器(No. 3, No. 4)が出土した。その特徴から, 上深川II式段階の時期の遺構であると思われる。

第10号住居跡(第15図)

本住居跡は, 2地点の尾根上標高194 m付近の平坦面に位置し, 南東で第9号住居跡と切り合っている。そのため床面は削平され, 幅480 cm, 奥行き140 cmしか遺存していない。壁高は西側で最大47 cmあり, 壁溝は遺存部分では周回しており深さは4~9 cm, 幅9~22 cmである。床面から検出されたP4, P8に対応する柱穴は, 底面レベルや壁との位置関係から考えて第9号住居跡の床面から検出されたP2, P6と思われる。その場合, 4本柱構造で長径570 cm, 短径530 cm程度の長円形プランと推定される。西側の壁は直線的である。また, 土層観察から, 本住居跡が第9号住居跡に先行するものと思われる。

なお, 本住居跡に伴うと考えられる遺物は土器片が出土したが, 時期は明らかでない。

第11号住居跡(第16図)

本住居跡は, 2地点の尾根上標高195 m付近の平坦面の西端に位置する。本遺跡中最も遺存状態の良い住居跡の1つであり, 径620 cmの円形プランを呈する。壁高は46~64 cm, 壁溝は南西側の一部を除いて周回しており, 深さ4~7 cm, 幅3~12 cmである。床面から11個のピットが検出されたが, それを深さによって分けるとP1, P6, P10が61~66 cm, P3, P9が50~55 cm, P7が44 cm, P2, P4, P5, P8, P11が35~38 cmとなる。各柱穴間の距離や壁との位置関係等を考えると, P1, P3, P6, P10及びP2, P5, P7, P9の2通りの4本柱の組合せが考えられ, 住居の建て替えがあったものと推定される。P4, P8, P11は支柱と考えられる。

床面ほぼ中央部の150 cm×110 cmの範囲が不整形にわずかに掘り込まれ, そこから焼土面が検出されており炉跡と思われる。また, 第5号住居跡にも同様の施設が見られるが, 本住居跡の北西部の壁が幅65 cm, 深さ20~23 cmにわたって掘り込まれており, 用途は不明であるが住居跡に伴う何らかの施設があった可能性がある。

なお, 本住居跡に伴うと考えられる遺物は弥生土器(No. 5)が出土した。出土した土器の特徴から上深川III(古)式段階の時期の遺構であると思われる。

第12号住居跡(第17図)

本住居跡は, 3地点の尾根上に位置する。3地点の尾根筋はたいへん狭小であるため本住居跡も西側は斜面により一部が流失している。東では第3号土坑と切り合っている。

壁高は南側で最大31cm、壁溝は深さ4～9cm、幅2～9cmで総じて浅く狭い。床面からは18個のピットが検出されたが壁との位置関係や柱穴間の距離からP1、P5、P7、P15の4本柱の組み合わせが考えられ、径605cm程度の円形プランと推定される。床面中央やや南よりに、直径70cm程度、深さ12～16cmの不整形のくぼみがあり、位置や形状から炉跡と思われる。また、第3号土坑との新旧関係は明らかでない。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は弥生土器(No. 6)が出土した。出土した土器の特徴から上深川Ⅰ式段階の時期の遺構であると思われる。

第13号住居跡(第18図)

本住居跡は、3地点の尾根上、第12号住居跡の北東5mに位置する。本遺跡中最西端の遺構である。尾根筋がたいへん狭小であるため東西両側とも斜面により一部が流失している。壁高は南東側で最大32cm、壁溝は深さ3～8cm、幅1～9cmである。床面から13個のピットが検出されたが、そのうち壁との位置関係や底部レベルから考えてP1、P3、P5、P10又はP2、P4、P6、P9の4本柱に、斜面により流失していると思われる2本を加えた6本柱構造による径670cm程度の円形プランと推定される。その場合、本遺跡中でも最も大きい住居跡の1つである。また建て替えの行われた可能性もある。床面のほぼ中央部にあると考えられる場所に、75cm×50cm、深さ7～18cmの長方形のくぼみがあり、埋立中には炭が混じっていた。位置、形状、検出状況から炉跡と考えられる。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は弥生土器が若干出土した。細片のため図示しえなかったが、その特徴から上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると考えられる。

第14号住居跡(第19図)

本住居跡は、標高189mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。壁溝及び床面が3組検出されており、3軒分の住居が重複していると思われる。レベルの低い方から床面a、b、cとする。床面aは、斜面のためほとんどが流失しており、幅270cm、奥行き20cm程度しか遺存していない。壁高は現状で最大15cm、壁溝は深さ4cm、幅4～11cmであるが遺存状態は良くない。床面aに伴うと考えられる柱穴及び焼土等は検出されずプランも推定しえない。床面bは南側で床面aと重複しており、幅345cm、奥行き155cmが遺存する。壁高は現状で最大32cm、壁溝は深さ6～15cm、幅11～19cmである。プランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と考えられる。床面cは南側で床面bと重複しており、幅310cm、奥行き40cmが遺存するのみである。壁高は最大72cm、壁溝は深さ2～6cm、幅8～14cmである。プランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と考えられる。

床面bに伴う壁から南へ150cmのところ、床面bと同レベルで25cm×40cmの範囲で焼土面(田)が検出されており、床面bに対応する炉跡と考えられる。同様に床面cに伴う壁から南へ100cmのところ、床面cと同レベルで20cm×30cmの範囲で焼土面(月)が検出されており、床面cに対応する炉跡と思われる。焼土の検出状況から、床面aが最も先行し、ついで床面b、床面cの順に斜面を掘り込みながら斜面上方へと建て替えをしていったと思われる。

また、床面b上から4個のピットが検出されたが、底部のレベルからP1、P2及びP3、P4の組み合わせが考えられる。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物としては土器片が出土したが、時期は明らかでない。

第15号住居跡（第20図）

本住居跡は、2地点の標高195mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。床面は幅550cm、奥行き175cmが遺存するが南側は斜面のため流失している。壁高は現状で最大32cm、壁溝は深さ4～10cm、幅4～15cmである。壁は直線状で東西両側で南へ回っている。床面からは3個のピットが検出されたが構造は明らかでない。推定されるプランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と考えられる。また、中央部分で壁溝が南へ回りかけているように見え、東側へ拡張された可能性もある。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土していない。

第16号住居跡（第21図）

本住居跡は、2地点の標高190mの南側斜面に第14号住居跡から北へ1.5m離れて位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。壁及び床面が6組検出されており、6軒分の住居が重複していると思われる。しかし、20°を越える急斜面への立地のためその大部分は流失しており遺存状態はたいへん悪い。床面はレベルの低い方から床面a、b、c、d、e、fとする。床面aは幅85cm、奥行き60cmが北東隅にわずかに遺存するのみである。壁高は現状で最大17cm、壁溝は深さ2cm、幅6～8cmである。床面bは床面aと南側で重複しており幅110cm、奥行き35cm程度しか遺存していない。壁高は現状で最大17cm、壁溝は検出されなかった。床面cは床面bと南側で重複しており幅460cm、奥行き35cmが遺存する。壁は東側で南へ回りかけており、壁高は現状で最大35cm、壁溝は検出されなかった。床面dは床面cと南側で重複しており幅125cm、奥行き65cmが北西隅にわずかに遺存するのみである。壁は西側で南へ回っており、壁高は現状で最大15cm、壁溝は深さ5～17cm、幅11～22cmである。床面eは南側で一部床面dと重複し、また斜面のため流失しており、幅250cm、奥行き80cmが遺存する。壁は東西両側で南へ回っており、壁高は最大16cmである。壁溝は深さ2～3cm、幅9～25cmである。床面fは床面cと南側で重複しており幅290cm、奥行き80cmが遺存する。壁は東側で南へ回っており、壁高は最大35cmである。壁溝は検出されなかった。

住居跡内からは6個のピットが検出された。壁との位置関係からP1、P2が床面aに伴うと考えられ、その場合は1辺が385cm程度の隅丸方形又は斜面であることを考慮し隅丸長方形プランと推定される。しかし、P1、P2の底部のレベル差が35cmあり疑問も残る。そこで底部レベルの等しいP1、P4が床面b又は床面cに対応することも考えられる。

また、床面cに伴う壁から南へ70cmのところ、床面cと同レベルで径60cm程度の不整形な焼土面(日)が検出され、床面cに対応する炉跡と思われる。同様に床面cに伴う壁に南で接する位置に床面dと同レベルで45cm×55cmの範囲に不整形な焼土面(月)が検出され、床面dに対応する炉跡と思われる。焼土の検出状況から床面a、b

が最も先行し、ついで床面c，床面dの順に斜面を掘り込みながら斜面上方へと建て替えをしていったと思われる。床面e，fについては新旧関係は明らかでない。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物としてはP2内及び床面b又はcの範囲内から弥生土器細片が、床面dから弥生土器（No. 7，No. 8）がそれぞれ出土した。その特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式段階の時期を中心とした遺構であると思われる。

第17号住居跡（第22図）

本住居跡は、2地点の標高189.5mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。壁溝及び床面が2組検出されており、2軒分の住居が重複していると思われる。レベルの低い方から床面a，bとする。床面aは幅600cm，奥行き55cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。壁高は現状で最大16cm，壁溝は東西両側で一部遺存しており深さ1～6cm，幅10～21cmである。床面bは南側で床面aと重複しており，幅240cm，奥行き160cmが遺存する。壁高は最大41cm，壁溝は深さ2cm，幅34～40cmである。

床面からは、ピットが4個検出されており、柱穴の組み合わせとしては、壁との位置関係からP1，P4の組み合わせが考えられるがプランは推定しえない。

また、床面aに伴う壁から南へ20cmのところに床面bと同じレベルで48cm×42cmの不整形な焼土面が検出され、床面bに対応する炉跡と思われる。このことから床面aが床面bに先行すると思われる。

なお、本住居跡の東側には現状で幅340cm，奥行き160cmの平坦面が付属している。

本住居跡に伴うと考えられる遺物としてP4内から弥生土器（No. 9）が出土した。その特徴から床面aは上深川Ⅰ式段階の時期の遺構であると思われる。

第18号住居跡（第23図）

本住居跡は、2地点の標高189.5mの南側斜面に第16号住居跡から西へ2.2m離れて位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。壁溝及び床面が2組検出されており，2軒分の住居が重複していると思われる。レベルの低い方から床面a，bとする。床面aは幅550cm，奥行き260cmが遺存するが，南側は斜面のため流失している。壁高は西側の屈曲部で最大73cm，壁溝は深さ2～6cm，幅5～13cmである。構造はP1，P2，P3，P4，P6，P7，P8及びP4－P6間に斜面のため流失したと思われる1本を加えた8本柱で，プランは東西に長径をとる長円形プランと推定される。その場合，長径600cm，短径460cm程度になるものと思われる。

床面bは南側で床面aと重複しており，なおかつ第4号テラス状遺構によって上端を削平されているため，幅130cm，奥行き70cmが遺存するのみである。壁高は現状で最大21cm，壁溝は深さ2～5cm，幅9～16cmである。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物としては床面aから弥生土器（No. 10）が出土した。その特徴から床面aは上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。

第19号住居跡（第24図）

本住居跡は、2地点の標高187.5～189.5mの南側斜面に位置する。斜面を等高線に沿うように掘り込んで住居としている。壁及び床面が4組検出されており，4

軒分の住居が重複していると思われる。レベルの低い方から床面 a, b, c, dとする。床面 aは幅500cm, 奥行き155cmが遺存するが, 南側は斜面のため流失している。壁は西側で南に回っており, 壁高は最大49cmである。壁溝は深さ8~28cmであるが概ね10cm以上と深く, 幅も10~50cmとたいへん広い。プランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して北側の壁を長辺とする隅丸長方形と推定される。床面 bは床面 aと南側で重複しているが, 床面 aの上に貼り床面を確認した。床面 bはこの貼り床面を含めて幅665cm, 奥行き185cmが遺存していた。壁は西側で南に回っており, 壁高は最大55cm, 壁溝は深さ6~16cm, 幅8~24cmである。斜面であることから北側の壁を1辺とする方形プランは考えがたく長方形プランであったと推定される。床面 cは床面 bと南側で重複しており幅380cm, 奥行き60cmが遺存する。壁は東西両側で南へ回りかけており, 壁高は現状で最大13cm程度, 壁溝は深さ1~6cm, 幅4~10cmである。プランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して北側の壁を長辺とする隅丸長方形と推定される。床面 dは床面 cと南側で重複しており幅430cm, 奥行き30cmが遺存する。壁は直線状であるが東側で南へ回り, 壁高は最大12cm, 壁溝は深さ8~9cm, 幅5~9cmである。プランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して北側の壁を長辺とする隅丸長方形と推定される。

また, 床面 bの貼り床面上から径60cm程度の不整形な焼土面を2カ所検出したが, 床面 bに伴う炉跡を思われる。このことから床面 aが床面 bに先行すると思われる。

なお, 本住居跡に伴うと考えられる遺物として床面 aから弥生土器が出土した。細片のため図示しえなかったが, その特徴から上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。また床面 bからは鉄鏃 (No. 65) が出土した。

第20号住居跡 (図25図)

本住居跡は, 2地点の標高189~191mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。壁溝及び床面が7組検出されており, 7軒分の住居が重複していると思われる。レベルの低い方から床面 a, b, c, d, e, f, gとする。床面 aは壁が北から西へ回るのみで床面自体は遺存しないが, 土層観察の結果奥行き180cmの褐色の粘土層を確認し, これを貼り床面と考え床面 aとした。壁高は現状で最大12cmである。床面 bは南側で床面 aと重複しており, 幅480cm, 奥行き50cmが遺存する。壁は直線状であるが, 東側で南へ回りかけており, 壁高は現状で最大39cmである。壁溝は深さ3~4cm, 幅11~19cmである。床面 cは南側で床面 bと重複してあり, 幅670cm, 奥行き35cmが遺存する。土層観察の結果, 床面 bに伴う壁溝の上に褐色の粘土による貼り床を確認した。壁は直線状であるが, 西側で南へ回りかけている。壁高は現状で最大39cmである。壁溝は深さ3~9cm, 幅6~40cmである。しかし, 床面 cに伴う壁溝は長さが780cmもあり長すぎることや, 途中で方向が変わっていること等から2軒分の壁溝が重複しているものと考えられる。床面 dは床面 cと南側で重複しており幅190cm, 奥行き20cmが遺存する。土層観察の結果, 床面 c上からこれに伴う壁溝の上に褐色の粘土による貼り床を確認した。壁は370cmあり, 西側で南へ回っている。壁高は現状で最大51cm, 壁溝は深さ1~6cm, 幅9~30cmである。床面 eは床面 dと東側で重複しており幅125cm, 奥行き100cmが遺存する。土層観察の結果, 床面 d上からこれに伴う壁溝の上

に褐色の粘土による貼り床を確認した。壁は西側で南へ回っており、壁高は現状で最大18cmである。壁溝は深さ4～6cm、幅9～20cmである。床面fは床面d、eと南側で重複しており、幅300cm奥行き32cmが遺存する。床面eに伴う壁溝の上に褐色の粘土による貼り床を確認した。壁は西側で南へ回りかけており、壁高は現状で最大14cm、壁溝は深さ3～8cm、幅5～18cmである。床面gは床面e、fと南側で重複しており幅210cm、奥行き90cmが遺存する。壁は730cmでほぼ直線状であり西側で南へ回っている。壁高は最大61cm、壁溝は深さ3～9cm、幅7～24cmである。なお、プランは各床面とも隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形であると推定される。

貼り床面の検出状況から、斜面下方の床面aが最も先行し次いで床面b、床面cの順に斜面を掘り込み貼り床面をつくりながら斜面上方へと建て替えが行われていったものと推定される。なお、床面gについては新旧関係は明らかでない。

また、本住居跡に伴うと考えられる遺物として床面dに伴う壁溝中から弥生土器（No. 11）が、床面eに伴う壁溝中から弥生土器（No. 12）が、床面fに伴う壁溝中から弥生土器（No. 13）がそれぞれ出土した。その特徴から本住居跡は上深川Ⅲ（古）式段階の時期の遺構であると思われる。また床面gからは砥石（No. 78）が出土し、床面aの貼り床面の下から上深川Ⅱ式段階の時期の特徴を持った弥生土器（No. 14）が出土している。

第21号住居跡（第26図）

本住居跡は、2地点の標高191.5mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。壁溝及び床面が2組検出されており、2軒分の住居が重複していると思われる。レベルの低い方から床面a、bとする。床面aは幅400cm、奥行き150cmが遺存するが南側は斜面のため流失している。壁は西側で南へ回っており、壁高は最大61cm、壁溝は深さ1～3cm、幅6～11cmである。床面bは東側で床面aと重複しており幅225cm、奥行き150cmが遺存するが南側は斜面のため流失している。壁は東西両側で南へ回っており、壁高は最大70cm、壁溝は深さ6～10cm、幅12～24cmである。住居跡内からは3個のピットが検出された。そのうち壁との位置関係、底面レベルからP2、P3が床面aに対応する柱穴と思われ、その場合推定されるプランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と考えられる。また、P1の底部のレベルが191.22mであるのに対して、床面aのレベルが191.20m程度であるから、P1に対応する柱穴は床面aとの重複のため遺存していないと思われ、この2個が床面bに対応する柱穴と考えられる。その場合、推定されるプランは長径500cm、短径400cm程度の長円形である。

また、床面aより床面bの方が20cm高く、土層観察の結果、床面aが床面bに先行すると思われる。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物として弥生土器が出土した。細片のため図示しえなかったが、その特徴から床面a、bともに上深川Ⅲ（古）式段階の時期の遺構と考えられる。

第22号住居跡（第27図）

本住居跡は、2地点の標高193mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居を

つくっている。壁溝及び床面が4組検出されており、4軒分の住居が重複していると思われる。レベルの低い方から床面a, b, c, dとする。床面aは床面bによって削平を受けているため壁溝のみが残る。壁溝は西側で南に回っており、深さは2~3cm, 幅6~18cmである。床面bは幅100cm, 奥行き150cmが遺存するが南側は斜面のため流失している。壁高は現状で最大12cm, 壁溝は深さ3~5cm, 幅4~20cmである。床面cは床面bと南側で重複しており幅330cm, 奥行き35cmが遺存する。壁は西側で南へ回っており、壁高は最大70cm, 壁溝は検出されなかった。床面dは幅160cm, 奥行き40cmが遺存する。壁は西側で南へ回っており、壁高は最大21cm, 壁溝は深さ6~8cm, 幅9~13cmである。

本住居跡からは4個のピットが検出された。そのうち壁との位置関係や底面レベルからP1, P2の組み合わせが床面bに対応すると思われる。その場合、推定されるプランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と考えられる。また、柱穴については明らかでないが、床面aは一辺が330cmの隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と考えられる。

また、床面bに伴う壁から南へ130cmの床面a上に50cm×30cmの範囲で不整形な焼土面(日)が検出されたが床面bに伴う炉跡と思われる。同様に床面cに伴う壁から南へ110cmのところに床面cと同レベルで28cm×38cmの範囲で不整形な焼土面(月)が検出されたが床面cに伴う炉跡と思われる。焼土の検出状況から、床面aが最も先行し、床面b, 床面cの順に斜面を掘り込みながら斜面上方へと建て替えが行われていったものと推定される。

なお、本住居跡の西側には幅420cm, 奥行き80cmの平坦面が付属している。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は床面bから弥生土器片、床面cから弥生土器(N o. 15), 付属する平坦面上から弥生土器片がそれぞれ出土した。細片のため図示しえないものもあるが、土器の特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。

第23号住居跡(第28図)

本住居跡は、2地点の標高193mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。本住居跡からは壁及び床面が3組検出されており、3軒分が重複していると思われる。レベルの低い方から床面a, b, cとする。床面aは南側で斜面のため流失しているが、南側斜面の住居跡の中で最も遺存状態が良いものの1つで、420cm×470cmの隅丸形状に遺存する。壁高は現状で最大58cm, 壁溝は遺存部分で周回し深さ3~9cm, 幅4~17cmである。床面bは床面aと南側で重複しており貼り床面を含めると幅320cm, 奥行き260cmが遺存していた。壁は東西両側でゆるやかに南へ回っており、壁高は現状で最大18cm, 壁溝は検出されなかった。床面cは床面bと南側で重複しており幅380cm, 奥行き25cmが遺存する。壁は東西両側でゆるやかに南へ回っており、壁高は現状で最大21cm, 壁溝は検出されなかった。

床面aから3個のピットが検出された。床面aはこの3個により斜面により流失していると思われる2個の柱穴を加えた5本柱の隅丸方形プランと推定される。またプランのほぼ中央と思われる場所に、長径50cm, 短径42cm, 深さ4~6cmの長円形

のくぼみが検出された。位置，形状から床面 a に対応する炉跡と思われる。床面 b，床面 c についてもほぼ同形状のプランであったと推定される。

床面 b に伴う壁から南へ 160 cm のところに床面 b と同レベルで 60 cm × 70 cm の範囲で不整形な焼土面①を検出したが床面 b に伴う炉跡と思われる。同様に床面 c に伴う壁から南へ 140 cm のところに床面 c と同レベルで 60 cm × 32 cm の範囲で不整形な焼土面②を検出したが床面 c に伴う炉跡と思われる。焼土の出土状況から，床面 a が最も先行し床面 b，床面 c の順に斜面を掘り込みながら斜面上方へと建て替えが行われていったものと推定される。

なお，本住居跡に伴うと考えられる遺物としては床面 a から弥生土器の他，鉄鏃（No. 66），石鏃 2（No. 68，No. 69），石錐（No. 75），砥石（No. 79）など本遺跡中最も多く出土した。細片のため図示しえなかったが，土器の特徴から上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。

第 24 号住居跡（第 30 図）

本住居跡は，2 地点の標高 191 m の南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。壁及び床面が 2 組検出されており 2 軒分が重複していると思われる。レベルの低い方から床面 a，b とする。床面 a は幅 560 cm，奥行き 75 cm が遺存するが南側は斜面のため流失している。床面 a に伴う壁は直線状で西側で南へ回っており，壁高は現状で最大 30 cm，壁溝は深さ 6～10 cm，幅 12～24 cm である。床面 b は南側で床面 a と重複しており幅 520 cm，奥行き 70 cm が遺存する。壁は直線状で東西両側で南へ回っており壁高は最大 77 cm，壁溝は一部で消失しているところがあり深さ 6～10 cm，幅 12～24 cm である。

床面 a に伴う壁は東端から 120 cm ほどのところで一旦回りかけているようにも見える。床面 a からはピットが 5 個検出されているが，その場合，柱穴間の距離から P1，P2，P4 の組み合わせが考えられる。斜面のため方形プランは考えにくく，長辺 490 cm の長方形プランが推定される。また壁との位置関係から P6，P7 が床面 b に伴う柱穴と思われ，床面 a と同規模のプランと推定される。

また，床面 b に伴う壁から南へ 140 cm のところに床面 b と同レベルで 34 cm × 36 cm の範囲で方形の焼土面が検出されており，床面 b に伴う炉跡であると思われる。このことから床面 a が床面 b に先行すると考えられる。

なお，本住居跡に伴うと考えられる遺物としては床面 a から弥生土器（No. 16）が，床面 b から弥生土器（No. 17）が出土した。その特徴から本住居跡は上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。

第 25 号住居跡（第 31 図）

本住居跡は，2 地点の標高 186 m の南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。床面は幅 520 cm，奥行き 170 cm が遺存するが，南側は斜面のため流失している。本住居跡のすぐ北上方が工事用車輛による削平を受けているため本住居跡の壁もその可能性があるが，壁高は現状で最大 67 cm である。壁溝は遺存部分で周回しており深さ 1～3 cm，幅 10～26 cm である。床面からはピットが 1 個検出された。プランは円形又は斜面であることを考慮して長円形と推定される。

なお，本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第26号住居跡（第32図）

本住居跡は、2地点の標高186.5mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっている。床面は幅560cm、奥行き180cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。壁はほぼ直線状であり、壁高は現状で最大51cmである。壁溝は深さ6～13cm、幅19～30cmである。床面が流失しかけている斜面からピットが3個検出された。

なお、本住居跡上をちょうど覆うように大量の弥生土器が出土した。出土の範囲が遺構の範囲に限られていること、床面から10cm付近のところから重なって出土していること等の状況からみて、上方の遺構群から流れ込んで来たものではなく、この場所へ一括投棄されたものと推定される。これらの土器の特徴が上深川Ⅱ式段階のものであることから、本住居跡もそれと同時期ないしはそれ以前の時期の遺構であると思われる。

第27号住居跡（第33図）

本住居跡は、2地点の標高187mの南側斜面に位置する第27号～第32号住居跡群のうち最も東にある。斜面を掘り込んで住居をつくっており、西で第28号住居跡と切り合っている。床面は、幅290cm、奥行き125cmが遺存するが、南側は工事用車輛によって削平されている。壁はゆるやかにカーブしており壁高は最大10cm、壁溝は検出されなかった。また床面からP1が検出された。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第28号住居跡（第33図）

斜面を掘り込んで住居をつくっており、東で第27号住居跡と、西で第29号住居跡、第30号住居跡とそれぞれ切り合っている。床面は幅260cm、奥行き120cmが遺存するが、南側は工事用車輛によって削平されている。壁は東側で南へ回っており壁高は最大49cm、壁溝は深さ6～8cm、幅10～26cmである。また床面からP2、P3が検出された。プランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と推定される。

また、本住居跡床面と第27号住居跡床面、第30号住居跡床面aとのレベル差はほとんどでなく、第29号住居跡の床面より約25cm高い。各住居跡との新旧関係は明らかでない。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は砥石（No. 80）が出土した。

第29号住居跡（第33図）

斜面を掘り込んで住居をつくっており、東で第28号住居跡と、北で第30号住居跡、第32号住居跡と、西で第31号住居跡とそれぞれ切り合っている。床面は幅270cm、奥行き130cmが遺存するが、南側は工事用車輛によって削平されている。壁はほぼ直線状であるが東側で南へ回っており、壁高は現状で最大21cmである。壁溝は深さ2～3cm、幅4～10cmである。また床面からP6、P7が検出された。プランは隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と推定される。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物としては弥生土器（No. 18）が出土した。細片のため明らかにしがたいが、その特徴から上深川Ⅰ式段階の時期の遺構であると思われる。

第30号住居跡（第33図）

斜面を掘り込んで住居をつくっており、東で第28号住居跡と、南で第29号住居跡と、西で第32号住居跡とそれぞれ切り合っている。本住居跡からは、貼り床面を含めて3組の壁及び床面が検出されており、3軒分が重複していると思われる。レベルの低い方から床面a, b, cとする。床面aは第29号住居跡の上に貼り床をして住居をつくっており、貼り床面を含めて幅230cm, 奥行き240cmが遺存する。壁は北側でやや直線的で東側で南へ回る。壁高は現状で最大72cm, 壁溝は深さ2~5cm, 幅7~12cmである。また貼り床面上に32cm×46cmの不整形な焼土面①を検出した。床面bは床面aに伴う壁を再利用し、80cmの盛土を施してつくられている。この床面bは床面a上から第28号住居跡, 第29号住居跡上にかけて検出され幅240cm, 奥行き330cmが遺存していた。本来は西側にもっと広範囲に広がっていたものと思われる。また、壁溝や対応すると思われる柱穴も確認されている。壁高は最大25cm, 壁溝は深さ2.5cm, 幅5~14cm, 柱穴P21は長径58cm, 短径46cmの長円形で、深さは24cmであった。床面cは南側で床面aと重複しており幅340cm, 奥行き45cmが遺存する。壁はほぼ直線状で東側で南へ回る。壁高は最大27cmで、壁溝は検出されなかった。

床面aに対応する柱穴は底面レベルや柱穴間の距離からP4, P5, P10, P14の4本柱の組み合わせが考えられ、この場合長径560cm, 短径440cm程度の長円形プランと推定される。また前述の焼土面①がこの推定プランのほぼ中央部にあたることから、床面aに伴う炉跡であると思われる。

以上の状況から床面aが床面bに先行していたと思われるが、床面cについては明らかでない。また、床面bは第28号住居跡, 第29号住居跡よりも新しいとも思われる。なお、土層観察の結果床面aの上10~25cmの位置に焼土及び炭を確認した。このレベルで床面があったことも考えられる。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物としては床面aより弥生土器(No. 19)が、床面bより弥生土器(No. 20)が出土した。その特徴から床面a, bとも上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。

第31号住居跡(第33図)

斜面を掘り込んで住居をつくっており、東で第29号住居跡, 北で第32号住居跡とそれぞれ切り合っている。床面は幅475cm, 奥行き155cmが遺存するが、南側は工事用車輛によって削平されている。壁は北側でゆるやかにカーブし東側で南へ回っており、壁高は現状で最大10cm, 壁溝は深さ6~8cm, 幅4~11cmである。

本住居跡に対応する柱穴は位置関係及び底面レベルからP11, P19又はP12, P19の2本柱の組み合わせが考えられ、その場合1辺400cm程度の隅丸方形プランと推定される。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は土器片が出土したが時期は明らかでない。

第32号住居跡(第33図)

住居跡群のうち最も深く斜面を掘り込んだ最奥部に位置し、南側で第31号住居跡と切り合っている。壁溝が2本検出されており建て替えがあったと思われる。床面は第31号住居跡の上に褐色粘土による貼り床をしてつくり出していた。貼り床面を含めた床面は幅480cm, 奥行き240cmが確認されたが、南側は工事用車輛によって削平

されていた。外溝に伴う壁の壁高は北側で最大78cmある。2本の壁溝は部分的に重なったり分かれたりしながら周回しており、内溝は深さ7～8cm、幅3～16cm、外溝は深さ2～9cm、幅6～20cmである。また、貼り床面から直径13cmの半円形の範囲で焼土面(月)が検出されたが、南半分は削平されていた。位置から考えて炉跡と思われる。

構造は、P9、P14、P15、P18の4本柱の組合せも想定しうる。しかし、P9、P15の底部レベルがそれぞれ186.56m、186.49mであり、第31号住居跡の床面のレベルが186.40m程度であることから、P9、P15に対応する柱穴は第31号住居跡と重複している可能性が高いと思われる。外溝、内溝のいずれの溝に対応するプランも円形と推定されるが、外溝の場合は直径560cm、内溝の場合は直径540cm程度になろう。

土層観察の結果、外溝が内溝に先行し、さらに第30号住居跡がそれに先行すると考えられることから、先行順に第29号住居跡・第31号住居跡→第30号住居跡床面a→第30号住居跡床面b→第32号住居跡外溝→第32号住居跡内溝という新旧関係があると推定される。

なお、本住居跡の東側床面上から完形に近い6個体の土器が折り重なるように出土した。(第34図)これらの土器群は①土器No.21の口縁部に土器No.22の胴部下半が入り込んだ状態であった。②土器No.22の口縁部に土器No.23の胴部下半が入り込んだ状態であった。③土器の胴部最大径が大きいものから小さいものへ順に並んでいた(No.24→No.23→No.22→No.21)。こうしたことから、土器No.24を一番下にしてうつ伏せに重ねて立てられていたか又は重ねて横倒しにしていたものと推定される。ちなみにNo.21～No.24をうつ伏せに重ねて立てると高さが70cm程度になり大変不安定である。さらにこれらの土器群には、①No.25の高坏を除きすべて底部が打ち欠かれている、No.24については口縁部～肩部も打ち欠かれている、②土器構成は甕形土器3、鉢形土器1(No.26)、高坏1、不明1で壺形土器がなかった可能性が高い等の特徴がある。同様に住居跡内から大量の完形土器が出土した例としては市域では下沖5号遺跡第10号住居跡、岡谷遺跡第2号住居跡、芳ヶ谷遺跡第3号住居跡が報告されている。下沖5号遺跡では7個の土器が住居跡の隅からまとまって出土しており、そのうちのいくつかはうつ伏せに重ねてあったようである。また、壺形土器が含まれていなかったことも本例と類似している。これに対し岡谷遺跡、芳ヶ谷遺跡の場合は住居跡内の全体から散らばって出土している。そして3例とも土器の底部は打ち欠かれていなかった。なお、大久保遺跡では住居跡内から底部の打ち欠かれた土器が出土したが、これは住居跡内の全体から散らばって出土した。つまり、住居跡内からの完形土器の出土状況としては①住居跡内の隅からまとまって出土する場合と住居跡内の全体から散らばって出土する場合がある、②底部が打ち欠かれている場合といない場合がある。この出土状況の違いが何を意味しているのかは類例の増加を待たねばならない。しかし、本例の場合は故意に底部を打ち欠いた土器を住居跡の隅にまとめていることから、住居を廃棄する際に意図的に行なわれた何らかの行為を示しているとも考えられる。

その他、本住居跡に伴うと考えられる遺物としては弥生土器(No.27、No.2

8) が出土した。その特徴から上深川Ⅲ(古)式段階の時期の遺構であると思われる。

第33号住居跡(第35図)

本住居跡は、2地点の標高187.5mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで住居をつくっており東側で第32号住居跡と切りあっている。また南側は工事用車輛によって削平されている。壁及び床面が4組検出されており、4軒分が重複していると思われる。床面のレベルの低い方から床面a, b, c, dとする。床面aは幅170cm, 奥行き150cmが遺存する。壁は北側で直線状であるが西側で南へ回っている。壁高は現状で最大15cm, 壁溝は深さ4cm, 幅5~13cmである。床面bは南側で床面aと重複しており幅85cm, 奥行き170cmが遺存する。壁は北側で直線状であるが西側で南へ回っている。壁高は北側で最大35cmあり, 壁溝は検出されなかった。床面cは東側で床面bと重複しており幅325cm, 奥行き180cmが遺存する。壁は北側で直線状であるが西側で南へ回っている。壁高は現状で最大40cm, 壁溝は検出されなかった。床面dは南側で床面cと重複しており幅470cm, 奥行き230cmが遺存する。壁は北側で直線状であるが西側で南へ回っている。壁高は最大53cmある。壁溝は西側しか遺存しておらず深さ3~7cm, 幅6cmである。

本住居跡床面からは5個のピットが検出された。底面レベルからP3, P4の組み合わせが床面cに伴うとも考えられるが, 壁との位置関係から疑問が残る。推定されるプランはいずれの床面も隅丸方形又は斜面であることを考慮して隅丸長方形と考えられるが規模については明らかでない。

なお, 本住居跡に伴うと考えられる遺物としては床面c, dから弥生土器が出土した。細片のため図示しえなかったがその特徴から上深川(監)式段階の時期の遺構であると思われる。また, 床面a, bに伴うと考えられる遺物は出土しなかったが住居跡埋立中から上深川Ⅱ式段階の特徴を持つ土器が大量に出土したため床面a, bも同時期ないしはそれ以前の遺構と思われる。

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第36図)

本掘立柱建物跡は、2地点の尾根上標高182m付近の平坦面に位置する。南東で第3号住居跡と切り合っている。北東部分は後世の里道によって削られている。ピットは9個検出した。その配置から棟方向はN80°Wと推定され, 桁行450cm, 梁行350cmの2間×2間の建物跡と考えられる。柱穴は径46~72cm, 深さ28~48cmである。また柱穴の配置はP8が外へ出ており, 柱穴間の距離にもややばらつきがある。

なお, P1に対応する柱穴が里道によって削られているとも思われるため, 北側に何らかの付属施設があった可能性もあろう。

本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかったが, 周辺からは弥生土器のみしか出土しておらず, 弥生時代の遺構であると思われる。

第2号掘立柱建物跡(第37図)

本掘立柱建物跡は、2地点の尾根上標高182m付近の平坦面にあり, 第1号掘立柱建物跡と南で接する。ピットは5個検出した。棟方向がN72°Wの1間×2間の建物跡と考え, P1に対応する付近を精査したが柱穴を検出できなかった。そのため, P1

を除いた1間×1間の建物跡と考えざるをえない。棟方向は不明、柱穴間の距離はいずれも232cm前後である。柱穴は径70～84cm、深さは最も深いP4で63cm、底部レベルはほぼ等しい。

なお、本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物は、P1、P4内から弥生土器が出土したが時期は明らかでない。

第3号掘立柱建物跡（第38図）

本掘立柱建物跡は、2地点の尾根上標高194m付近の平坦面に位置し、第5号住居跡、第6号住居跡と重複している。ピットは3個検出した。その配置から棟方向はN61°Eと推定され、桁行250cm、梁行165cmの1間×1間の建物跡と考えられる。しかし、4個目の柱穴は付近にある径75cmの5個のピット列のうちの1個と重複していると思われ確認できない。なお、そのピットの底部レベルは、3個のうちで最も深いP2より19cm低い。柱穴は径24～30cm、深さは最も深いP3で30cm、底部レベルはほぼ等しい。

なお、本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。しかし、第5号掘立柱建物跡と棟方向がほぼ一致し、また規模もほぼ等しいことから第5号掘立柱建物跡と同時期の遺溝であると思われる。

第4号掘立柱建物跡（第40図）

本掘立柱建物跡は、2地点の尾根上標高194m付近の平坦面に位置し、第5号掘立柱建物跡及び第6号住居跡、第7号住居跡、第1号土坑とも重複している。柱穴の配置から棟方向はN84°Eと推定され、桁行270cm、梁行232cmの1間×1間の建物跡と考えられる。柱穴はP4が第1号土坑と切り合って半分削平されているが、径40～56cm、深さは最も深いP3で26cmである。しかし、底部レベルはP1、P2で最大74cmも差があり掘立柱建物跡の柱穴の組み合わせとしては疑問が残る。

なお、本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。しかし桁行、梁行の規模やその形状が第5号掘立柱建物跡と類似していることから弥生時代の遺構であると思われる。

第5号掘立柱建物跡（第40図）

本掘立柱建物跡は、2地点の尾根上標高194m付近の平坦面に位置し、第4号掘立柱建物跡及び第6号住居跡、第7号住居跡、第1号土坑とも重複している。ピットは3個検出した。その配置から棟方向はN56°Eと推定され、桁行270cm、梁行190cmの1間×1間の建物跡と考えられる。柱穴は径36～46cm、深さは最も深いP7で58cm、底部レベルはほぼ等しい。3個のうち最もレベルの低いP6（193.64m）と、第1号土坑の底部のレベルがほぼ等しく、4個目の柱穴は土坑に重複していると思われ確認できない。

なお、本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物としてはP5より弥生土器が出土した。細片のため図示しえなかったが、その特徴から上深川(監)式段階の時期の遺構であると思われる。またP6の上から、第6号住居跡床面と同レベルで砥石が出土していることから、本掘立柱建物跡は第6号住居跡に先行すると思われる。

第6号掘立柱建物跡（第39図）

本掘立柱建物跡は、2地点の尾根上標高195m付近の平坦面に位置する。柱穴の配

置から棟方向はN16°Eと推定され、桁行485cm、梁行310cmの2間×2間の総柱建物跡と考えられる。柱穴は径46～72cm、深さ21～59cmである。桁行の真ん中の柱穴列が西側に偏っており、梁行方向の柱穴間の距離は一定ではないが、桁行方向の柱穴間の距離はほぼ等しい。

なお、本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。しかし、その規模や形態は弥生時代には稀であり、付近からは奈良時代・中世の遺物が多く出土している。第4号テラス状遺構の柱穴から須恵器が出土していることから弥生時代以降に本遺跡に遺物があったことは確実であり、本遺構もその可能性があると思われる。

第7号掘立柱建物跡（第41図）

本掘立柱建物跡は、2地点の尾根上標高195m付近の平坦地に位置する。ピットは6個検出した。その配置から棟方向はN4°Wと推定され、桁行272cm、梁行210cmの1間×1間の建物跡と考えられる。柱穴は径30～66cm、深さ15～41cmである。また、P1、P3の間にP2、P4とP7の間にP5、P6があり、これらは棟を支える支柱であったと考えられる。

なお、本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。しかし桁行、梁行の規模やその形状が第5号掘立柱建物跡と類似していることから弥生時代の遺構であると思われる。

第8号掘立柱建物跡（第42図）

本掘立柱建物跡は、2地点の尾根上標高195m付近の平坦面に位置し、P3は第2号土坑と重複している。柱穴の配置から棟方向はN89°Wと推定され、桁行き210cm、梁行190cmの1間×1間の建物跡と考えられる。柱穴は径28～36cm、深さ37～50cm、底部レベルはほぼ等しい。

なお、本掘立柱建物跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。しかし桁行、梁行の規模やその形状が第5号掘立柱建物跡と類似していることから弥生時代の遺構であると思われる。

（3）テラス状遺構

第1号テラス状遺構（第43図）

本テラス状遺構は、1地点の標高170mの南側斜面に位置する。現状では斜面を最大37cm掘り込んで長大な平坦面をつくり出しており、幅930cm、奥行き150cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。平坦面からは、土器棺墓1基、土壙墓2基、柱穴と思われるピット2個が検出され平坦面の西からも土器棺墓2基が検出された。

土器棺墓群に接するようにつくり出されているため、葬送儀礼に関する何らかの施設とも考えられる。また、柱穴が2個検出されているため何らかの建物があった可能性もある。

なお、本テラス状遺構に伴うと考えられる遺物は弥生土器（No. 29）が出土した。出土した土器の特徴から上深川Ⅲ（古）式段階の時期の遺構であると思われる。また、第1号・第2号土壙墓は現状で深さがそれぞれ最大34cm、57cmと浅いことから、本テラス状遺構によって上端を削平されている可能性がある。さらに、第1号土器棺墓の土器（No. 34、No. 35）は、上深川Ⅲ（新）式段階の特徴を持っていること

から、第1号・第2号土壙墓が先行し、その後本テラス状遺構、第1号土器棺墓の順につくられたものと推定される。

第2号テラス状遺構（第57図）

本テラス状遺構は、1地点の標高172mの南側斜面に位置する。斜面を最大38cm掘り込んで平坦面をつくり出しており幅100cm、奥行き100cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。本テラス状遺構は第4号～第7号土器棺墓と重複している。

なお、本テラス状遺構に伴うと考えられる遺物は出土していないが、上深川Ⅱ式段階の時期の特徴を持つ第7号土器棺墓が本テラス状遺構の壁を削っているため、それと同時期ないしはそれ以前の遺構であると思われる。

第3号テラス状遺構（第44図）

本テラス状遺構は、1地点尾根上の標高169.5mのゆるやかな斜面に位置する。斜面を最大40cm掘り込み平坦面をつくり出しているが、南側は斜面のため流失している。壁は閉じず、逆に西側で北へ回っている。平坦面上からは柱穴と思われるピットが2個検出された。土器棺墓群に接するように位置することや、2個のピットが検出されたことなど第1号テラス状遺構と共通の性格を持つ遺構とも考えられる。

なお、本テラス状遺構に伴うと考えられる遺物としてはP1中より弥生土器が出土した。細片のため図示できなかったが、その特徴から上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。

（4）住居跡状遺構

第1号住居跡状遺構（第45図）

本住居跡状遺構は、2地点の標高186mの南側斜面に第14号住居跡から南東へ5m離れて位置する。斜面を掘り込んで遺構をつくっており、床面は幅530cm、奥行き90cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。壁は西側で南へ回っており、壁高は最大40cm、壁溝は深さ5～8cm、幅12～24cmである。壁も回っており壁溝もあるため住居跡である可能性もあるが、遺存状態がたいへん悪いいため明確でなく住居跡状遺構とした。

なお、本住居跡状遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第2号住居跡状遺構（第21図）

本住居跡状遺構は、2地点の標高190.5mの南側斜面に位置し、東側で第16号住居跡と接している。床面は斜面のため大部分が流失している。壁はほぼ直線状で長さ300cm、壁高は現状で最大6cmである。壁溝は深さが1～2cm、幅は6～10cmである。壁溝もあるため住居跡である可能性もあるが、遺存状態がたいへん悪いいため明確でなく住居跡状遺構とした。

なお、本住居跡状遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第3号住居跡状遺構（第47図）

本住居跡状遺構は、2地点の標高186mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで遺構をつくっている。壁溝及び床面が2組検出されており、2組分の遺構が重複していると思われる。レベルの低い方から床面a、bとする。床面aは幅130cm、奥行き35cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。壁高は現状で最大17cm、

壁溝は深さ4～14cm、幅6～10cmである。床面bは幅440cm、奥行き110cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。壁は直線状で壁高は最大61cm、東側で壁溝が遺存し、深さ2～3cm、幅10～18cmである。壁も回っており壁溝も一部で遺存しているため住居跡である可能性もあるが、遺存状態がたいへん悪いため明確でなく住居跡状遺構とした。

なお、本住居跡状遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第4号住居跡状遺構（第48図）

本住居跡状遺構は、2地点の標高194mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで遺構をつくっている。床面は幅460cm、奥行き50cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。壁はほぼ直線状で西側で南へ回りかけている。壁高は現状で最大28cmある。壁溝は深さ2～5cm、幅7～16cmである。壁も回りかけており、壁溝も遺存しているため住居跡である可能性もあるが、遺存状態がたいへん悪いため明確でなく住居跡状遺構とした。

なお、本住居跡状遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第5号住居跡状遺構（第49図）

本住居跡状遺構は、2地点の標高191mの南側斜面に位置する。東側で第20号住居跡、西側で第24号住居跡とそれぞれ切り合っている。現状では幅920cm、奥行き160cmの長大な平坦面が遺存しており、南側は斜面のため流失している。壁はほぼ直線状で西側で南へ回っている。壁高は現状で最大52cm、壁溝は一部しか検出されなかったが深さ2～3cm、幅3～15cmである。また、平坦面から5個のピットの他、第6号土坑を検出した。

本遺構は遺存状態からみて、壁が何力所かで方向が変わっていることや、柱穴と思われる5つのピットもその間の距離や壁との位置関係から同一の建物のものではないと思われることから、何組分かの遺構が重複して作り出されているものであると推定される。その場合には、東西で第20号住居跡、第24号住居跡と切り合っていることから、これらの住居跡が建て替えられたものと考えられる。しかし、遺存状態がたいへん悪いため明確にしがたく1つの住居跡状遺構とした。

なお、本住居跡状遺構に伴うと考えられる遺物は弥生土器（No. 30）が出土した。その特徴から上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。しかし、前述のようによくつかの遺構が重複している可能性があるため、本遺構すべてが同時期であるかどうかは不明である。また、第6号土坑から上深川Ⅲ（新）式段階の特徴を持つ弥生土器（No. 33）が出土している。

第6号住居跡状遺構（第29図）

本住居跡状遺構は、2地点の標高191.5mの南側斜面に位置する。斜面を掘り込んで遺構をつくっている。床面は幅245cm、奥行き50cmが遺存するが、南側は斜面のため流失している。壁はほぼ直線状であるが東西両側で若干南へ回っており、壁高は最大52cmである。壁溝は深さ2～5cm、幅7～16cmである。壁も回っており、壁溝も存在するが遺存状態がたいへん悪いため明確にしがたく住居跡状遺構とした。

なお、本住居跡状遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

(5) 土 坑

第1号土坑 (第50図)

本土坑は、2地点の尾根上標高194m付近の平坦面に位置する。第6号住居跡と南で接し、第4号掘立柱建物跡、第5号掘立柱建物跡の柱穴が重複している。上端は、長辺160cm、短辺が東側145cm、西側130cmの長方形、底部は長辺155cm、短辺が東側110cm、西側105cmであり、いずれも若干東側が広い。深さは中央部で最も深く74cmある。北側では底部よりも上端端部がややせり出しており、断面形は袋状を呈する。その形状から貯蔵穴と思われる。本土坑は第7号住居跡に伴うと思われる。

なお、本土坑に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第2号土坑 (第51図)

本土坑は、2地点の尾根上標高195m付近の平坦面に位置する。第11号住居跡の南東1mにあり第8号掘立柱建物跡のP3と切り合っている。上端は北西側が張り出しているものの径270cmのほぼ円形である。底部は長径160cm、短径135cmのやや不整形な長円形である。なお、底部中央には深さ5cmの円状のくぼみがある。上端からこのくぼみの底部までの深さは103cmある。また、本土坑の北西側には上端から42cm付近に幅185cm、奥行き最大65cmの段がある。本土坑の性格については不明である。

本土坑の埋立中から弥生土器(No. 31, No. 32)が出土した。その特徴から中期のものと考えられ、本土坑も同時期ないしはそれ以前の時期の遺構と思われる。

第3号土坑 (第17図)

本土坑は、3地点の尾根上に位置し、第12号住居跡と南西で切り合っている。上端は北側が110cm、南側が130cm、東側が170cm、西側が160cmのやや不整形な隅丸方形で、東側の壁も張り出している。底部も北側が70cm、南側が90cm、東側が105cm、西側が90cmで西側の張り出した不整形な隅丸方形である。また、底部中央には長径42cm×短径32cm、深さ32cmの長円形のピットがある。深さは中央部で最も深く140cmあり、ピット底部までは172cmある。本土坑の東側の壁には2つの狭小な段があり、断面は階段状を呈している。本土坑は形状からは疑問が残るが、第12号住居跡に伴う貯蔵穴と思われる。

なお、本土坑に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第4号土坑 (第25図)

本土坑は、2地点の標高190mの南側斜面に位置し、第20号住居跡床面dと西で接する。上端は径120cmの円形で南側がやや張り出している。底部は長径105cm、短径85cmの長円形ではほぼ平坦である。斜面に位置するため深さは北側で深く117cm、南側では72cmである。断面形は若干袋状を呈し、その形状から貯蔵穴と思われる。

なお、本土坑に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。しかし、埋土中から上深川Ⅲ(古)式段階の特徴を持つ土器が出土しており、本土坑も同時期ないしはそれ以前の時期の遺構と思われる。

第5号土坑 (第25図)

本土坑は、2地点の標高189mの南側斜面に位置し、西側で第20号住居跡床面aと切り合っている。上端は、北側102cm、南側120cm、東西側120cm、底部は北側85cm、南側100cm、東西側110cmの台形状である。深さは現状で北側で最大65cmあり底部はほぼ平坦である。本土坑の性格については不明である。

なお、本土坑に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。しかし、埋土中から上深川Ⅱ式段階の特徴を持つ土器が出土しており、本土坑も同時期ないしはそれ以前の時期の遺構と思われる。

第6号土坑（第49図）

本土坑は、2地点の第5号住居跡状遺構上に位置する。上端は長径75cm、短径64cmの長円形で、底部は長径60cm、短径52cmの長円形である。斜面に位置するため深さは北側で深く70cm、南側では28cmである。断面形は若干袋状を呈し、その形状から貯蔵穴と思われる。

なお、本土坑に伴うと考えられる遺物は土器（No. 33）が出土した。その特徴から、上深川Ⅲ（新）式段階の時期の遺構と考えられる。

（6）土壙墓

以下の遺構については、土器棺墓群の近くに位置することやそのプランが長方形を呈し貯蔵穴等の土坑とは思われないため土壙墓とした。

第1号土壙墓（第52図）

本土壙墓は、1地点の第1号テラス状遺構上に位置する。南側は斜面のため流失しており規模は明らかにしえないが、底部は北側60cm、東西側は65cmが遺存する。また、第1号テラス状遺構によって上端を削平されていると思われるが、深さは現状で最大34cmある。主軸方向は不明である。

なお、本土壙墓に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第2号土壙墓（第53図）

本土壙墓は、1地点の第1号テラス状遺構上に第1号土壙墓から南西へ1.2m離れて位置する。第1号テラス状遺構によって上端を削平されていると思われるが、上端は長径120cm、短径80cmの西側が直線状の長円形、底部は北側95cm、南側70cm、東西側45cmの台形状を呈する。また、深さは現状で北側57cm、南側30cmある。底部レベルは北東隅が27cm高いことを除けばほぼ平坦である。主軸方向はN55°Eである。その規模から小児用と考えられる。なお、本土壙墓に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第3号土壙墓（第9図）

本土壙は、2地点の尾根上標高184m付近の平坦面に位置し、西で第4号住居跡と切り合っている。そのため上端の規模は明らかでないが、長辺200cm、短辺が東側110cm、西側100cm程度の長方形であったと思われる。底部は長辺180cm、短辺が東側95cm、西側85cmである。深さは中央部で最も深く75cmであるが、底部はほぼ平らである。

なお、本土壙墓に伴うと考えられる遺物は出土しなかったが、埋土中から弥生土器片が出土した。

（7）土器棺墓

第1号土器棺墓（第54図）

本土器棺墓は、1地点の第1号テラス状遺構上に第1号住居跡から南西に3m離れて位置する。土壌は上端が長径75cm、短径68cm、底部が長径51cm、短径37cmのそれぞれ長円形である。底部は北側が高く南へ徐々に低くなっている。深さは北側で40cm、南側で27cmである。

この土壌内に、胴部最大径41.4cmの大型の壺形土器（No. 34）の口縁部を取り外して棺身とし、胴部最大径25.6cmの壺形土器（No. 35）の口縁部を切り離し胴部下半部を蓋として埋葬してあった。これら2つの複合口縁部はいずれも棺身の安定を図るためか棺身と土壌の壁の間に詰められていた。棺身は仰角50°で上向きに、口をN68°E方向に向け埋置されていた。蓋として使用された壺形土器の内外面には赤色顔料が塗られていた。

本土器棺墓は棺身としている壺形土器の大きさから乳幼児を埋葬したものと考えられる。棺内からは遺物は出土しなかった。

土器の特徴から本土器棺墓は、古墳時代初頭の時期の遺構と考えられる。

第2号土器棺墓（第55図）

本土器棺墓は、1地点の第1号テラス状遺構の西に位置し、第2号土器棺墓と第3号土器棺墓に挟

まれている。掘り方は南側が斜面のため流失しており、西側で第3号土器棺墓と切り合っているため、現状は上端で幅85cm、奥行き50cmが、底部で幅85cm、奥行き14cmがそれぞれ半円状に遺存するのみである。深さは北側で最大22cmである。

この掘り方内に、胴部最大径45.6cmの大型の壺形土器（No. 36）の口縁部を打ち欠いて棺身とし、口径36.6cmの鉢形土器（No. 37）を蓋として埋葬してあった。また、甕形土器（No. 38）を破碎して棺身と土壌の壁の間に詰めていたと思われる。棺身は仰角65°で上向きに口をN14°Wへ向け埋置されていた。

本土器棺墓は棺身としている壺形土器の大きさから乳幼児を埋葬したものと考えられる。棺内からは遺物は出土しなかった。

土器は上深川Ⅱ式段階の特徴を持つものと上深川Ⅲ（古）式段階の特徴を持つものが組合せられており、上深川Ⅲ（古）式段階の遺構と思われる。

第3号土器棺墓（第56図）

本土器棺墓は、1地点の第1号テラス状遺構の西に位置し、第2号土器棺墓と東で切り合っている。掘り方は南側が斜面のため流失しており、東側で第2号土器棺墓と切り合っているため上端で幅138cm、奥行き60cmが、底部で幅55cm、奥行き35cmがそれぞれ半円状に遺存するのみである。深さは北側で最大37cmある。底面には壁に沿って溝が回っており、深さ3～4cm、幅5～12cmである。この掘り方内に、胴部最大径50.4cmの大型の壺形土器（No. 39）を棺身としてその胴部を25cm×27cmにわたって打ち欠いて口をつくり、土器（No. 40）の胴部を打ち欠いて胴部下半部を蓋として埋葬してあった。また胴部最大径21.1cmの壺形土器（No. 41）を破碎してその蓋の隙間を覆っていたと思われる。

本土器棺墓は棺身としている壺形土器の大きさから乳幼児を埋葬したものと考えられる。棺内からは遺物は出土しなかった。

また、第2号土器棺墓の掘り方で本土器棺墓の掘り方が切られていることや、両者の棺身の残り方と切り合い関係から考えて、本土器棺墓が第2号土器棺墓に先行すると思われる。

なお、土器の特徴から本土器棺墓は、上深川Ⅲ（古）式段階の時期の遺構と考えられる。

第4号～第6号土器棺墓（第58図～第60図）

本土器棺墓群は、1地点の標高172mの南側斜面に位置し、第2号テラス状遺構と切り合っている。第4号土器棺墓は土器棺墓群のうち最も東にある。掘り方は南側が斜面のため流失しており、幅55cm、奥行き35cmの平坦面が遺存するのみである。深さは現状で西側で最大18cmである。

この掘り方に、胴部最大径48.8cmの大型の壺形土器（No. 42）の口縁部を打ち欠いて棺身とし埋葬してあった。斜面のため埋置した時に上になっていた部分は流失してしまっており、詳しい埋葬状況は明らかでないが、棺身は横倒しにして口を北東方面へ向け埋置されていたようである。他の土器片が出土しなかったことから、蓋はなかった可能性がある。

第5号土器棺墓は第4号土器棺墓と第6号土器棺墓の中間に位置する。掘り方は南側が斜面のため流失しており、なおかつ東西で第4号及び第6号土器棺墓と切り合っているため幅70cm、奥行き55cmの平坦面が遺存するのみである。深さは現状で最大15cmある。

この掘り方に、胴部最大径33.2cmの大型の壺形土器（No. 43）の口縁部を打ち欠いて棺身とし、口径34.1cmの鉢形土器（No. 44）を蓋として埋葬してあった。斜面のため埋置した時に上になっていた部分は流失してしまっていた。棺身は仰角60°で上向きに、口を北方向へ向け埋置されていた。

第6号土器棺墓は土器棺墓群のうち最も西に位置する。掘り方は南側斜面のため流失しており幅51cm、奥行き45cmの平坦面が遺存するのみである。深さは現状で西側で最大20cmある。

この掘り方に、胴部最大径43.0cmの大型の壺形土器（No. 45）の口縁部を打ち欠いて棺身とし、口径32.7cmの鉢形土器（No. 46）を蓋として埋葬してあったと思われるが、斜面による土器の流失及び攪乱が著しく明確でない。

本土器棺墓群は棺身としている壺形土器の大きさからいずれも乳幼児を埋葬したものと考えられる。またいずれの棺内からも遺物は出土しなかった。

また、第4号及び第6号土器棺墓の掘り方が第5号土器棺墓の掘り方を東西両側で切っていることや、3者の棺身の残り方と切り合い関係から考えて、第5号土器棺墓が最も先行すると思われる。

なお、土器の特徴から第5号土器棺墓は上深川Ⅲ式段階の時期の遺構、第6号土器棺墓は上深川Ⅲ（古）式段階の時期の遺構と考えられる。第4号土器棺墓については胴部しか遺存しておらず、時期については明確にしえなかった。

第7号土器棺墓（第61図）

本土器棺墓は、1地点の標高172mの南側斜面に第4号～第6号土器棺墓から北へ40cm離れて位置する。北側で第2号テラス状遺構と切り合っている。土壌の上端は

北側で63cmとやや長く，他の3辺は56cmの程度で台形状を呈する。一旦，深さ20cm程度まで掘り込んだ後，西隅に30cm四方程度の平坦面を残して「L字」状にさらに30cm程度掘り込んでいる。

この土壌内に，胴部最大径36.9cmの大型の壺形土器（No. 47）の口縁部を打ち欠いて棺身とし，口径28.5cmの鉢形土器（No. 48）を蓋として埋葬してあった。土器の流失・攪乱が著しく明確でないが，鉢形土器の出土状況から，棺身は仰角50°で上向きに，口を南西方向へ向け埋置されていたようである。

本土器棺墓は棺身としている壺形土器の大きさから乳幼児を埋葬したものと考えられる。棺内からは遺物は出土しなかった。

土器の特徴から本土器棺墓は，上深川Ⅱ式段階の時期の遺構と考えられる。

3. その他の時期の遺構

(1) テラス状遺構

第4号テラス状遺構 (第46図)

本テラス状遺構は、2地点の標高190.5mの南側斜面に位置する。斜面を最大1.06m掘り込んでつくり出された長大テラスであり、南側は第17号住居跡、第18号住居跡と重複している。平坦面は幅10.7m、奥行き2mが遺存する。壁溝は深さ1~11cmで西側の方が総じて深く、幅は6~19cmである。本テラス状遺構からは11個のピットが検出されているが、底部レベルや形状から現状の壁に伴うのはP1, P2, P3, P4の組み合わせが考えられる。その場合、対応する柱穴は第17号住居跡、第18号住居跡と重複していると思われるため確認できないが、南側が斜面であるため棟方向が南北方向であることは考えにくく、N7°Wの棟方向をとる桁行640cmの1間×3間の掘立柱建物跡となる可能性が高い。柱穴は径62~72cm、深さ58~76cmで、底部レベルはP1が25cm程度低い以外はほぼ等しい。柱穴間の距離も210~220cmでほぼ等しい。なお、P1内より奈良時代のものと思われる須恵器片が出土していることから、本掘立柱建物跡も同時期ないしはそれ以前の時期の遺構と考えられる。

また、P8, P9, P10の組み合わせも考えられる。対応する柱穴は第17号住居跡、第18号住居跡と重複していると思われるため確認できないが、同様の理由で棟方向がN3°Wで桁行620cmの1間×2間の掘立柱建物跡となる可能性が高い。柱穴は径29~52cm、深さ33~47cmで、底部レベルはP8とP10で最大18cmの差がある。穴柱間の距離はP8-P9間が285cm、P9-P10間が335cmである。なお、P8, P9, P10は深さが浅いため、テラスをつくり出す時に上端を削平されている可能性がある。

なお、本テラス状遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

4. 遺物

本遺跡からは、大量の弥生土器の他、土師質土器・須恵器の土器類、鉄器(3点)、石器(9点)、砥石(5点)、紡錘車(1点)、土錘(1点)が出土した。弥生土器は、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏・器台の各器種が出土した。また、ミニチュア土器も出土した。鉄器は、鏃(2点)、鏃(1点)、石器は鏃(3点)、石斧(3点)、石庖丁(1点)、錐(1点)がそれぞれ出土した。以下、それらの遺物について報告する。

(1) 弥生土器

2地点を中心に本遺跡全体から大量の弥生土器が出土した。それらの土器を時期で見ると、大部分が上深川Ⅱ式又は上深川Ⅲ(古)式の特徴を持つものであった。これは、本遺跡中の遺構の多くが上深川Ⅱ式又は上深川Ⅲ(古)式の段階の時期の遺構であることと一致している。その他、中期、上深川Ⅰ式、上深川Ⅲ(新)式の特徴を持つものも少量であるが出土した。

中期の特徴を持つ土器は2地点尾根上の標高195m付近の平坦面からのみ出土した。第2号土坑の埋土中の他、平坦面の東側から多く出土した。特に第2号土坑の埋土中から出土した大型の壺形土器の口縁部（No. 31）はラッパ状に大きく開き、端部が斜め下方に大きく下垂する。外縁にヘラ状工具による鋸歯紋を施し口縁内面には2本の突帯をΩ状に巡らせている。こうした特徴を持つ土器は山口県の東部地域を中心に分布するとされている。また、倉重向山遺跡からも類似の壺形土器が出土している。

上深川Ⅰ式の特徴を持つものは第12号住居跡、第17号住居跡、第29号住居跡から出土したものが、また上深川Ⅲ（新）式の特徴を持つものも第6号土坑から出土したものがそれぞれ確認されただけである。

なお、個々の土器の詳細については、後掲する土器観察表にまとめた。

（2）須 恵 器

須恵器は2地点の第4号テラス状遺構の周辺から少量出土した。なお、個々の土器の詳細については、後掲する土器観察表にまとめた。

（3）土師質土器

土師質土器は2地点尾根上の標高195m付近の平坦面を中心に少量出土した。なお、個々の土器の詳細については、後掲する土器観察表にまとめた。

（4）鉄 器

鏃（No. 65～No. 66）

No. 65は、第19号住居跡から出土したものである。全長5.4cm、刃部最大幅1.7cm、刃部及び茎部の厚さはともに3.5mmである。平面形は関部が不明確で、木の葉状を呈する。茎部断面は方形である。

No. 66は、第23号住居跡から出土したものである。全長2.3cm、幅1.4cm、厚さ3.5mmである。基部は「V字」形の腸袂を持ち、頭部の側縁はやや外湾している。

鑿（No. 67）

2地点表土中から出土した。全長16.1cm、幅7mm、厚さ4mmで、身部は方柱状を呈する茎鑿である。

（5）石 器

鏃（No. 68～No. 70）

No. 68は第23号住居跡から出土した。長さ2.0cm、幅1.4cmで基部は直線状で茎を持たない平基無茎鏃である。幅は基部において最も広く、頭部の側縁は外湾している。

No. 69は第23号住居跡から出土した。長さ2.3cm、幅1.4cmで基部はやや内湾し茎を持たない凹基無茎鏃である。幅は基部において最も広く、頭部の側縁は外湾している。

No. 70は第16号住居跡付近の表土中から出土した。長さ1.6cm、幅1.4cmで基部の中央部の5mmに深い「U字」状の挟りがあり、茎を持たない凹基無茎鏃である。幅は基部において最も広く、頭部の側縁は直線状である。

石斧（No. 71～No. 73）

No. 71は南側斜面の地山上から出土した。長さ13.0cm、幅5.2cm、厚

さ4. 1cmの大型蛤刃石斧である。刃部には使用痕と思われる細かい線状痕が認められる。刃部は全体的に磨滅が著しく、大きな剥落も見られる。また、基部についても損傷が見られる。

No. 72は第13号住居跡の埋土中から出土した。基部を欠失しているが現存長9.2cm, 幅4.1cm, 厚さ3.8cmの磨製石斧である。節理のある石を用いて刃端が節理面に直交するようにつくられている。側縁が明瞭な稜を持っておらず、断面は隅丸になっている。刃部の使用痕はほとんど観察できないが、刃端部の磨滅は著しく、特に中央部は幅7mm程度の平坦面を呈するほどである。

No. 73は南側斜面の表土中から出土した。長さ8.1cm, 幅4.0cm, 厚さ1.2cmの磨製石斧である。節理のある石を用いて刃部が節理面に直交するようにつくられている。刃部の使用痕はほとんど観察できないが、刃端部のほぼ中央部が幅6mm程度くぼんでいる。しかし他の2つに比べて磨滅は少ない。

石庖丁 (No. 74)

第20号テラス状遺構付近の表土中から出土した。本石庖丁は全体の1/3程度を欠失しており、現存長6.8cm, 幅3.7cm, 厚さ7mmである。刃部はゆるやかに外湾し、片刃である。背部は中央部は直線状であるが、両側で外湾していると思われ、平面形は楕円形であったと推定される。紐穴は2カ所にあり、いずれも両側から穿孔されている。

石 錐 (No. 75)

第23号住居跡から出土した。長さ1.4cm, 幅0.9cm, 厚さ0.2cmで、木の葉状を呈し、頭部と錐部の区別はない。あるいは、基部が尖っており茎を持たない凸基無茎鏃とも考えられる。

(6) 砥 石 (No. 76~No. 80)

No. 76は第4号住居跡から出土した。残存長10.0cm, 最大幅4.2cm, 最大厚3.3cmである。四角柱状の石の4面を使用している。使用面には荒い線状痕が見られる。

No. 77は第6号住居跡から出土した。全長17.0cm, 最大幅11.7cm, 最大厚3.7cmである。ほぼ平らな石の1面のみを使用している。

No. 78は第20号住居跡から出土した。全長16.1cm, 最大幅12.8cm, 最大厚6.4cmである。不整形な四角柱状の石の3面を使用している。使用面には縦方向の細かい線状痕が見られる。

No. 79は第23号住居跡から出土した。全長13.0cm, 最大幅7.7cm, 最大厚2.1cmである。ほぼ平らな石の1面のみを使用している。

No. 80は第28号住居跡から出土した。全長17.2cm, 最大幅10.2cm, 最大厚9.1cmである。四角柱状の石の4面を使用しているがいずれの面も磨滅が著しく、中央部にかなりのくぼみが見られる。

(7) 土 錘 (No. 81)

第20号住居跡周辺の地山付近から出土した。片側の先端部が欠失しているが長軸径5.0cm, 短軸径2.6cm程度であったと推定される。ラグビーボール状の土製品の外表に、長軸方向に4本、短軸方向に1本の溝をそれぞれ巡らせている、いわゆる有

溝土錘である。有溝土錘の出土は、県下では西10地点遺跡に次いで2例目であるが、西10地点遺跡の場合も本遺跡の場合も単独で出土していることから、漁撈具としての用途には疑問が持たれる。

(8) 紡錘車 (No. 82)

調査区外の南側斜面表面で採集した。直径4.3cmの円板形を呈する石製紡錘車である。厚さは中央部で7mm、縁辺部で6mmと、若干中央部が厚い。ほぼ中央に直径7mmの円形の穴があり、一方の側からのみ穿たれている。また、片面には外縁と中央穴との真ん中あたりに、直径2mm程度の小さなくぼみが2つ並んでいる。

なお、この他に細片のため図示しえなかった石製、土製のものが各1個出土した。

注

1. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988
広島市教育委員会『岩上山田遺跡発掘調査報告』1988
なお、時代的位置付けについては、上深川Ⅰ式を弥生時代後期葉に、上深川Ⅱ式を弥生時代後期中葉～後葉に、上深川Ⅲ(古)式を弥生時代後期終末～古墳時代初頭、上深川Ⅲ(新)式を古墳時代初頭～前葉として整理し、以下すべてこれに順じた。
2. 浄安寺遺跡でも同様の建て替え方法が報告されている。財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告(Ⅲ)』1986
3. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988
4. 広島市教育委員会『岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告』1985
5. 広島市教育委員会『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』1984
6. 1991年度、本事業団が発掘調査を実施した。
7. 井上山遺跡発掘調査団『井上山』1979
8. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『倉重向山遺跡発掘調査報告』1991
9. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『加茂学園都市開発整備事業地内(西高屋地区)遺跡群(労)』1990
10. 和田春吾「漁獵具」『弥生文化の研究5 道具と技術(特)』1985

【参考文献】

1. 金関恕、佐原真編『弥生文化の研究5 道具と技術(特)』1985
2. 詫間町文化財保護委員会『紫雲出』1964
3. 大村直「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号、1984

出土土器観察表

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
1	第4号住居跡	高坏		高坏の坏部。底部はやや丸味を帯び、体部との境で立ち上がり、口縁部は外湾する。	外面 口縁部ナデ、体部へラ磨き。 内面 ナデ。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
2	第7号住居跡	鉢形土器	口径 16.0 底径 2.7 器高 11.9	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめる。体部は球状に張る。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目のちナデ。 内面 口縁部ハケ目、以下へラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 口縁部に黒斑
3	第9号住居跡	鉢形土器	口径 19.4 底径 5.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面 口縁部～肩部ハケ目、以下へラ磨き。頸部に櫛歯状工具による刺突紋を施す。 内面 口縁部へラ磨き、以下へラ削り。	色調 黄褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟
4	第9号住居跡	壺形土器	底径 1.1 胴部最大径 12.4	球状に張った胴に直立気味に外反する口縁部を有する。凸底の底部を持つ。	外面 口縁部～胴部上半ナデ、以下ハケ目のちナデ。 内面 口縁部横ナデ、胴部上半不明、以下ハケ目。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 外面胴部下半に黒斑。
5	第11号住居跡	甕形土器	口径 15.5 胴部最大径 18.9	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面 口縁部横ナデ、以下ナデ。肩部にへラ状工具による刺突紋を施す。 内面 口縁部横ナデ、以下へラ削り。頸部に指頭圧痕。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 やや軟 外面胴部中央にスス附着。
6	第12号住居跡		底径 5.6	平底の底部を持つ。	磨減が著しく不明。	色調明赤褐色 胎土 粗 焼成 軟
7	第16号住居跡	壺形土器	口径 13.0 胴部最大径 21.4 器高 28.8 底径 6.2	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部はつまむことによって肥厚させている。凹底の底部を持つ。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目のちナデ。底部磨減が著しく不明。 内面 口縁部ナデ、以下へラ削りのちナデ。	色調 外面淡赤褐色 内面黄褐色 胎土 密 焼成 良 外面に黒斑。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
9	第17号住居跡			口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土を貼り付けることによって肥厚させ4条の凹線を施す。	内外面とも口縁部横ナデ、以下磨減が著しく不明。 外面 頸部にヘラ状工具による押引紋を施す。	色調 外明赤褐色 内面 暗灰色 胎土 粗 焼成 軟
10	第18号住居跡		底径 3.8	平底の底部を持つ。	外面 ナデ。 内面 ヘラ削り。	色調 外明赤褐色 内面 褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟
11	第20号住居跡	甕形土器	口径 20.0 胴部最大径 24.2 器高 28.7	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部は器厚を減じつつ平たくおさめる。	外面 口縁端部ナデ、口縁部ハケ目のちナデ、胴部上半ハケ目、以下磨減が著しく不明。 内面 口縁部ハケ目のちナデ、以下ヘラ削り。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 良 内面胴部下半にスス附着、外面に黒斑。底部を打ち欠いている。
12	第20号住居跡	甕形土器	口径 18.1	口縁部は内湾気味に外反し、端部は丸くおさめる。	外面 口縁部横ナデ。以下ナデ。 頸部に指頭圧痕。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 淡赤褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 外面口縁部、胴部下半にスス附着。
13	第20号住居跡	甕形土器	口径 14.8 胴部最大径 19.1	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめる。	外面 口縁部横ナデ、以下ナデ。 内面 口縁部ハケ目のちナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 外面胴部中央及び内面全体にスス附着。底部を打ち欠いている。
14	第20号住居跡	甕形土器	口径 10.6 胴部最大径 11.8 器高 13.2 底径 5.3	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめる。胴部が厚手である。	外面 口縁部から胴部上半ナデ、以下ヘラ削り。 内面 ナデ、底部不明。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 内面底部にスス附着。外面にもスス、黒斑。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
17	第24号住居跡	甕形土器	口径 16.7	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面 口縁部横ナデ、以下磨減が著しく不明。 肩部に櫛歯状工具による刺突紋を施す。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削りか。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 軟 外面全体にスス付着。
18	第29号住居跡		底径 4.4	平底の底部を持つ。	内外面ともナデ。	色調 外面灰褐色 内面赤褐色 胎土 やや密 焼成 良 外面に黒斑。
19	第30号住居跡	鉢形土器	口径 18.4 胴部最大径 15.4 器高 12.5 底径 5.6	胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。	内外面ともハケ目のちナデ。	色調 外面赤褐色 内面茶褐色 胎土 やや粗 焼成 軟
20	第30号住居跡	鉢形土器	口径 18.4 器高 12.6 底径 6.0	口縁部は短く「くの字」状に外反し、端部は丸くおさめる。	外面 ハケ目のちナデ。 底部不明。 頸部にヘラ状工具による押引紋を施す。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削りのちナデ。 胴部中央に指頭圧痕。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 良 底部内外面に黒斑。口縁部内外面にスス付着。
21	第32号住居跡	甕形土器	口径 12.8 胴部最大径 12.9	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部は器厚を減じつつ尖り気味におさめる。	外面 ハケ目のちナデ。 内面 口縁部ハケ目のちナデ、以下ヘラ削り。	色調 外面茶褐色 内面黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 底部を打ち欠いている。
22	第32号住居跡	甕形土器	口径 18.7	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめる。	外面 ナデ 内面 口縁部ハケ目のち横ナデ、胴部上半ヘラ削りのちナデ。 以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 やや軟 底部を打ち欠いている。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
23	第32号住居跡	甕形土器	口径 19.1	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめる。	外面 口縁部横ナデ、胴部上半ハケ目のちナデ、胴部下半磨減が著しく不明。 内面 口縁部～頸部ナデ、以下ヘラ削り。	色調 茶褐色 外面茶褐色 内面黄褐色 胎土 やや密 焼成 良 外面口縁部、胴部中央にスス附着。底部を打ち欠いている。
24	第32号住居跡			胴部は内湾しながら立ち上がる。	外面 ナデ。 内面 ヘラ削り。	色調 茶褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 外面上部にスス附着、下部に黒斑。肩部底部を打ち欠いている。
25	第32号住居跡	高 坏	口径 19.8	口縁部はゆるやかに外反し、端部は尖り気味におさめる。	外面 坏部横ナデ、脚部ハケ目のちナデ。 内面 坏部ナデ、脚部ヘラ削り。 口縁部と体部の境に指頭圧痕あり。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良 脚部内面にスス附着。
26	第32号住居跡	鉢形土器	口径 33.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめる。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目のちナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削りのちナデ。	色調 茶褐色 胎土 密 焼成 やや軟 内面1/3及び外面一部に黒斑。底部を打ち欠いている。
27	第32号住居跡		底径 5.1	胴部は内湾しながら立ち上がる。凹底の底部を持つ。	外面 胴部ハケ目のちナデ、底部手づくね、指頭圧痕あり。 内面 ナデ。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 軟
28	第32号住居跡	鉢形土器	口径 15.1 器高 11.1 底径 3.7	胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はごく短く外反し、端部は尖り気味におさめる。	外面 ハケ目のちナデ。 内面 口縁部磨減が著しく不明、以下ヘラ削りのちナデ、胴部下部に指頭圧痕。	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 軟 外面に黒斑2か所、内面1/2にスス附着。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
30	第5号住居跡状遺構	甕形土器	口径 12.5 胴部最大径 13.2 器高 15.6 底径 4.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面 口縁部～頸部横ナデ、胴部ハケ目のちナデ、底部磨減が著しく不明。 内面 口縁部ハケ目のちナデ、胴部ヘラ削りのちナデ、底部磨減が著しく不明。	色調 外面赤褐色 内面黄褐色 胎土 密 焼成 良 外面にスス・炭化物付着、黒斑あり。
31	第2号土坑	壺形土器	口径 34.8	口縁部はラッパ状に大きく開き、端部は斜め下方に大きく下垂する。	外面 口縁端部ナデ、以下ハケ目のちナデ、口縁端部にヘラ状工具による鋸歯紋を施す。 内面 ナデ。 2段の断面三角形の突帯を有する。	色調 黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟
32	第2号土坑	壺形土器		頸部はゆるやかに外反する。	外面 ハケ目。 ヘラ状工具により頸部に4条の沈線紋、肩部に2条の波状紋を施す。 内面 磨減が著しく不明。	色調 黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 外面下部にスス付着。
33	第6号土坑	甕形土器	口径 16.4 胴部最大径 23.8 器高 18.5 底径 3.2	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部は器厚を減じつつ尖り気味におさめる。	外面 口縁部ハケ目のち横ナデ、胴部上半ハケ目、以下磨減が著しく不明。 内面 口縁部ハケ目、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 外面口縁部、胴部にスス付着。内面胴部、底部に黒斑。
34	第1号土器棺墓	壺形土器	口径 21.6 胴部最大径 41.4 器高 47.2 底径 9.2	「くの字」状に外湾する口縁部に、直立する粘土帯を貼り付け複合口縁としている。胴部は球状に張り、底部は厚く凸底である。	外面 擬口縁部ナデ、口縁部ハケ目、胴部上半ハケ目のちナデ、胴部下半ハケ目、底部磨減が著しく不明。 擬口縁部に7条の櫛歯状工具による波状紋を施す。 頸部に核目格子の貼り付け突帯を有する。 内面 擬口縁部～頸部ナデ、以下ハケ目、底部不明。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 良 外面胴部に黒斑あり。

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器形	調整・成形	備考
35	第1号土器棺墓	壺形土器	口径 15.1 胴部最大径 25.6 器高 31.4 底径 4.2	丸く外反する口縁部に外傾する粘土帯を貼り付け複合口縁としている。胴部は球状に張る。	外面 擬口縁部～頸部ナデ, 肩部ハケ目のちナデ, 以下ハケ目。 内面 擬口縁部～口縁部横ナデ, 以下ヘラ削りのちナデ。	色調 茶褐色 胎土 密 焼成 良 外面底部に黒斑。内面全体と外面口縁部に赤色顔料。
36	第2号土器棺墓	壺形土器	底径 6.1 胴部最大径 45.6	胴部は球状に張り, 凸底の底部を持つ。	外面 頸部～胴部上半ヘラ磨き, 以下磨減が著しく不明。 内面 胴部上半ハケ目のちナデ, 胴部下半ナデ。	色調 外面黄褐色 内面黒色 胎土 やや密 焼成 良 外面底部に黒斑, 上部に赤色顔料。口縁部を打ち欠いている。
37	第2号土器棺墓	鉢形土器	口径 36.6 器高 27.5 底径 10.5	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部はつまむことによって若干肥厚させ平たくおさめる。	外面 口縁部ナデ, 胴部上半ハケ目のちナデ, 以下磨減が著しく不明。 内面 口縁部ナデ, 以下ハケ目のちナデ, 胴部に指頭圧痕。	色調 外面赤褐色 内面黄褐色 胎土 密 焼成 良 外面胴部にスス付着。
38	第2号土器棺墓	甕形土器	口径 16.0 胴部最大径 29.0 器高 23.3 底径 4.1	口縁部は「くの字」状に外反し, 端部は尖り気味におさめる。	外面 ハケ目 内面 口縁部～頸部ハケ目, 胴部上半ヘラ削りのちナデ, 胴部下半ヘラ削り。胴部中央に指頭圧痕あり。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 外面胴部下半～底部に黒斑あり。
39	第3号土器棺墓	壺形土器	胴部最大径 50.4 底径 9.6	口縁部は「くの字」状に外湾する。胴部は球状に張り, 底部は凸底である。	外面 ハケ目のちナデ。底部に葉脈痕あり。頸部にヘラ状工具による斜めの沈線を施した貼り付け突帯を有する。 内面 ハケ目のちナデ。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 良 外面に黒斑あり。外面上部に赤色顔料。胴部に打ち欠きあり。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
41	第3号土器棺墓	壺形土器	胴部最大径 21.1	口縁部はほとんど遺存しないが、「くの字」状に外傾する。	外面 口縁部不明，以下ハケ目のちナデ。 内面 ハケ目，肩部はハケ目のちナデ。 頸部にヘラ状工具による斜めの沈線を施した貼り付け突帯を有する。	色調 茶褐色 胎土 密 焼成 良
42	第4号土器棺墓	壺形土器	胴部最大径 48.8 器高 60.4 底径 10.2	胴部は内湾しながら立ち上がる。胴部最大径は上部1/3にあり，器高が高い。器厚は全体に薄い。	外面 ハケ目のちナデ。 内面 ハケ目のちナデ，底部は磨減が著しく不明。	色調 黄褐色 胎土 粗 焼成 やや軟 外面胴～底部に黒斑，口縁部を打ち欠いている。
43	第5号土器棺墓	壺形土器	底径 4.4 胴部最大径 33.2	胴部は内湾しながら立ち上がる。	外面 ハケ目のちナデ，胴部下半～底部磨減が著しく不明。 内面 ナデ，胴部下半～底部磨減が著しく不明。	色調 黄褐色 胎土 粗 焼成 やや軟 外面胴部下半に黒斑，口縁部を打ち欠いている。
44	第5号土器棺墓	鉢形土器	口径 34.1	口縁部は「くの字」状に外反し，端部は丸くおさめる。	外面 口縁部～頸部ハケ目のちナデ，以下ハケ目。 頸部にヘラ状工具による押引紋を施す。 内面 ナデ，胴下部不明。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 外面にスス付着。
45	第6号土器棺墓	壺形土器	底径 7.8 胴部最大径 43.0	胴部は内湾しながら立ち上がる。胴部最大径はやや上部にある。	外面 タタキのちハケ目のちナデ，底部は磨減が著しく不明。 内面 ハケ目，底部は磨減が著しく不明。	色調 外面黄褐色 内面灰色 胎土 密 焼成 良 外面上部に黒斑あり。
46	第6号土器棺墓	鉢形土器	口径 32.7 器高 23.0 底径 7.3	口縁部は「くの字」状に外湾し，端部は器厚を減じつつ尖り気味におさめる。	外面 口縁部ナデ，以下ハケ目のちナデ，底部磨減が著しく不明。 内面 口縁部横ナデ，胴部上半ナデ，胴部下半ヘラ磨き。	色調 茶褐色 胎土 密 焼成 良

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
48	第7号土器棺墓	鉢形土器	口径 28.5 器高 22.3 底径 6.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことによって若干肥厚させており平たくおさめる。	外面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削りのちナデ、底部磨減が著しく不明。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削りのちナデ。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 良 内外面の一部に黒斑あり。
49	第5号土坑	鉢形土器	口径 4.7 器高 2.3 底径 1.3	ミニチュア土器である。	手づくねである。	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟
50	2地点表土	高坏		ミニチュア土器である。	ナデ。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 良
51	第20号住居跡埋土		口径 3.7 器高 2.5 底径 2.5	ミニチュア土器である。	外面 手づくね。 内面 ナデ。	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 軟
52	第23号住居跡埋土	甕形土器	口径 16.7	口縁部は内湾気味に外反し、端部は粘土を貼り付けることによって肥厚させ、2条の凹線を施す。	外面 横ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 外面乳灰色 内面黒褐色 胎土 やや密 焼成 良 外面頸部以下スス附着。
53	2地点表土	皿	口径 10.8 器高 3.5 底径 7.1	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	手づくねである。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 軟 内外面にスス附着。
54	2地点表土	皿	口径 10.9 器高 3.4 底径 5.6	体部は直線状に立ち上がり、端部は器厚を減じつつ尖り気味におさめる。	ろくろによる巻き上げ成形後、内外面とも横ナデ。底部はタール附着が著しく切り離し方法不明。	色調 黒褐色 胎土 密 焼成 やや軟 外面全体に厚くタール状のスス附着。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
55	2地点表土		底径 9.2	底部に外傾する粘土を貼り付けている。	ろくろによる巻き上げ成形後、内外面とも横ナデ。	色調 黄褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟
56	2地点土器溜り	器台	口径 14.1 器高 13.4 底径 12.8	受部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	外面 受部ハケ目のちナデ、柱部ヘラ削り、裾部ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削りのちナデ、裾端部横ナデ。	色調 茶褐色 胎土 やや密 焼成 良 外面にスス付着、内面に黒斑あり。
57	2地点表土	甕形土器	口径 14.4 器高 18.0 底径 2.8	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部は器厚を減じつつ尖り気味におさめる。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目のちナデ。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 内面底部に炭化物付着。
58	2地点地山	甕形土器	口径 16.6 胴部最大径 21.5 器高 16.3 底径 5.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことによって若干肥厚させ平たくおさめる。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目のちナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良 内外面にスス付着、外面一部に黒斑あり。
59	2地点地山	甕形土器	口径 12.1 器高 11.1 底径 5.1	口縁部は短く「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面 ナデ。 頸部にヘラ状工具による押引紋を施す。 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り。	色調 黄褐色 胎土 密 焼成 良 外面1/3にスス付着、外面下部が赤変。
60	2地点土器溜まり	甕形土器	口径 9.9 胴部最大径 11.4 器高 13.4 底径 3.2	口縁部は「くの字」状に外湾し、端部は平たくおさめる。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目のちナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調 黄褐色 胎土 やや粗 焼成 良 外面胴部にスス付着、外面下部が赤変。
61	2地点表土	台付鉢形土器	口径 9.7 胴部最大径 11.5 器高 13.3 底径 6.1	胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立している。端部はつまむことによって若干肥厚させ平たくおさめる。	外面 磨減が著しく不明。 内面 ナデ。 脚台部に指頭圧痕あり。	色調 黄褐色 胎土 粗 焼成 やや軟 内面に赤色顔料。

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
63	2 地点表 土	坏	底径 7.3	体部は外湾気味に立ち上がる。	ろくろによる巻き上げ成形後、ナデ。	色調 青灰色 胎土 やや粗 焼成 やや軟
64	2 地点表 土	坏	.	高台を貼りつけている。	ろくろによる巻き上げ成形後、ナデ。	色調 灰色 胎土 密 焼成 良

IV 総 括

今回の発掘調査の結果、稗畑遺跡は遺物の出土状況から弥生時代後期を中心に営まれた集落跡であることが確認された。さらに、弥生時代中期の土器及び土師質土器・須恵器も出土しており、かなりの長期にわたって使用されていたと思われる。ここでは弥生時代後期の集落構成及び土器棺墓群について若干の検討を加える。

集落構成及び斜面に立地する住居について

稗畑遺跡からは住居跡 33軒（建て替え分を除く）が検出された。これらを出土した遺物から時期ごとに整理してみると以下のようなになる。

上深川Ⅰ式段階の時期の遺構であると思われるのは、第12号住居跡、第17号住居跡、第29号住居跡である。

上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われるのは、第5号住居跡、第7号住居跡、第9号住居跡、第13号住居跡、第16号住居跡、第18号住居跡、第19号住居跡、第22号住居跡、第23号住居跡、第24号住居跡、第26号住居跡、第30号住居跡、第33号住居跡である。

上深川Ⅲ（古）式段階の時期の遺構であると思われるのは、第4号住居跡、第11号住居跡、第20号住居跡、第21号住居跡、第32号住居跡である。

このうち、同時に立地が可能であったと思われる住居跡を、他の住居跡との距離等を考慮して考えてみる。上深川Ⅰ式段階の時期では最大で3軒、上深川Ⅱ式段階の時期では最大で13軒、上深川Ⅲ（古）式段階の時期では最大で5軒となる。なお、時期が不明の住居跡が12軒あるが、これらの住居跡は切り合い関係や、周辺から上深川Ⅱ～上深川Ⅲ（古）式段階の時期の特徴を持った土器が多数出土していることから上深川Ⅱ～上深川Ⅲ（古）式段階の時期の遺構である可能性が高い。そこで、これらを加えると上深川Ⅱ式段階の時期では最大で17軒、上深川Ⅲ（古）式段階の時期では最大で10軒となる。これを同時期の倉重川水系の遺跡と比較してみると、倉重向山遺跡が3軒、倉重2号遺跡が3軒、白禿遺跡が1軒、寺山遺跡が1軒と稗畑遺跡が卓越していることがわかる。さらに八幡川・石内川水系の核となる集落と考えられている浄安寺遺跡の21軒に匹敵しており、稗畑遺跡が浄安寺遺跡、下沖5号遺跡と並ぶ当該地域における拠点となる集落であったといえよう。

稗畑遺跡の住居跡は大きく尾根上に立地するものと、南側斜面に立地するものに分けられる。尾根上に立地するものとしては第4号～第13号までの10の住居跡が挙げられる。また、南側斜面に立地するものとしては第14号～第33号住居跡の20の住居跡が挙げられる。なお、尾根と南側斜面との傾斜変換点付近に位置するもの（第1号、第3号住居跡）、北側斜面に位置するもの（第2号住居跡）もある。第4号住居跡については、尾根筋が標高184m付近につくる一連の平坦面上に位置するため尾根上に加えた。

これまでも尾根上と斜面上の住居跡の違いについてはいくつかの点が指摘されてきたが、稗畑遺跡の場合もほぼ当てはまる。すなわち、①尾根上の住居跡は、中央の広場状の空閑地を取り囲むように平坦面の縁辺に位置し、一般に大型である、②斜面上の住居

跡は全体に小型で、かなり頻繁に建て替えが行なわれている等である。こうした住居跡の立地の相違については、「住居占地に対する何らかの規制」が働いていたと指摘されており、本遺跡の例からもそれは十分に窺うことができる。

さらに、斜面の住居跡群を詳細に観察するとその中でも2つのグループがあるように見受けられる。1つは、斜面の中でも比較的傾斜がゆるやかで平坦な場所につくられており、壁もしっかり掘り込まれつくりが全体に丁寧なものである（A群）。さらにこれらの住居跡群はプランも円形、方形に近く、規模的にも尾根上のものと遜色ないものもある。第18号、第23号、第29号～第32号住居跡がこれにあたる。これとは逆に斜面の傾斜の厳しいところを「コの字」状に細長く掘り込んで出されており、奥行きも十分取れずいかにも狭くなおかつ脆そうなものがある（B群）。これらは前述のA群に比べて急斜面にあるため床面を盛土をしてつくり出す労力も大きかったであろうし、また流失や破壊を受けやすかったであろう。A群、B群の住居跡には場所的、時期的な偏りが見られないため、場所・時期による特徴ではないと思われる。そこで、これは同じ斜面への立地の中における住居占地に対する規制であったと推定される。

斜面に立地する住居跡、特にB群のものについてはその構造はいわゆる一般に見られる円形、方形プランのものとは異なっている。稗畑遺跡で最も一般的に見られるものとしては前述したように斜面を等高線に沿って「コの字」状に細長く掘り込み、さらに斜面下方に盛土をして床面をつくり出したものである。プランは長方形又は隅丸長方形になろう。盛土部分は流失して遺存していないものがほとんどであるが、中には第19号住居跡のように盛土部分とその上の焼土が確認されたものもあった。また、これらの住居跡のうちのいくつかのものは柱穴が壁に対してたいへん近く、しかも壁と並行しているようである（第17号、第21号、第22号、第24号）。特に第24号住居跡の場合は床面aは3個が、床面bでは2個が直線状の壁と並行して検出された。同様の例は、大明地遺跡、浄安寺遺跡、豊谷東遺跡、小林A地点遺跡等でも見られる。これを掘立柱建物跡と捉えるものもある。また用木山遺跡ではこれを長方形長屋状住居跡と呼んでいる。これが平地式の住居としての掘立柱建物跡であるのかどうかは明らかでないが、斜面上の住居跡の構造を考える上で重要であろう。逆に柱穴が壁の近くから検出されなかった住居跡もある（第16号、第19号、第20号、第25号）。これらの住居跡群と前述の住居跡群は同じB群の中でも構造が異なっていた可能性がある。

また、B群の住居跡の盛土部分の構造については遺存状態が悪いため明らかでない。しかし、①壁をつくるためにはさらに余分な土量が必要となること、②斜面というその立地の性格から考えて雨天時の排水が重要であること等の理由を考慮すると壁がつくられていなかったとも考えられ、いわゆる半竪穴半平地式住居であったと思われる。

掘立柱建物跡については時期を明らかにできなかったものが多かった。その中で第4号、第5号掘立柱建物跡については上深川Ⅱ式段階の時期の遺構であると思われる。弥生時代の掘立柱建物跡の検出例としては、八幡川・石内川水系では下沖5号遺跡、和田1号遺跡、白禿遺跡が知られる。従来、市域では「上深川Ⅱ～Ⅲ式の頃に集落によっては、倉としての掘立柱建物跡を伴うものが現れる」と指摘されているが、本遺跡についてもその指摘に合致しているようである。

以上のように本遺跡は、①上深川Ⅱ～Ⅲ式段階の時期に住居跡が増加する、②尾根上

と斜面の住居跡に違いが見られる、③住居跡が数軒の小集落と、核となる大規模集落が存在する等の石内川・八幡川流域における同時期の集落跡の一般的なあり方に一致しており、弥生時代後期における地域の核集落の1つのありようを示していると思われる。ただし、斜面から多くの住居跡が検出されたこと、7基もの乳幼児用土器棺墓がまとまって検出されたことは同時期の集落跡を考える上で新しい視点を与えたと言えよう。

土器棺墓について

稗畑遺跡からはいずれも乳幼児を埋葬したと思われるいわゆる土器棺墓が7基検出された。1ヵ所で7基もの土器棺墓が検出されたのは市域でも初めてのことであり注目される。ここでは土器を使用した乳幼児の埋葬方法を中心に市域の弥生時代の墓制について若干の検討を加えたい。

稗畑遺跡から検出された7基の土器棺墓にはいくつかの共通した特徴が見られる。それらを以下に整理してみる。①棺身はすべて口縁部を打ち欠いた大型壺形土器である。第3号土器棺墓については胴部を打ち欠いて遺体の入れ口としている。②鉢型土器（2号，5号，6号，7号）又は土器の下半部（1号，3号）を蓋としている。第4号土器棺墓については蓋はなかったと思われる。③棺身は口を 50° ～ 60° の角度で上向きに埋置しているものが多い。第3号土器棺墓については胴部の打ち欠き部分を上向きに埋置している。また、口縁部を棺身と土壌の壁の間に挟み込んだり（1号，2号），土壌内に平坦部を設けたり（7号）して棺身を上向きに安定させるようにしている。④1～3個体の土器で構成されている。

また、土器の特徴からこれらの土器棺墓群の中心は上深川Ⅲ（古）式段階の時期と思われる、これは本遺跡の集落が最も大きかった時期と一致しているため、本土器棺墓群は本遺跡の集落に伴う乳幼児用の墓地であると位置付けられよう。乳幼児用の土器棺墓については住居の近くに埋葬されることが多いとされているが、本土器棺墓群の場合は集落の中心から大きくはずれた1地点に設けられていることが注目される。

ところで市域でみられる弥生時代の土器を使用した乳幼児の埋葬方法には以下の3つのタイプが見られる。

A、棺身とする土器内へ遺体を埋葬する。遺体の入れ口に他の土器等で蓋をするものが多いが、蓋のない例もある。いわゆる土器棺墓である。このタイプはさらに棺身の埋置方法や蓋のしかたなどでさらに細かく分けられよう。

B、土壌内に直接遺体を埋葬し、土器の破片でこれを覆う。いわゆる土器蓋土壌である。

C、土器を破砕してその破片を石棺状に組み上げ、棺内に遺体を埋葬する。

Aタイプの類例としては、八幡川・石内川流域では小林B地点遺跡，高井遺物包含層から，太田川・安川流域では長う子遺跡，矢ヶ谷遺跡，落合遺跡，寺迫遺跡，大久保遺跡，大明地遺跡から，広島湾東部では岡谷遺跡からそれぞれ出土しているものがある。

Bタイプの類例としては，末光A-2地点遺跡，末光B地点遺跡，毘沙門台B・C地点遺跡，浄安寺遺跡からそれぞれ出土したものがある。末光B地点遺跡のものについても遺体は直接土壌に埋葬されておりこのタイプのものとした。

Cタイプの類例としては，寺迫遺跡，毘沙門台B・C地点遺跡，大久保遺跡から出土したものがある。

従来の出土例を見ると、同一の遺跡中にA、Cの両タイプを持つもの（寺迫遺跡、大久保遺跡）やB、Cの両タイプを持つもの（毘沙門台B・C地点遺跡）もあり、また同じAタイプの中でも蓋のしかたや棺身の埋置方法が異なっているものも多い。

ところが稗畑遺跡から検出された7基の土器棺墓はすべてAのタイプであったと推定され、またそれだけでなく前述のような共通の特徴を持つ。本土器棺墓群が上深川Ⅱ式段階から上深川Ⅲ（新）式段階のかなり長期にわたって営まれたにもかかわらずこうした共通の特徴が見られることは、稗畑遺跡として乳幼児の埋葬方法にある一定の傾向を有していたものと考えられよう。また他の土器棺墓と比較すると鉢形土器を蓋として多く使用している点も注目される。

市域の土器棺墓を管見すると、A、B、Cのタイプを問わずすべて壺形土器が使用されていることが指摘される。Aタイプでは知りうるすべての棺身は壺形土器であり、しかも複合口縁を持つ大型のものが多い。Bタイプでも大型の壺形土器が土器蓋の中心として使用されていることが窺われる。Cタイプでも同様に大型の壺形土器を破碎して石棺状に組み上げている。棺身として使用されている壺形土器は口縁部や胴部を打ち欠いて口をつくっているものが多いことから、土器棺用につくられたものではないとも思われる。しかし逆に複合口縁を持つ大型の壺形土器が土器棺墓以外に出土することも量的に少ない。これらの土器が何のために製作されたものであるのか今後の課題であると思われるが、複合口縁を持つ大型の壺形土器と土器を使用した乳幼児の埋葬との関係が推定される。なお、A・B・Cタイプの相違については、その規模からいずれも乳幼児用、特に乳幼児用と思われ、時期についても違いは明らかでない。出土例が少ないためその理由は明確にしえなかった。ただ、出土例の多いAタイプがBタイプと同一の遺跡中から検出されていないため、集落等による埋葬方法の違いである可能性もあろう。

最後に市域における弥生時代後期の墳墓について見てみる。その中で太田川・安川流域における墳墓群（西願寺遺跡A地点、矢ヶ谷遺跡、恵木遺跡、大久保遺跡等）においては、成人の埋葬方法がすべて土壙墓（木棺墓も含む）であるのに対して、乳幼児・小児の埋葬方法には石棺墓も見られる（矢ヶ谷遺跡、恵木遺跡、毘沙門台B・C地点遺跡、末光B地点遺跡等）ことが注目される。このことは、この地域の特定の時期・場所において成人の埋葬方法として土壙墓が主流であったこと、また成人と乳幼児・小児との埋葬方法を使い分ける意識があったことを示しているものとも思われる。また、乳幼児・小児の埋葬方法としては土壙墓も見られるが、その規模から幼児以上用と思われるものが多くを占めていると言えよう。以上のことから乳児については土器棺墓や石棺墓、幼児から小児については土壙墓や石棺墓、成人については土壙墓による埋葬というように年齢等による埋葬方法の使い分けが行われていた可能性があると考えられる。

注

1. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『倉重向山遺跡発掘調査報告』1991
2. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』1987
3. 注2と同じ
4. 五日市町誌編集委員会『五日市町誌』上巻、1974
5. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調

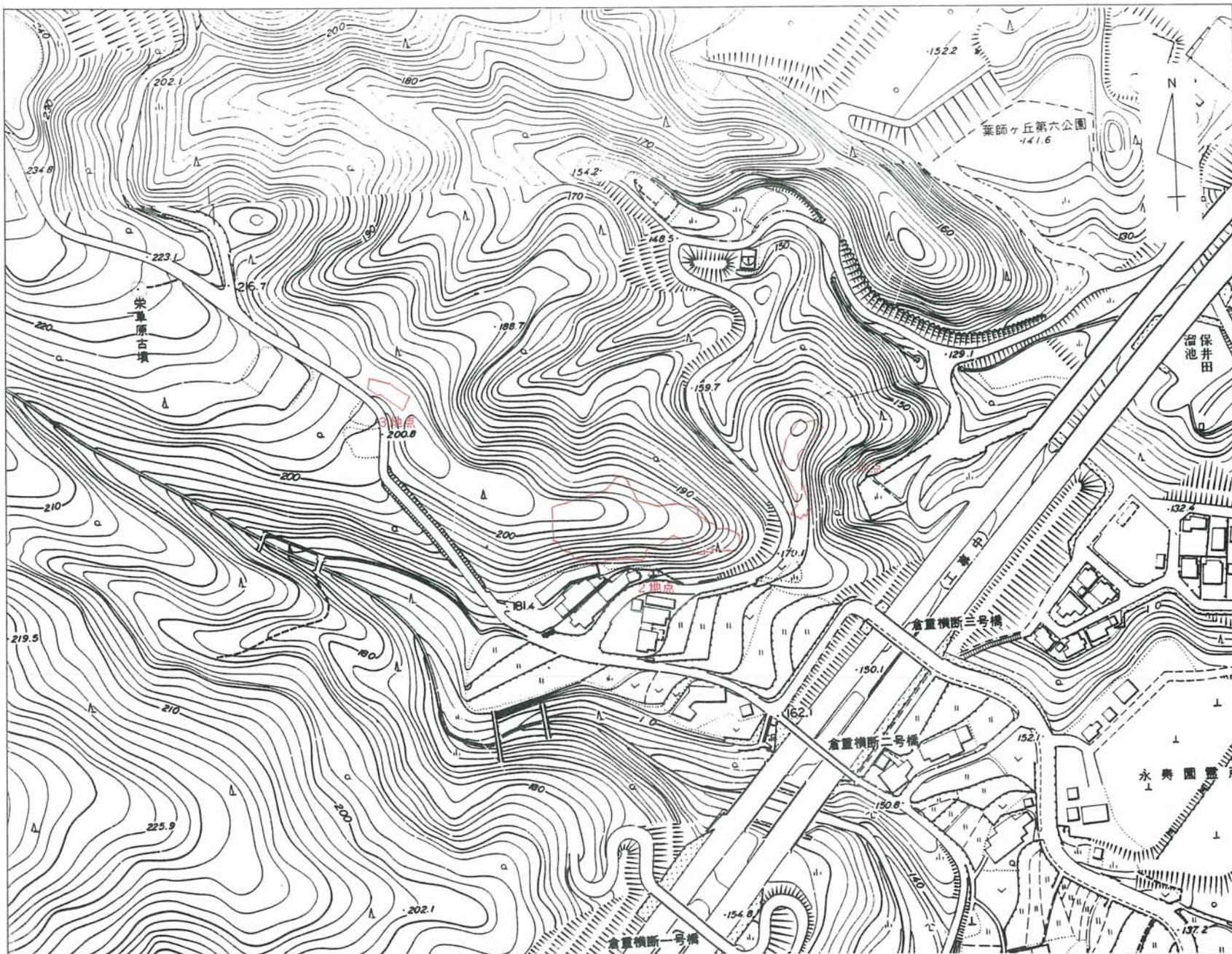
査報告（Ⅲ）』 1986

6. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』 1988
広島市教育委員会『小林遺跡A・B地点遺跡発掘調査報告』 1990
日本道路公団岩国工事事務所，山口県教育委員会『畑岡遺跡』 1990
その他，後出の用木山遺跡，奈カリ与遺跡，頭高山遺跡等でも同様の指摘がなされており，当時の山陽地方の一般的な集落の在り方だったものと思われる。
7. 広島市教育委員会「下沖5号遺跡」『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』 1988
8. A群の住居跡を家長世帯の住居と推測するものもある。財団法人兵庫県文化協会「奈カリ与遺跡」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』 1983
9. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告（Ⅳ）』 1987
10. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『須賀谷古墳群・豊谷東遺跡発掘調査報告』 1985
11. 広島市教育委員会『小林遺跡A・B地点遺跡発掘調査報告』 1990
12. 注9と同じ
13. 岡山県山陽町教育委員会『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（4）』 1979
14. 森岡秀人「兵庫県会下山遺跡」『弥生文化の研究7』雄山閣， 1986
神戸市教育委員会「頭高山遺跡」『神戸市埋蔵文化財年報』 1986
財団法人兵庫県文化協会「奈カリ与遺跡」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』 1983
15. 広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』 1988
16. 注7と同じ
17. 佐原眞「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史1』 1975
18. 注11と同じ
19. 吉野益見「広島付近の貝塚（其三）」『考古学雑誌』第16巻第12号，考古学会， 1926
20. 広島市教育委員会『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』 1984
21. 矢カ谷遺跡発掘調査団『矢カ谷遺跡発掘調査報告』 1984
22. 広島市教育委員会『落合遺跡発掘調査報告』 1974
23. 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977
24. 1991年度，当事業団が発掘調査を行った。
25. 広島市教育委員会『岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告』 1985
26. 広島市教育委員会『末光遺跡群発掘調査報告』 1984
27. 注25と同じ
28. 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』 1990

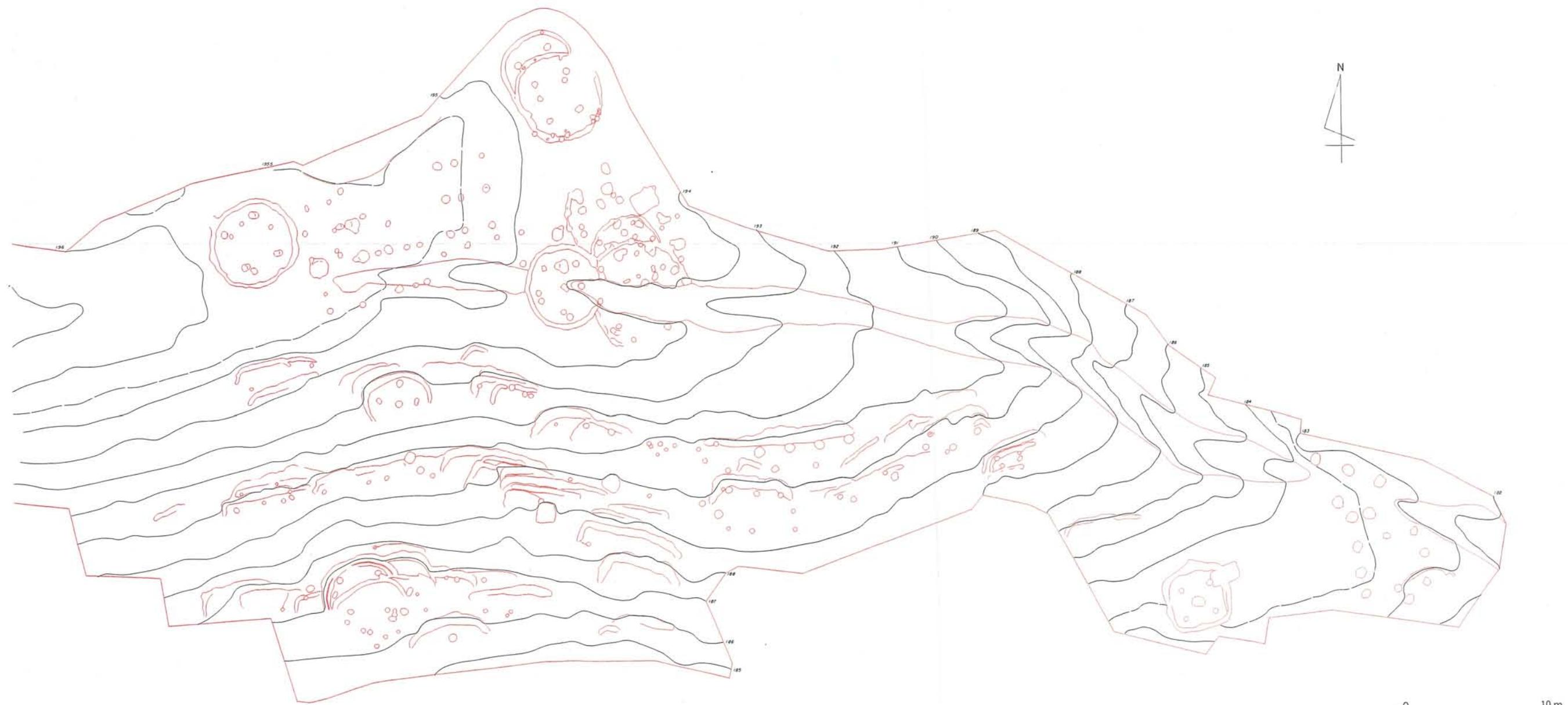
29. 広島県教育委員会『西願寺遺跡』1974
30. 恵木遺跡発掘調査団『恵木遺跡発掘調査報告』1982

【参考文献】

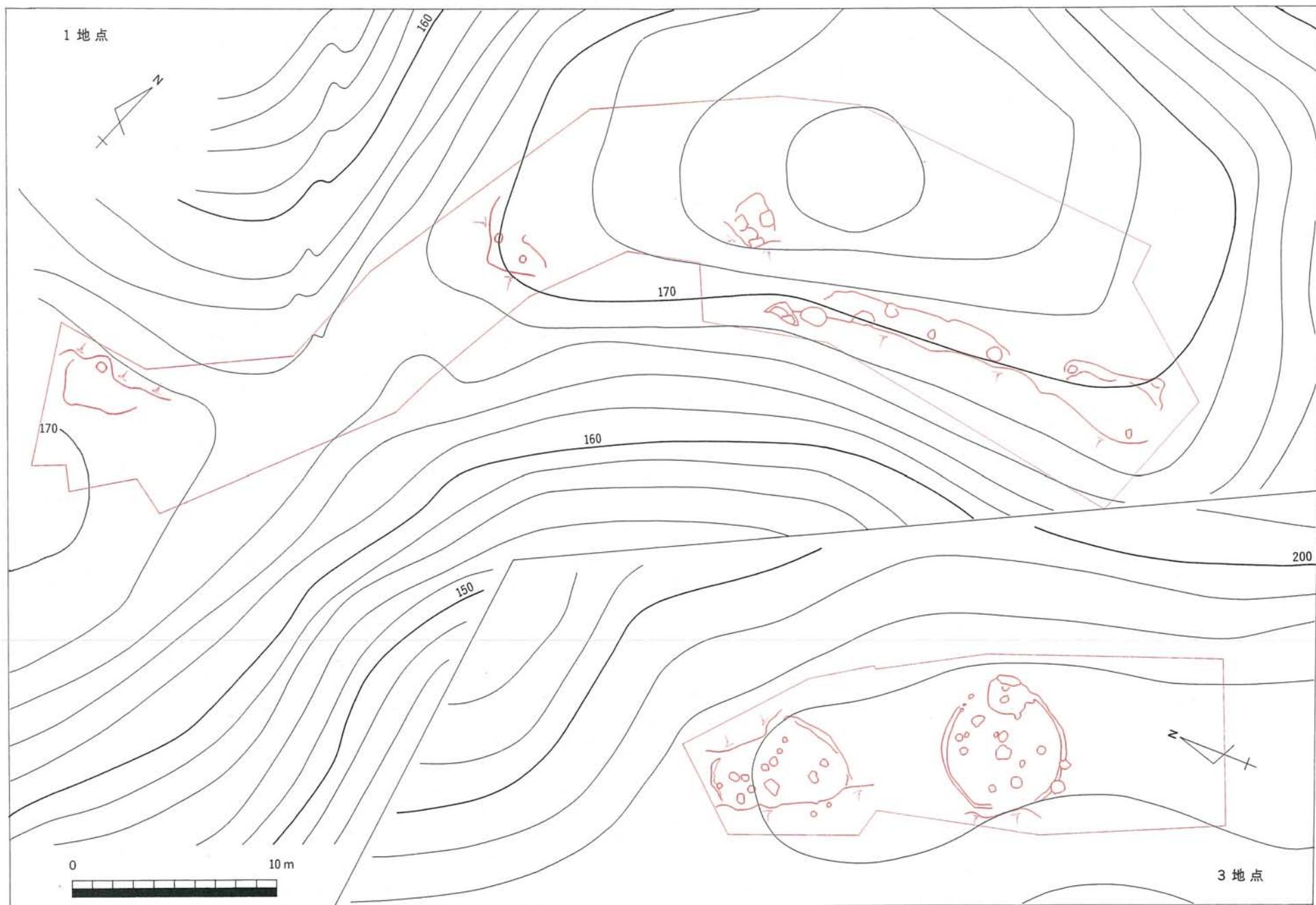
1. 馬目順一「幼児用の壺・甕棺墓」『弥生文化の研究8』1985
2. 福岡市教育委員会『史跡金隅遺跡』1985
3. 大間茂「甕棺の他界観の系統性」『古代文化』第27巻第6号, 1975
4. 潮見浩「山陽地方における弥生時代の墓制」『古代学』第8巻第2号, 1959



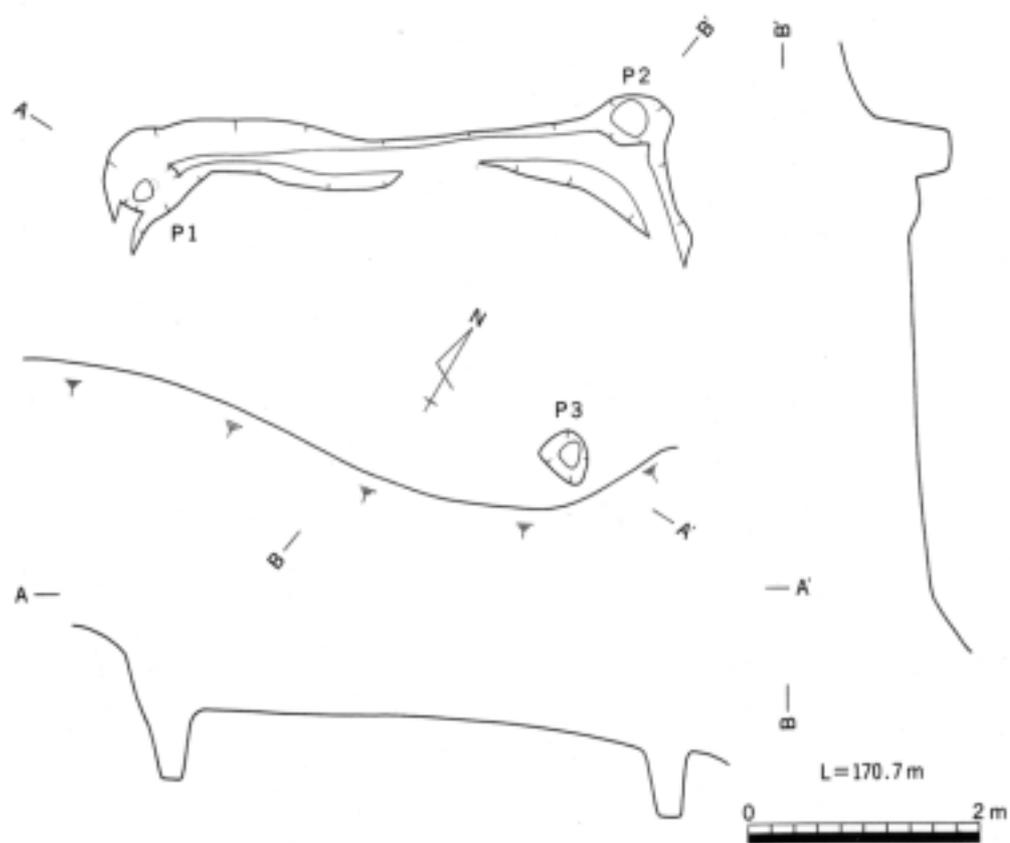
第3図 遺跡周辺地形図 (1:2,500)



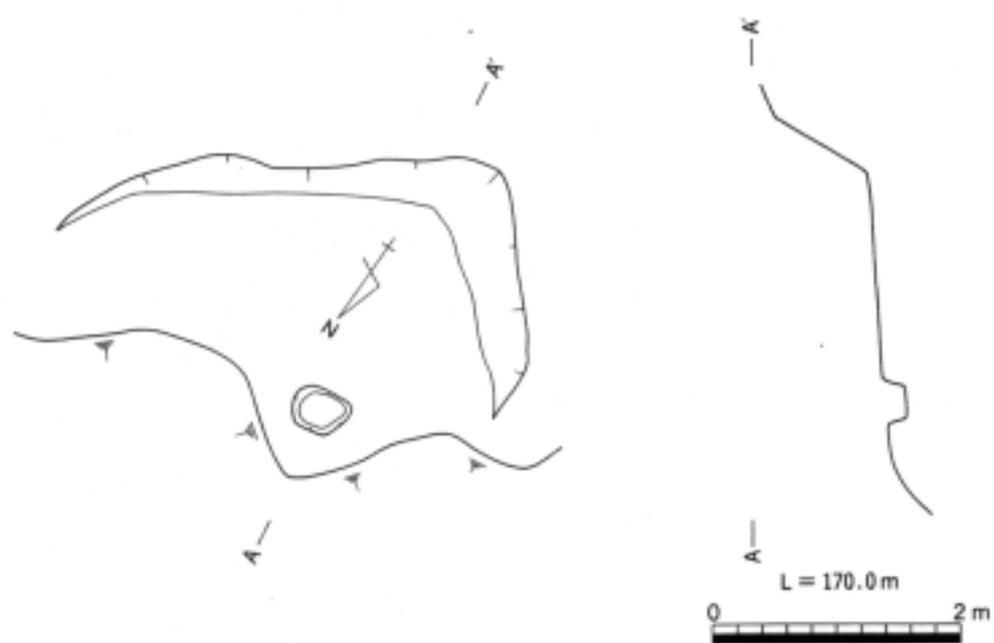
第4图 2 地点遗构配置图



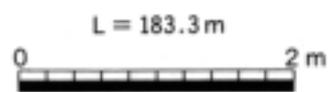
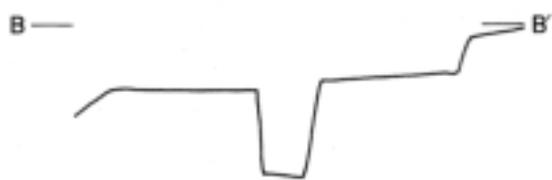
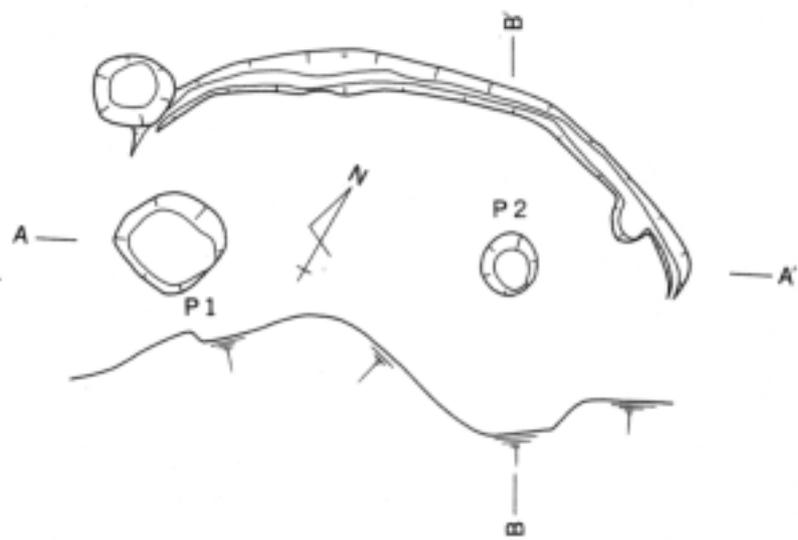
第5图 1·3 地点遺構配置図



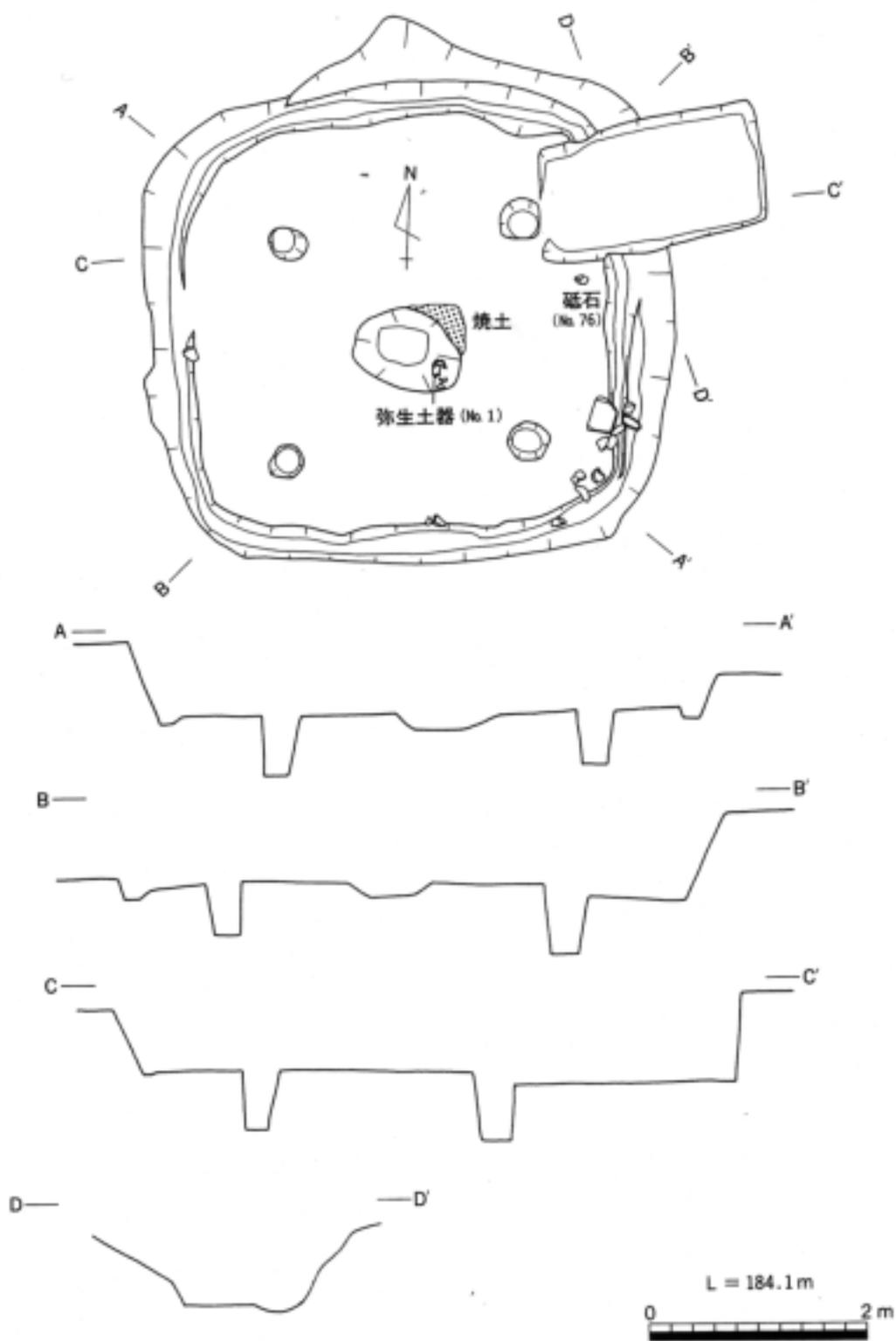
第6图 第1号住居跡実測图



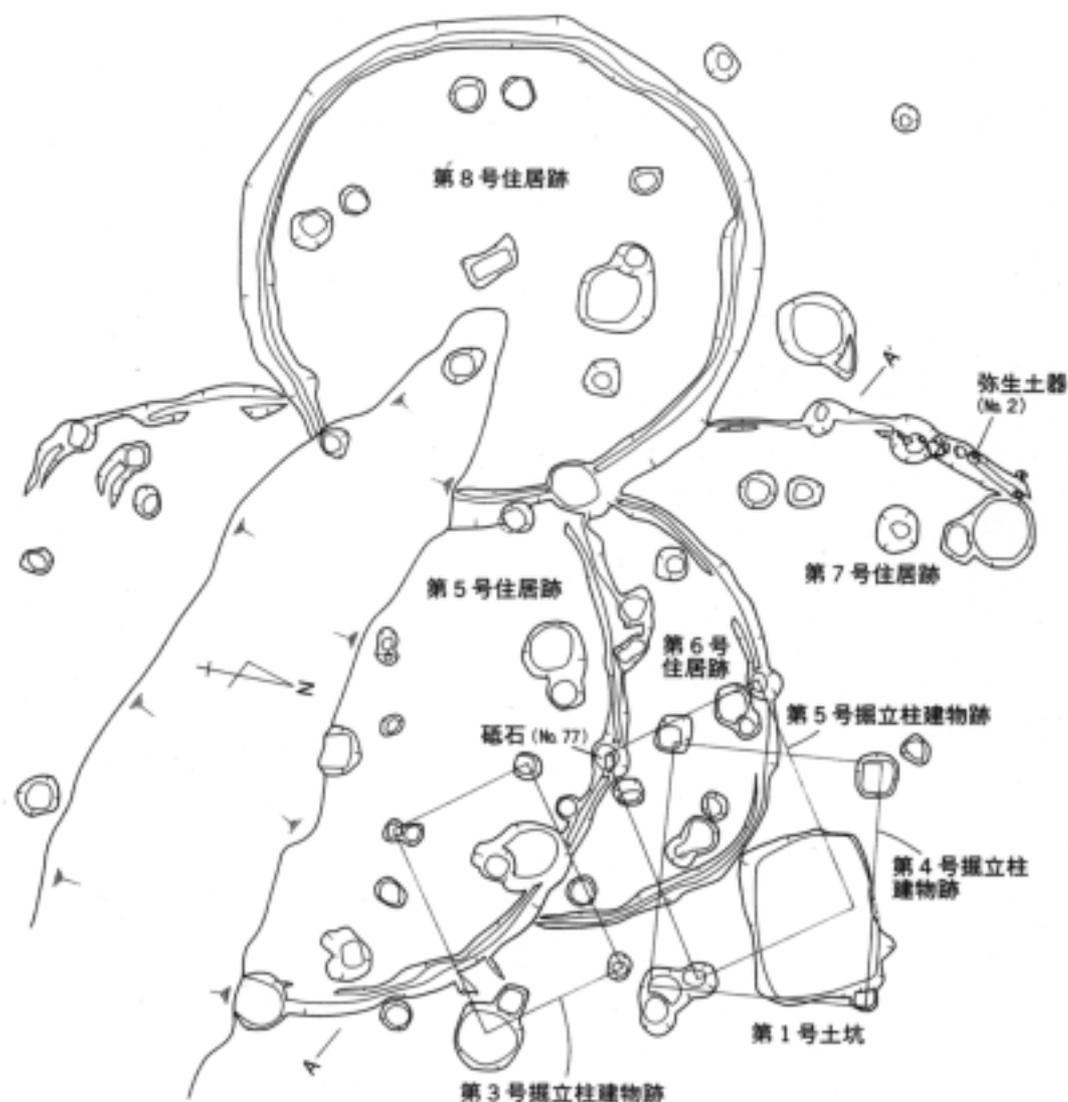
第7图 第2号住居跡実測图



第 8 图 第 3 号住居跡実測图

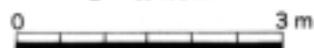


第9图 第4号住居跡及び第3号土坑墓実測図

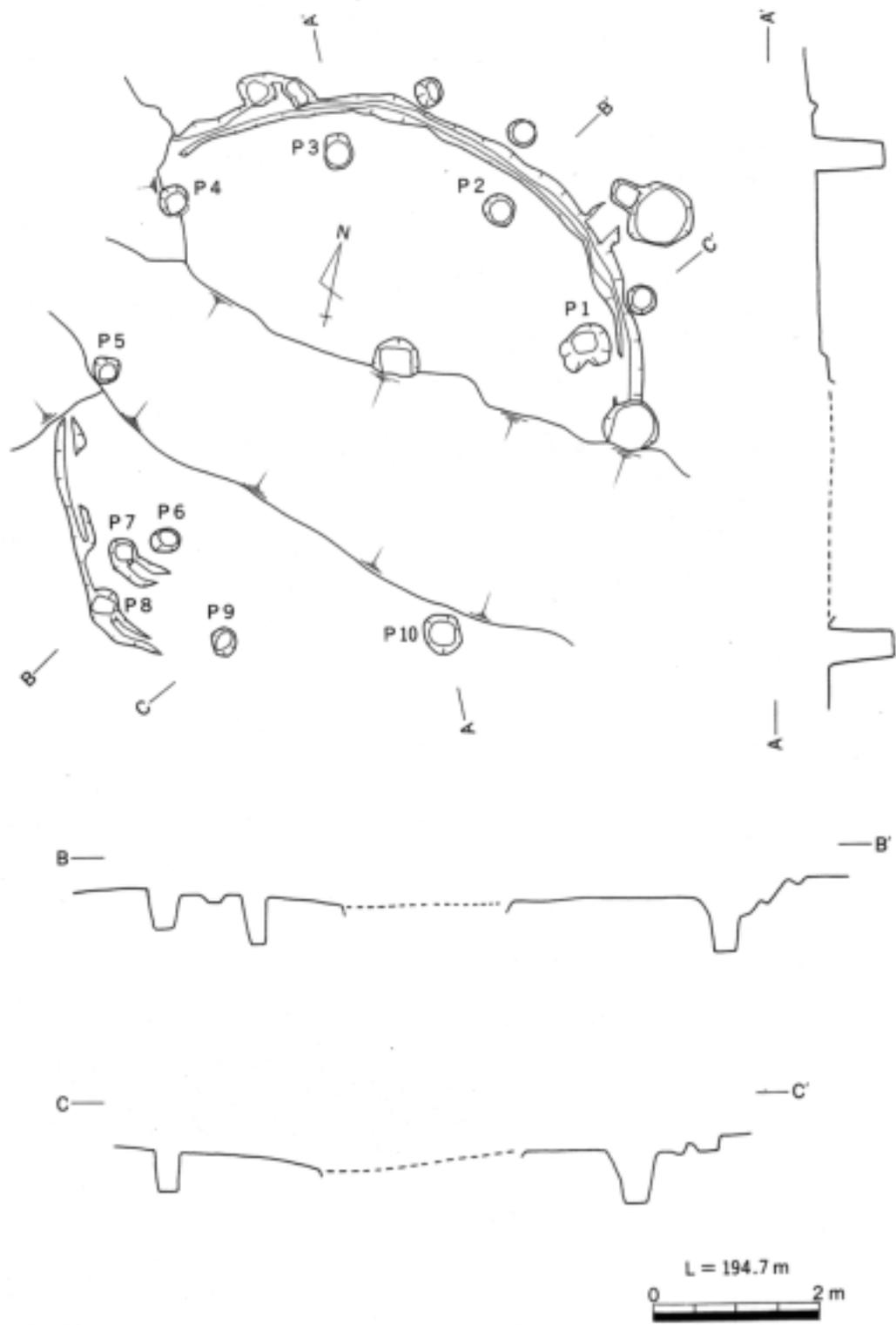


- | | | |
|------------|--------------|------------------|
| 1. 表土 | 5. 黑褐色土(細) | 9. 暗褐色土 |
| 2. 暗褐色土 | 6. 黑色土(炭混じり) | 10. 灰褐色土(真砂土混じり) |
| 3. 黑褐色土(細) | 7. 黑褐色土(粗) | 11. 真砂土 |
| 4. 黑褐色土(粗) | 8. 真砂土 | |

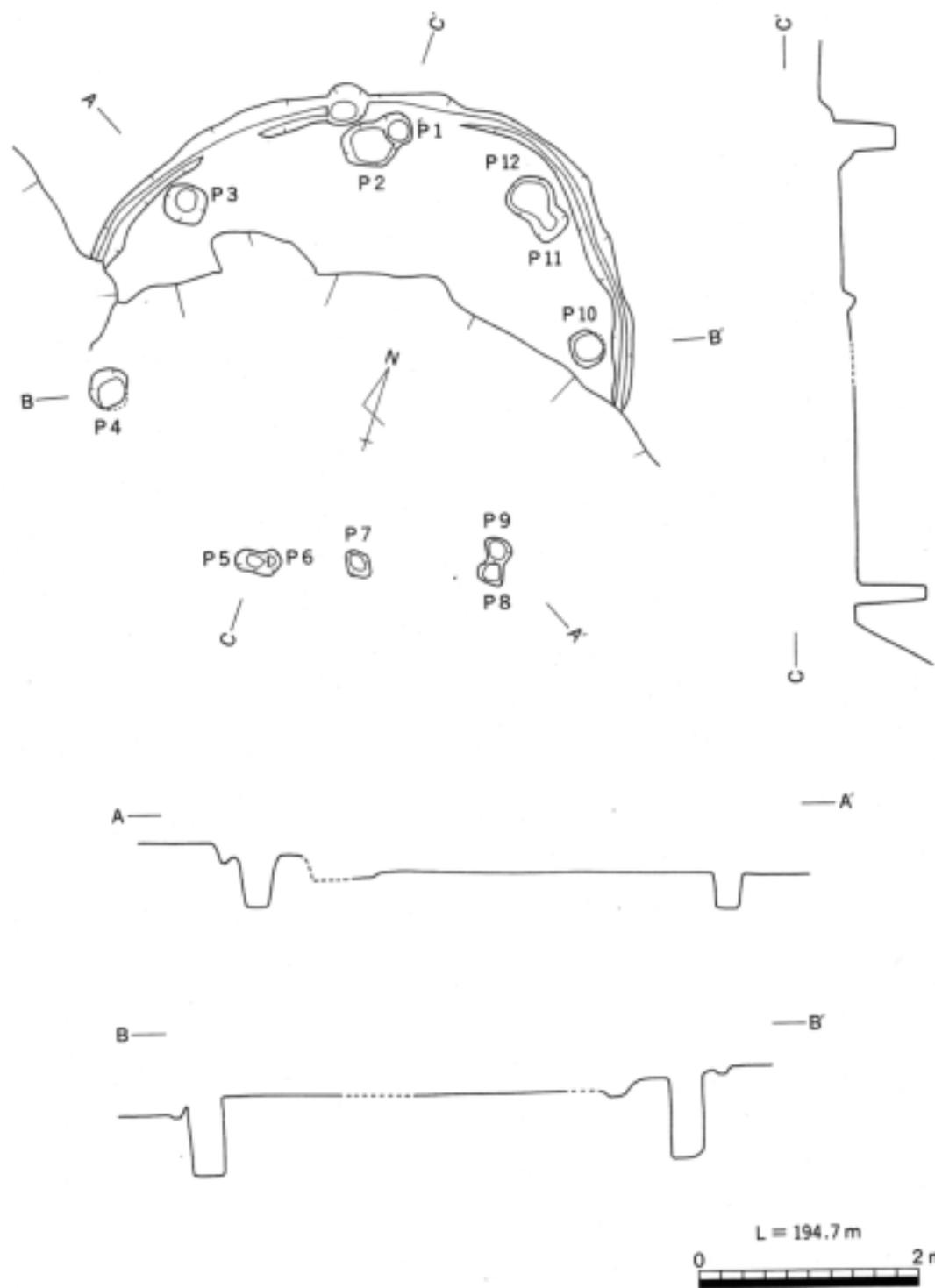
L = 194.8 m



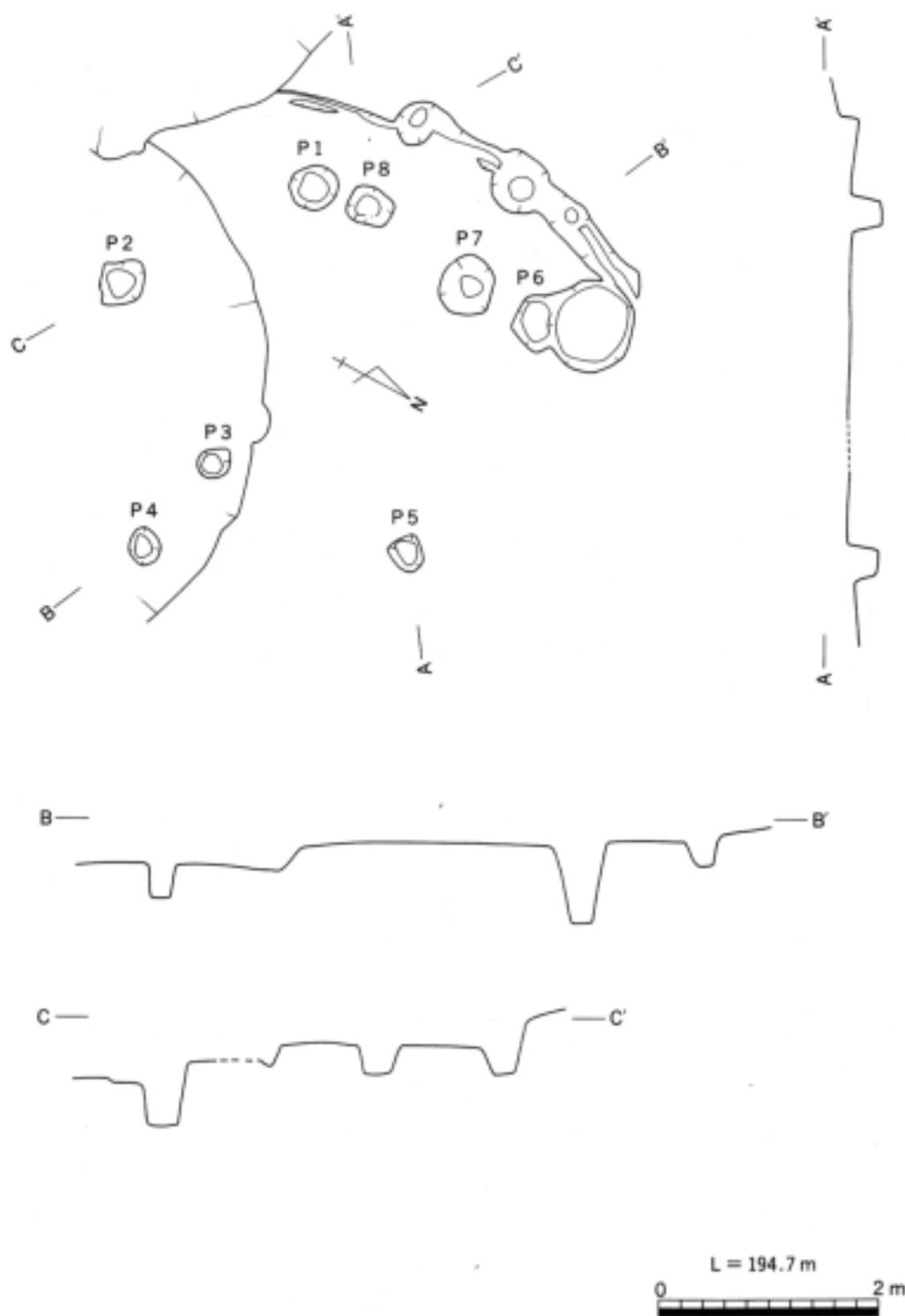
第10図 第5号～第8号住居跡，第3号～第5号掘立柱建物跡及び第1号土坑実測図



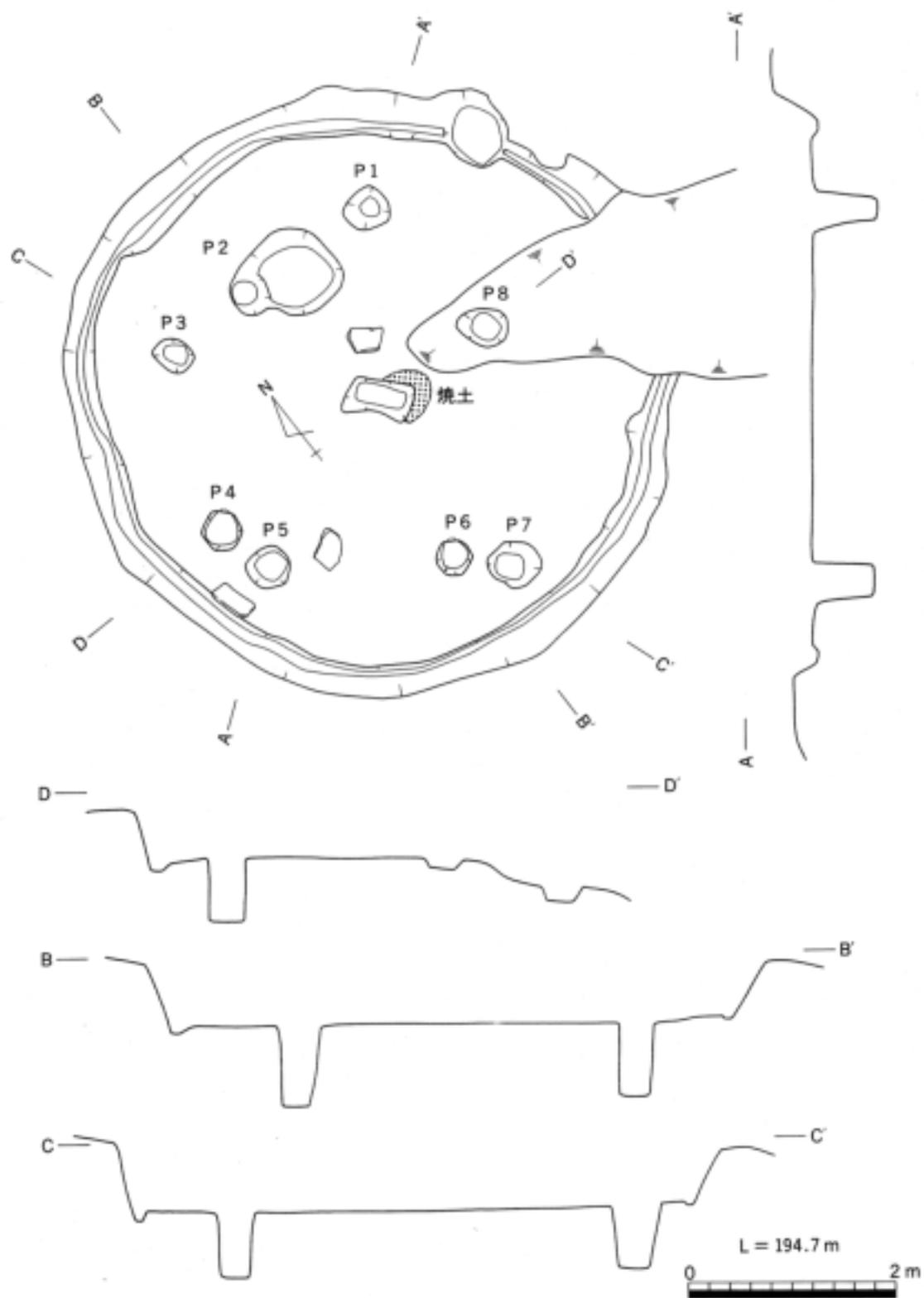
第 11 图 第 5 号住居跡実測图



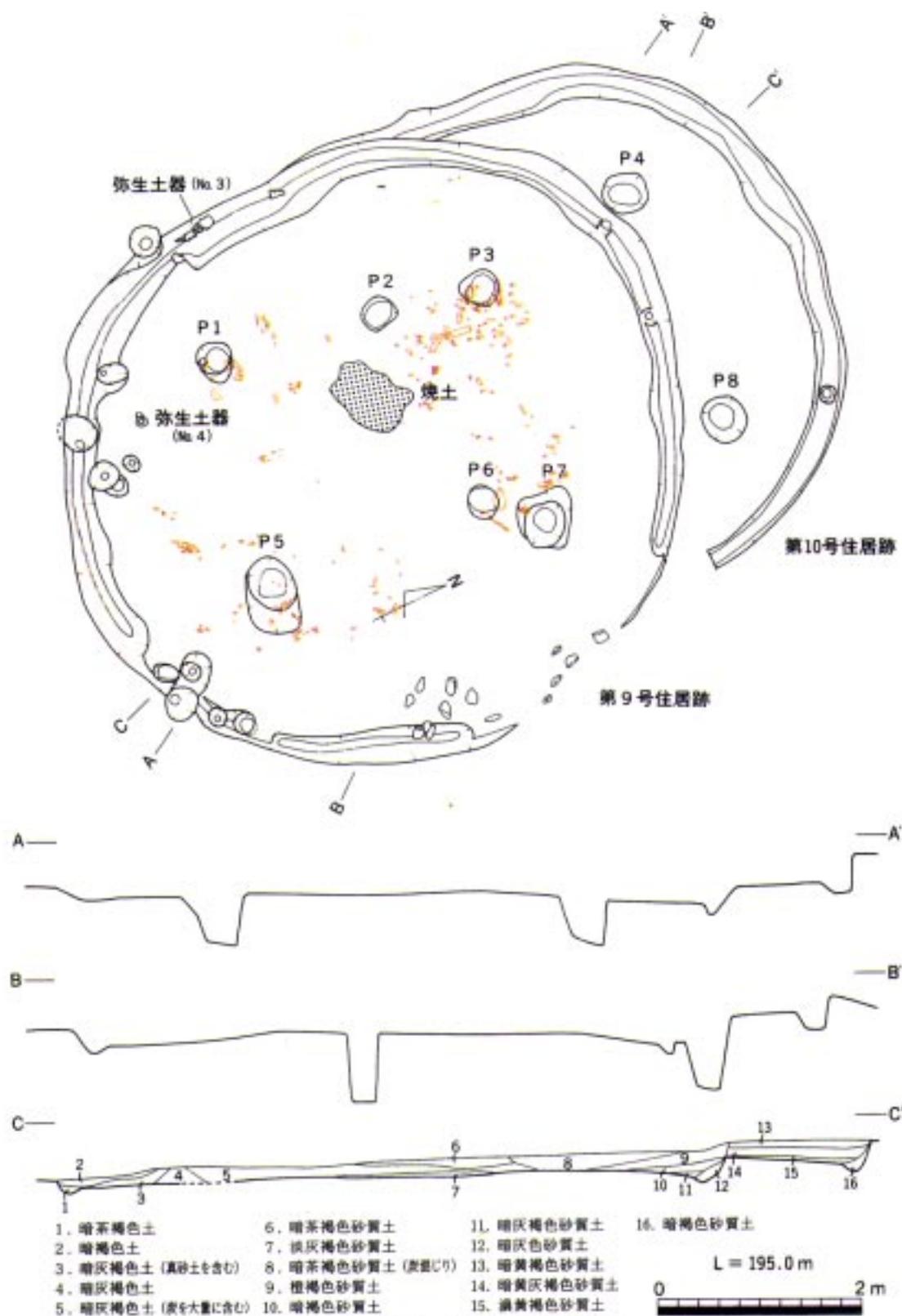
第 12 图 第 6 号住居跡実測図



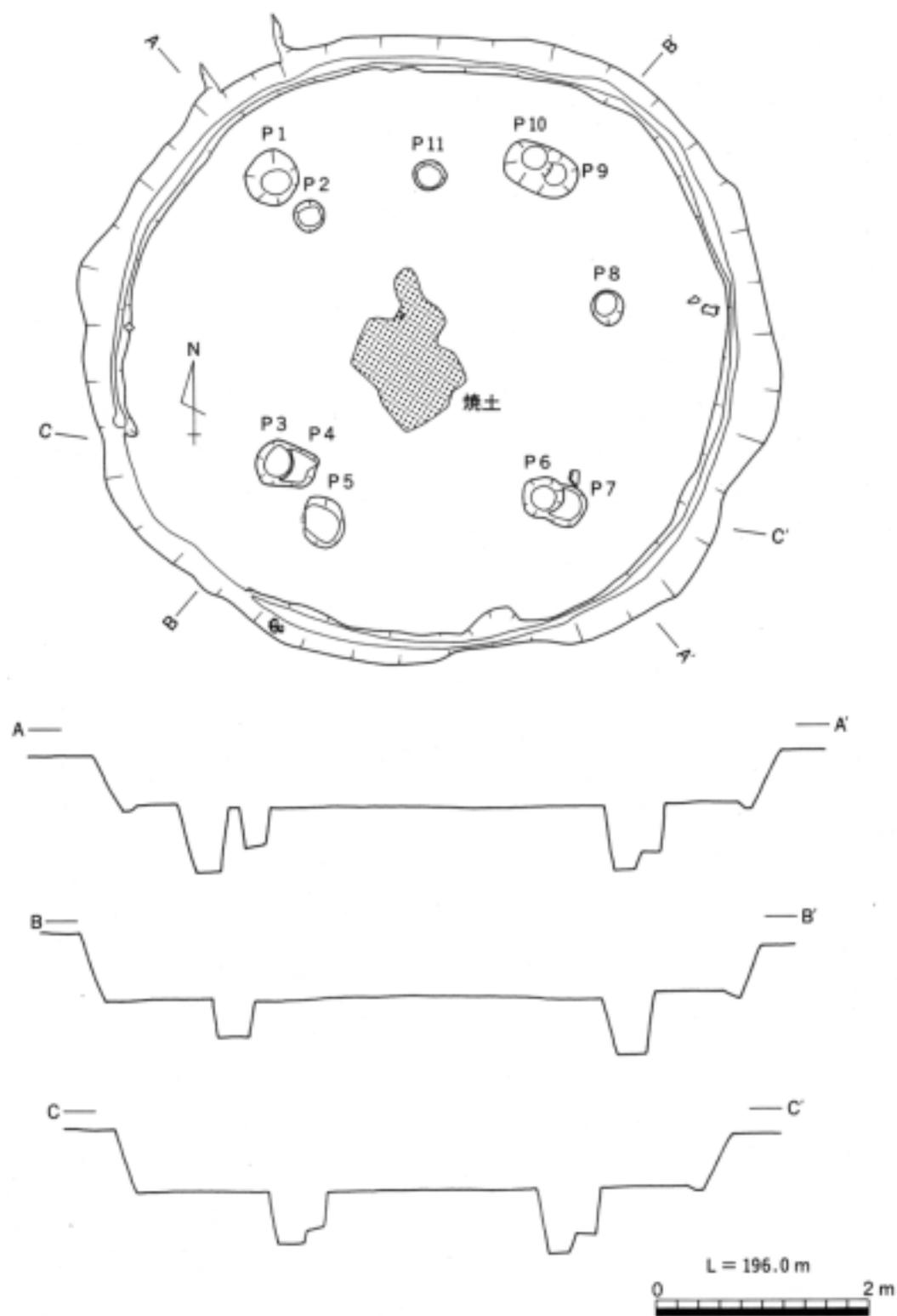
第 13 图 第 7 号住居跡実測図



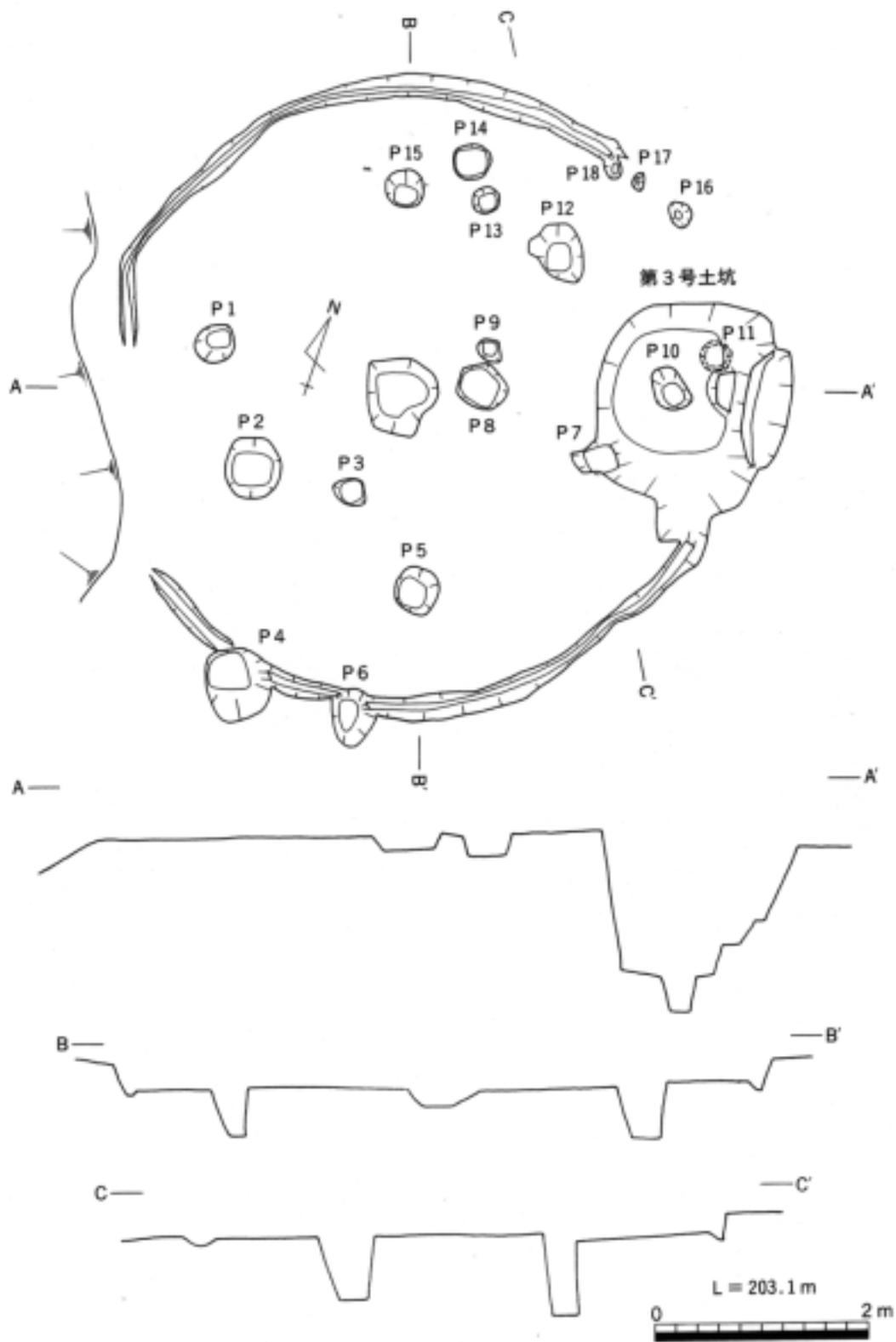
第 14 图 第 8 号住居跡実測图



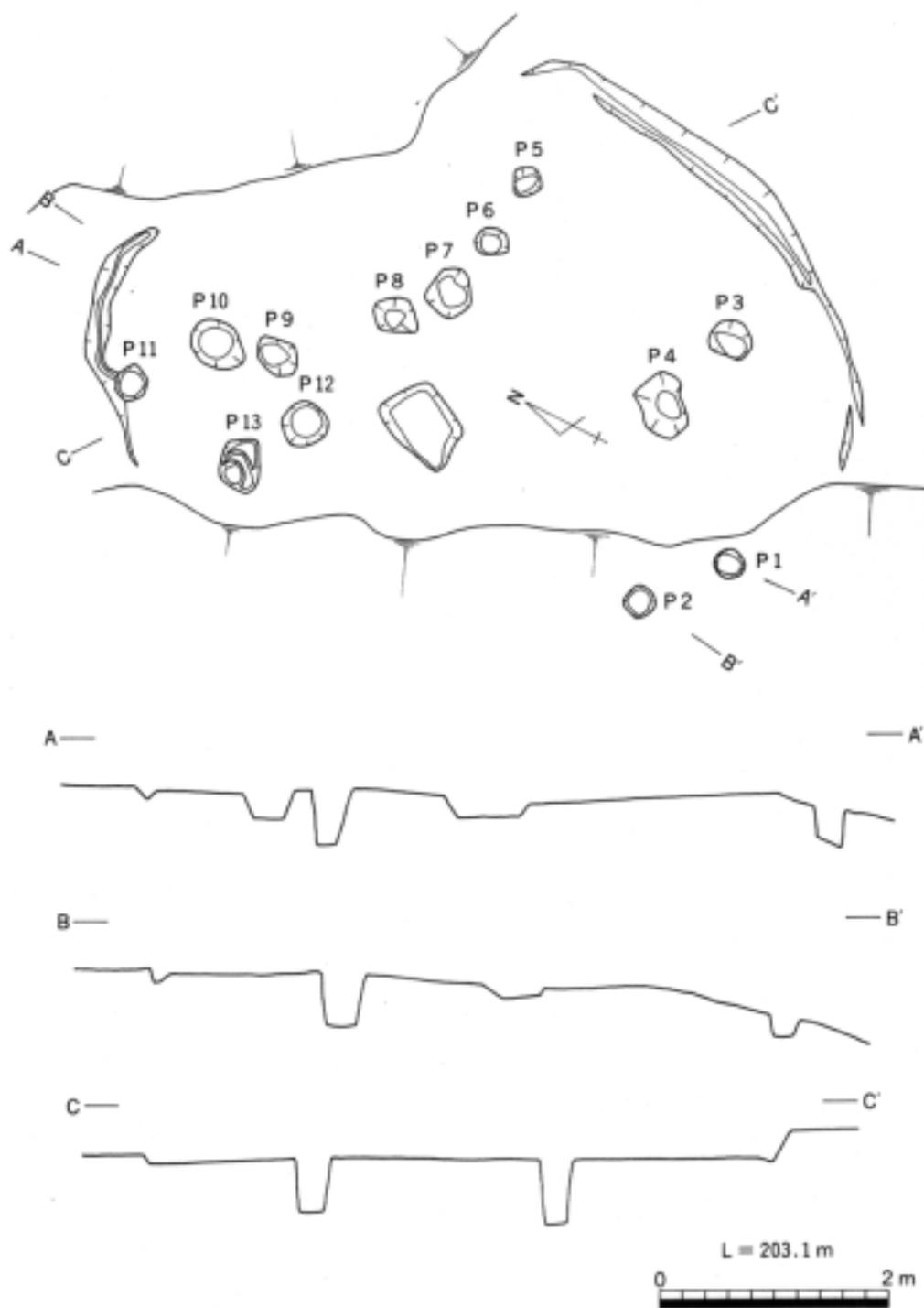
第15图 第9号・第10号住居跡実測図



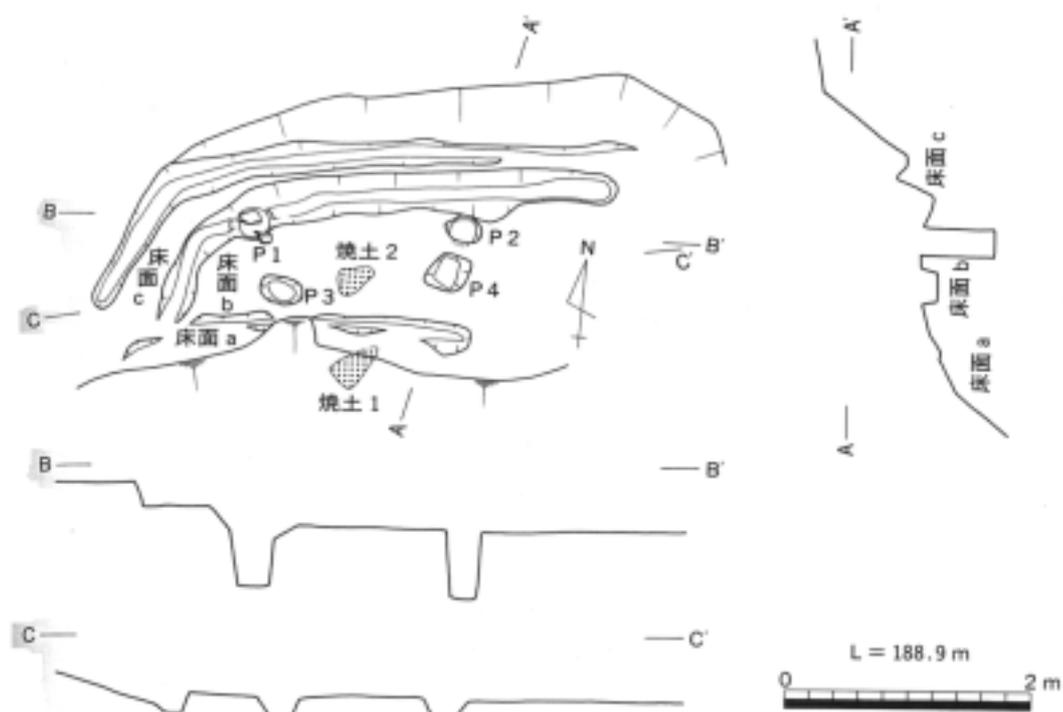
第16图 第11号住居跡実測图



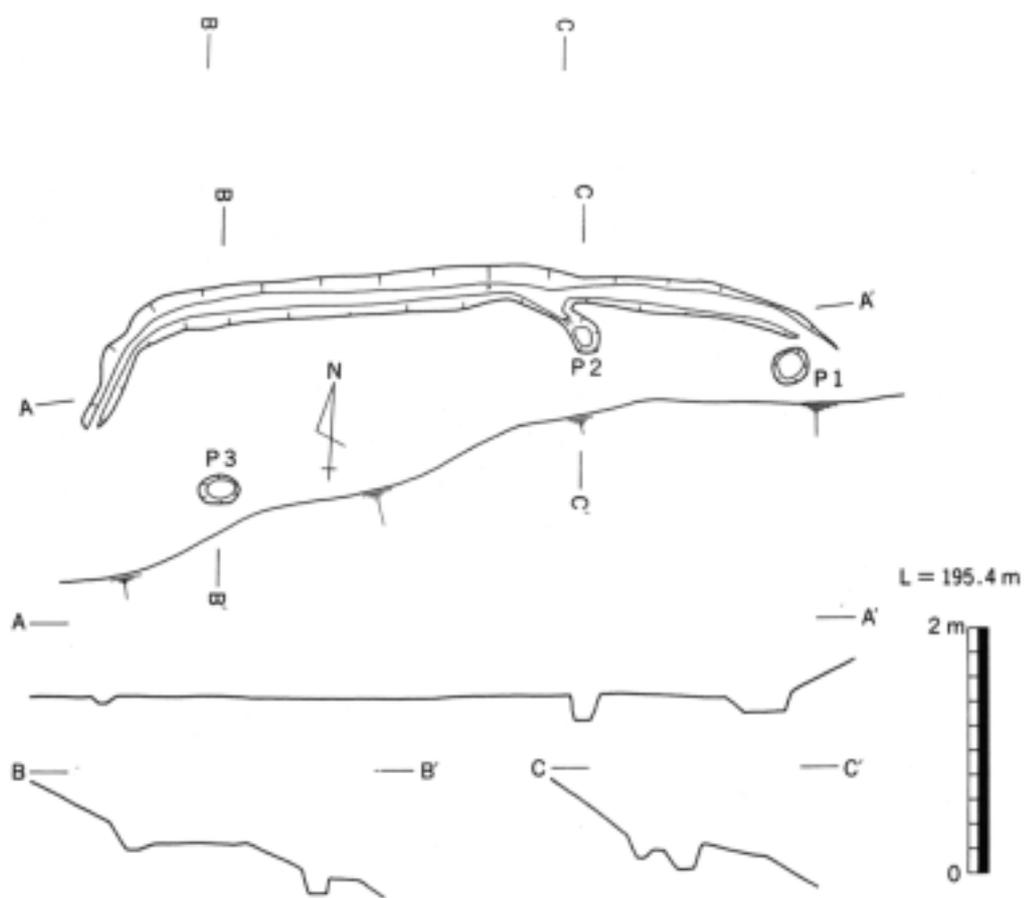
第 17 图 第 12 号住居跡及び第 3 号土坑実測図



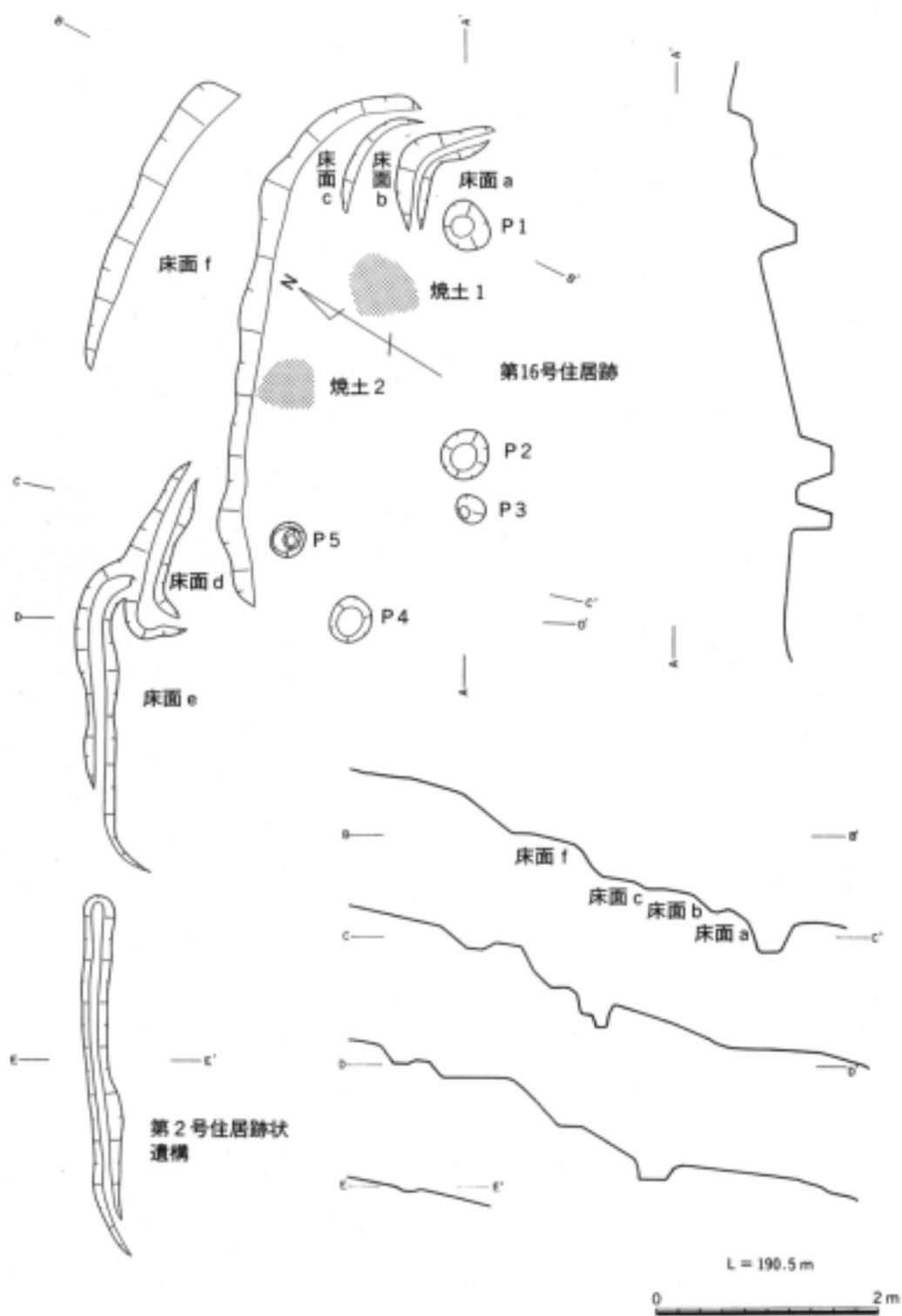
第 18 图 第 13 号住居跡実測图



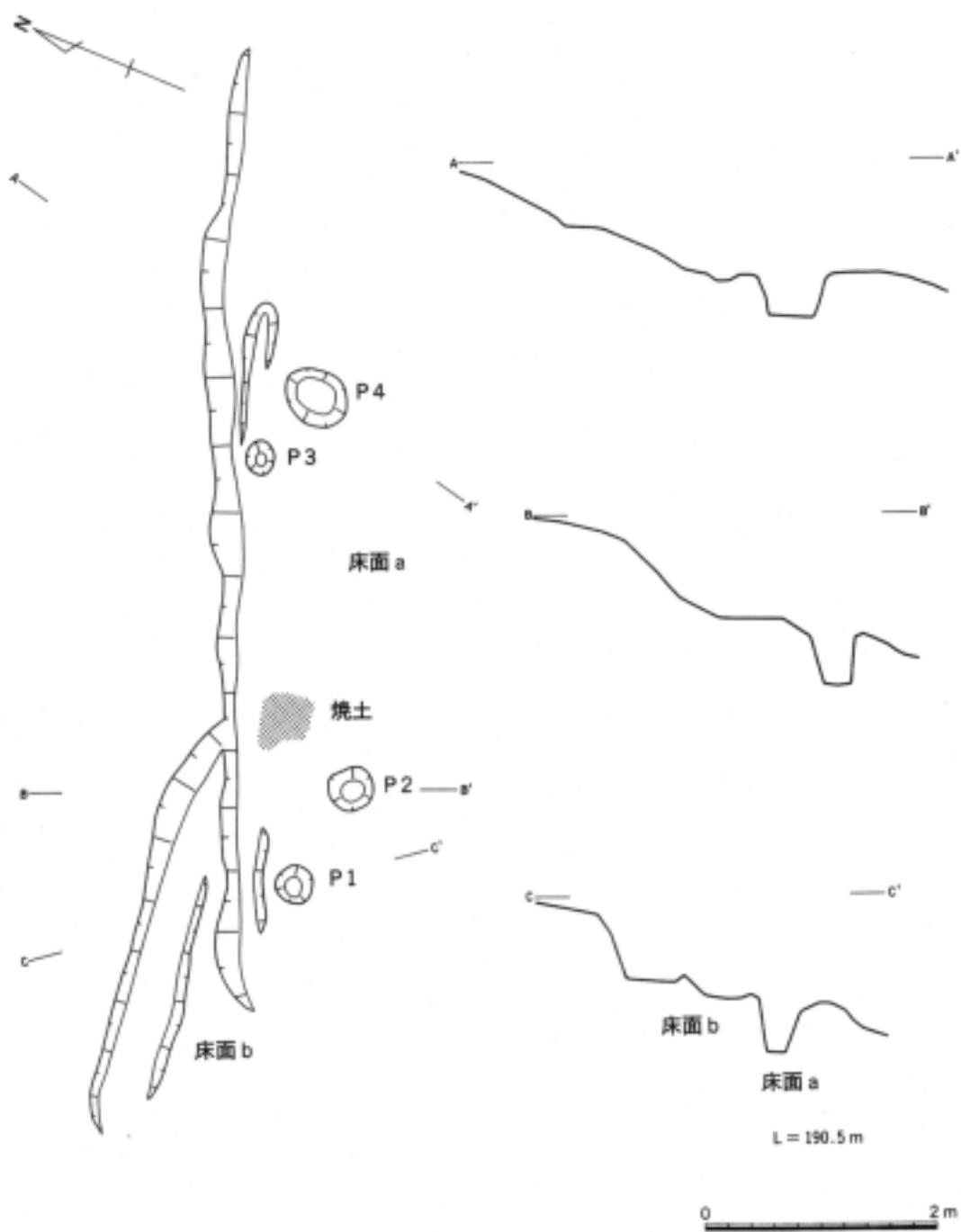
第19图 第14号住居跡実測図



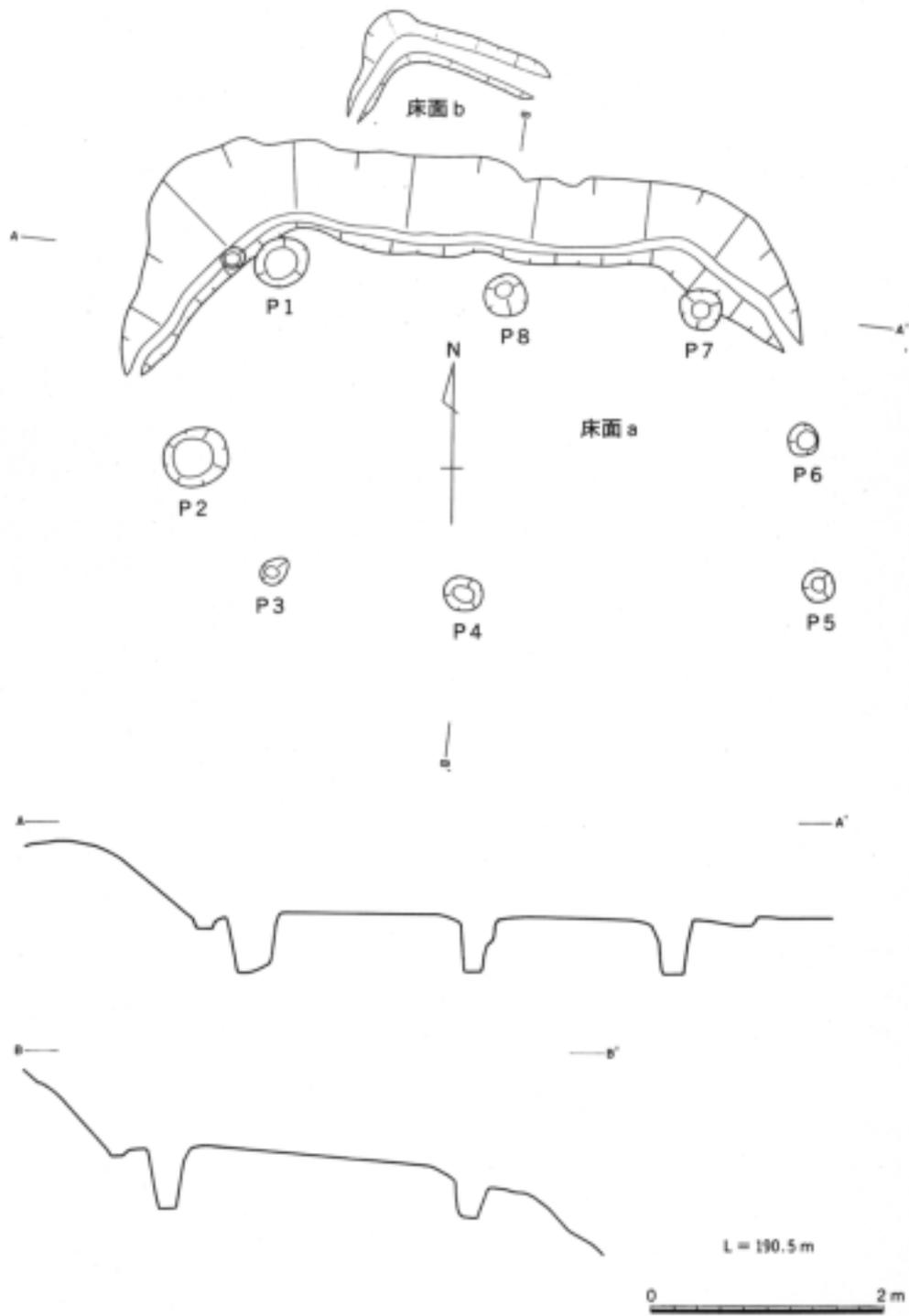
第20图 第15号住居跡実測図



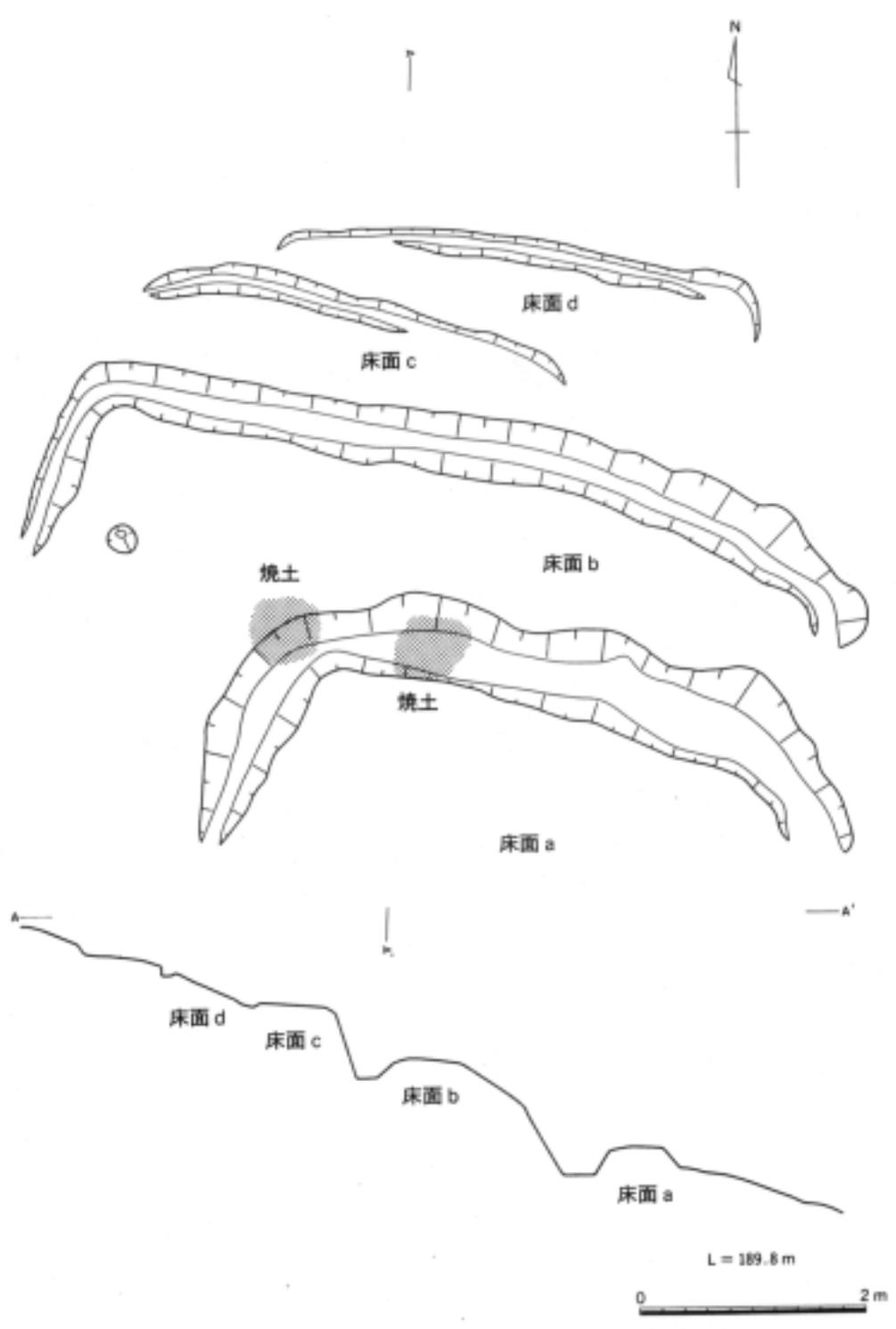
第 21 图 第 16 号住居跡及び第 2 号住居跡状遺構実測図



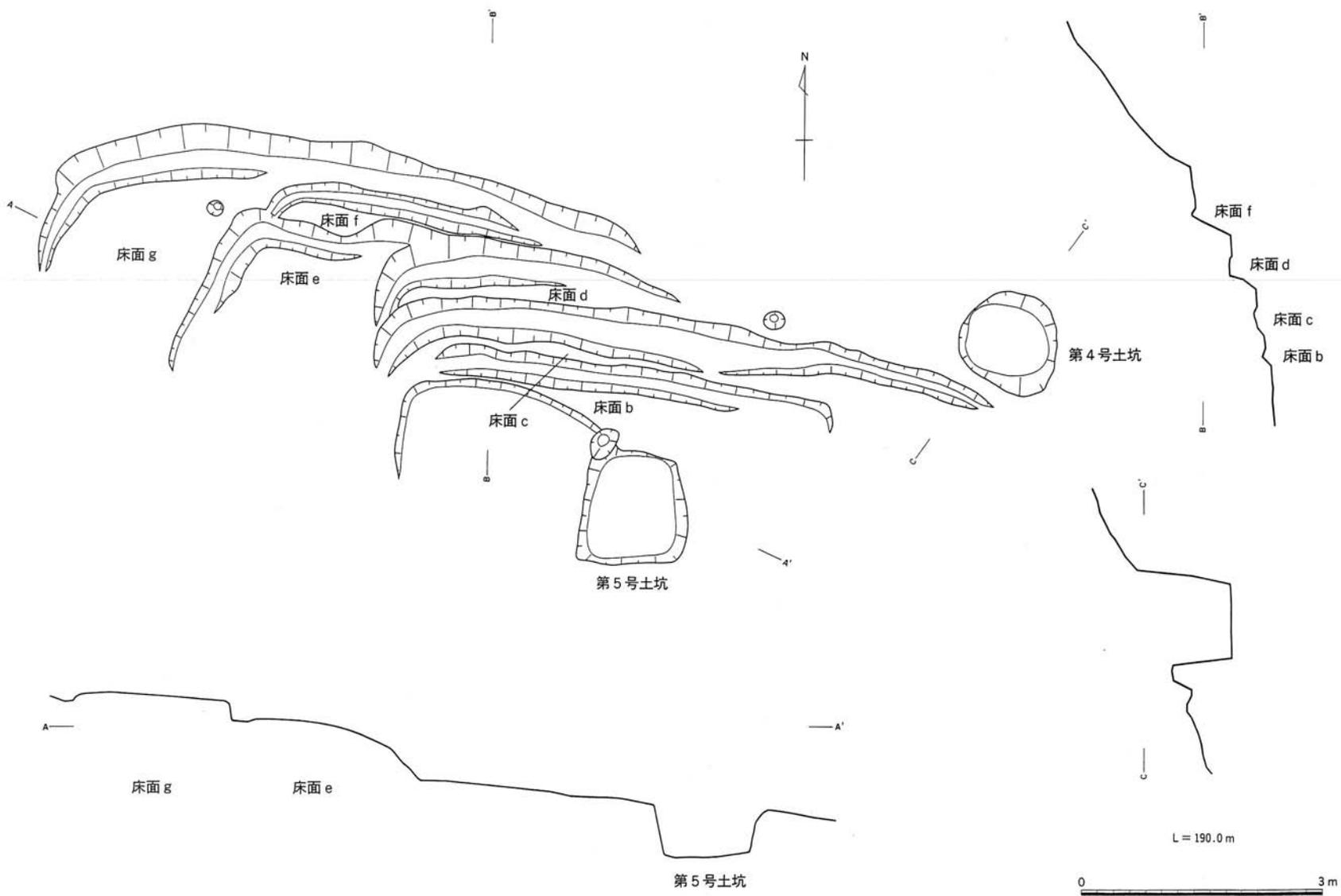
第 22 图 第 17 号住居跡実測図



第 23 图 第 18 号住居跡実測图



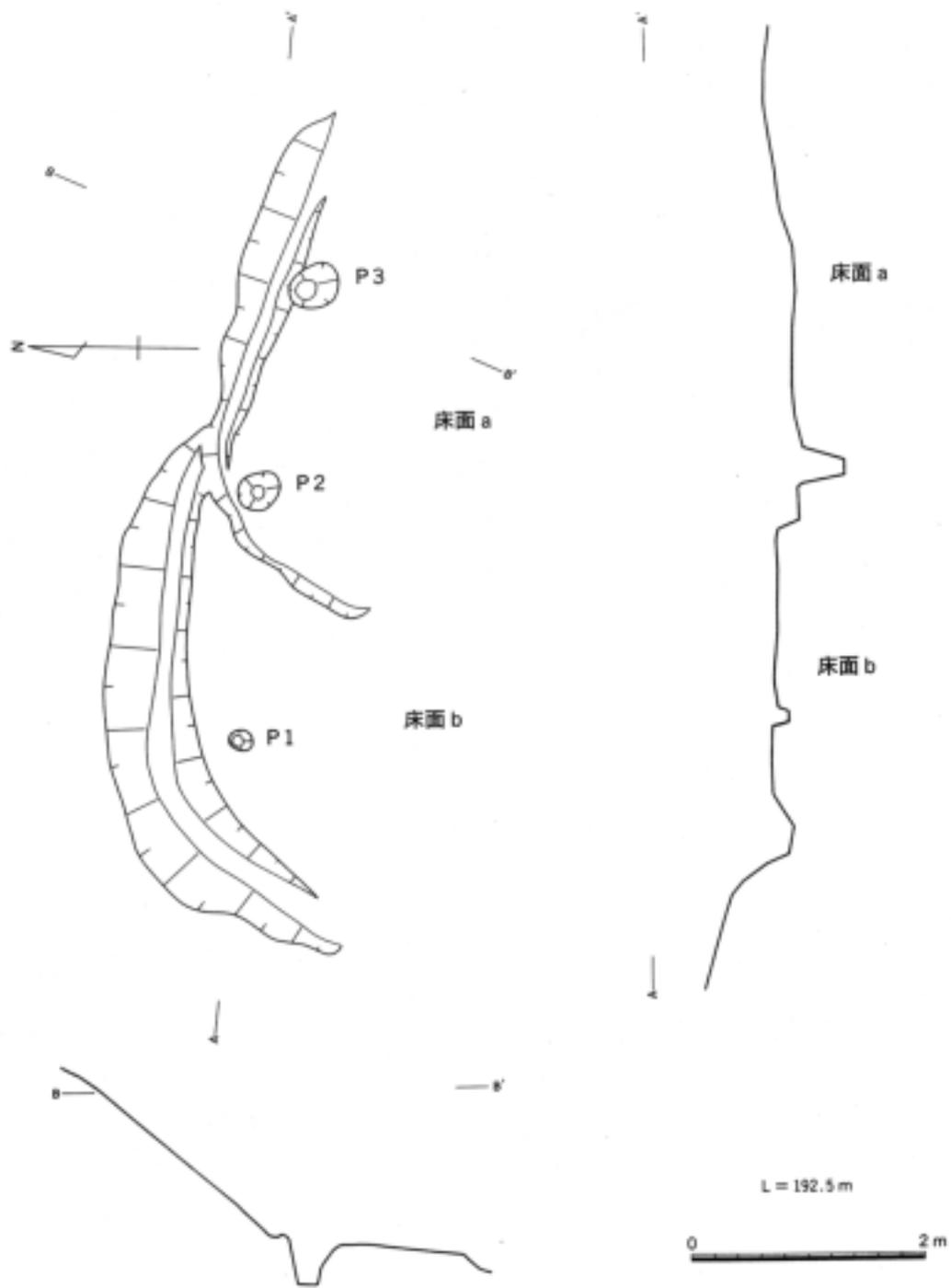
第 24 图 第 19 号住居跡实测图



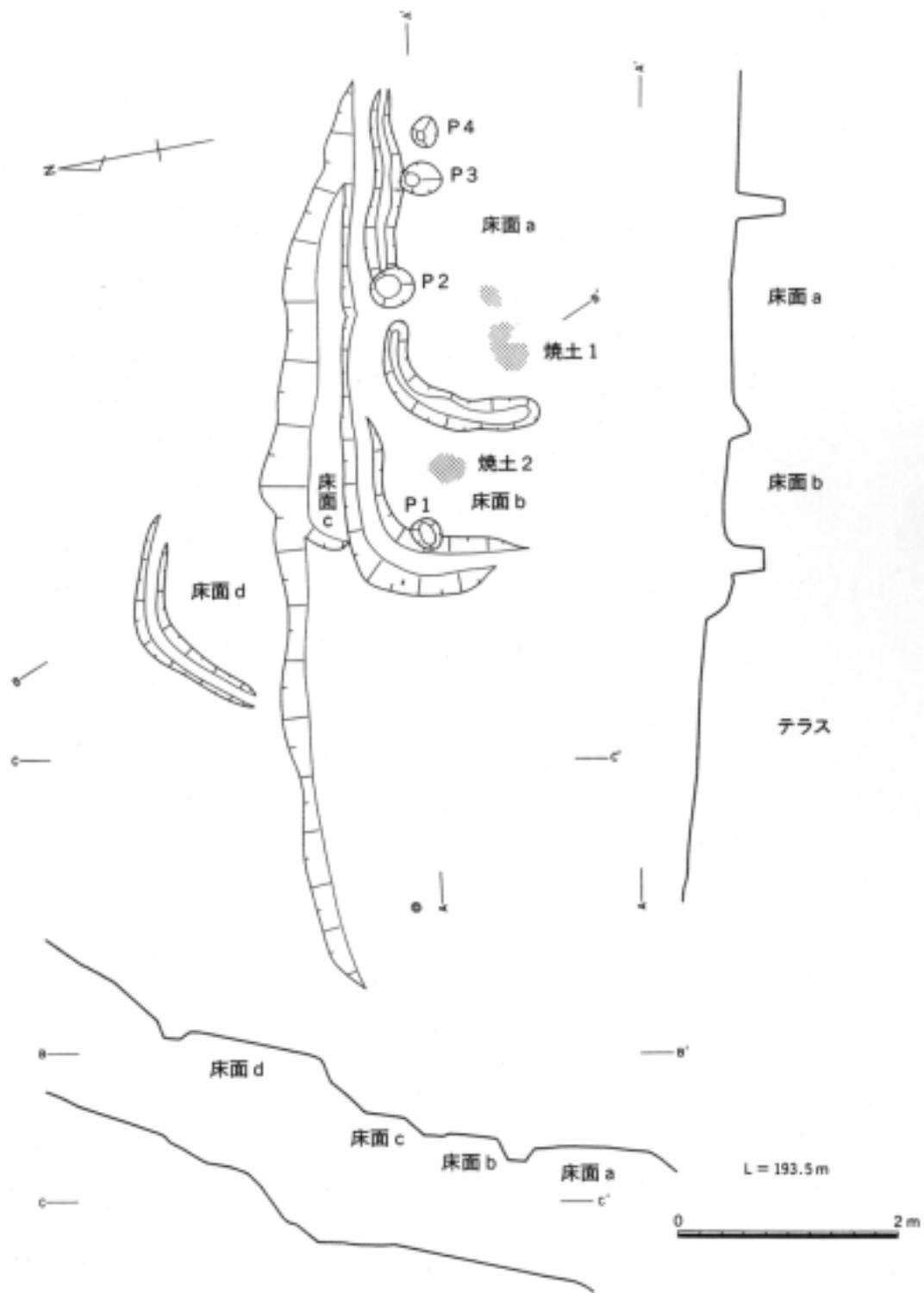
L = 190.0 m

0 3 m

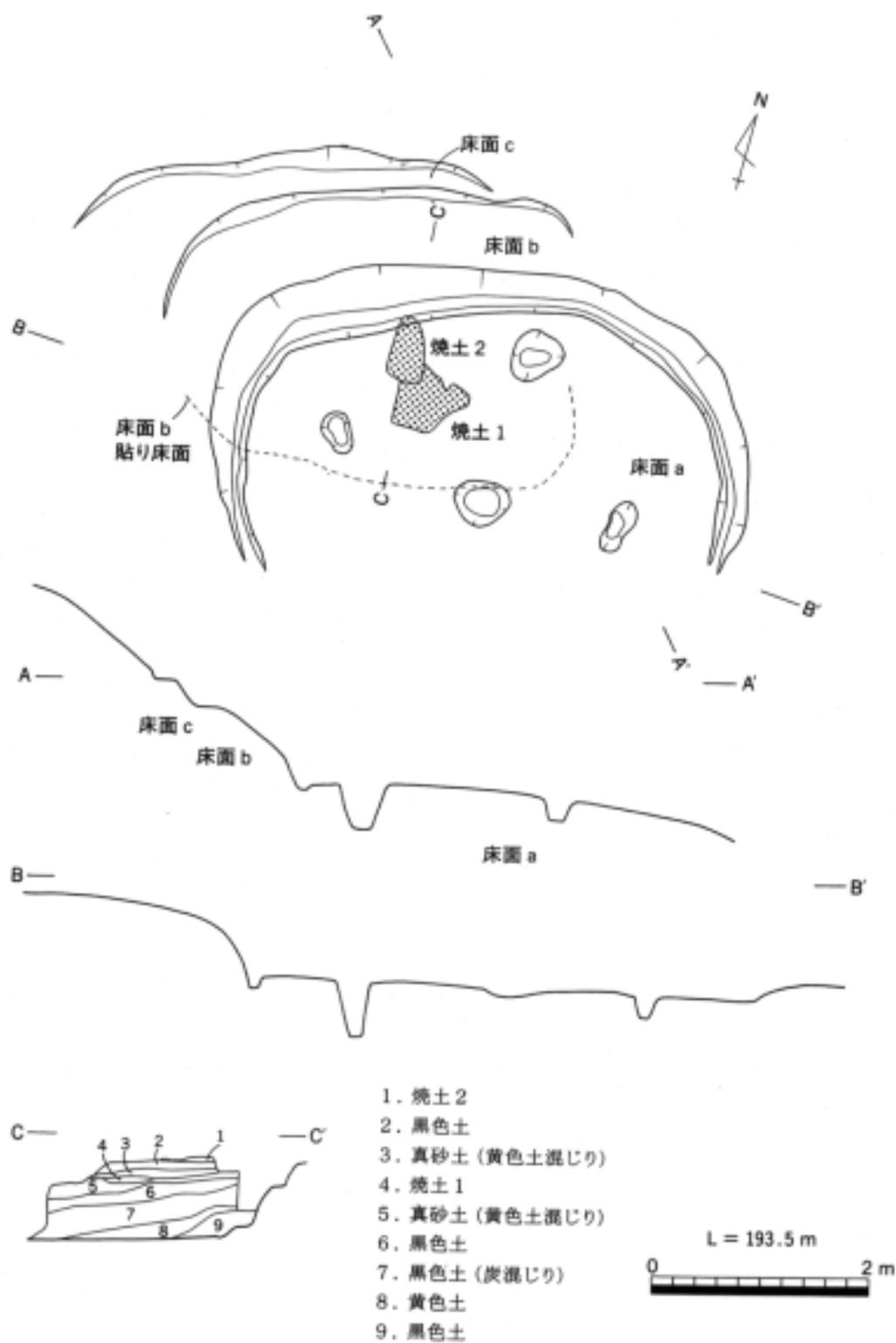
第 25 图 第 20 号住居跡及び第 4 号・第 5 号土坑実測図



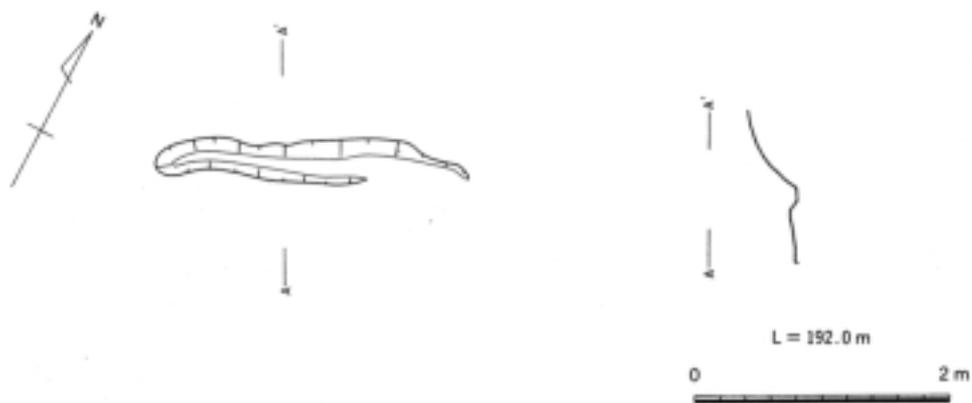
第 26 图 第 21 号住居跡実測図



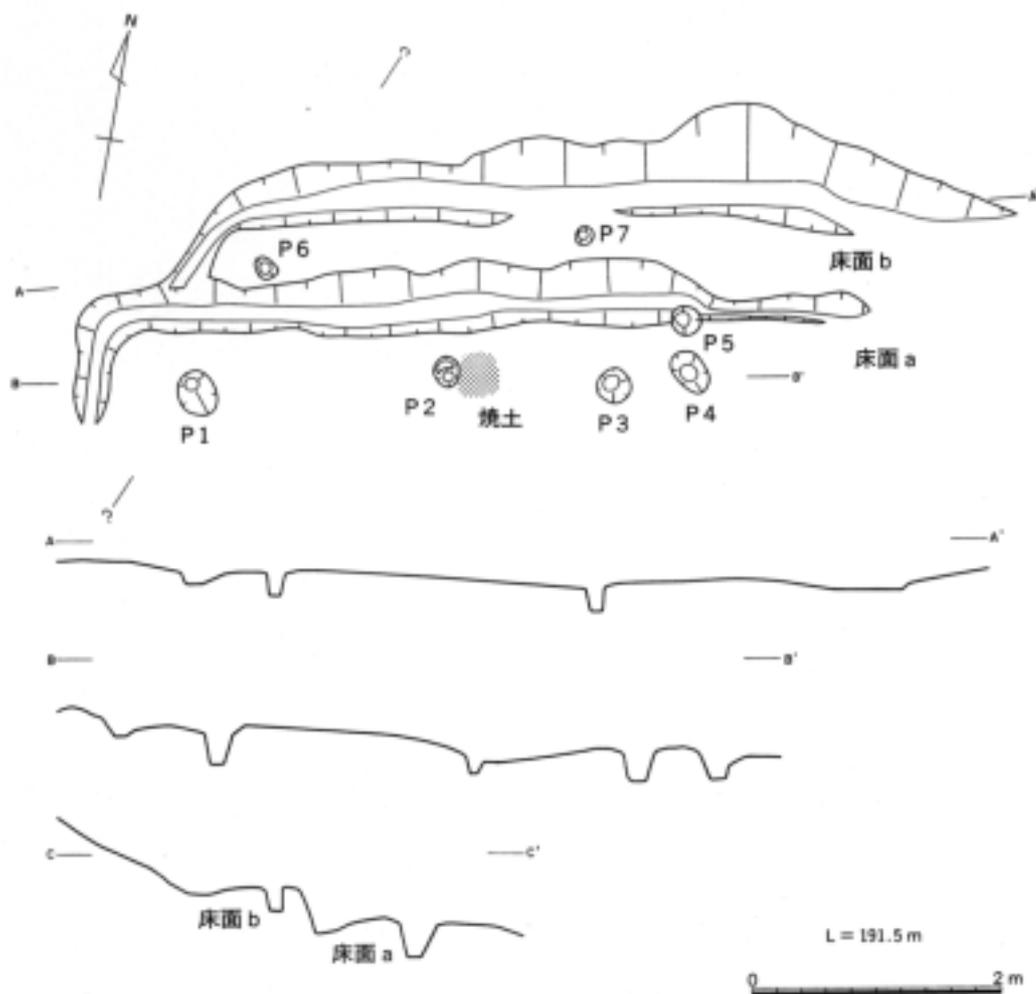
第 27 図 第 22 号住居跡実測図



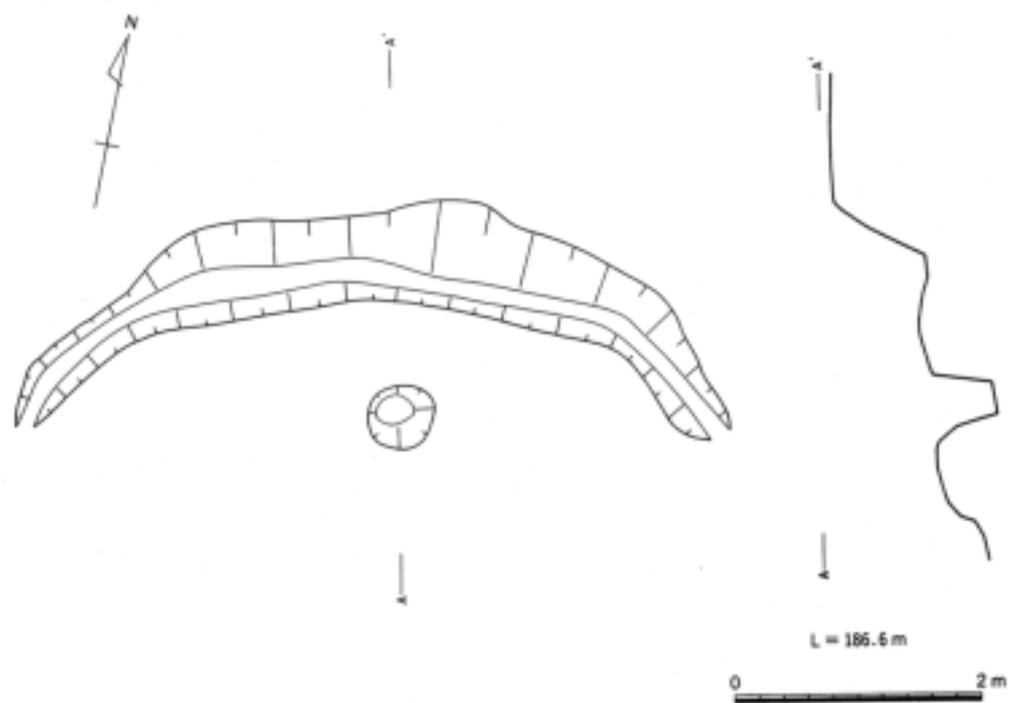
第28図 第23号住居跡実測図



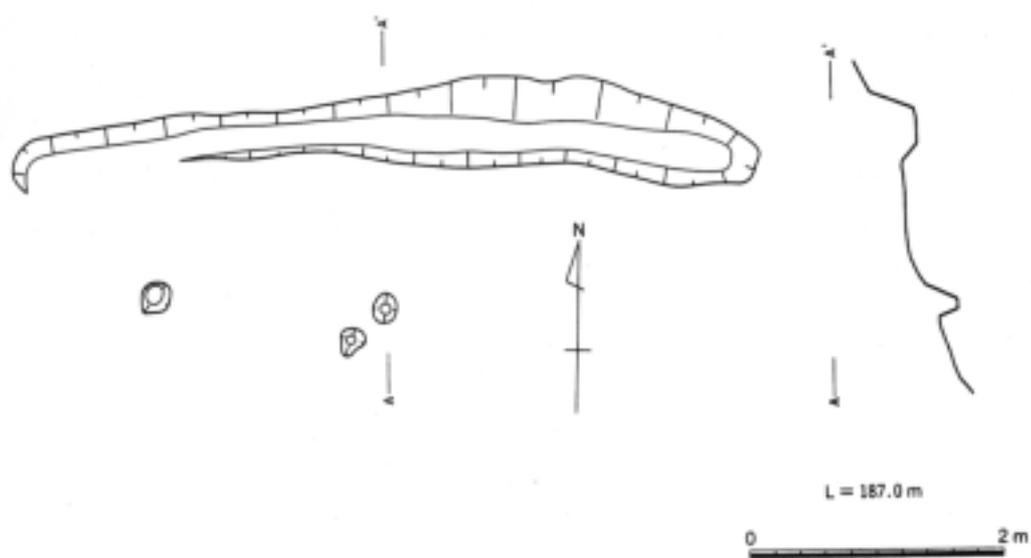
第 29 图 第 6 号住居跡状遺構実測図



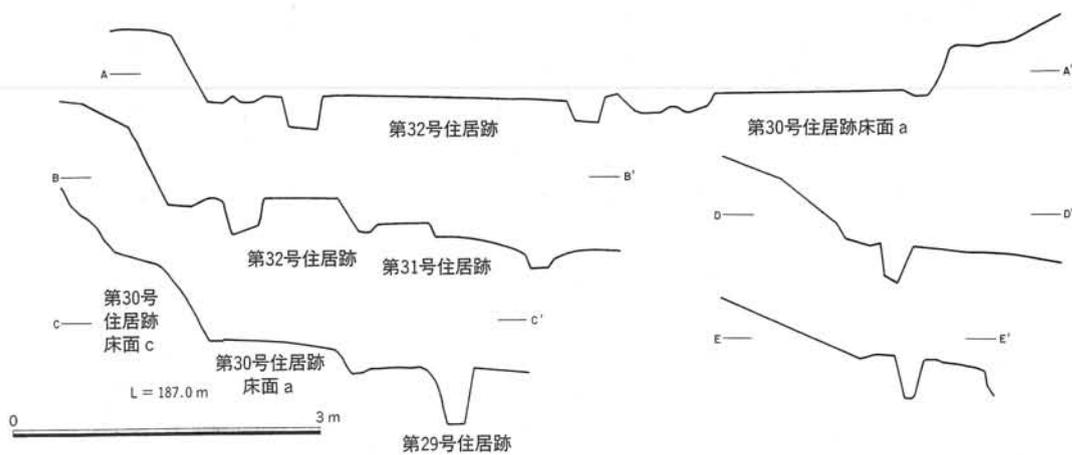
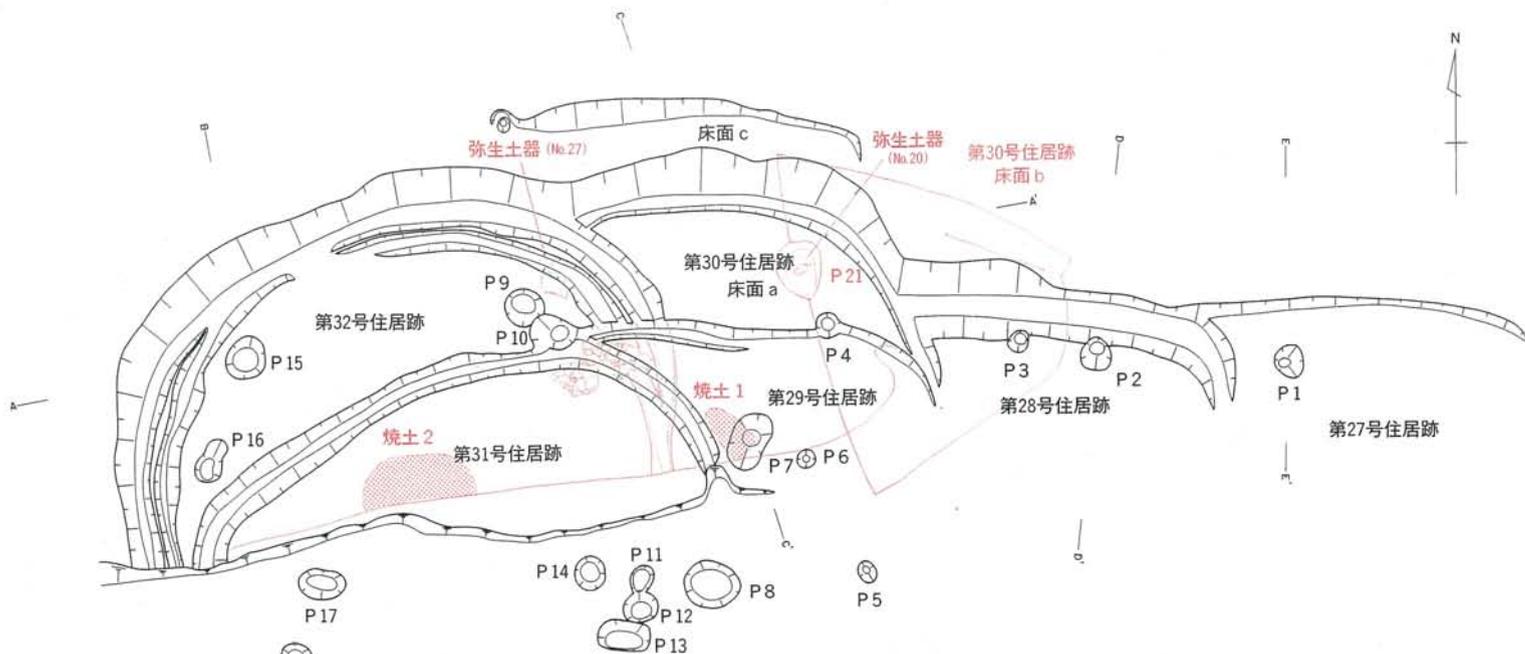
第 30 图 第 24 号住居跡実測図



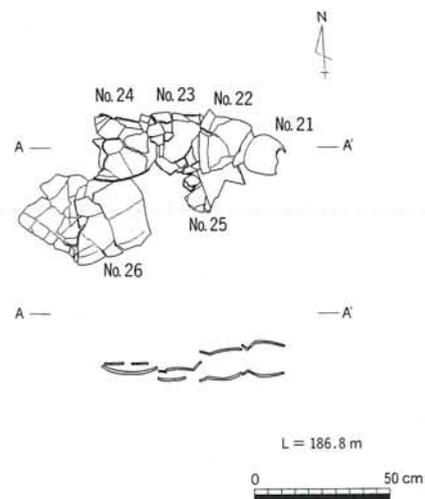
第 31 图 第 25 号住居跡実測図



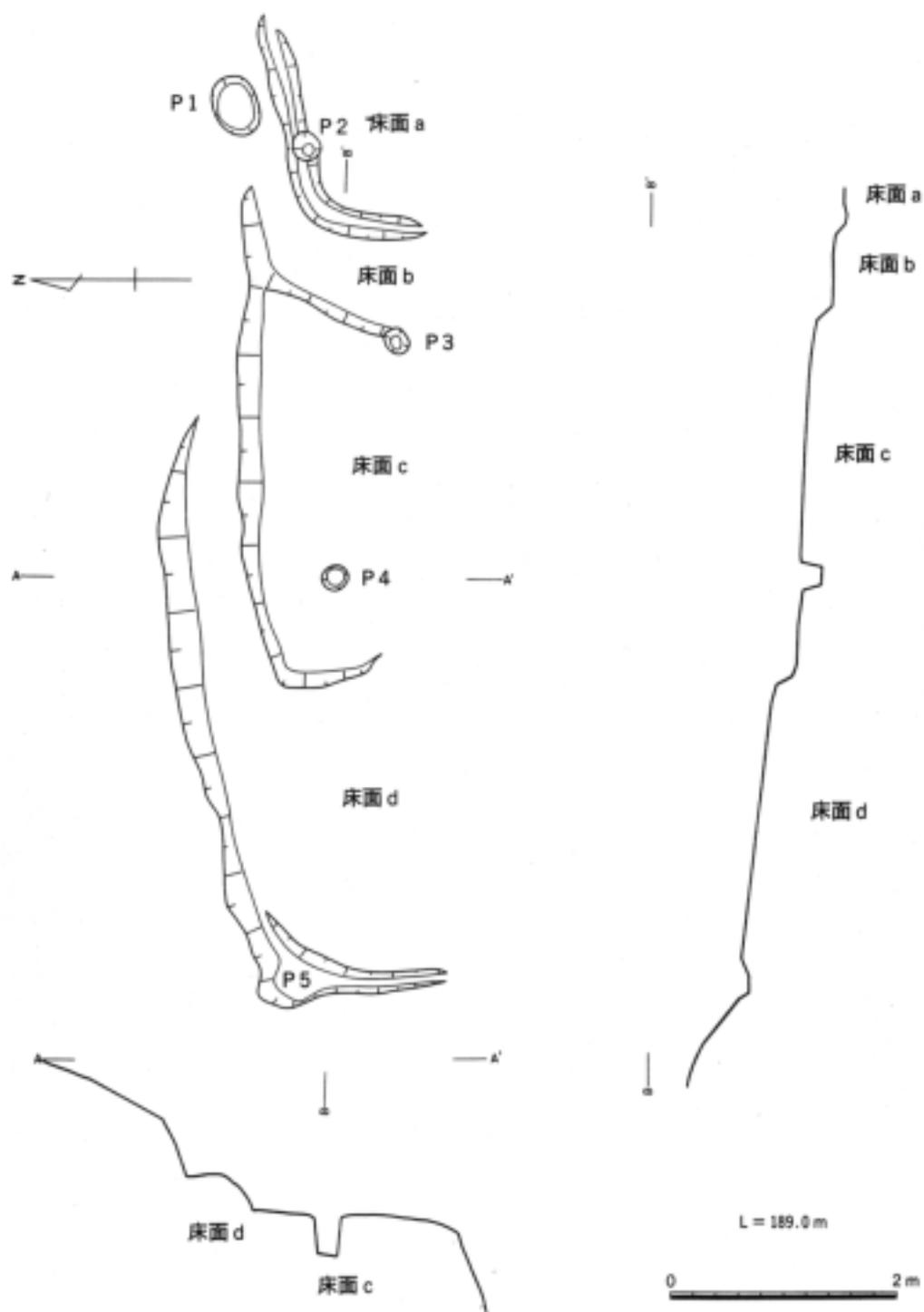
第 32 图 第 26 号住居跡実測図



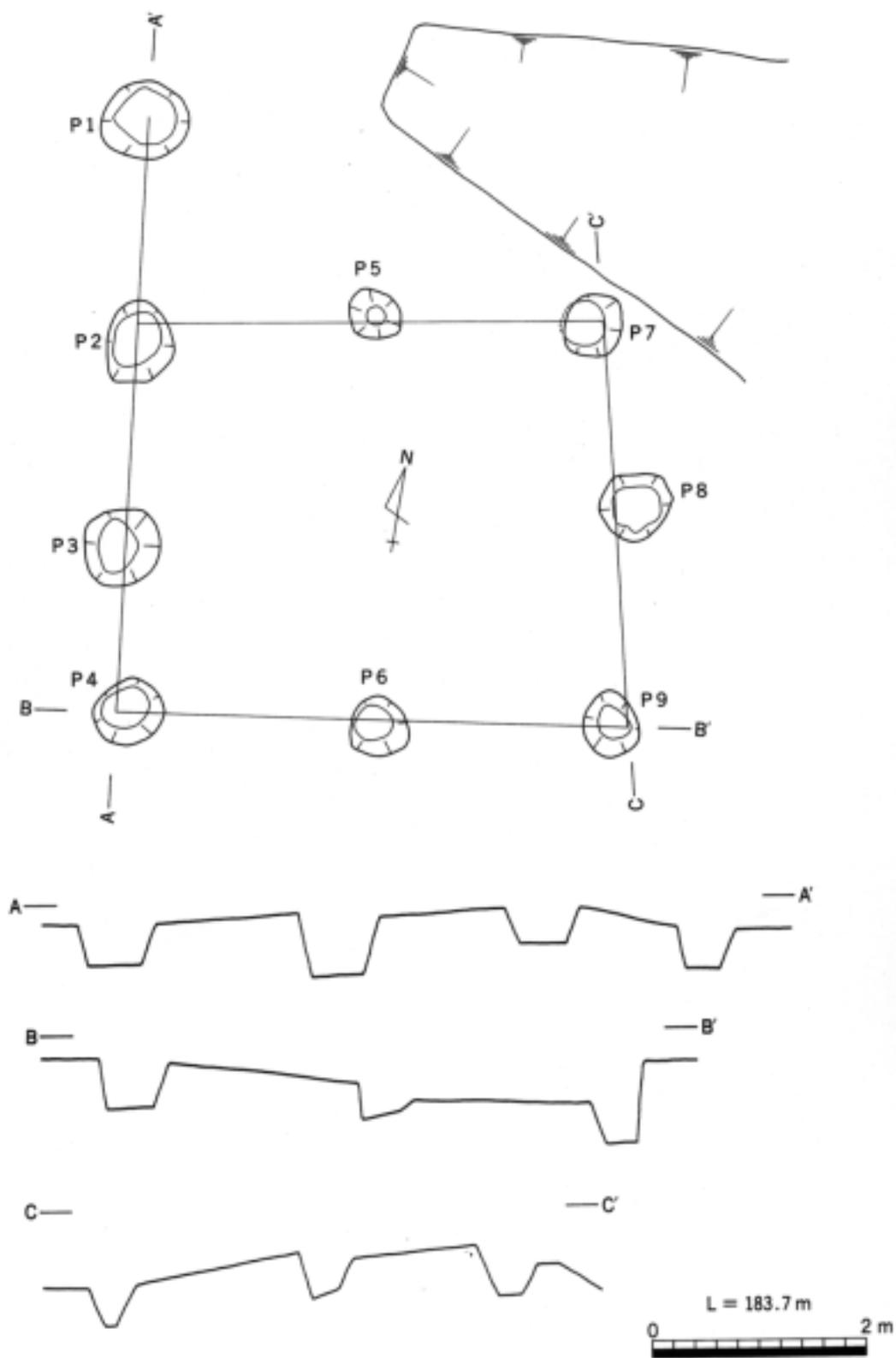
第 33 图 第 27 号~第 32 号住居跡実测图



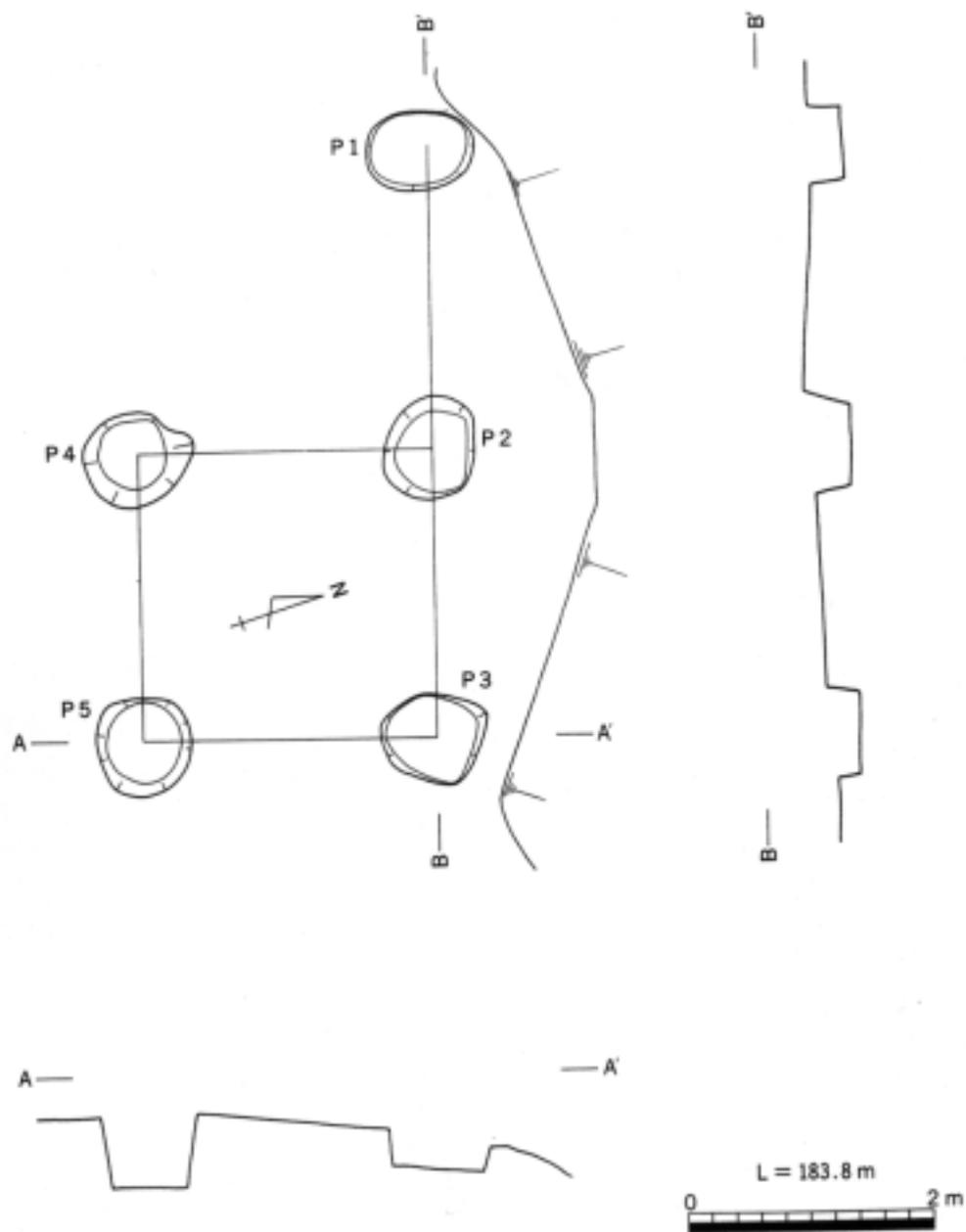
第 34 图 第 32 号住居跡内出土土器实测图



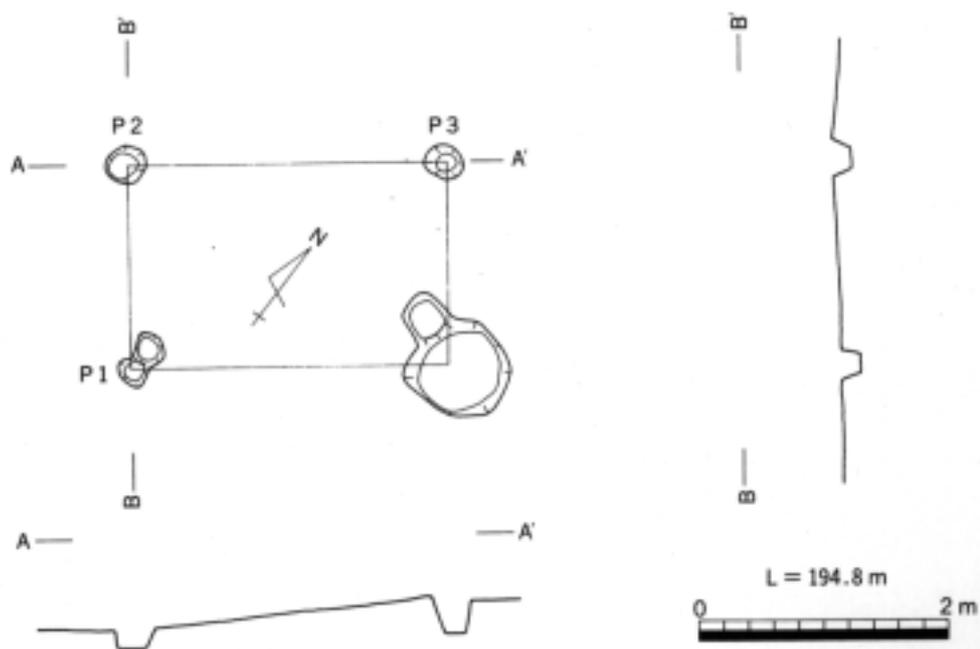
第 35 图 第 33 号住居跡実測图



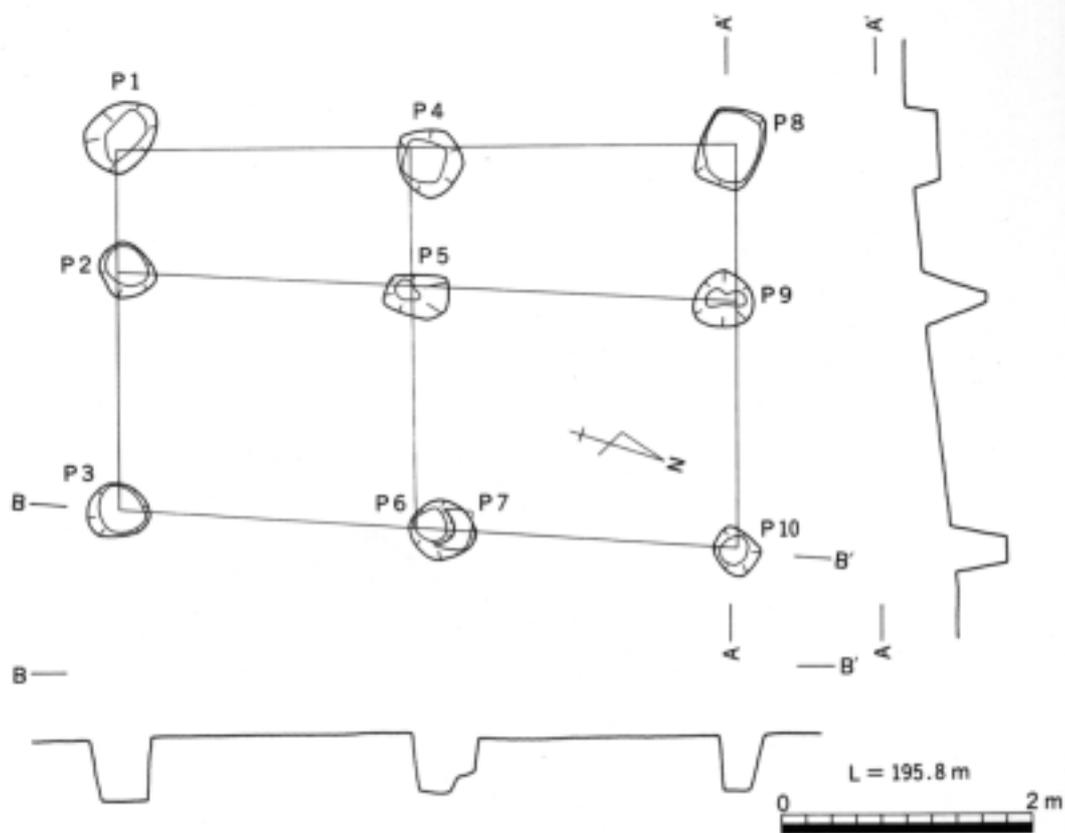
第 36 图 第 1 号掘立柱建物跡実測图



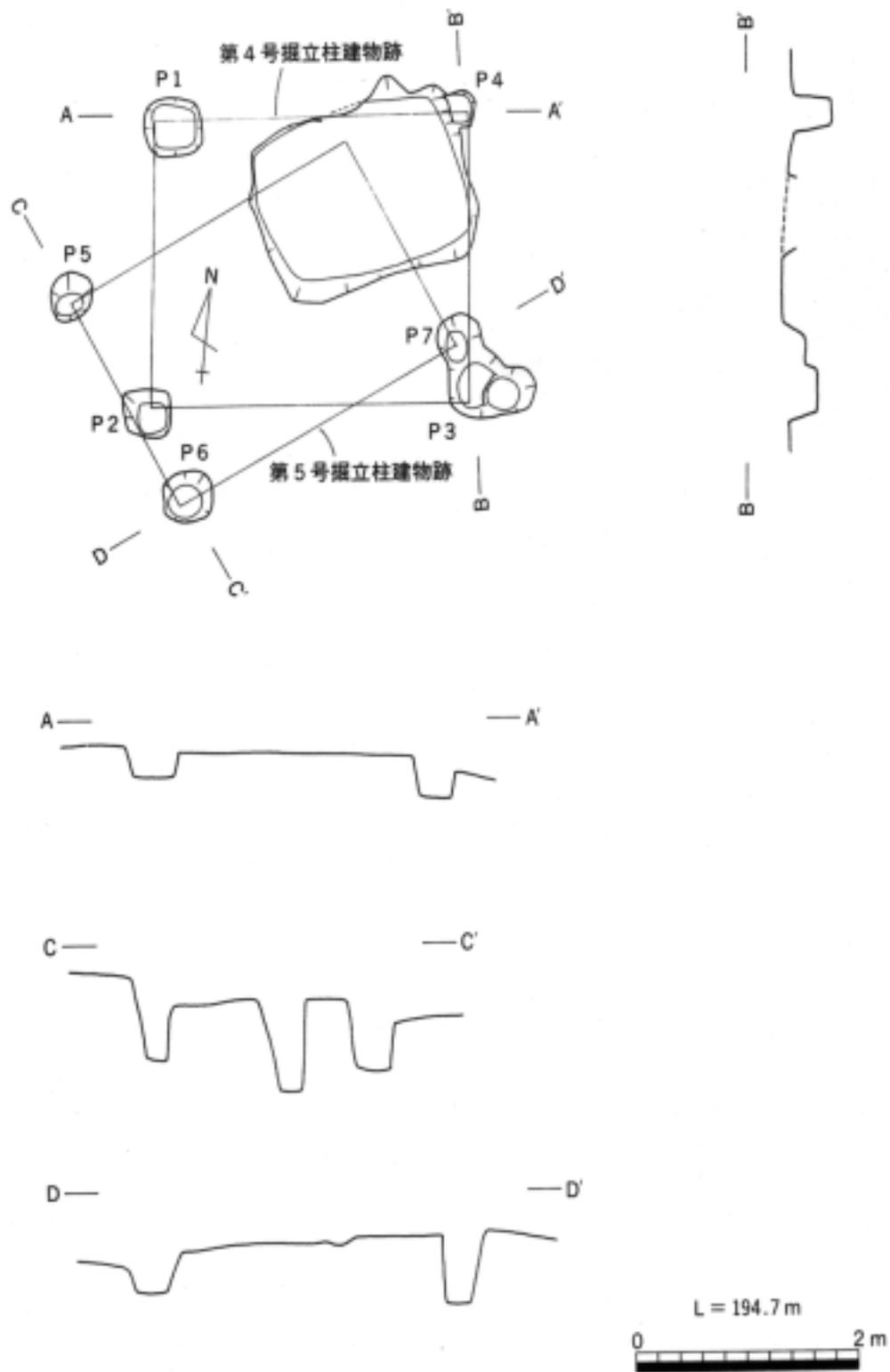
第 37 图 第 2 号掘立柱建物跡平面図



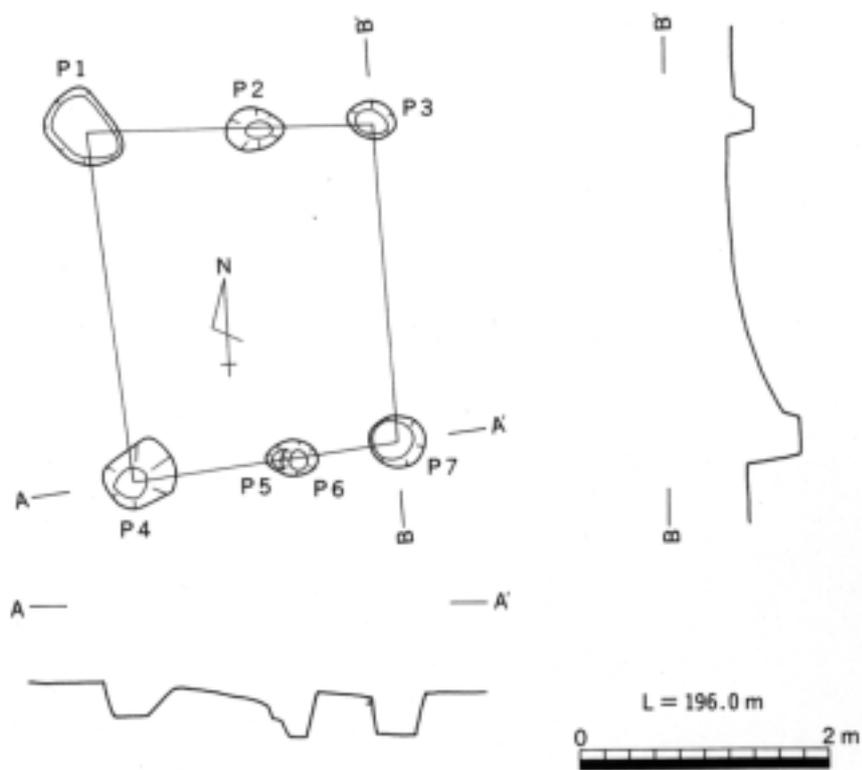
第 38 图 第 3 号独立柱建物跡実測図



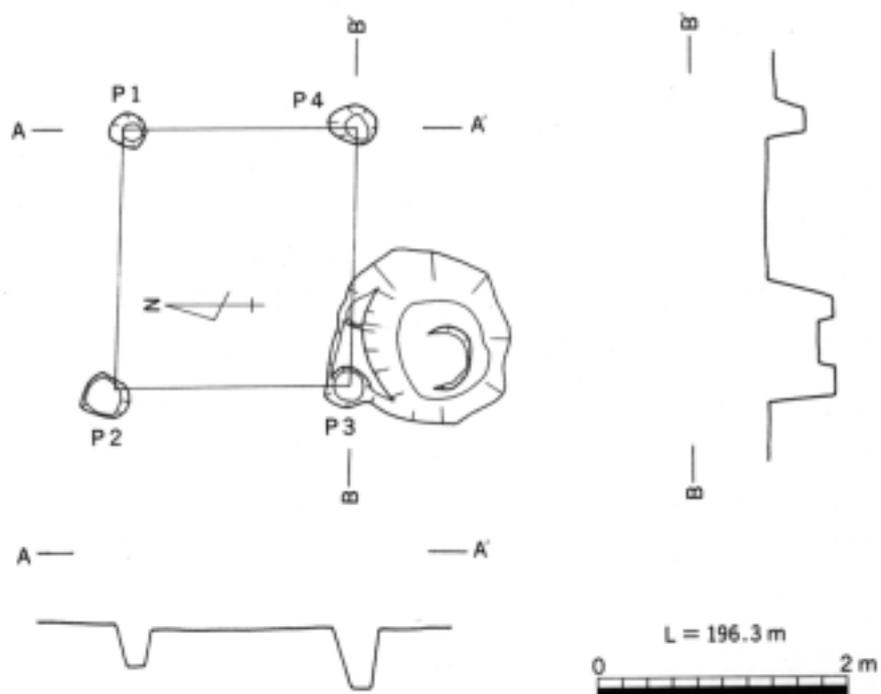
第 39 图 第 6 号独立柱建物跡実測図



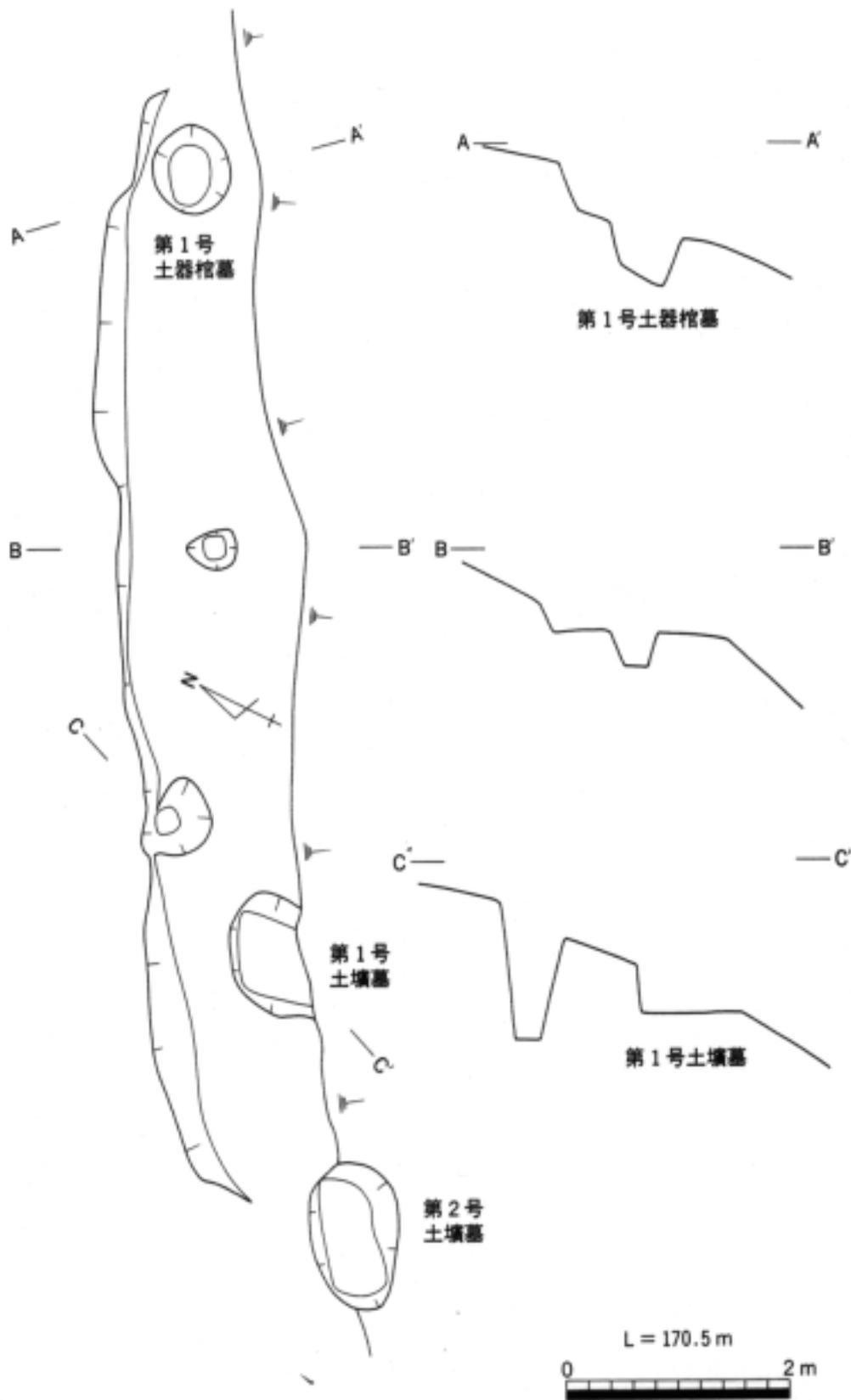
第40图 第4号·第5号掘立柱建物跡実測图



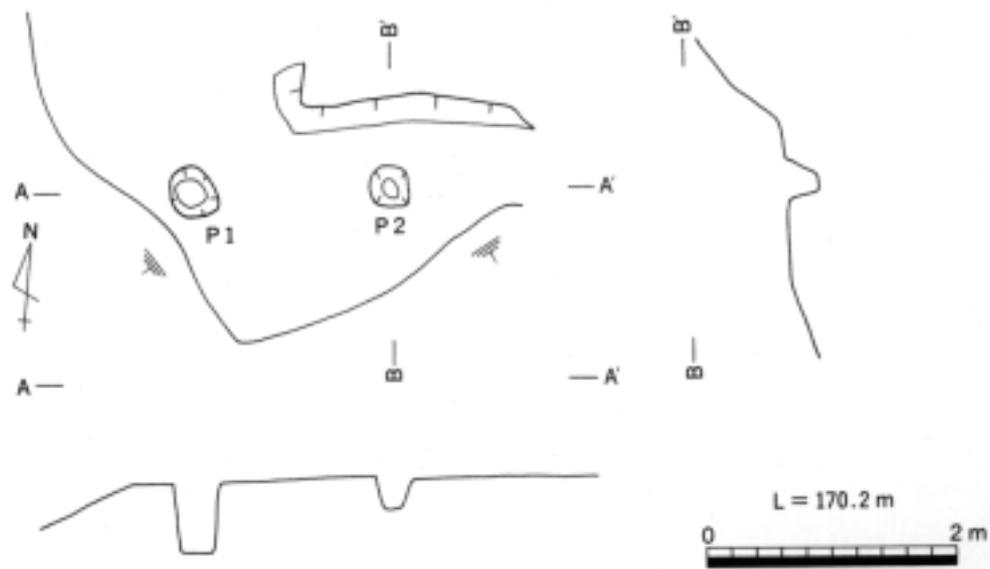
第 41 图 第 7 号掘立柱建物跡実測図



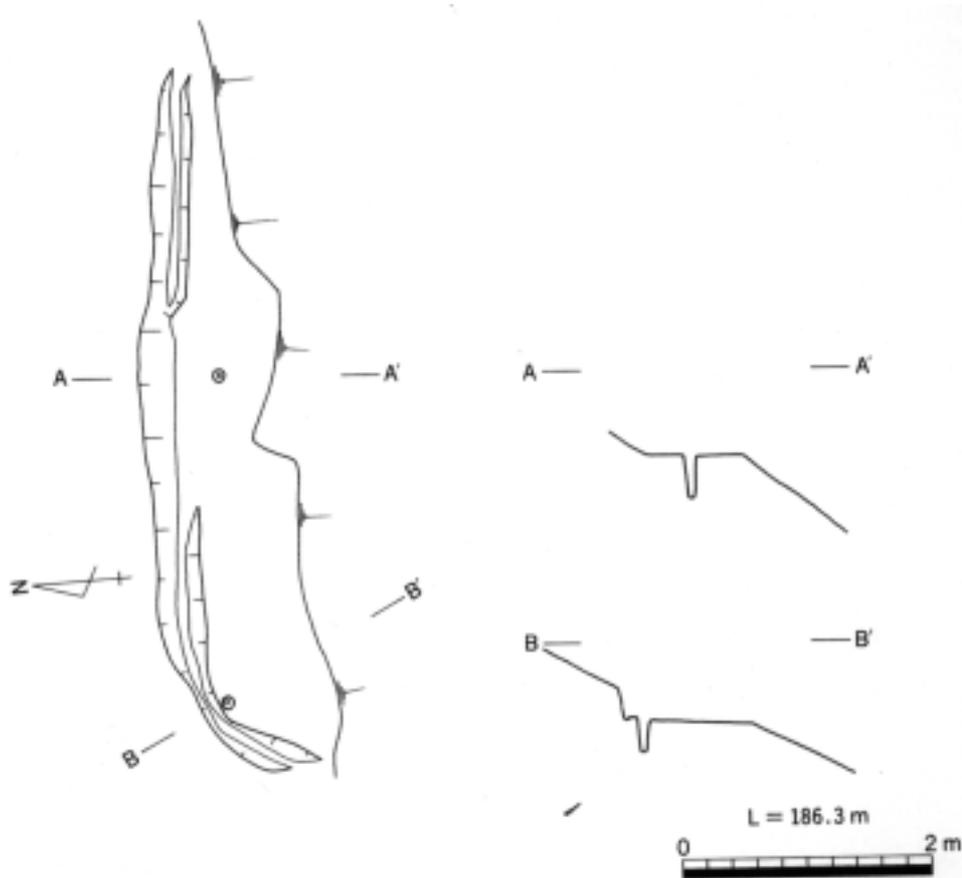
第 42 图 第 8 号掘立柱建物跡実測図



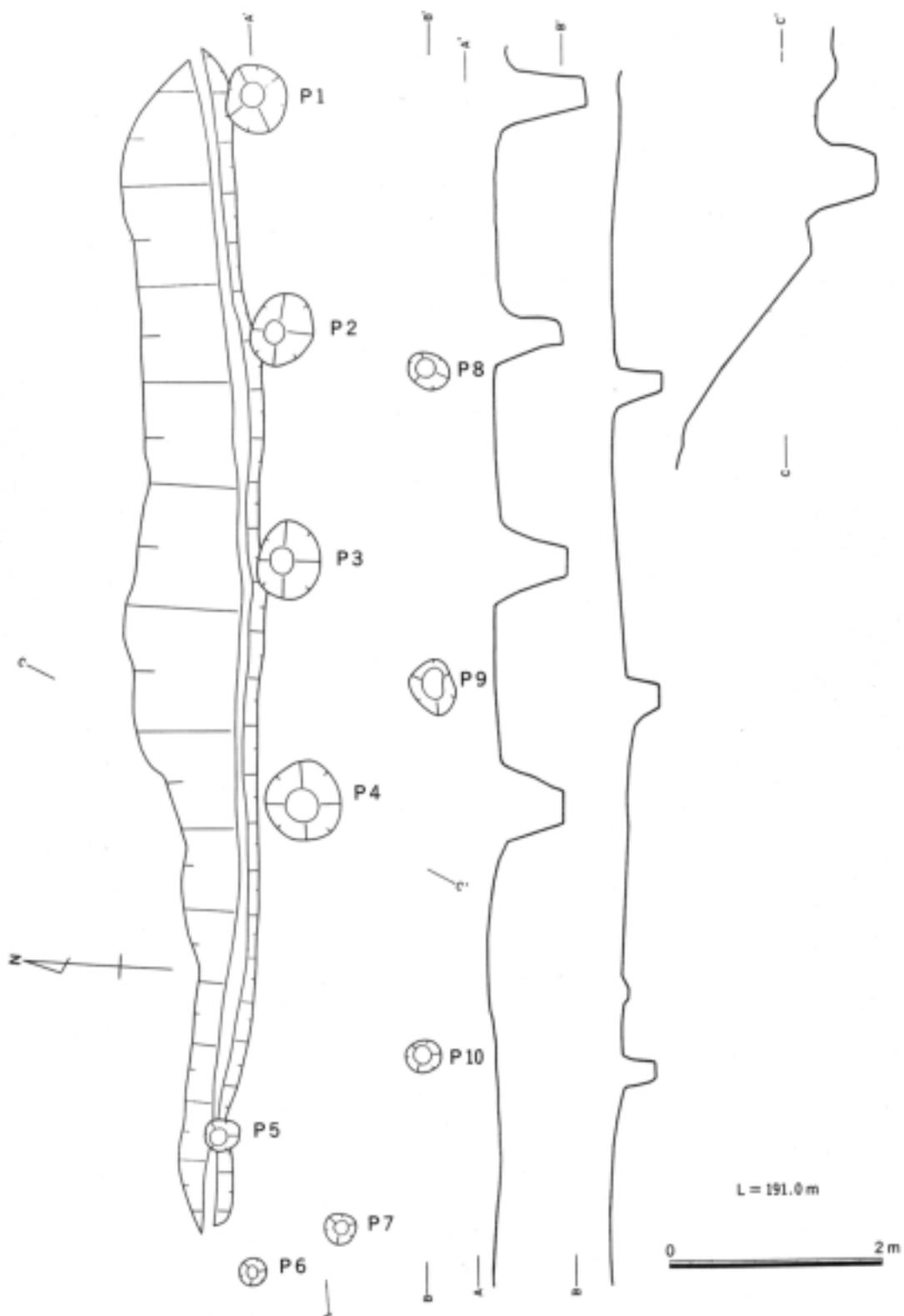
第43図 第1号テラス状遺構実測図



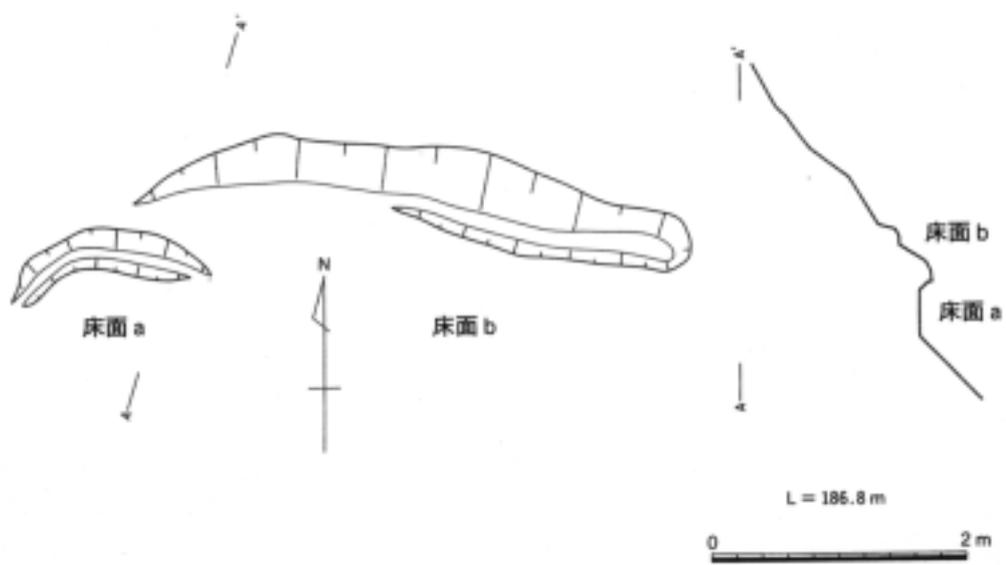
第44図 第3号テラス状遺構実測図



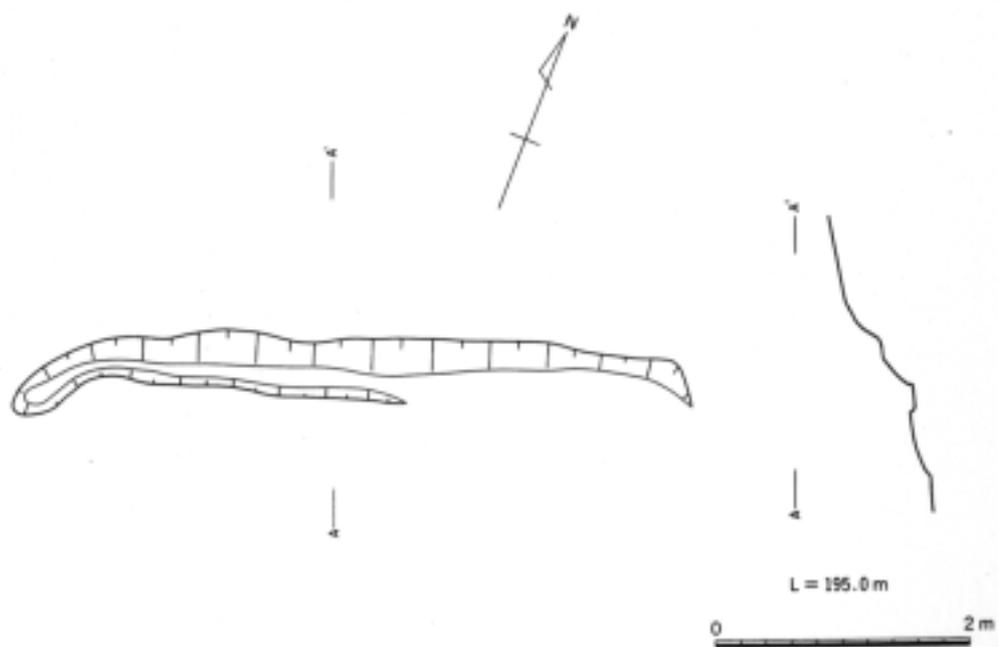
第45図 第1号住居跡状遺構実測図



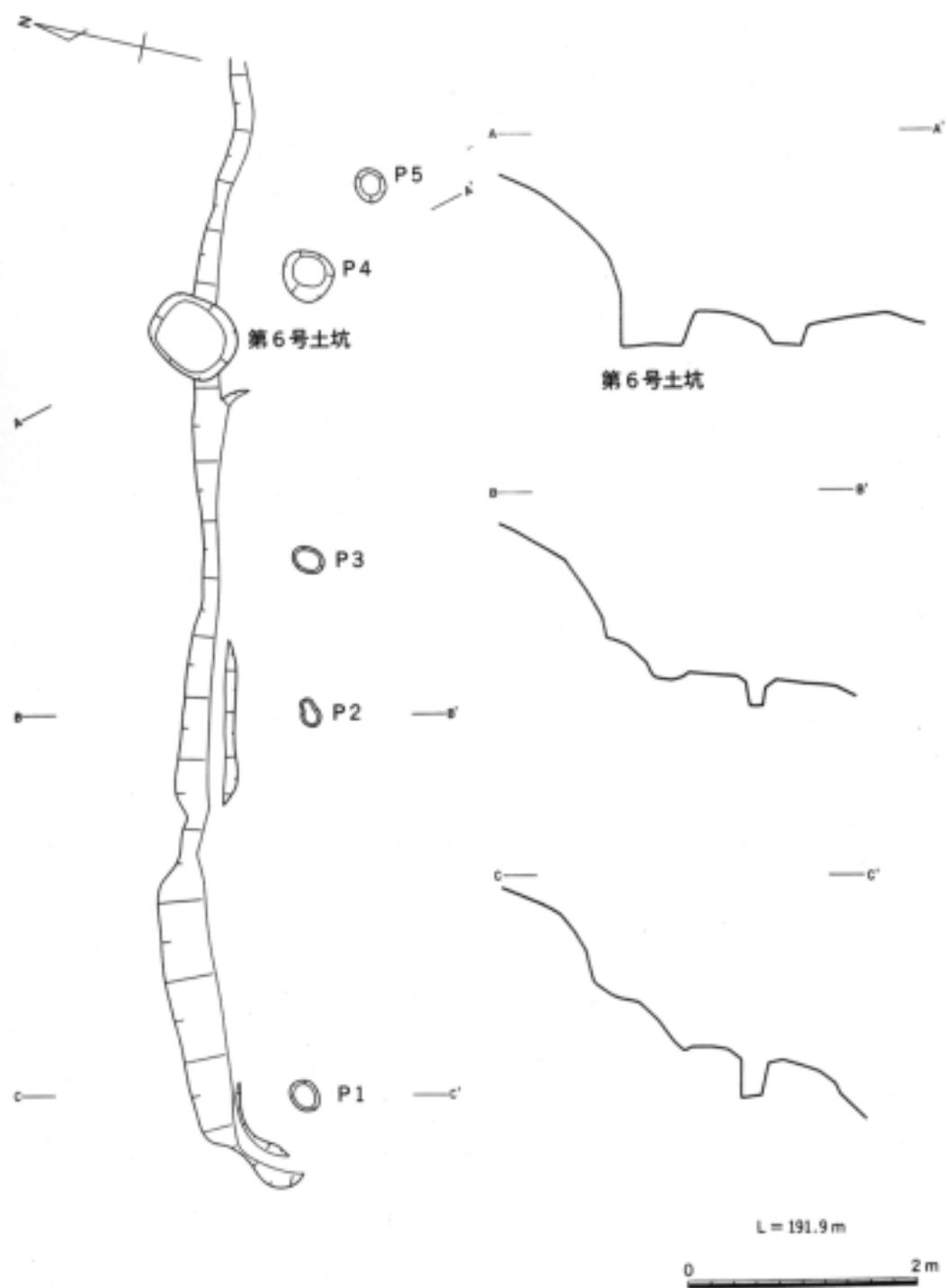
第46図 第4号テラス状遺構実測図



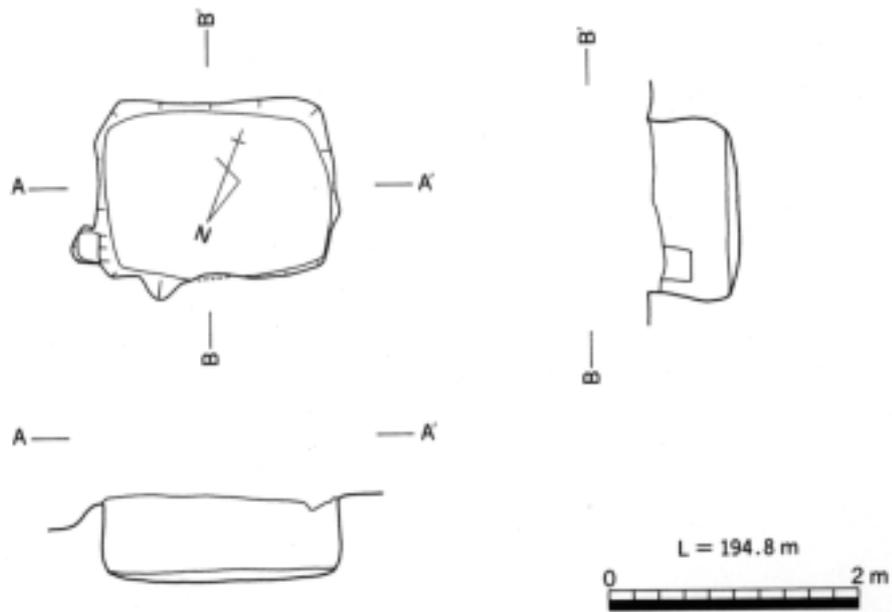
第 47 图 第 3 号住居跡状遺構実測図



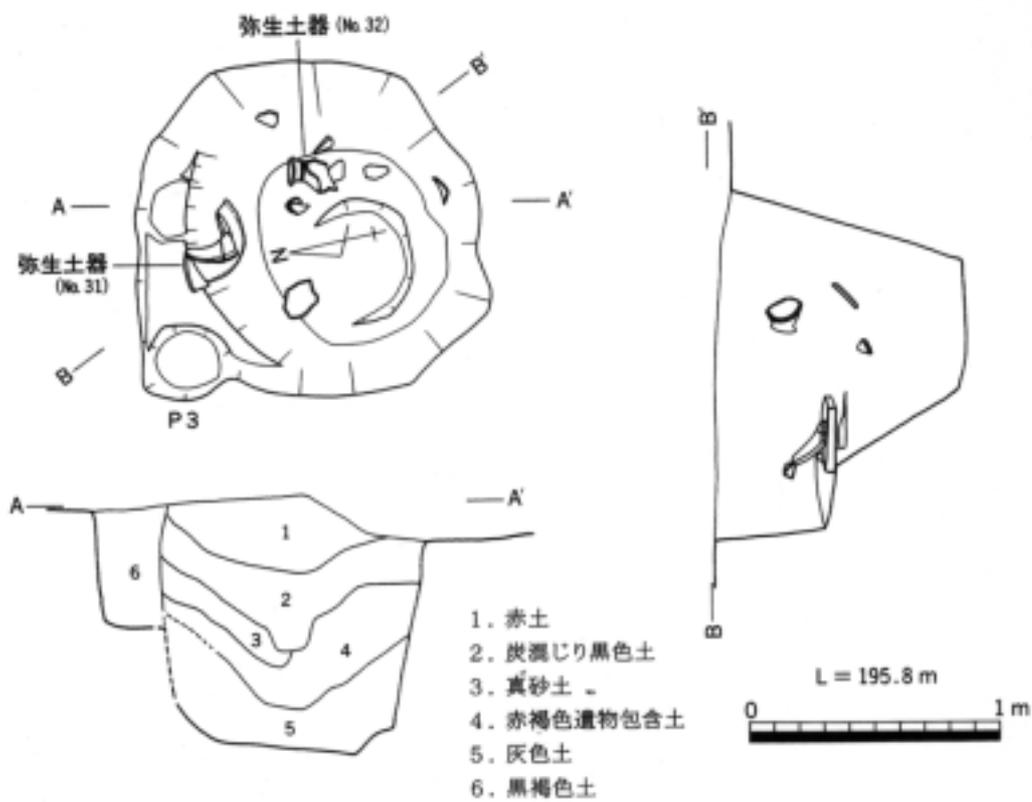
第 48 图 第 4 号住居跡状遺構実測図



第49图 第5号住居跡状遺構及び第6号土坑実測図

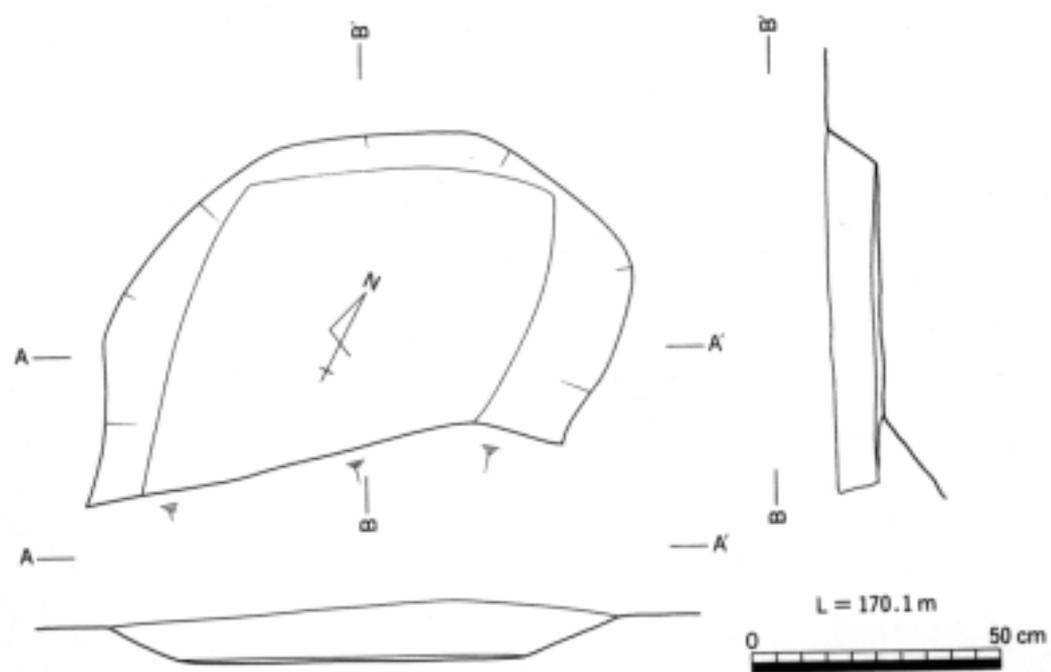


第 50 図 第 1 号土坑実測図

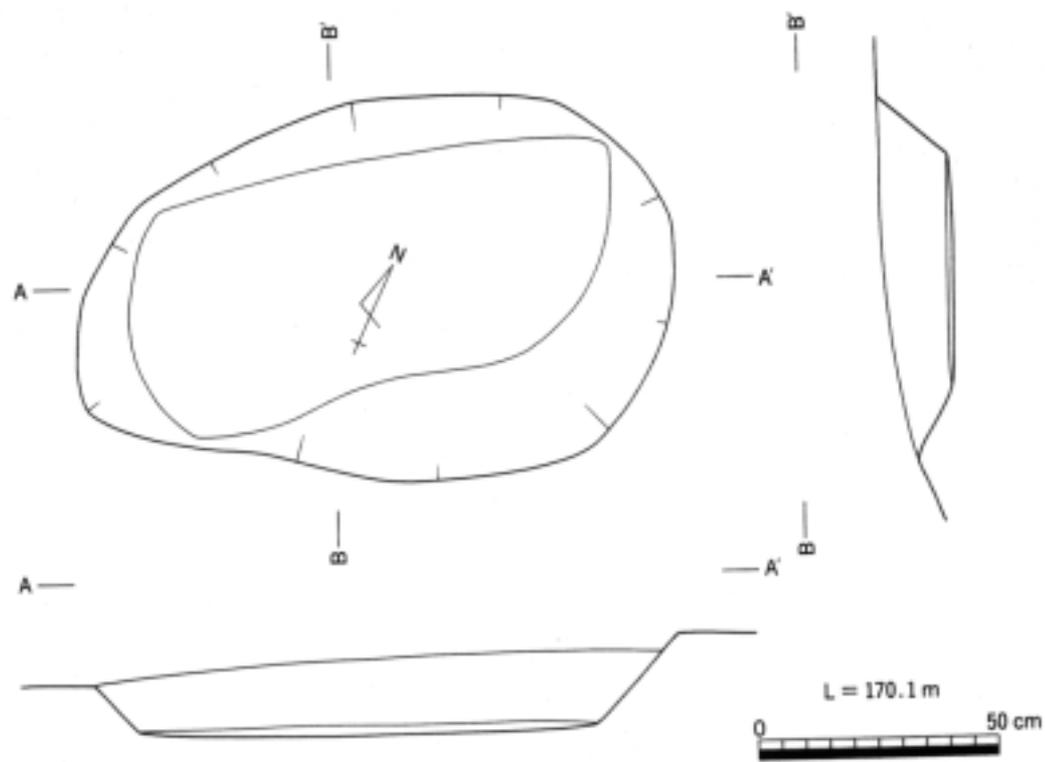


1. 赤土
2. 炭混じり黒色土
3. 真砂土
4. 赤褐色遺物包含土
5. 灰色土
6. 黒褐色土

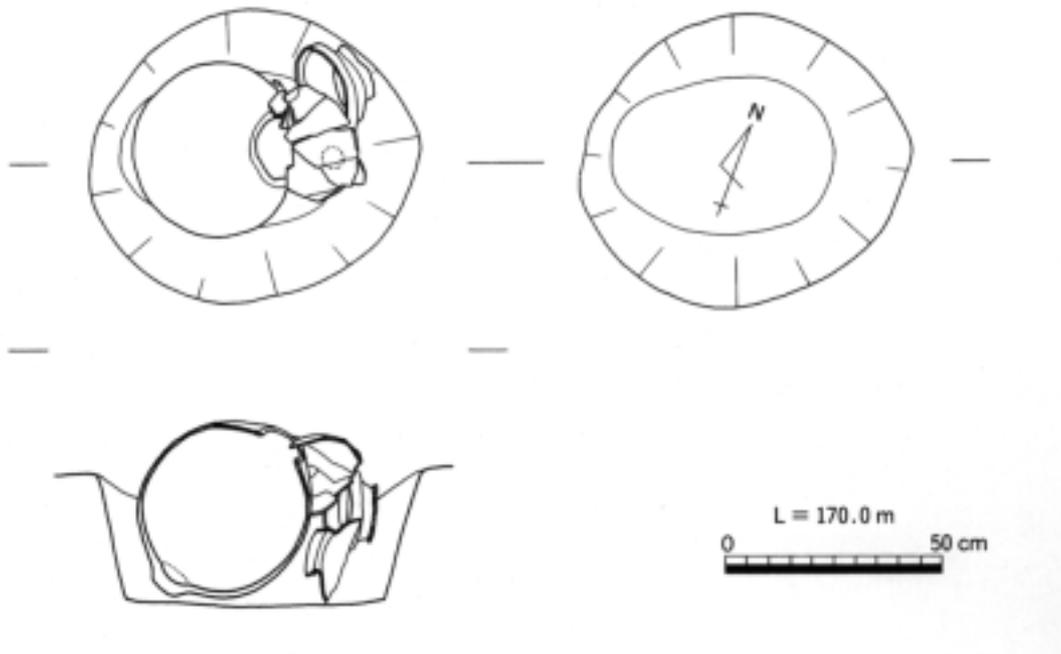
第 51 図 第 2 号土坑実測図



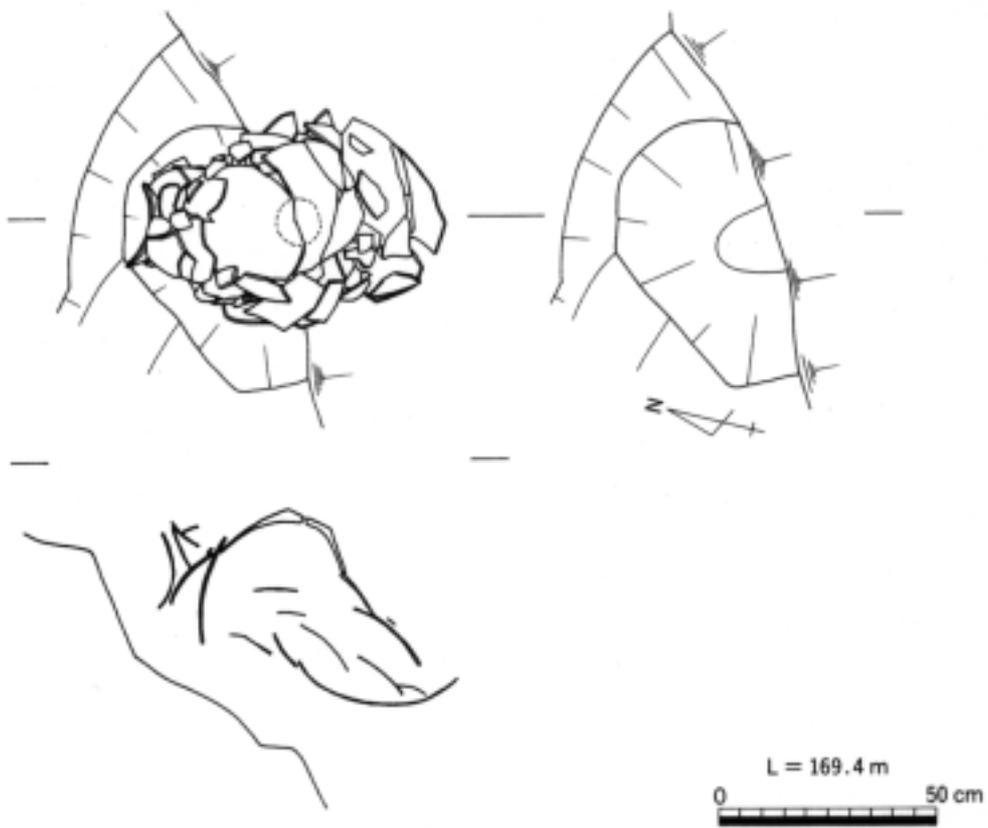
第 52 图 第 1 号土坑墓平面图



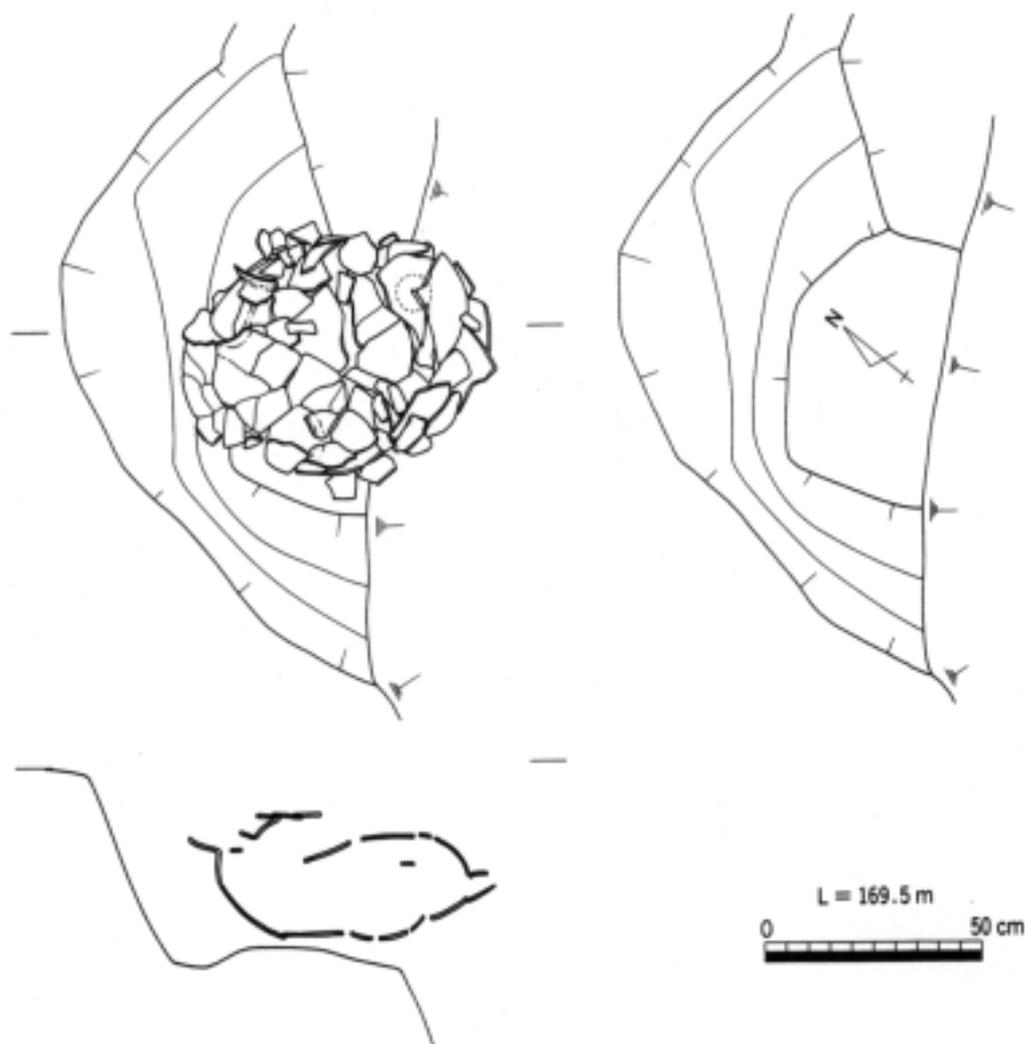
第 53 图 第 2 号土坑墓平面图



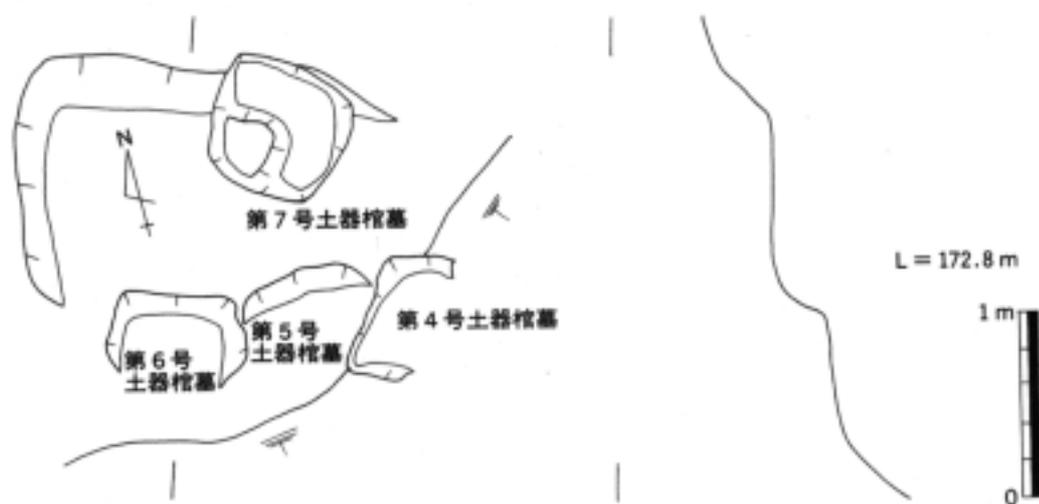
第54图 第1号土器棺墓实测图



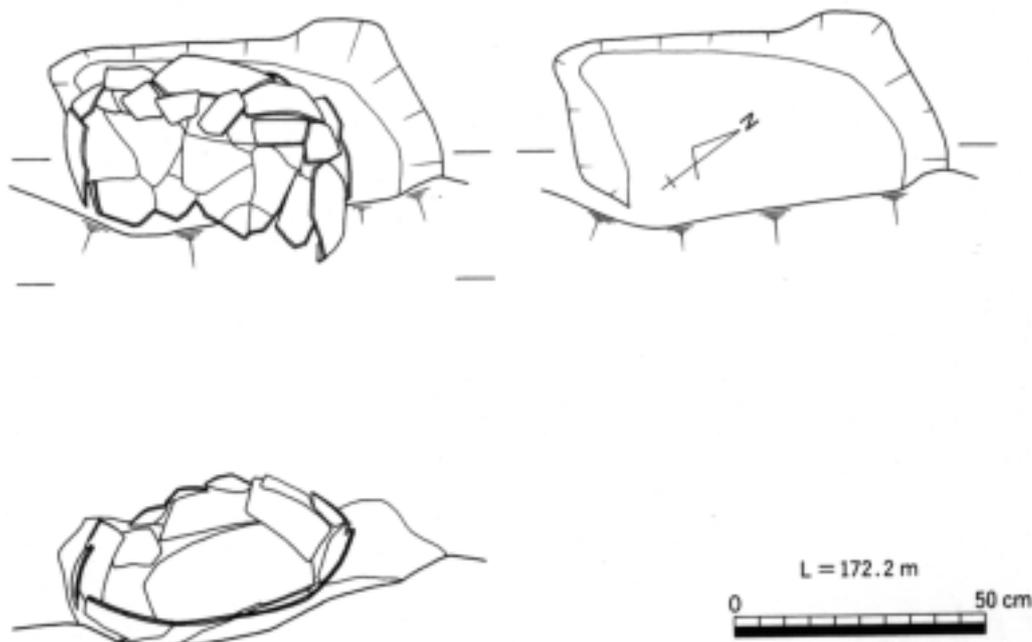
第55图 第2号土器棺墓实测图



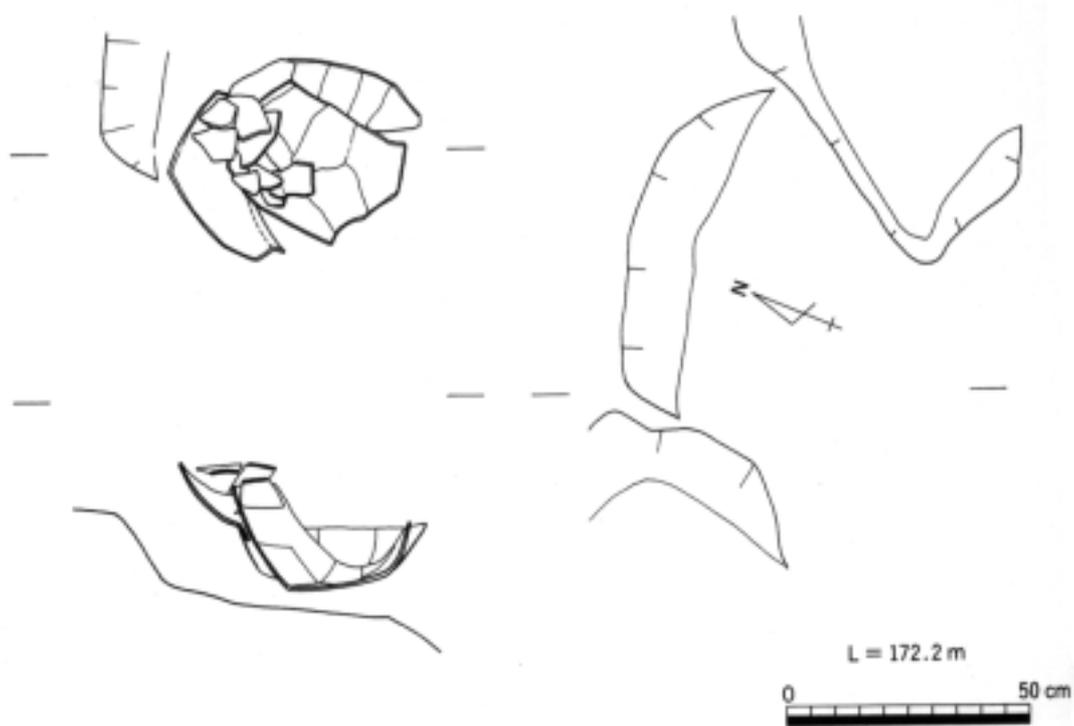
第56図 第3号土器棺基実測図



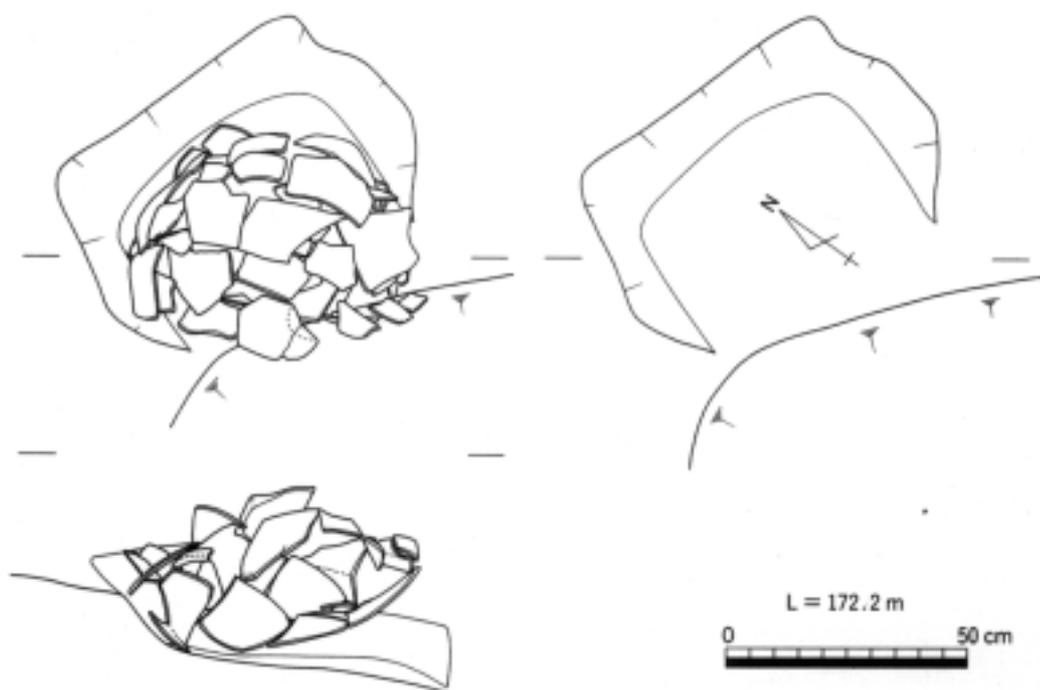
第57図 第2号テラス状遺構実測図



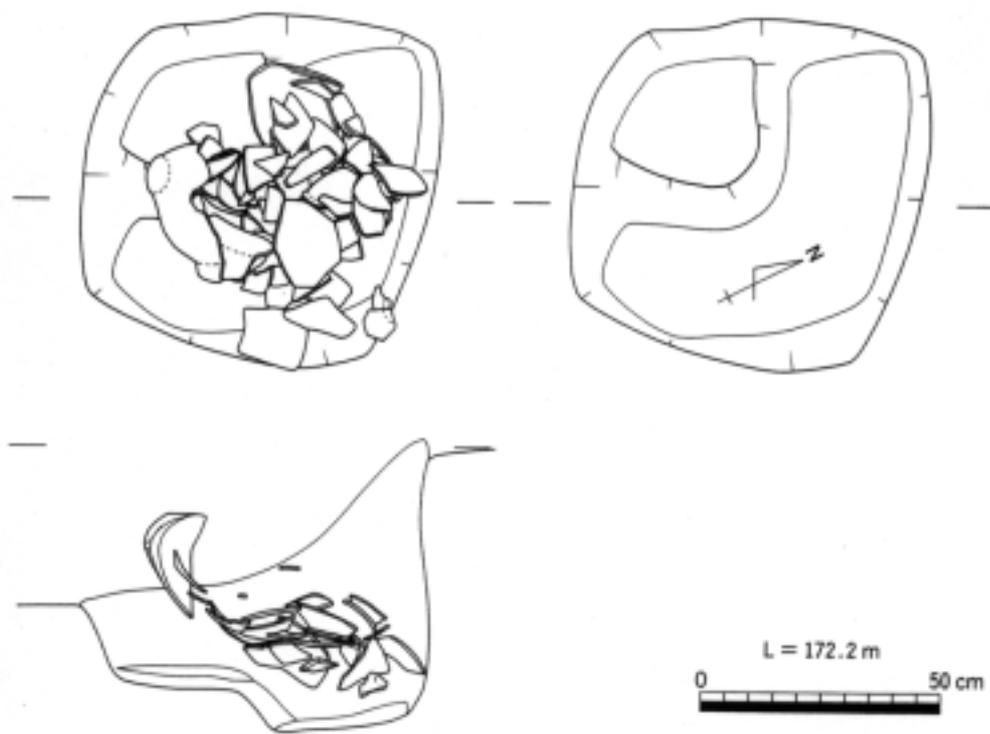
第 58 图 第 4 号土器棺墓实例图



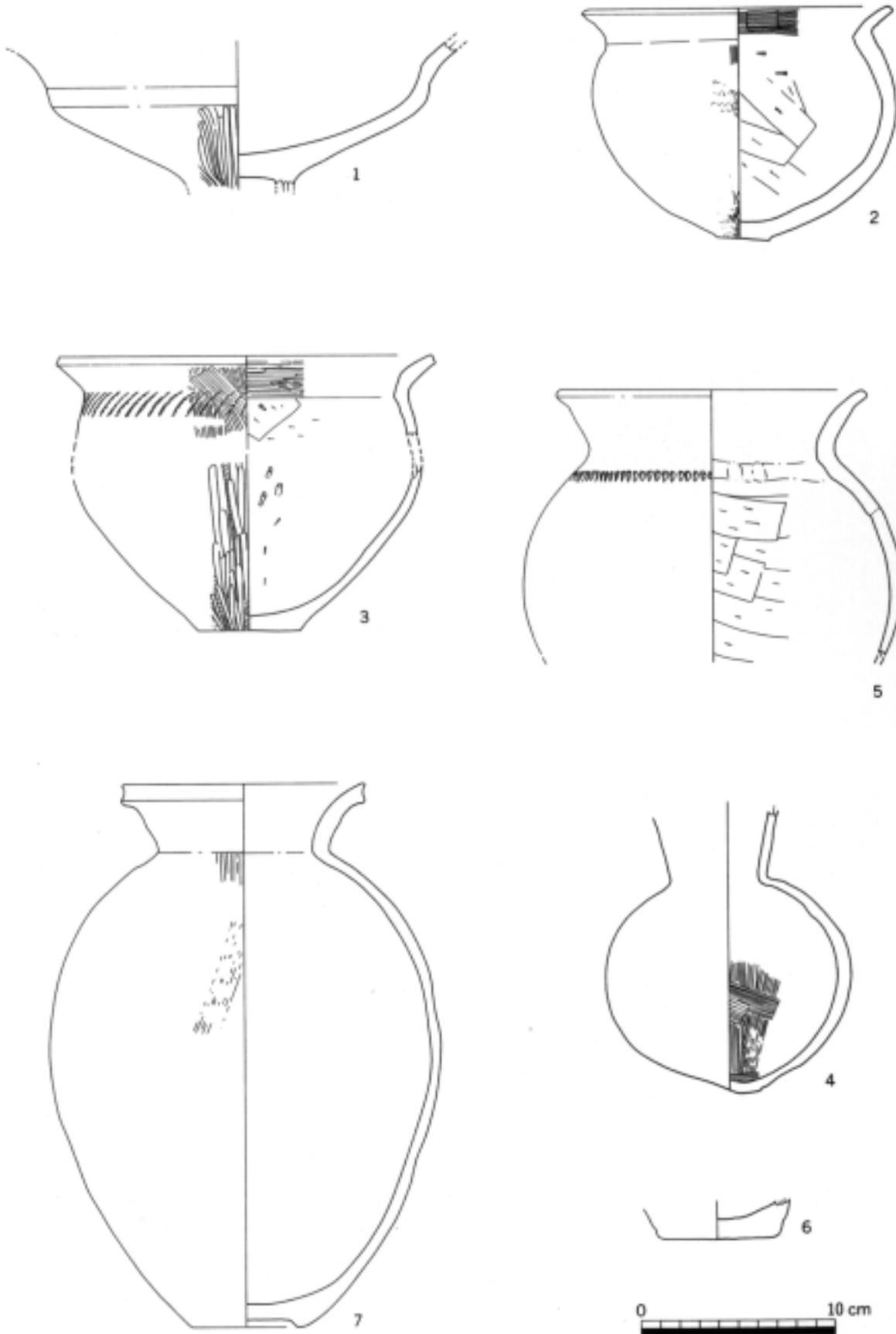
第 59 图 第 5 号土器棺墓实例图



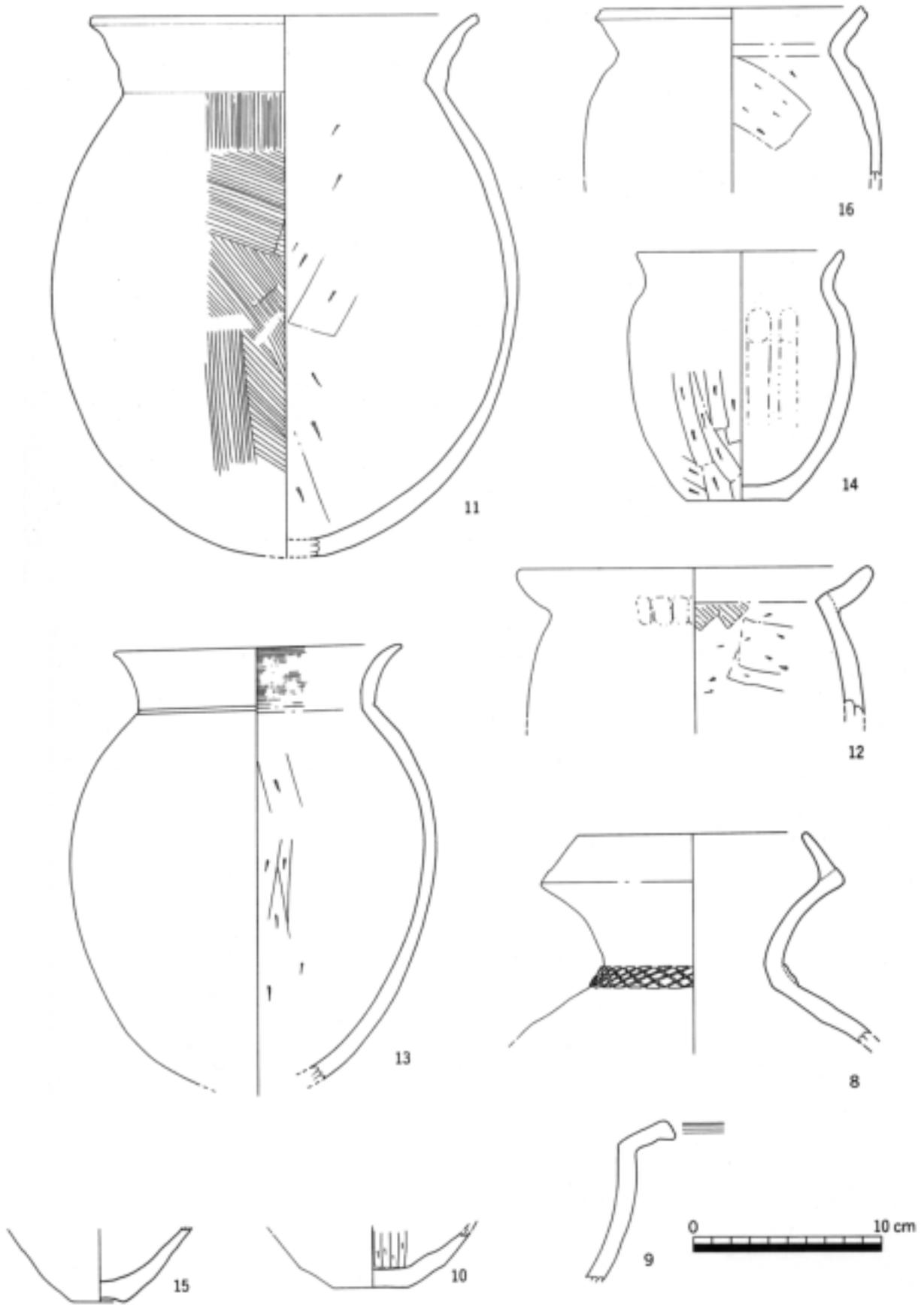
第60图 第6号土器棺基实测图



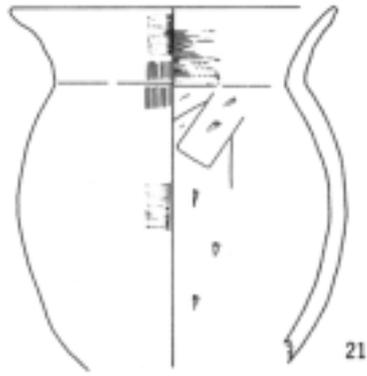
第61图 第7号土器棺基实测图



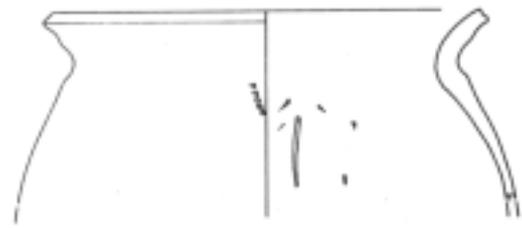
第 62 图 出土土器实例图 (1)



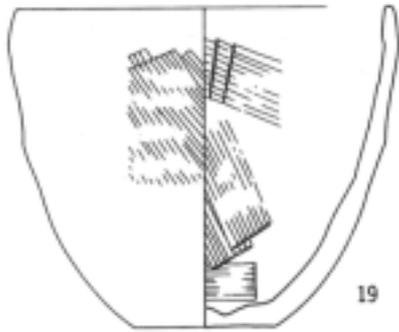
第 63 图 出土土器实线图 (2)



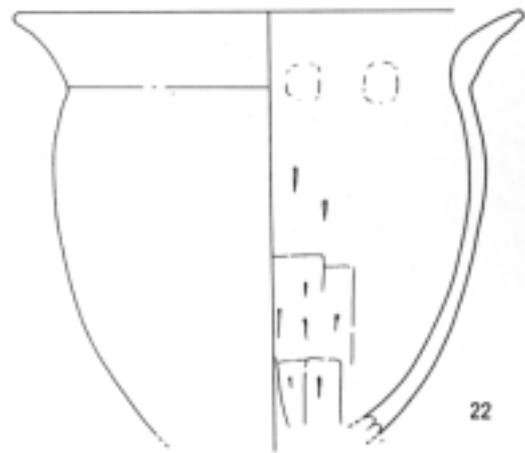
21



17



19



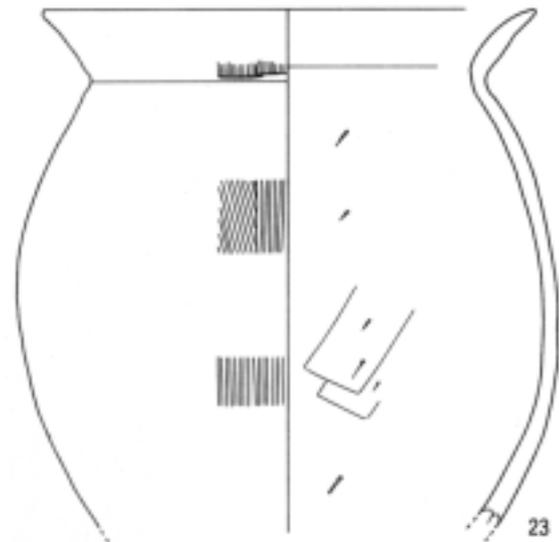
22



20



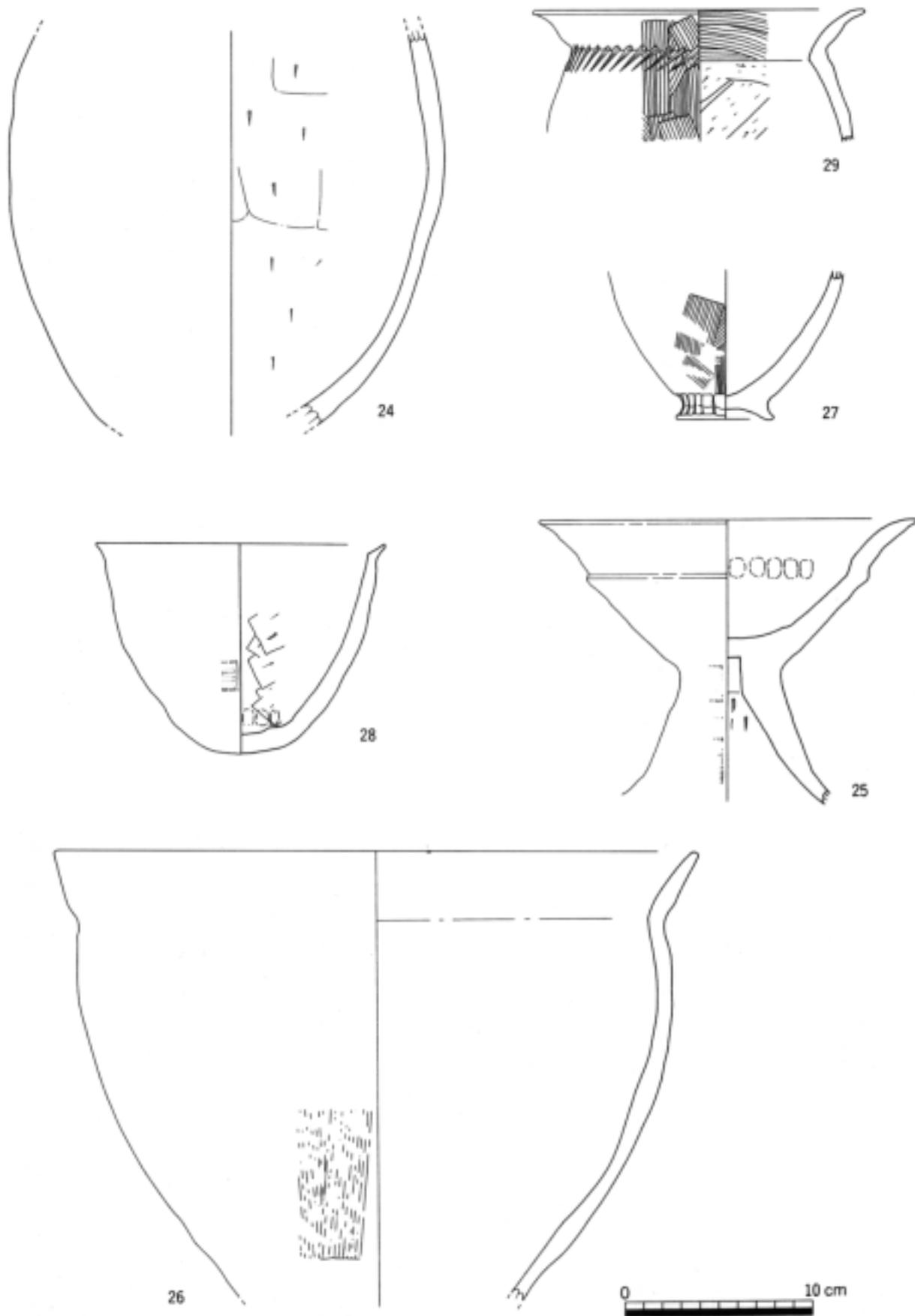
18



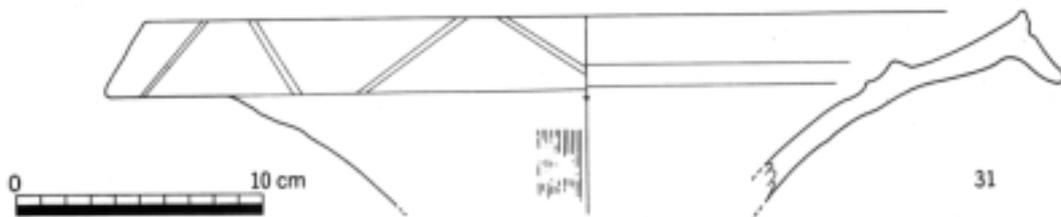
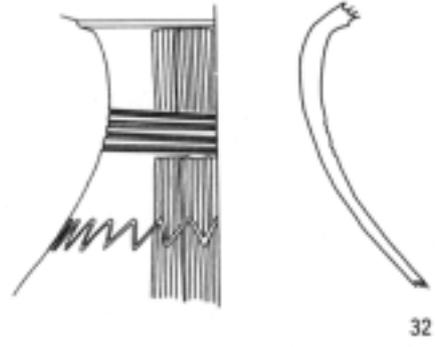
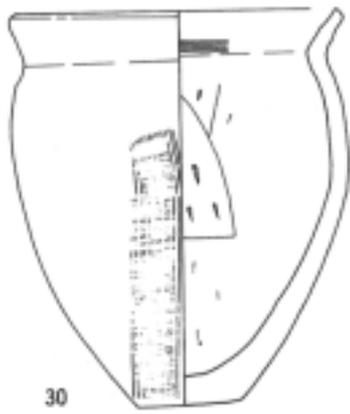
23



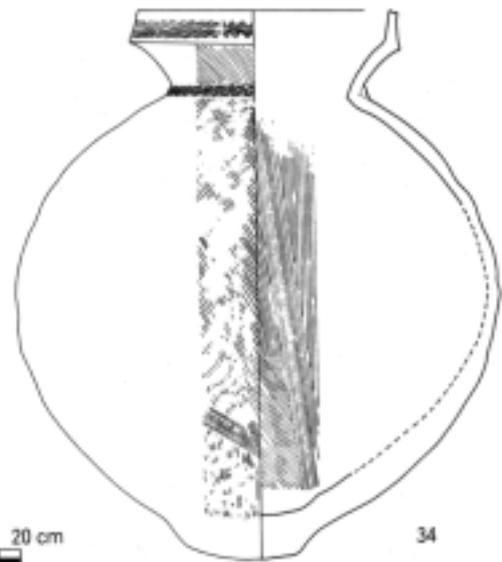
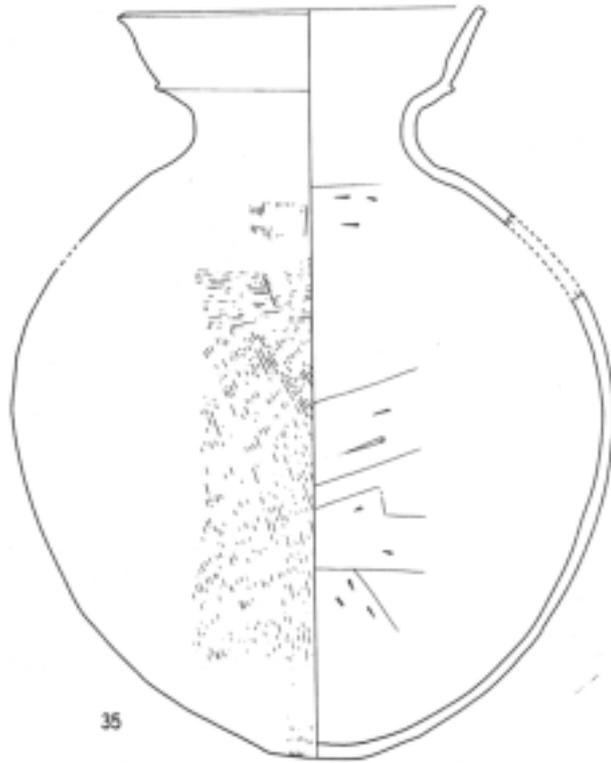
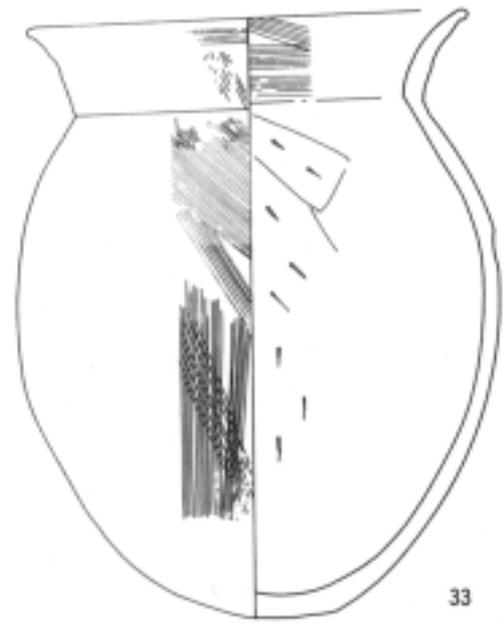
第 64 图 出土土器实例图 (3)



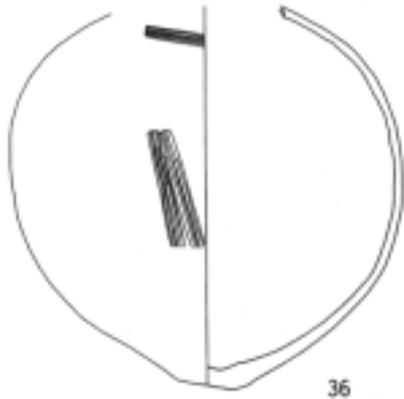
第 65 图 出土土器实物图 (4)



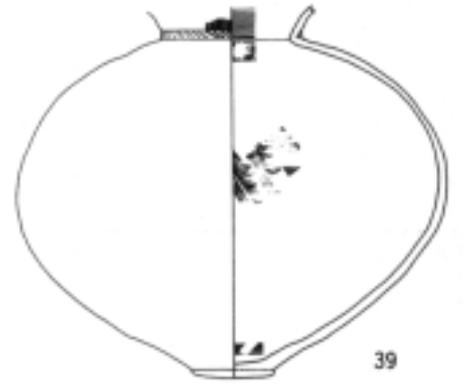
第66图 出土土器实测图(5)



第67图 出土土器実线图(6)

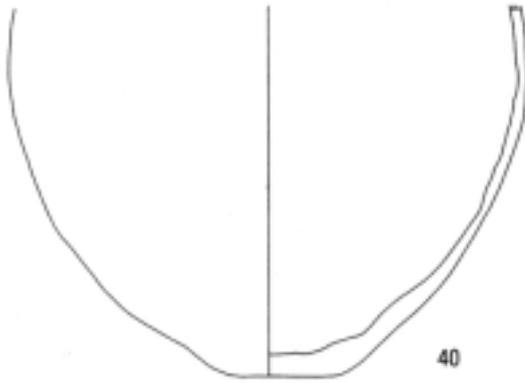


36

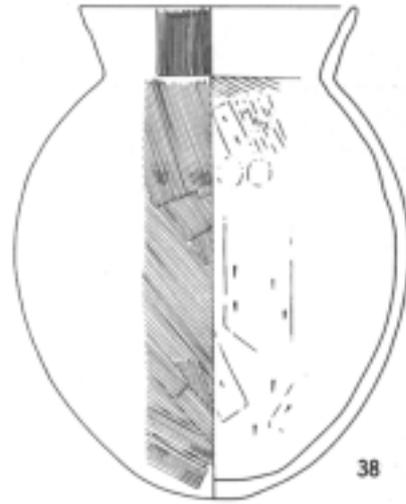


39

0 20 cm

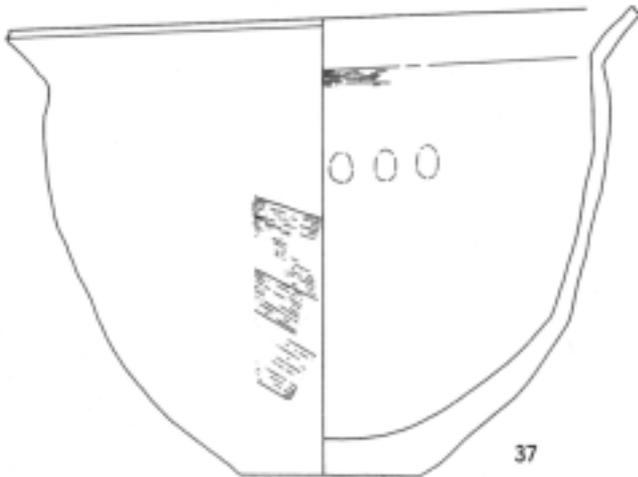


40

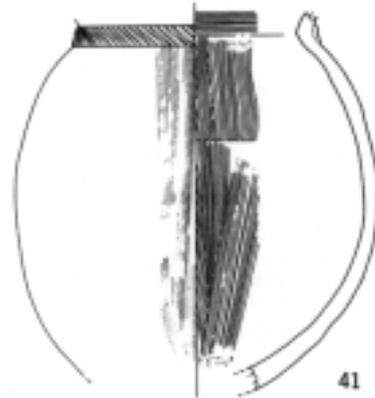


38

0 10 cm

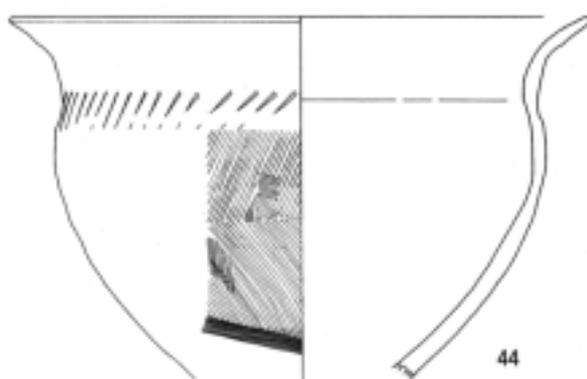
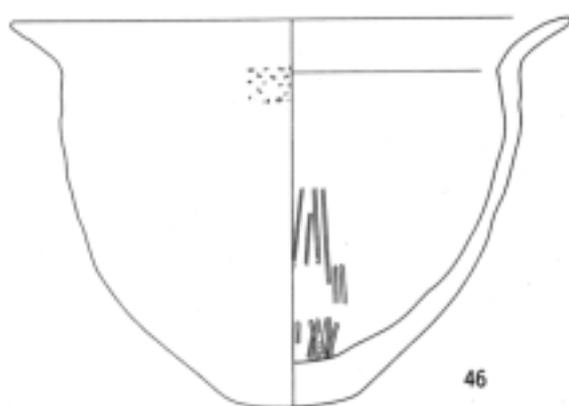
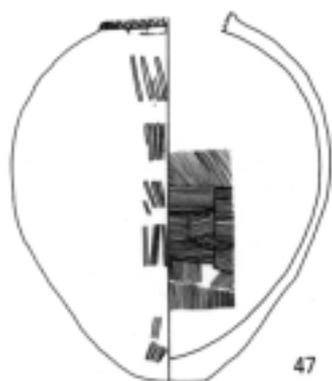
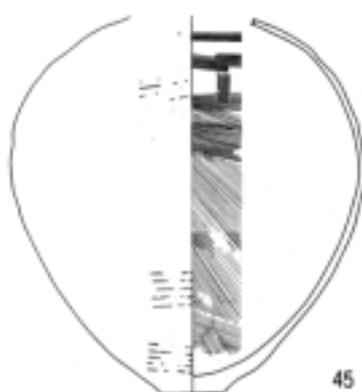
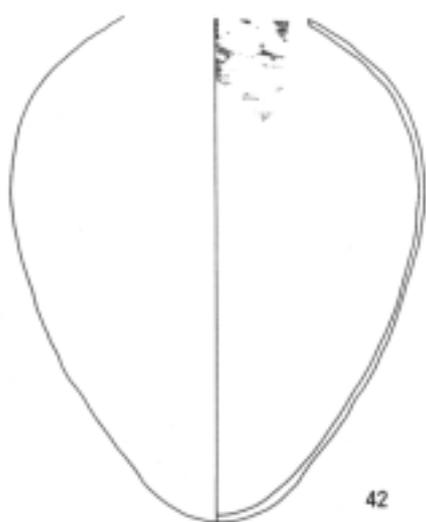


37

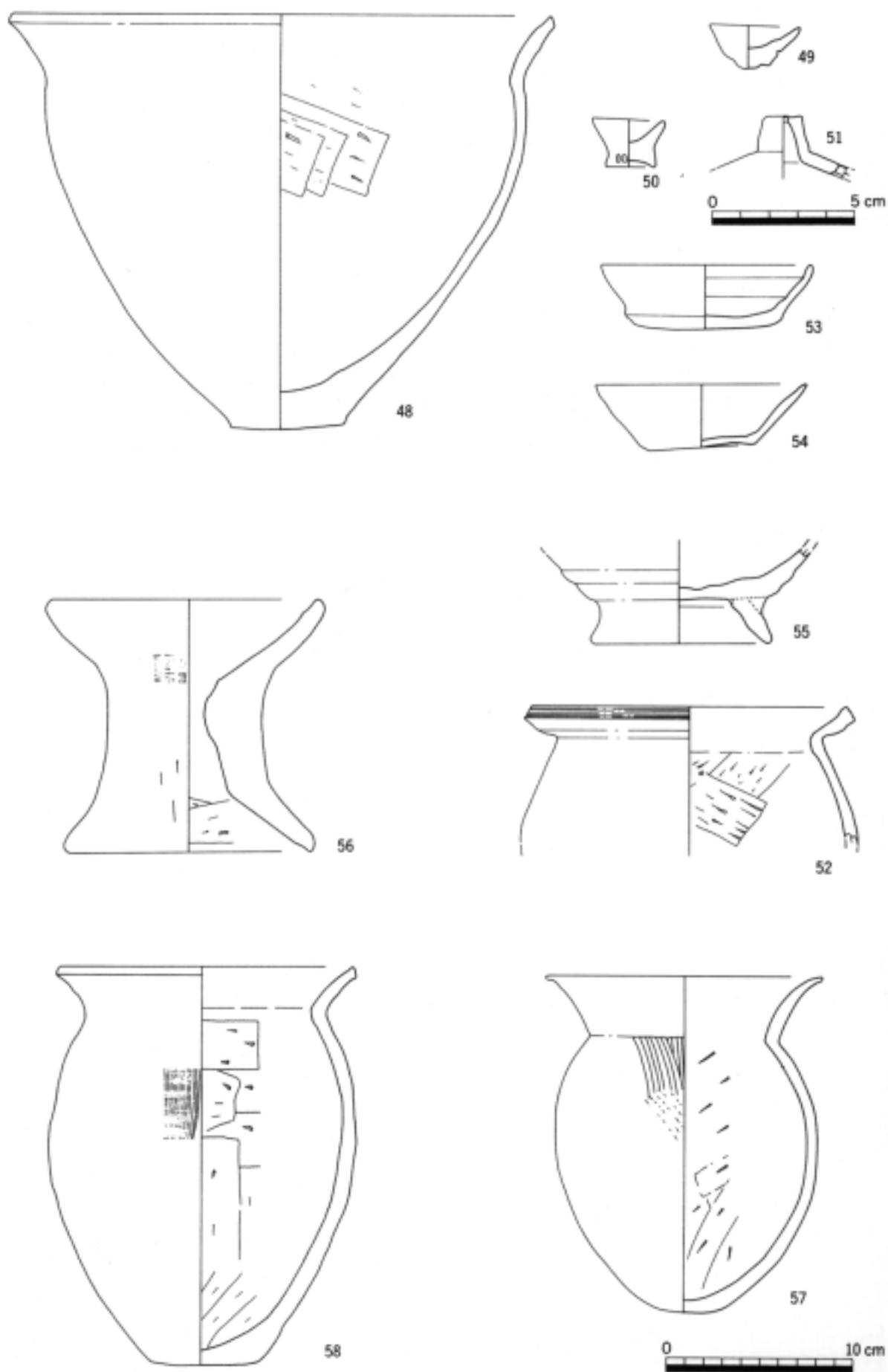


41

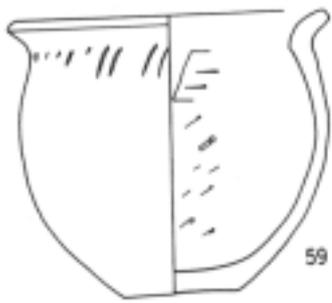
第 68 图 出土土器实侧图 (7)



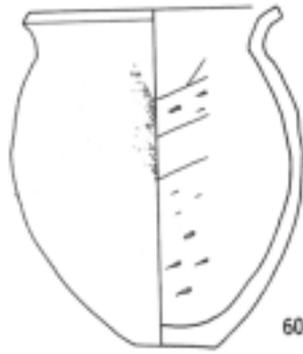
第 69 图 出土土器实物图 (8)



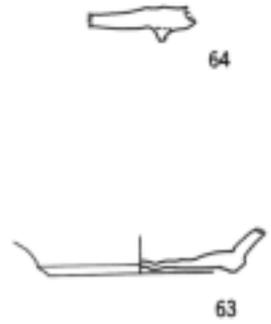
第70图 出土土器夹刻图(9)



59

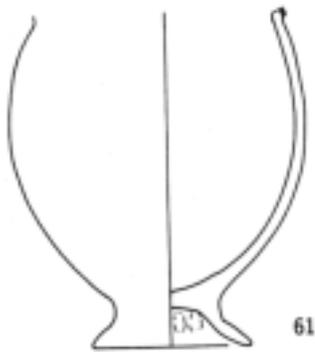


60

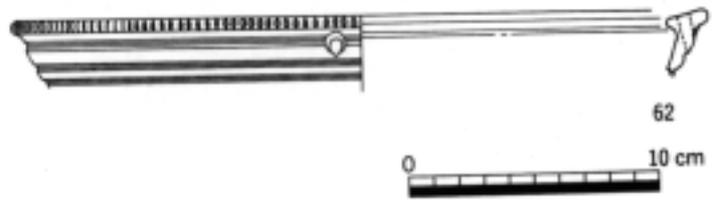


64

63



61



62

0 10 cm

第71图 出土土器実測図00



65



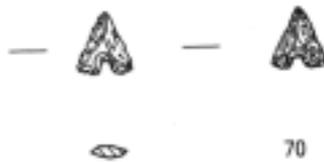
68



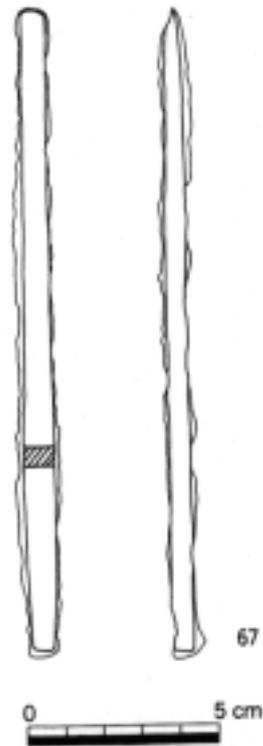
69



66



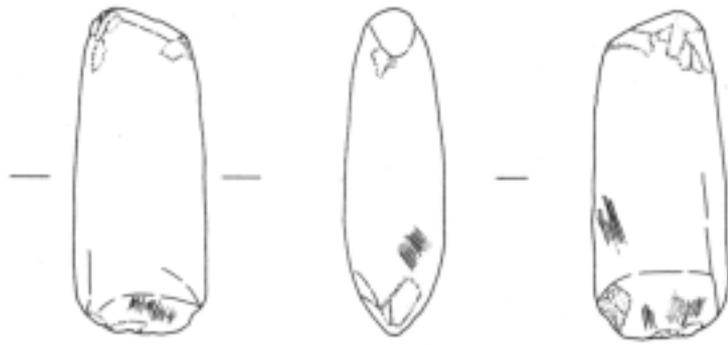
70



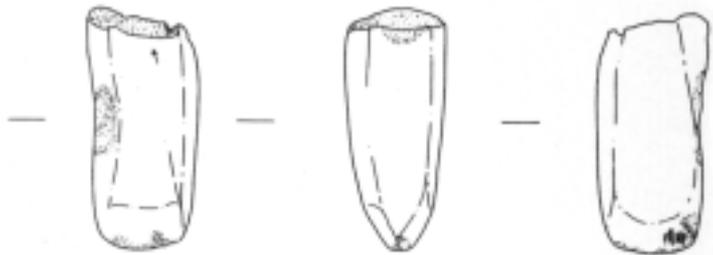
67

0 5 cm

第72图 出土鉄器及び石器実測図



71



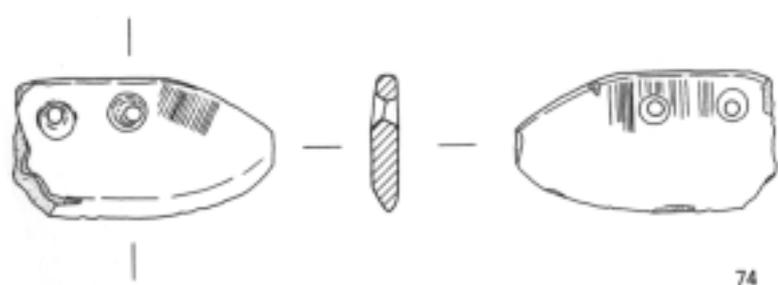
72



73



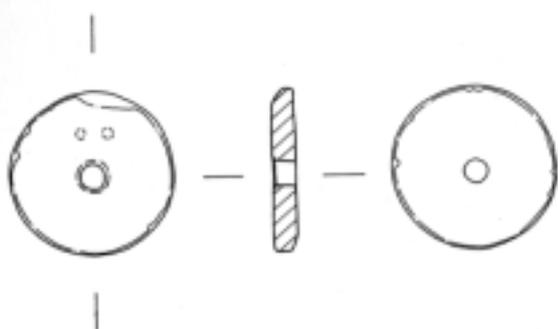
第73圖 出土石器実測図



74



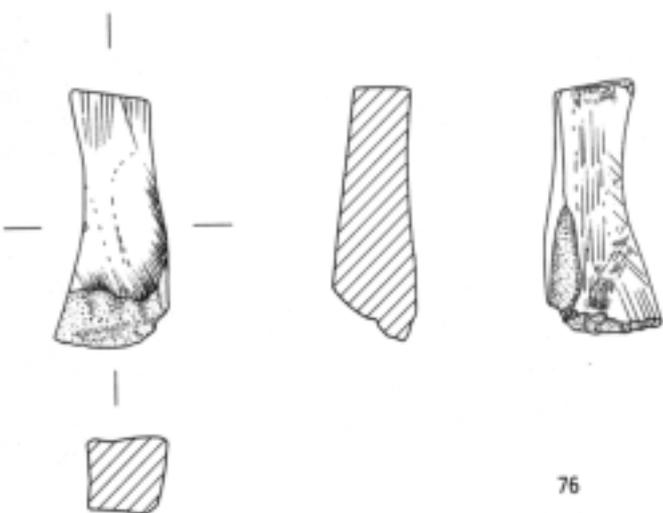
82



81



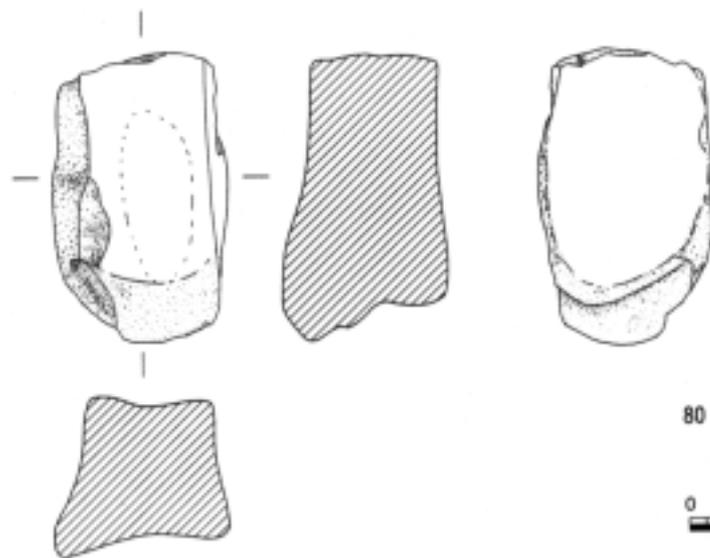
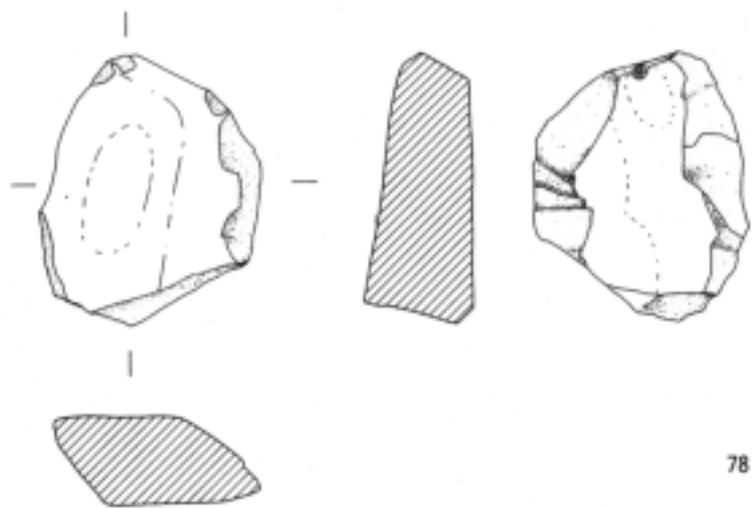
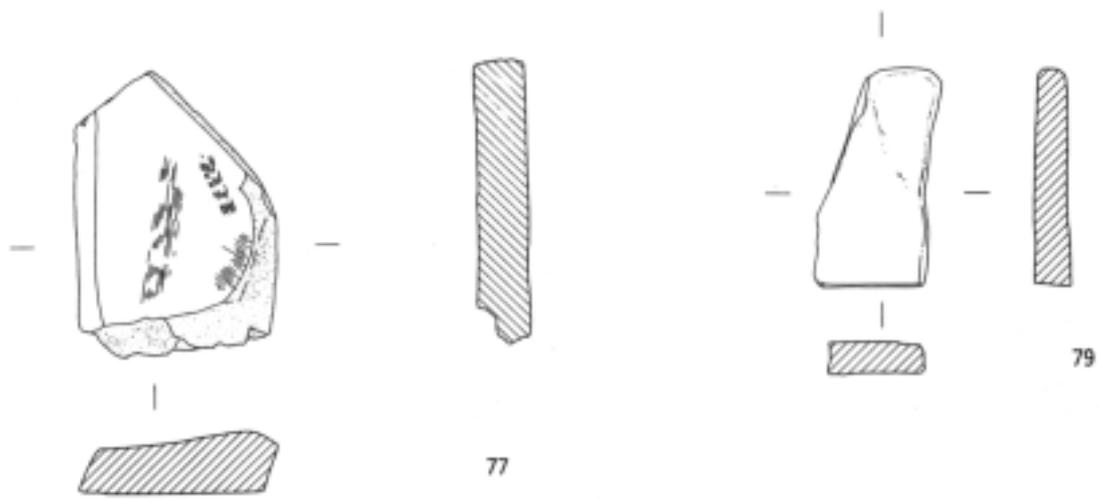
75



76



第74図 出土石器及び砥石実測図



0 10 cm

第 75 图 出土磁石夹侧图

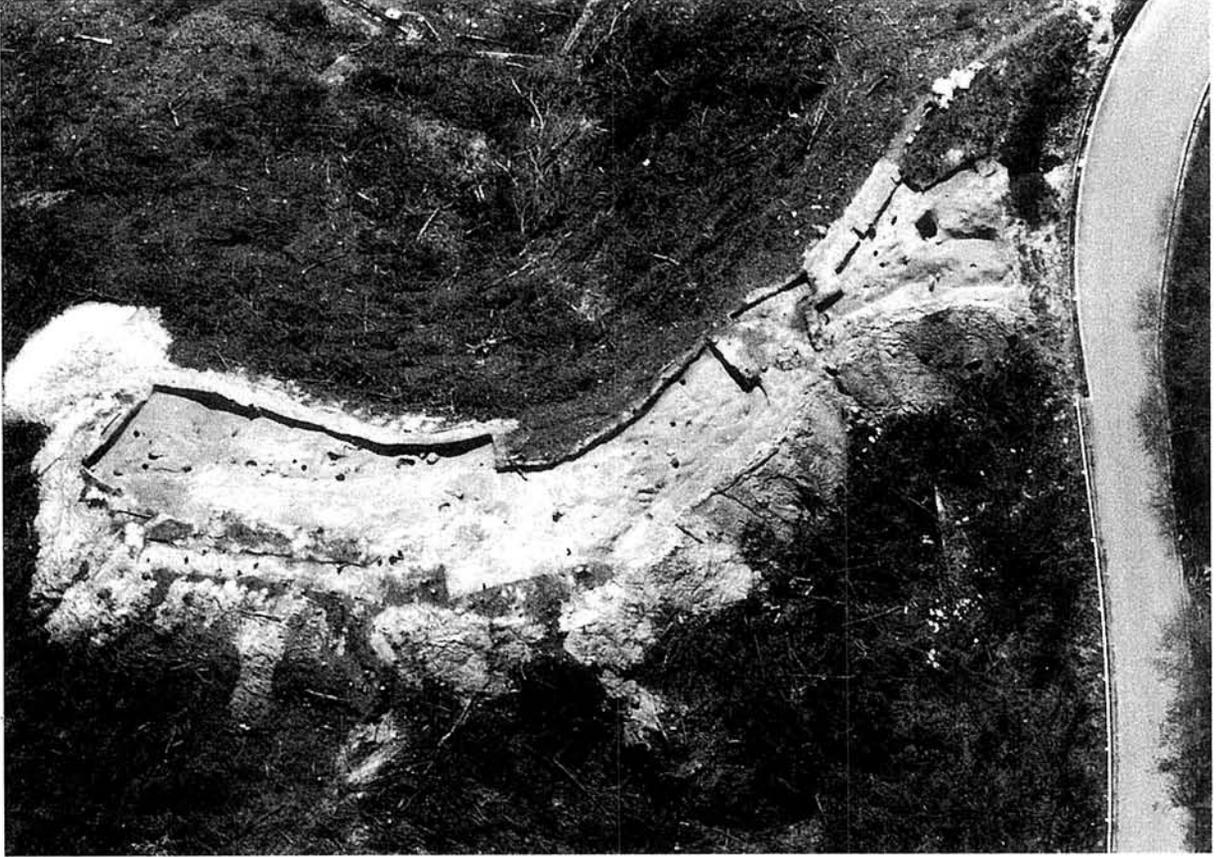
版 圖



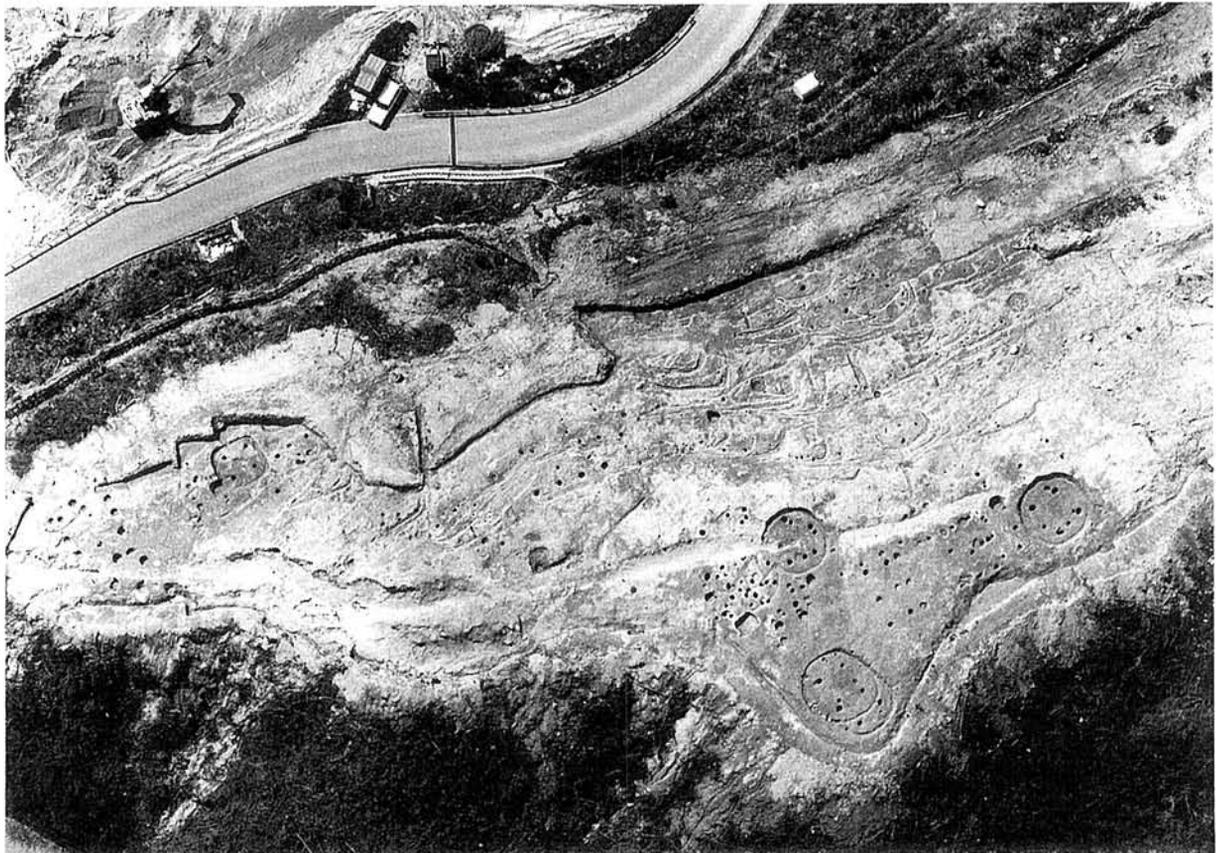
a. 稗畑遺跡全景（調査前，南より）



b. 稗畑遺跡全景（調査後，南より）



a. 1 地点全景 (北より)



b. 2 地点全景 (北より)



a. 3 地点全景（東より）



b. 第1号住居跡（東より）



a. 第2号住居跡（東より）



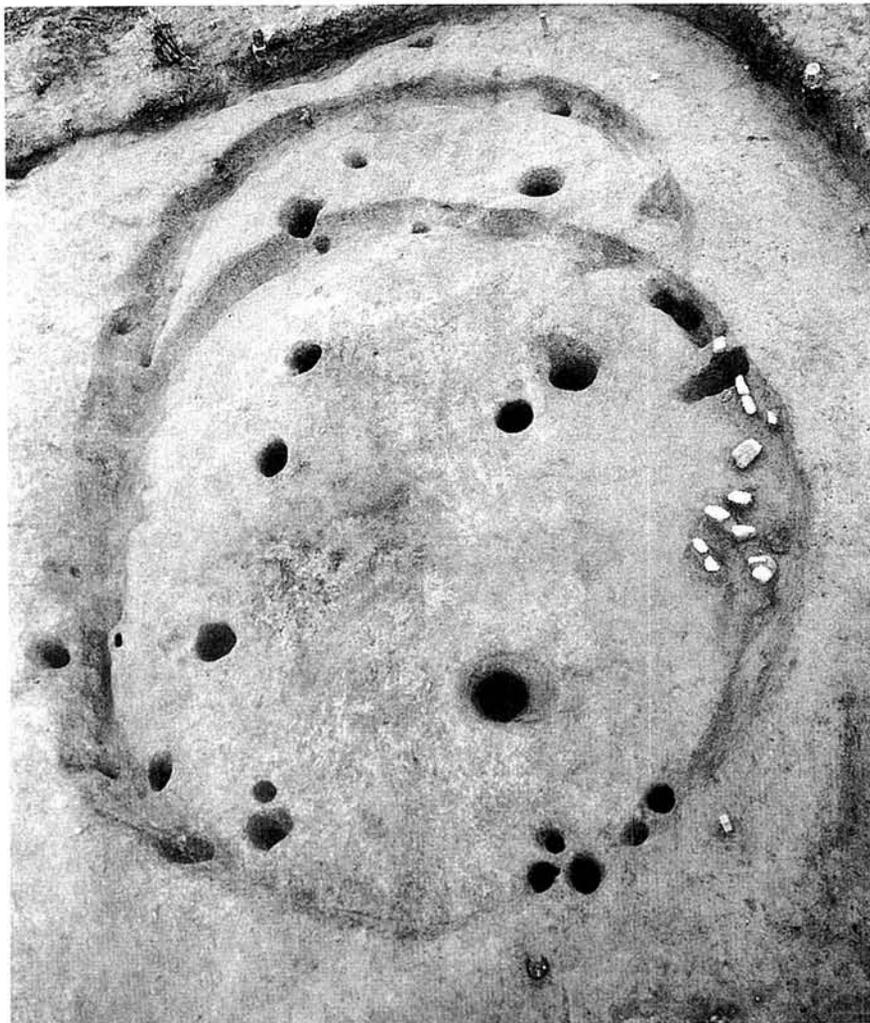
b. 第3号住居跡（西より）



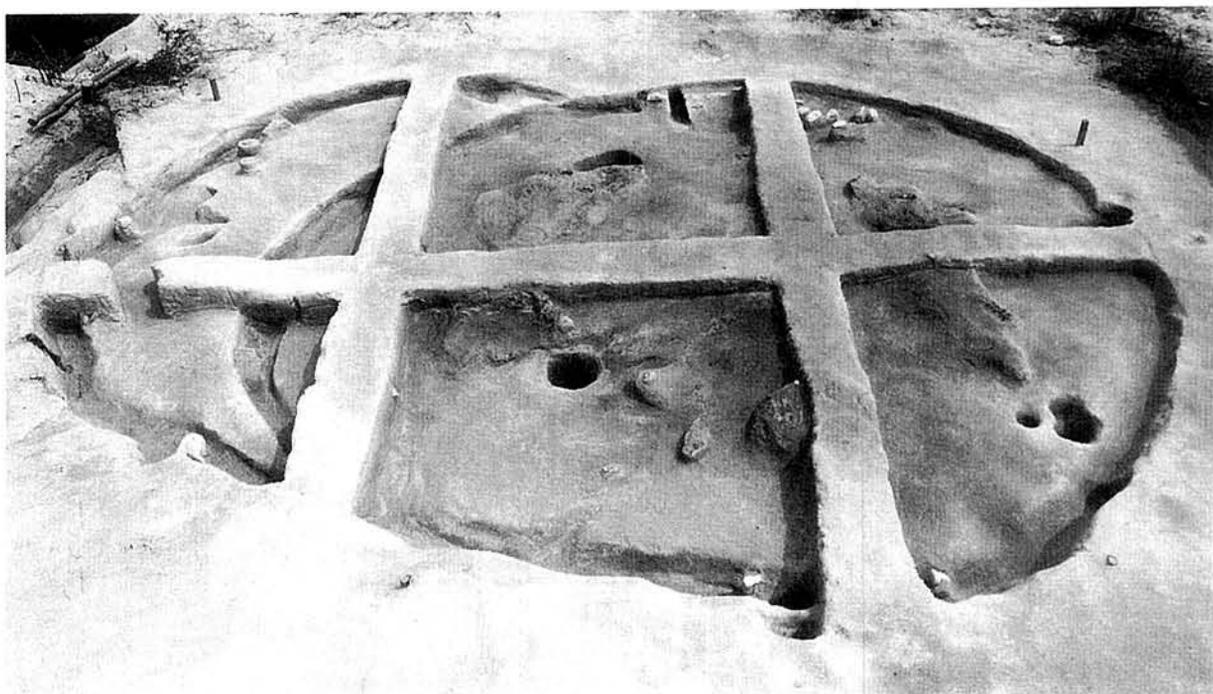
a. 第4号住居跡及び第3号土墳墓（西より）



b. 第5号～第8号住居跡，第3号～第5号掘立柱建物跡及び第1号土坑（西より）



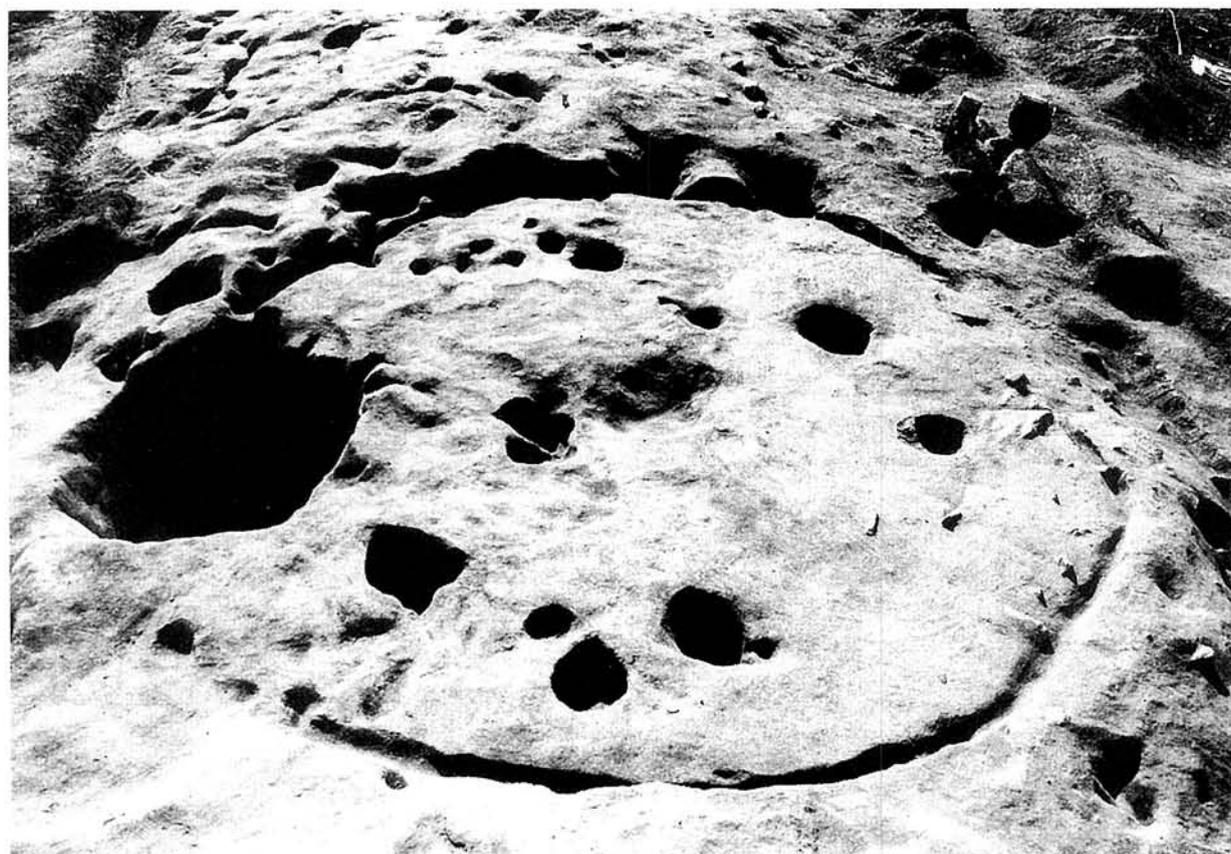
a. 第9号・第10号住居跡（東より）



b. 第9号住居跡炭化物出土状況（南より）



a. 第11号住居跡, 第8号掘立柱建物跡及び第2号土坑(西より)



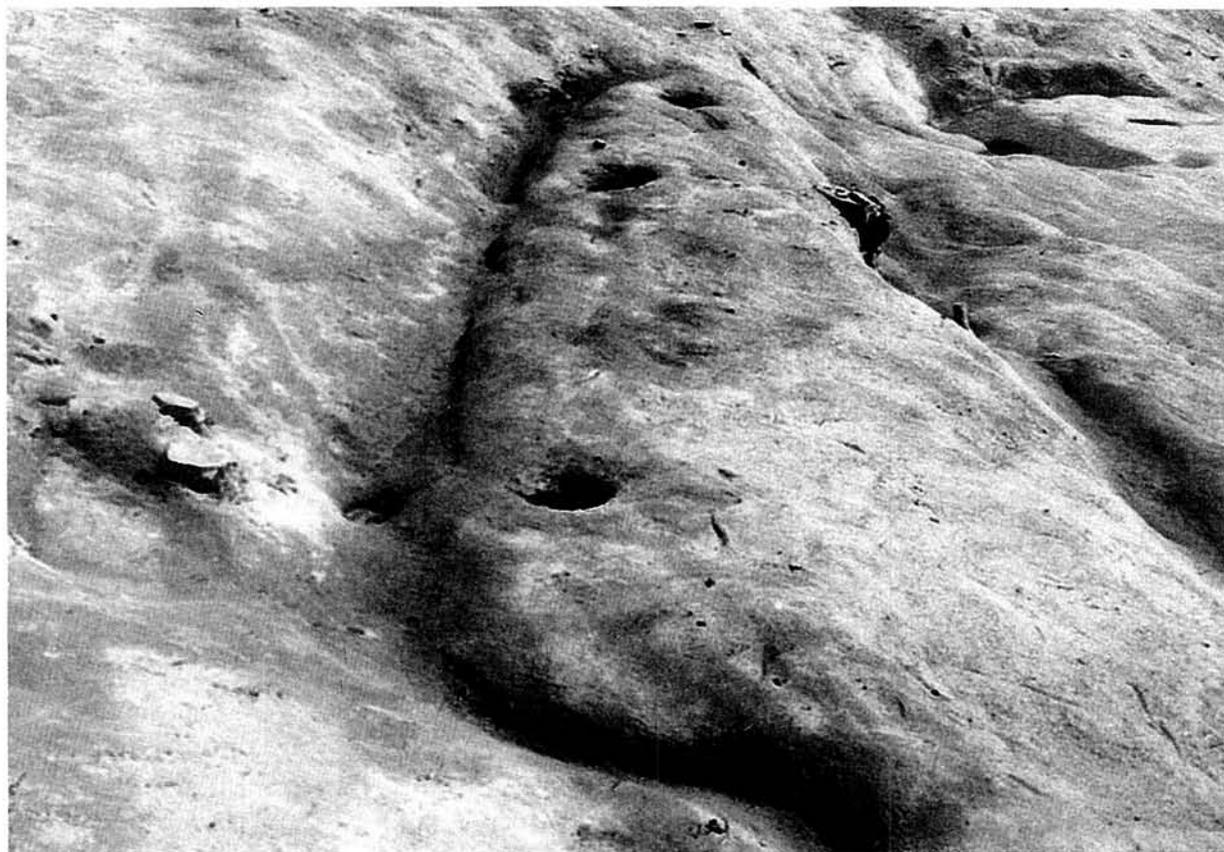
b. 第12号住居跡及び第3号土坑(北より)



a. 第13号住居跡（東より）



b. 第14号住居跡（東より）



a. 第15号住居跡（西より）



b. 第16号住居跡及び第2号住居跡状遺構（東より）



a. 第17号住居跡（西より）



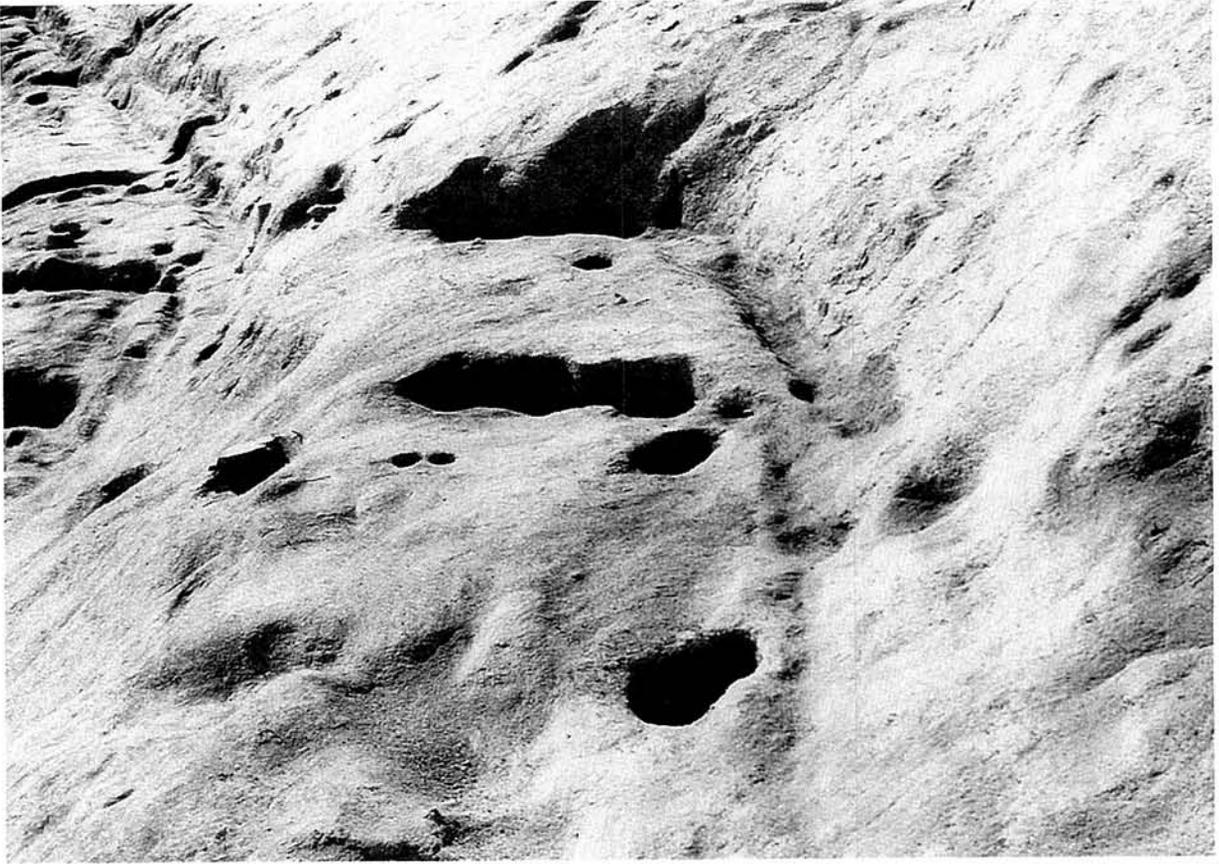
b. 第18号住居跡（東より）



a. 第19号住居跡（東より）



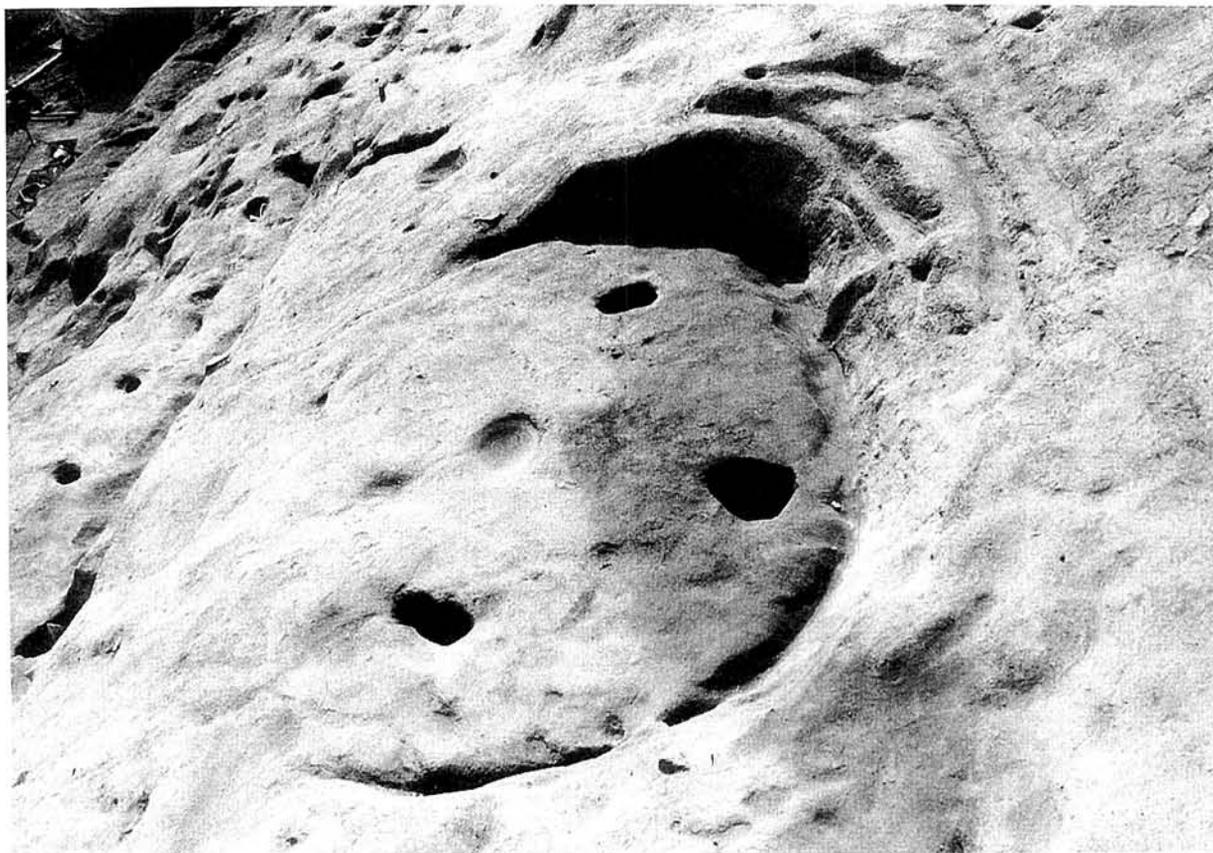
b. 第20号住居跡及び第4号土坑



a. 第21号住居跡（東より）



b. 第22号住居跡（東より）



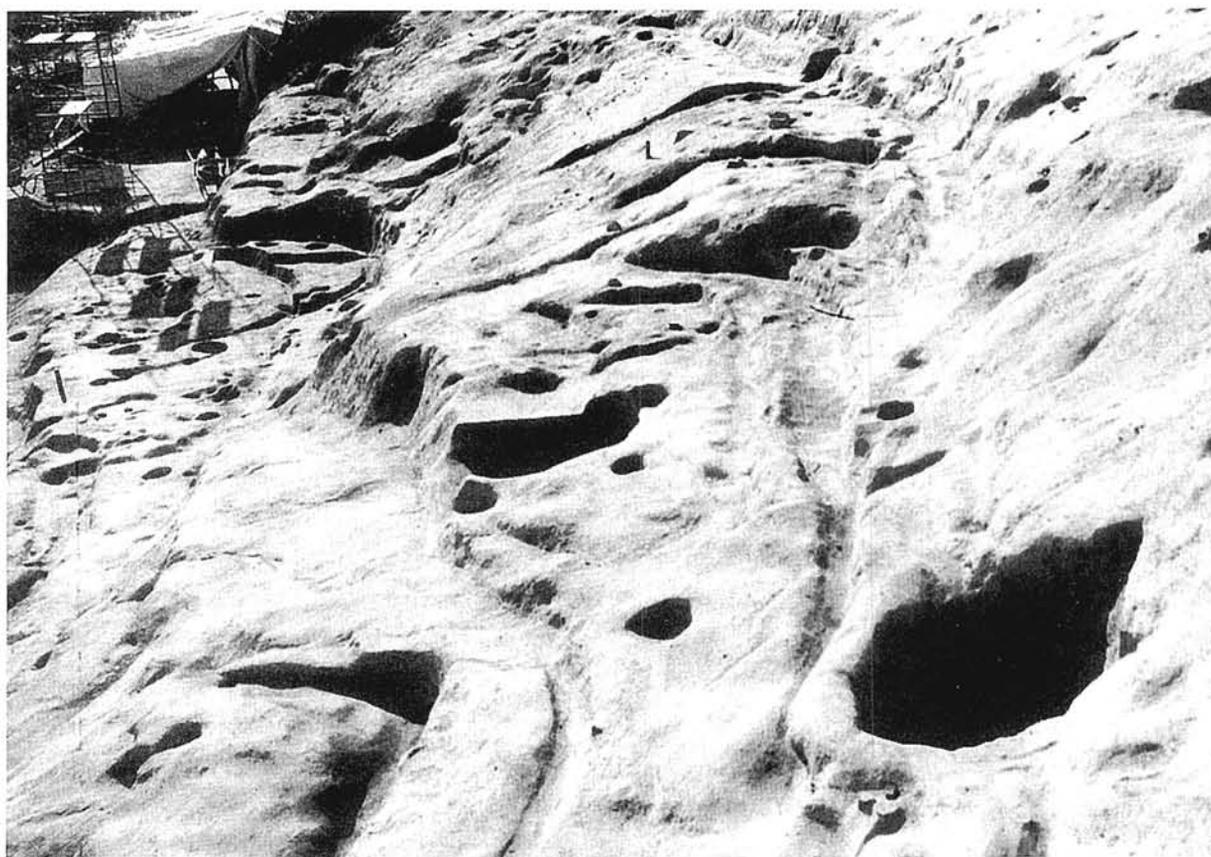
a. 第23号住居跡（東より）



b. 第24号住居跡（西より）



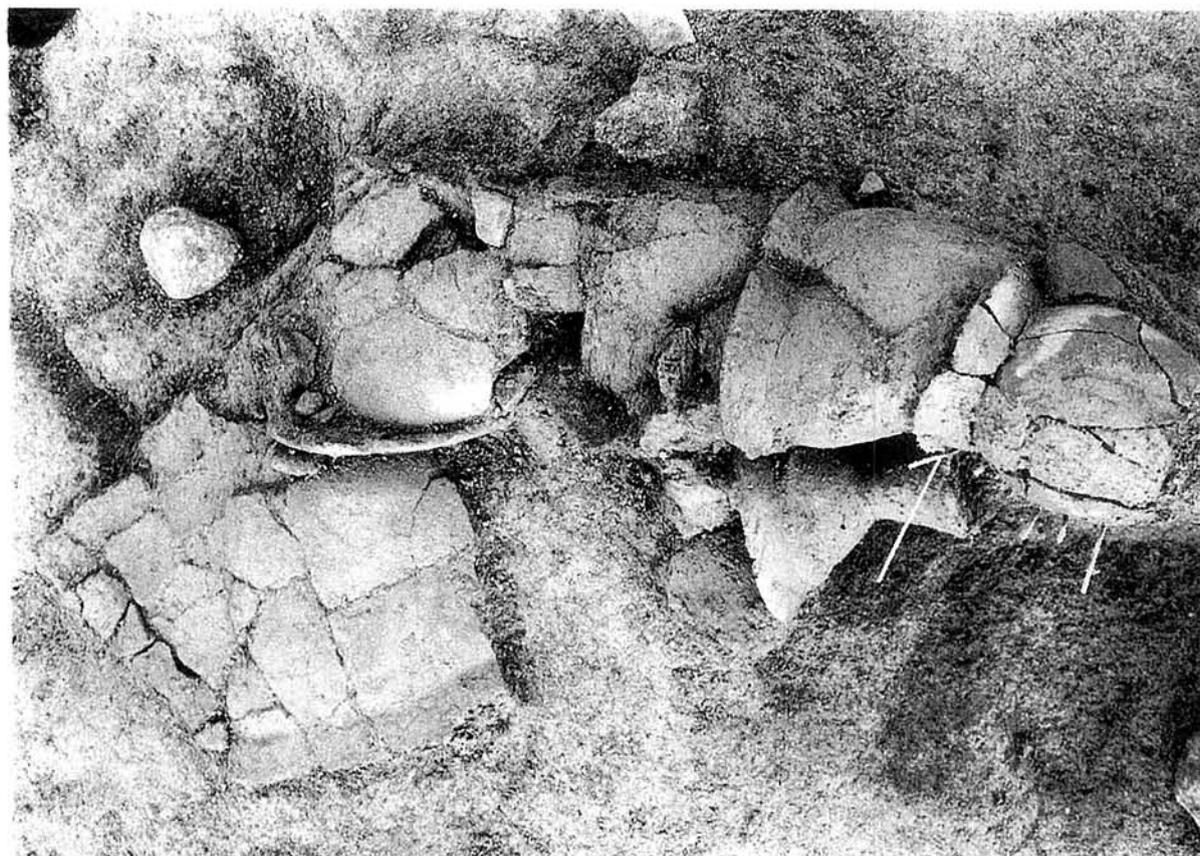
a. 第25号住居跡（東より）



b. 第26号～第28号住居跡（南より）



a. 第29号～第32号住居跡（東より）



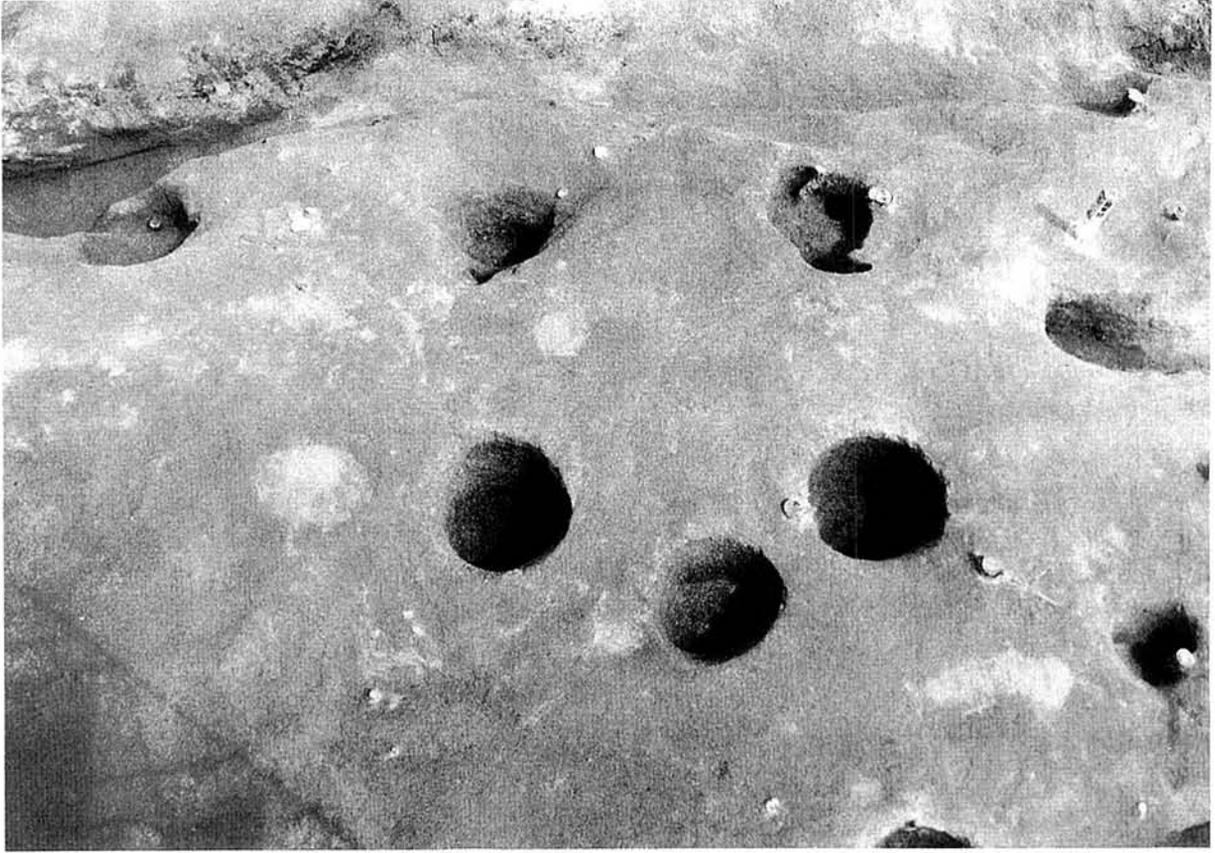
b. 第32号住居跡土器出土状況（南より）



a. 第33号住居跡（南より）



b. 第1号掘立柱建物跡（西より）



a. 第2号掘立柱建物跡（南より）



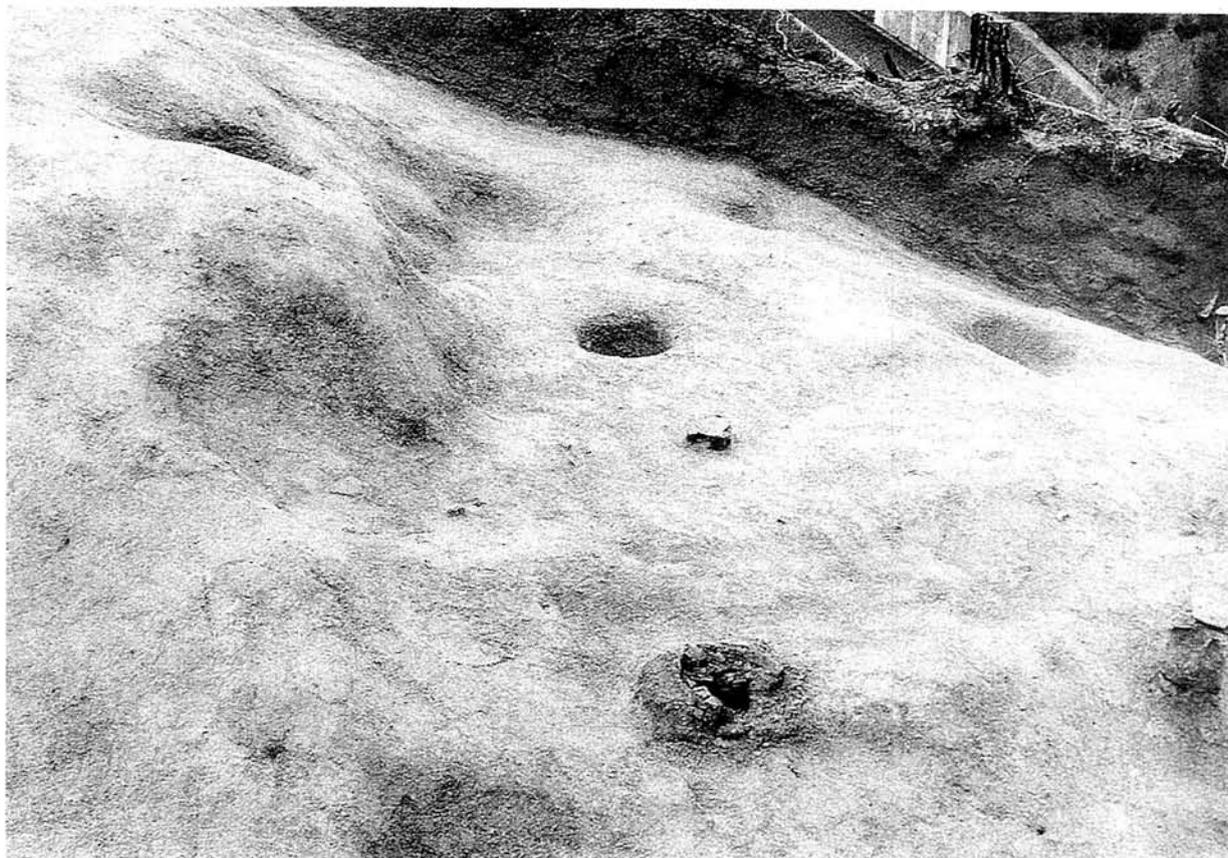
b. 第6号・第7号掘立柱建物跡（東より）



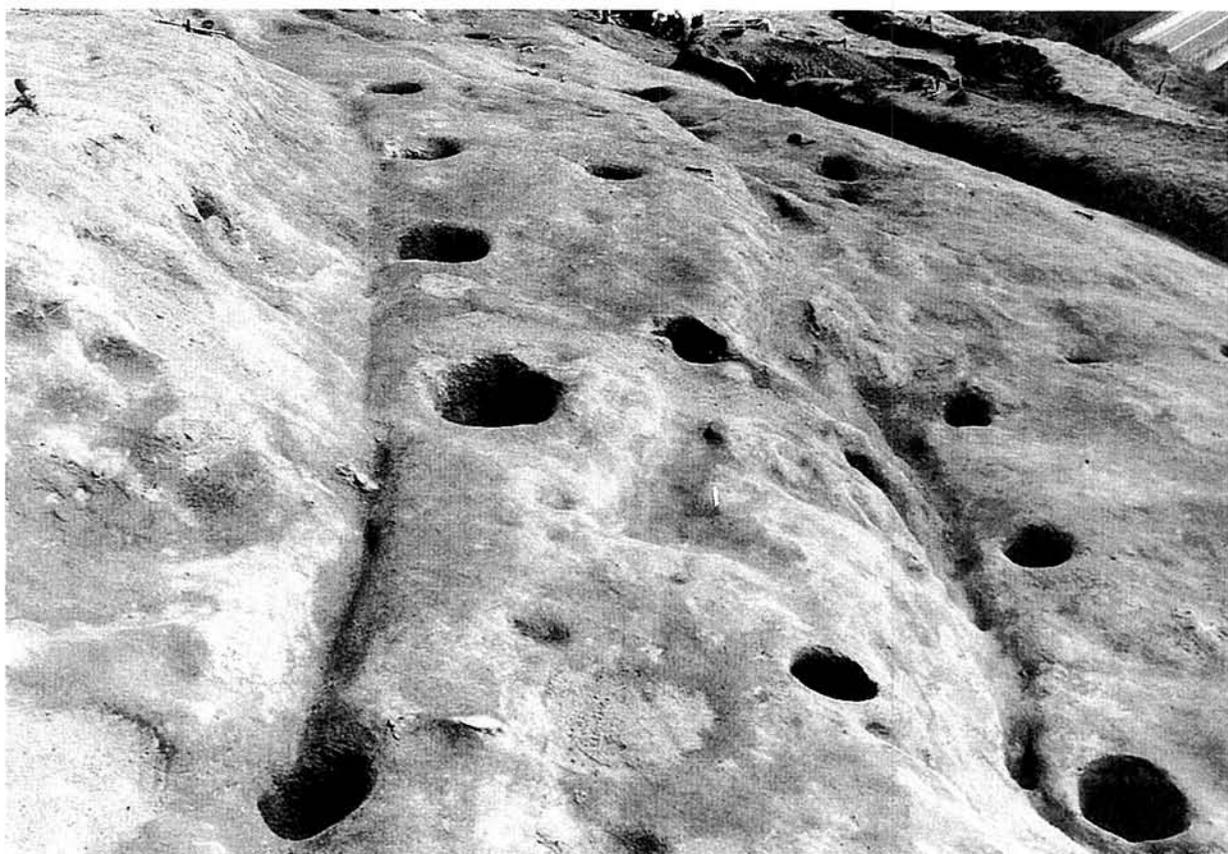
a. 第1号テラス状遺構（東より）



b. 第2号テラス状遺構（南より）



a. 第3号テラス状遺構（西より）



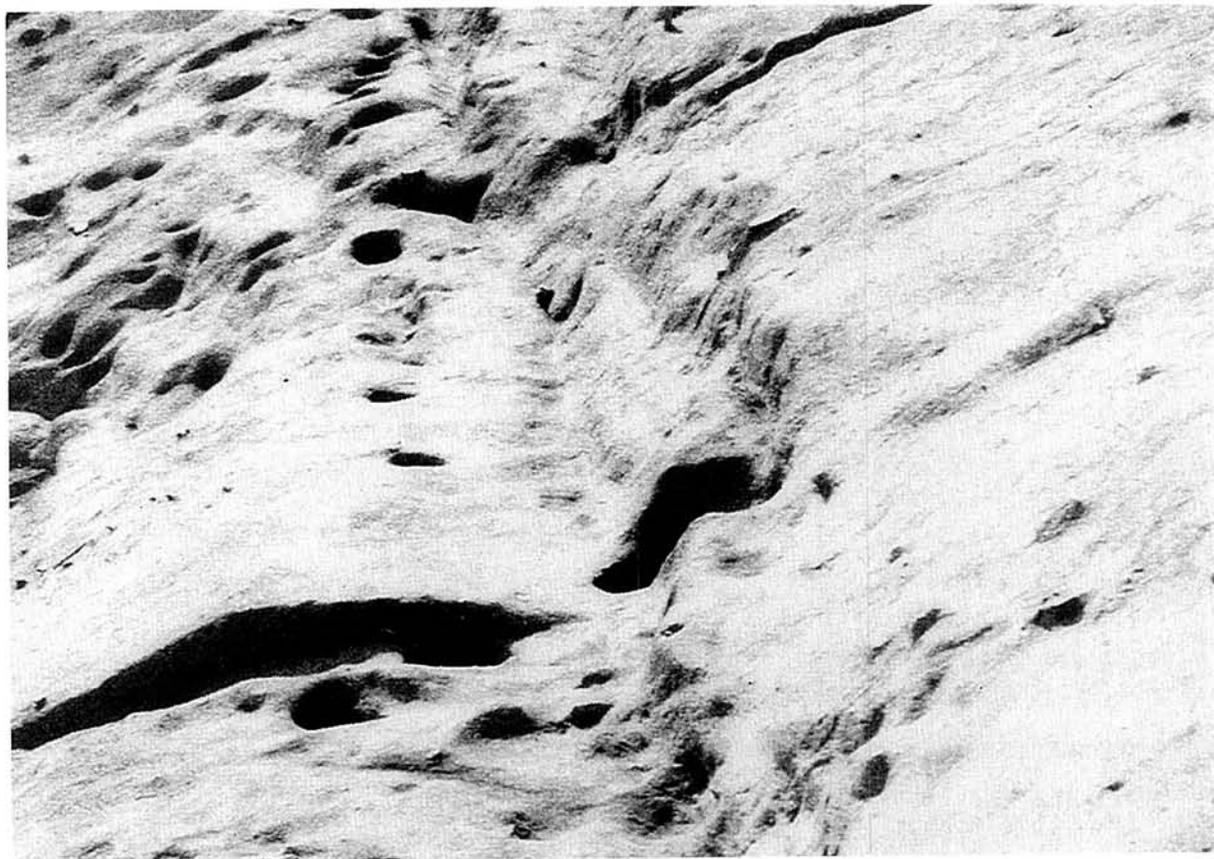
b. 第4号テラス状遺構（西より）



a. 第1号住居跡状遺構（西より）



b. 第3号住居跡状遺構（東より）



a. 第5号住居跡状遺構（東より）



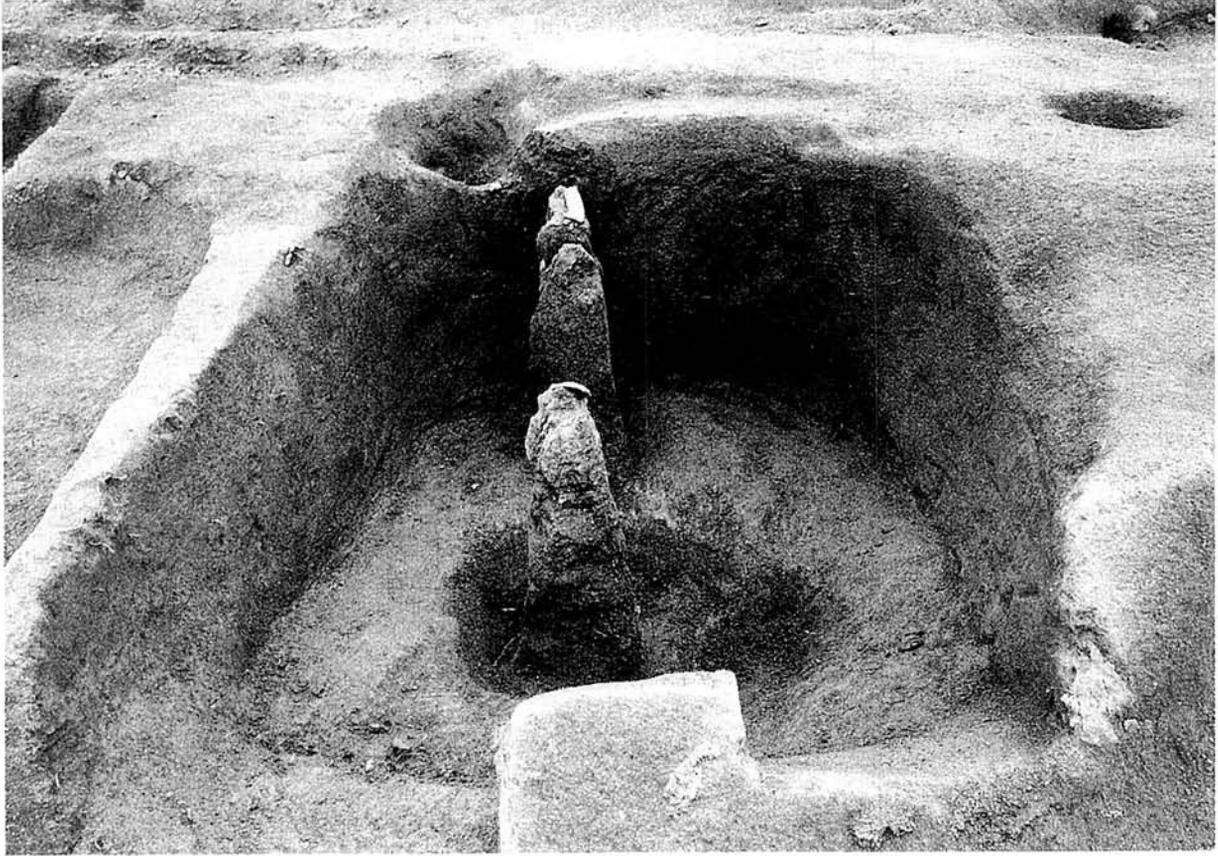
b. 第6号住居跡状遺構（西より）



a. 第1号土坑（東より）



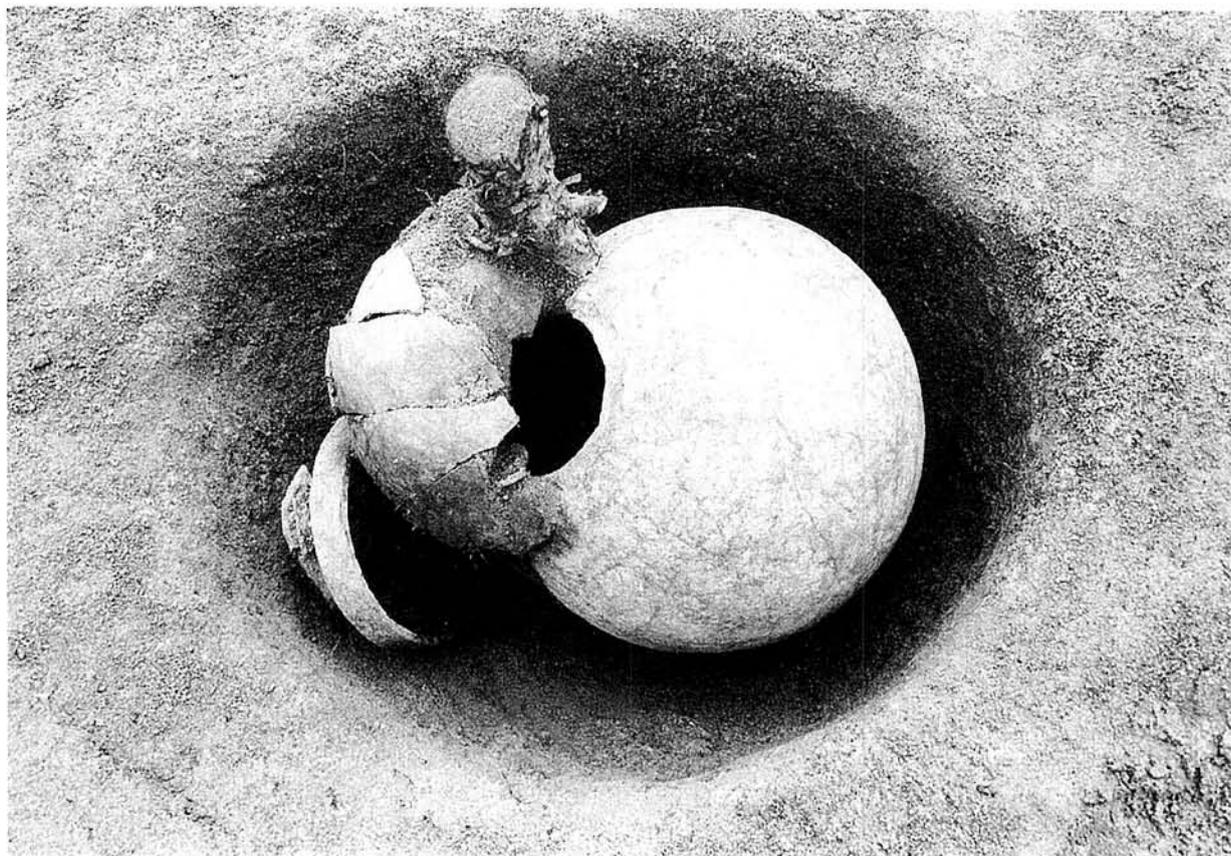
b. 第2号土坑（南より）



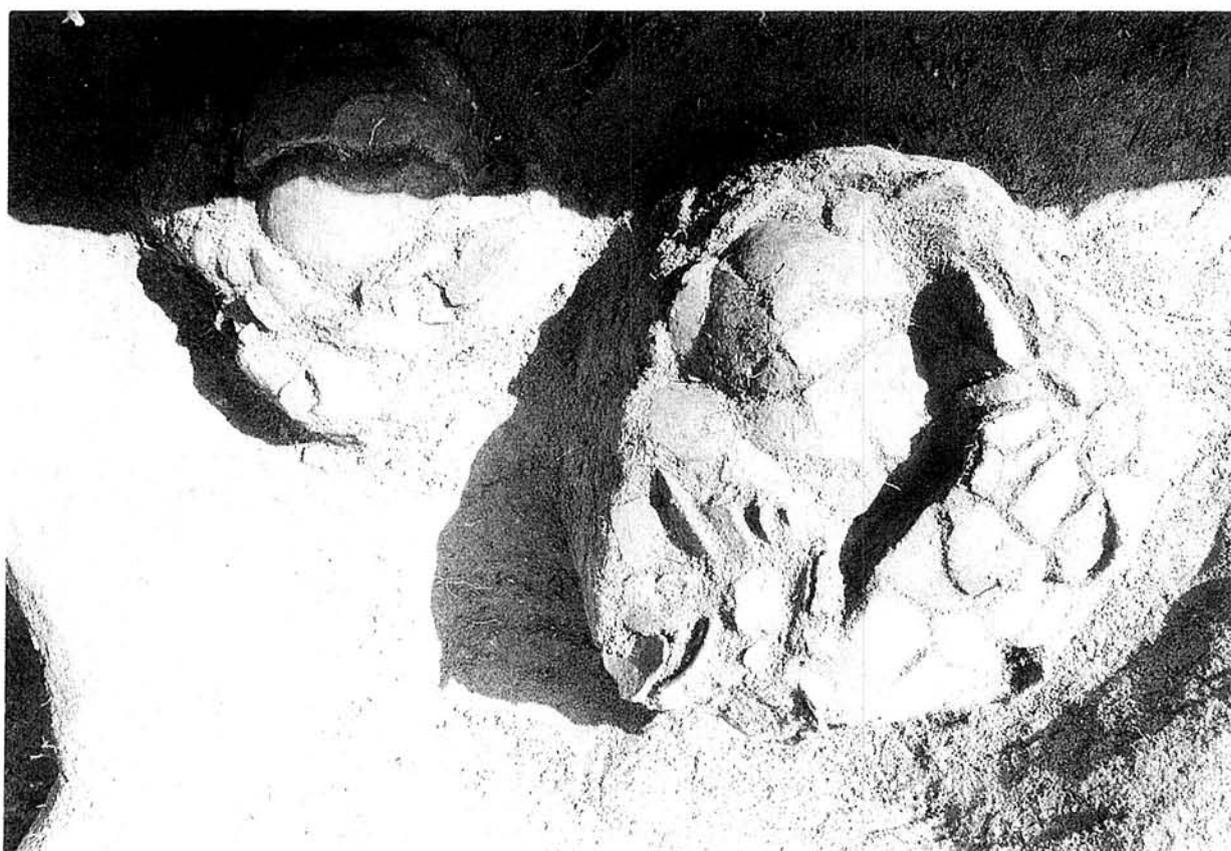
a. 第5号土坑（南より）



b. 第1号・第2号土坑墓（東より）



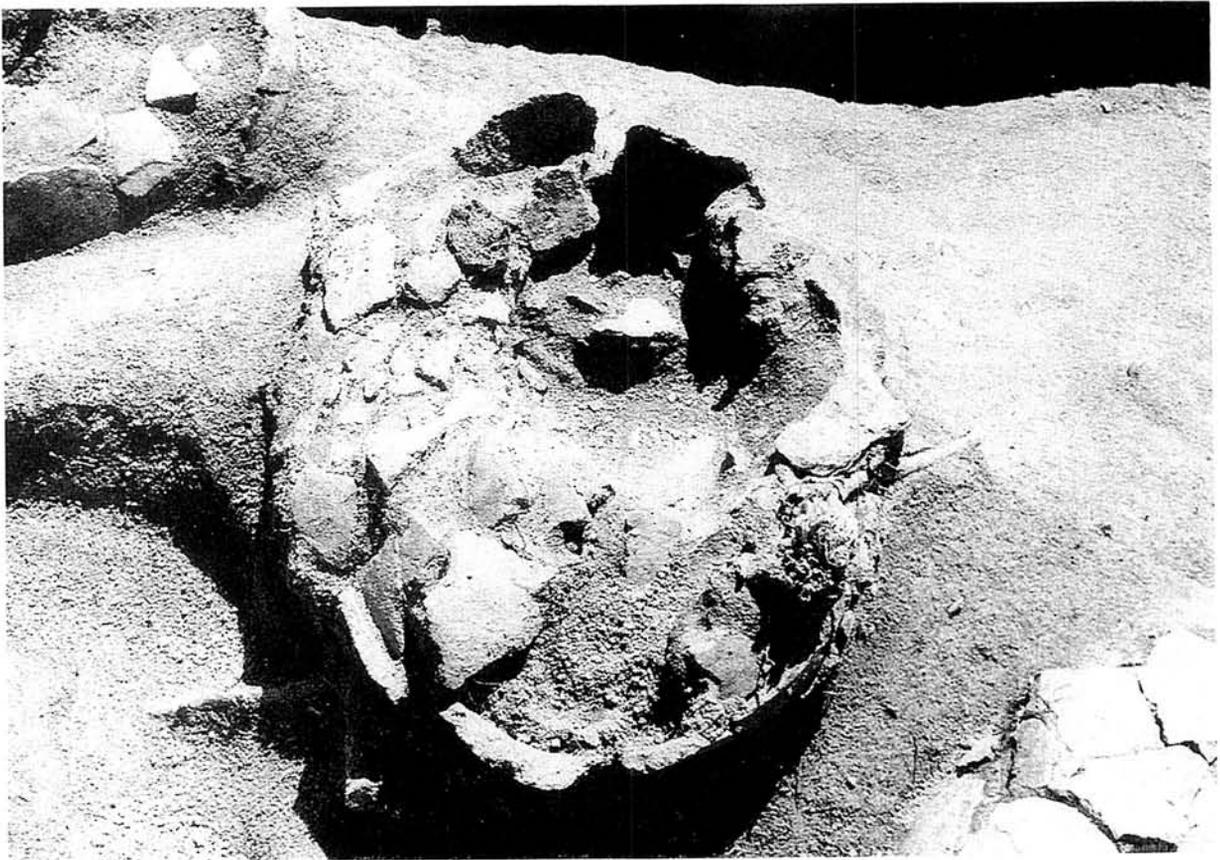
a. 第1号土器棺墓（北より）



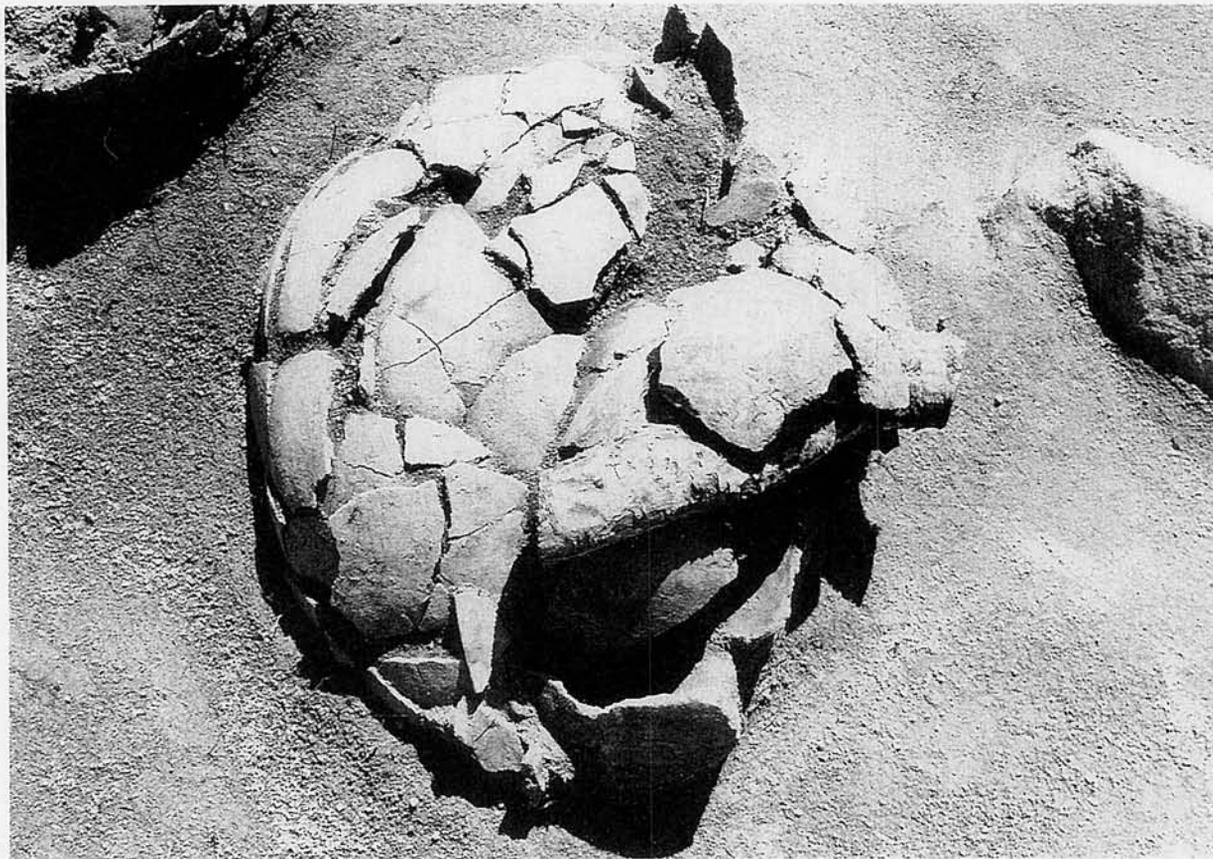
b. 第2号・第3号土器棺墓（北より）



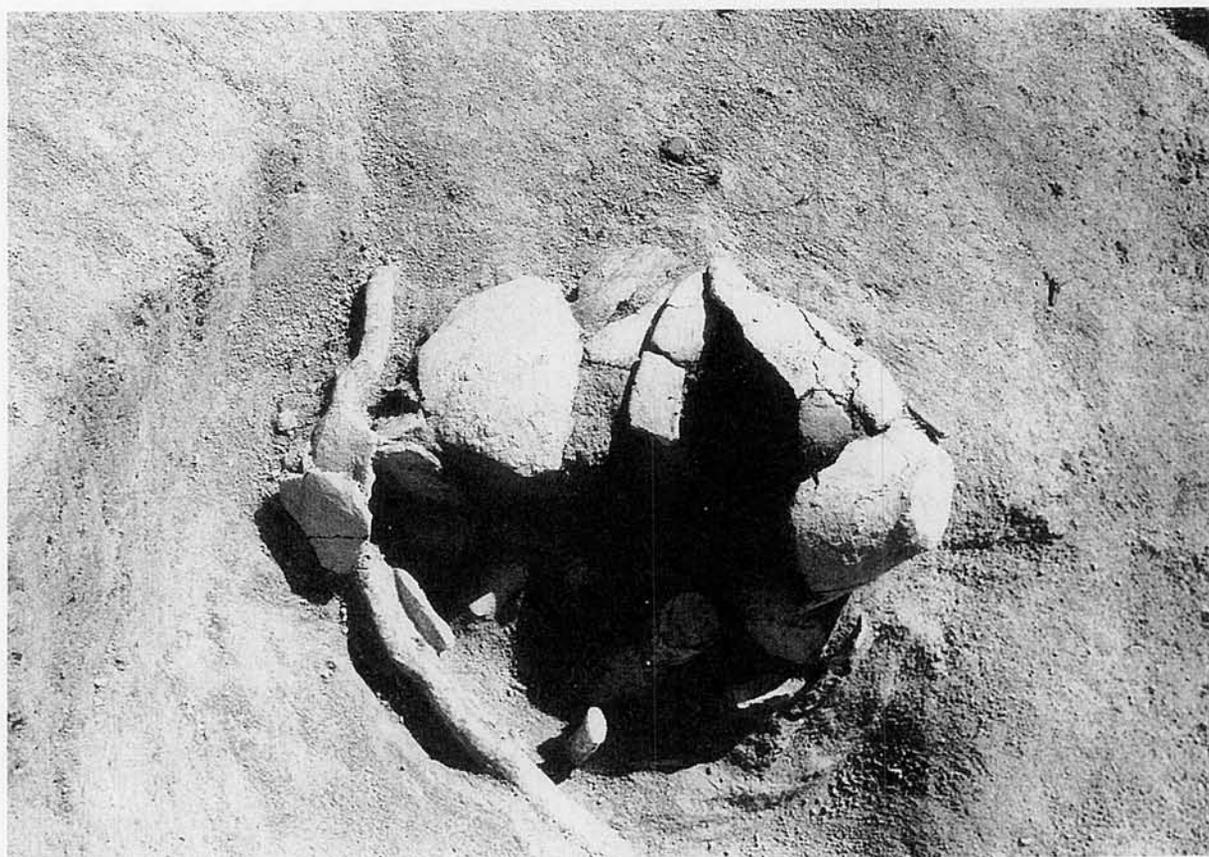
a. 第4号～第7号土器棺墓（東より）



b. 第5号土器棺墓（北より）



a. 第6号土器棺墓 (西より)



b. 第7号土器棺墓 (西より)



1



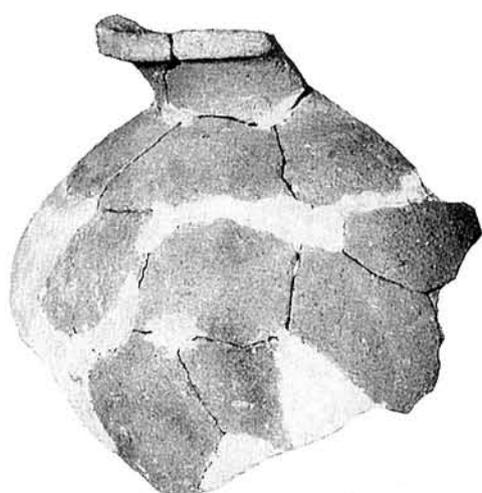
2



3



5



4



7



6

出土土器 (1)



11



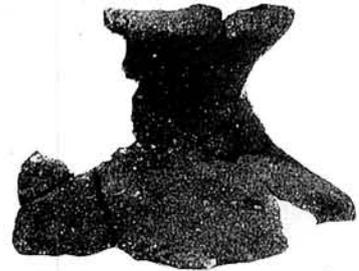
16



14



13



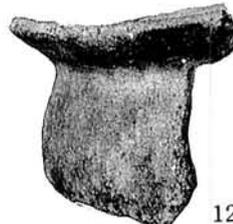
8



15



10



12



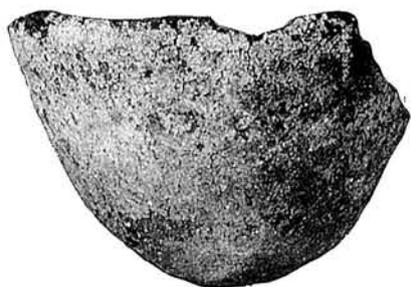
9



21



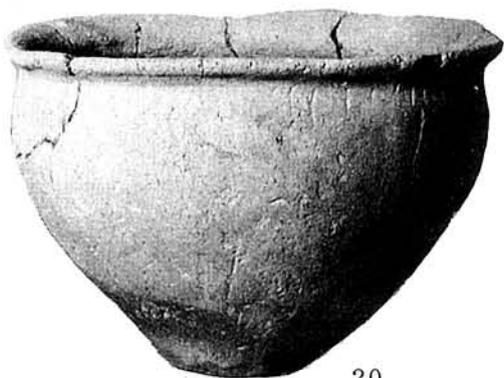
17



19



22



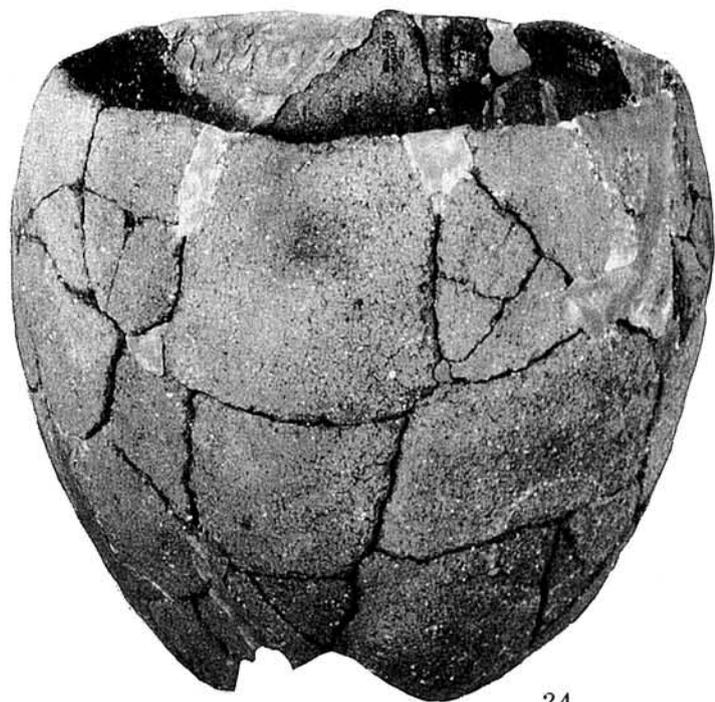
20



18



23



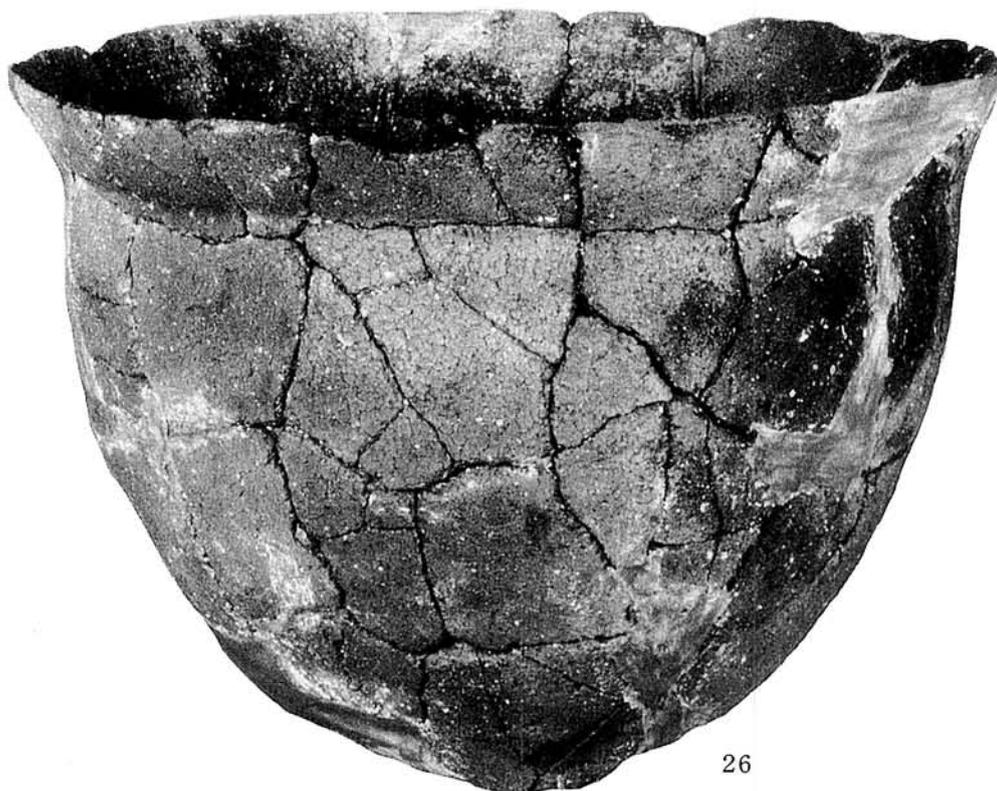
24



25



27

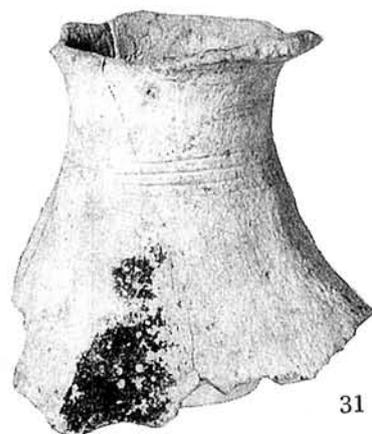


26

出土土器 (4)



28



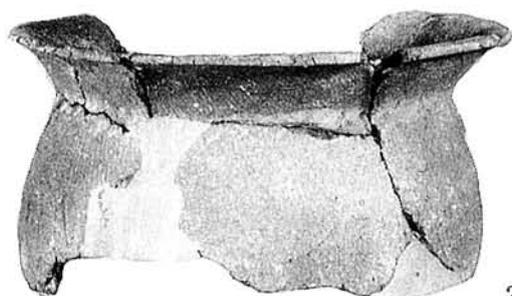
31



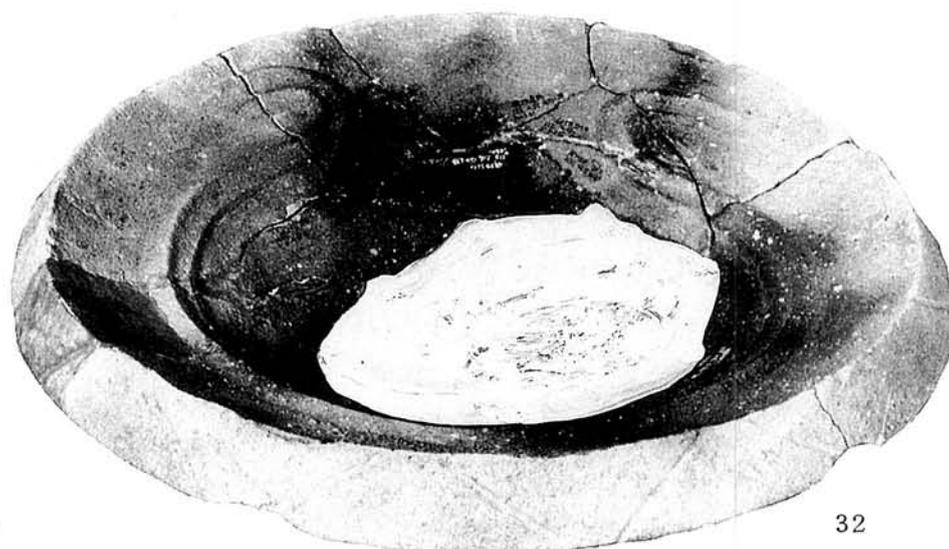
30



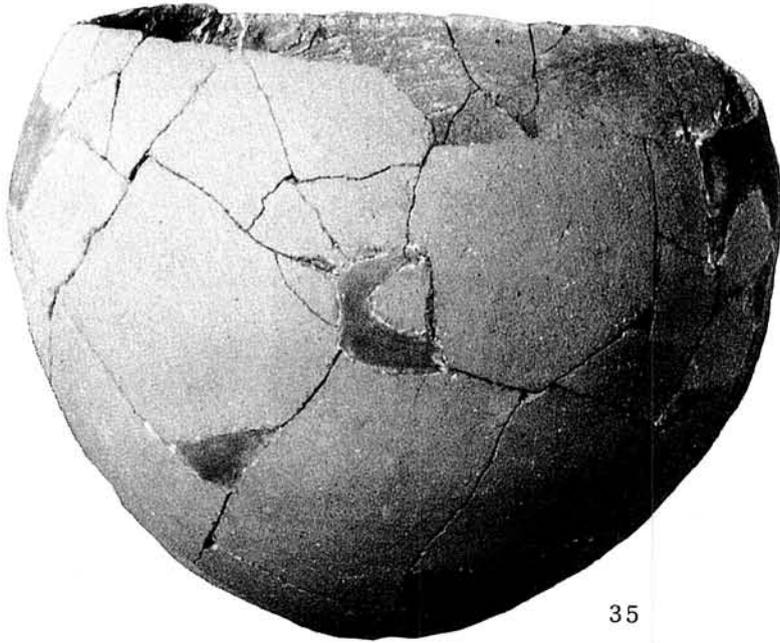
33



29



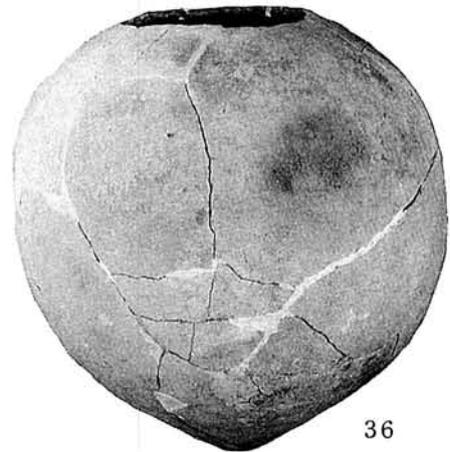
32



35



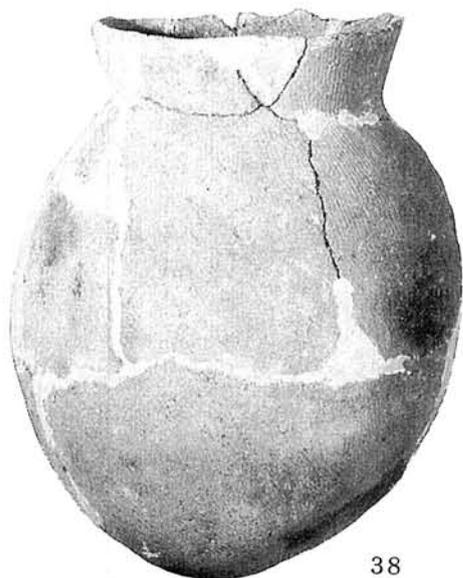
34



36



40



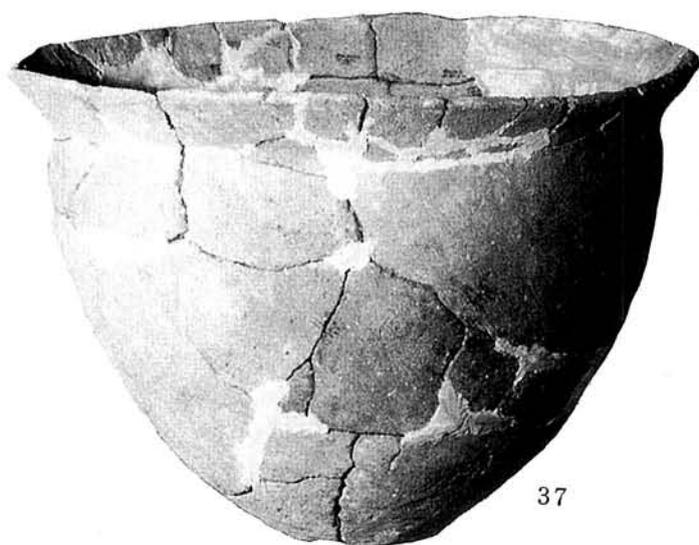
38



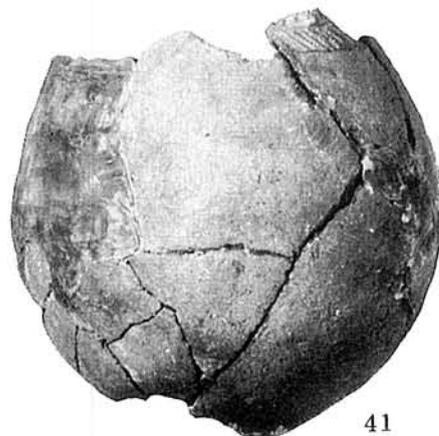
39



42



37



41



45



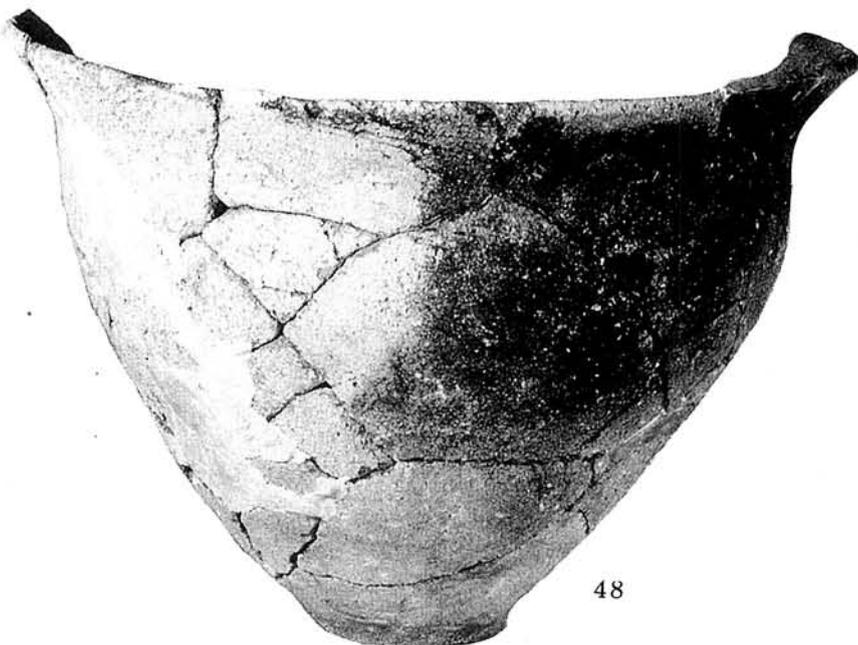
43



46



44



48



47



49



50



51



52



59



56



60



53



54



55



58



57



61



62



63



64



65



67



68



69



70



66



71



72



73



74



75



76



77



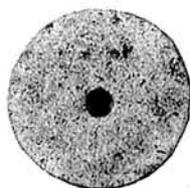
79



78



80



81



82

出土石器及び砥石

(財) 広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第4集

広島市佐伯区倉重町所在

稗畑遺跡発掘調査報告

1992年3月

編 集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発 行

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印 刷 電 子 印 刷 株 式 会 社

広島市中区堺町一丁目1番5号